

正義の魔王 [改稿版]

しらこつの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

強く優しい少年が神殺しとなった物語。

祖父から受け継いだ武術を武器に神殺しとなった少年。

意図せず手に入れた神を殺す為の強大な力。

心優しい少年はその力を誰かの為に使う事を決意した!!

改稿版です。

読み直した所、滅茶苦茶な文章だった為書き直しました。

前作よりマシになっていると思います。

読んで頂けると嬉しいです。

前作に追い付き次第前作は削除しようと考えています。

早く追い付く様に頑張りますので、待っていて下さい。

目次

はじまりの物語

第01話	神藤 昂	1
第02話	卒業旅行での出会い	8
第03話	エリカ・ブランデツリ	17
第04話	まつろわぬ神	29
第05話	神殺し	41
第06話	神殺しの誕生	56
第07話	魔術師の世界	64
第08話	両親の誇り	73
第09話	婚約者	86
日本の魔王		
第10話	神道流道場	100
第11話	婚約者と同棲	116
第12話	日本の神殺し	126
第13話	草薙 護堂	137
第14話	日本の呪術界	153
第15話	味方	163
第16話	沙耶宮 馨	175
第17話	V S エリカ・ブランデツリ	188
第18話	厄介事	201
第19話	監視	211
第20話	参戦	222
第21話	V S ウプウアウト	231
第22話	決着	238

第23話	これから	252
第24話	会談	266
欧州での戦い		
第25話	思わぬ遭遇	279
第26話	剣の王	292
第27話	VSサルバトーレ・ドニ	302
第28話	決闘後とそれぞれの思惑	318
第29話	デート	328
第30話	会談に向けて	337
第31話	プリンセス・アリス	348
第32話	ブラック・プリンス	361
第33話	胸騒ぎ	375
第34話	開戦	391
第35話	激戦	399
第36話	決着	410
第37話	夏休みの終わり	422
第38話	予感	434
都の守護者		
第39話	修学旅行	442
第40話	京都事情	450
第41話	京都に行こう	455

はじまりの物語

第01話 神藤 昴

Side 昴

僕は道場に立つ。

気持ちを静め、体全身に意識を張り巡らせる。

精神統一を終えると気合と共に動き出す。

「はっ!!」

拳を突出し、足を振り上げる。

その一連の動作を淀み無く・・・まるで演武の様に。

最後に上段回し蹴りを繰り出すと、その場で動きを止め起立の姿勢に戻る。

深く息を吐くと今迄なら掛けられていた声が聞こえない事に涙が込み上げて来る。

でも・・・。

僕の名前は『神藤 昴』。

中学校を卒業し、新年度から城楠学院高等部への入学が決まっていた。戻る。

本来であれば高校入学までの春休みを中学の仲間達と楽しんでいたら筈だった・・・。

・・・ほんの一週間前、中学の卒業式直前に唯一の肉親である祖父『神藤 統一郎』が他界したのだ。

幼い頃に両親を亡くした僕をお爺ちゃんが育ててくれた。

僕の家は代々『神道流』と呼ばれる流派の道場だ。

お爺ちゃんは何時までも泣き続ける僕に父が継ぐ筈だった『神道流』を教えてくれた。

・・・少しでも両親との繋がりを感じられる様に。

お爺ちゃんは稽古の時は厳しかったが、普段はとても優しくかった。

僕はそんなお爺ちゃんが大好きだった。

そんなある日・・・学校から帰ると道場で倒れているお爺ちゃんを見つけた。

駆け寄って声を掛けたけど返事は無いし、正直どうしていいのかわからなかった。

それでも無我夢中に必死になって蘇生術をした事は覚えている。

その後、道場に来た門下生の人が倒れたお爺ちゃんを見て救急車を呼んでくれた。

治療中待合室で待っている間、不安でいっぱいだった。

看護師さんに呼ばれ病室に入ると・・・そこにはお爺ちゃんが弱々しくベッドに横になっていた。

「すまないな、昴・・・お爺ちゃんもう駄目じゃ。」

「そんな事無い、すぐ元気になるよ。」

「いいや・・・自分の体の事は自分が一番わかっている。」

昴・・・今日から『神道流』の当主はお前じゃ・・・。」

「僕何かじゃまだ無理だよ。」

お爺ちゃんに教えて欲しい事、まだまだ沢山あるんだよ!!」

「何、お前の強さはもう儂も・・・そしてお前の両親すらも越えておるよ。」

自信を持って、昴・・・お前なら神すらも殺せる男になれる筈じゃ。

そしてその力を誰かの為に・・・。」

「お爺ちゃん!!」

「誰よりも優しく・・・強く・・・生きるんじゃ・・・ぞ。」

その言葉を最後にお爺ちゃんは息を引き取った。

その後の事を僕はよく覚えていない・・・気付けば卒業式もお爺ちゃん葬式も終わっていた。

僕は数日の間お爺ちゃんの仏壇の前から動かなかった。

じつと僕に笑い掛けるお爺ちゃんの写真から目を離さなかった。

僕を心配して沢山の人が声を掛けてくれたけど、どれも僕の耳には届かなかった。

本当はこんな事じゃいけないのは分かっていた・・・それでもここ

を動きたいとは思わなかった。

そんな時・・・ふと道場の方で声が聞こえた気がした。

どこか懐かしく・・・厳しくも優しい声だ。

僕は何かに縋る様に・・・導かれる様に道場へ足を向けた。

・・・でもそこには誰もいない。

道場を前にして僕の目には涙が溢れて来た。

いつも多くの人達で活気に溢れている道場・・・でも今は静まり返っている。

いつも綺麗に掃除が行き届いていた床・・・数日の間使わなかっただけで埃が目立っている。

そして・・・いつも皆を見守り、時に厳しい声で指導をしていたお爺ちゃんの姿はもう無い。

でも・・・でも、見えるのだ・・・お爺ちゃんの姿が・・・。

何時も声を張り上げて指導していた姿が・・・誰かを褒める時のめつたに見せない笑顔が・・・。

僕はそんなお爺ちゃんの姿に導かれる様に道場に立った。

息を整え気持ちを落ち着かせる・・・いつも通りに。

そして・・・。

「はっ!!」

気合と共に拳を前に出し、次々に技を決めて行く。

・・・流れる様な動きの中で思う。

これこそが両親と・・・そして亡くなったお爺ちゃんとの繋がりと。

動きの中でお爺ちゃんの厳しい声が聞こえて来るみたいだ。

その度に自分の動きが洗練されて行く。

数日の間に鈍ってしまった体がお爺ちゃんに認められた動きに戻るまで、僕は何時間も体を酷使し続けた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

どれだけの時間動き続けていただろう。

お爺ちゃんの声も聞こえなくなった頃、漸く体の動きを止めた。

いつもなら息一つ乱れないのに今は肩で息をしている。

僕は息を整えるといつもお爺ちゃんが立っていた道場の上座に体を向ける。

僕には笑って褒めてくれていいるお爺ちゃんが見えた気がした。

零れ落ちそうな涙を堪え、精一杯の笑顔を浮かべながら・・・あの時言えなかった、別れの言葉を。

「・・・お爺ちゃん、今までありがとう。」

お爺ちゃんが死んじやって寂しいけど・・・もう、大丈夫。

僕がお爺ちゃんに教わったこの『神道流』を忘れない限り、家族との繋がりが無くなる事は無いとわかったから。

零れ落ちた涙を拭い、道場を見渡す。

・・・何時までも道場を閉めている訳にはいかないな。

僕はまずは道場の掃除から始めるかと動き出そうとした時だった。

ピンポン!!

玄関の呼び鈴の音が家中に鳴り響いた。

ここ数日は誰が来ても出る事は無かったな、と思つて急いで玄関に向かう。

そこに居たのは中学の同級生達だった。

「皆、どうしたの??」

「・・・あ、だ、大丈夫か??」

心配して来てくれたのかな??

その事が何だか嬉しくて思わず笑顔になる。

「うん、大丈夫だよ。」

確かにお爺ちゃんの事は寂しいけど・・・いつまでも塞ぎ込んでる訳にはいかないから。」

僕の笑顔で無理をしていない事が伝わったのだろうか・・・皆ほつとした表情で僕を見つめていた。

「それで、何か用事でもあったの??」

「ああ、そうだった・・・お前卒業旅行はどうする??」

卒業旅行・・・今迄忘れてた!!

確か仲が良かった友達の中に親がイタリアのミラノでホテルを経営してるって奴が企画したんだっけ?!

一流ホテルを格安で止めてくれるって話だったから皆で行こうって誘われたんだった!!

「お前、今迄大変だったから・・・どうするのかなって。」

本当だったら今迄休んでいた道場を開きたいんだけど・・・。

高校が違う友達もこの旅行に行くし・・・。

それに・・・気持ちの切り替えにもなるかな!!

「僕も旅行に連れてって貰ってもいいかな?！」

「そうか!!」

やっぱり皆揃って行きたかったから・・・俺達も嬉しいよ!!」

僕の返事に皆喜んでくれた。

「でも大丈夫か?！」

出発明日なんだけど・・・。」

「あ、明日!?!」

「急で悪いけどお前だけ連絡が付かなかったから・・・お金やパスポートは・・・。」

「パスポートは持つてる筈、覚えてないけど子供の頃に海外に行った事があるってお爺ちゃんが言ってたから。」

お金も心配ないよ、卒業旅行に行きたいって言った時にお爺ちゃんが用意してた記憶がある。」

「だったら心配ないな。」

一応必要な物のリストを作って来たから、これを参考に荷造りしてくれ。」

「ありがと、助かるよ。」

どんな物があるか分からなかったから本当に助かる。

パスポートとかも後で探してみないと・・・。

その後軽く話をしたら皆帰って行った・・・皆もまだ準備が終わってなかったみたい。

でも本当に嬉しかったな、僕にはまだ心配してくれる友達がいるとわかったのだから・・・。

僕は家に入るとお爺ちゃんの仏壇の前に座り手を合わせる。

・・・これからも頑張るから、見守っていて下さい。

目を開けて写真を見ると、写真のお爺ちゃんがさつきよりも笑っている様に見えた。

それが嬉しくて僕も自然と笑顔になっていた。

その後門下生の人達に心配かけた事のお詫びと、卒業旅行に行ってくるから道場をもう暫く休むと電話した。

皆さん心配していたのか、元気になった僕の声を聴いて「楽しんで来て下さい」と送り出してくれた。

そして急ピッチで旅行の準備を始めた。

メモに書いてある物の中で持っていない物もあったので、外に出たりしていたから結構時間が掛かってしまった。

パスポートを探している時だった。

探している最中にお爺ちゃんの訃報に色々な所から来ていた手紙を引っ繰り返してしまった。

その中の一つに外国からのエアメールを見つけた。

相手の国が旅行先のイタリアだった事もあり、興味を惹かれて中に目を通してみる。

手紙は綺麗な日本語で書かれていて、お爺ちゃんの御悔やみと僕に対して何かあれば力になると書いてあった。

僕はその内容に首を傾げる。

差出人の名前・・・『パオロ・ブランデツリ』。

相手には悪いが聞き覚えがない・・・と言うより海外に知り合いなんて僕にはいない。

お爺ちゃんは交友関係が広がったから・・・昔お爺ちゃんにお世話になった人かな??

海外から態々僕の事まで気に掛けてくれるなんて・・・いい人だなあ。

その後我に返ってパスポート探しを再開した。

準備を続けながら今回の旅行に思いを馳せる。
・ ・ ・ 明日からの旅行楽しみだなあ。

第02話 卒業旅行での出会い

Side 昴

まだ日の昇っていない時間。

家の前で友達に車で拾って貰い空港に向かう。

昨日は準備で忙しかった事と、久し振りに体を動かした事もあつてぐっすり眠れた。

朝は稽古の関係上早起きが得意だったりするから問題なく起きられた。

空港で皆と合流し何事も無く飛行機に乗り込む。

イタリアまでおよそ12時間、飛行機の旅を楽しもう。

最初はみんな楽しくお喋りをしていたのだが・・・でもすぐに皆寝てしまった。

朝も早かったし、案外飛行機の中って退屈だったから仕方ないかな。

僕も寝ようと思ったけど、これからの事を考えると楽しみ過ぎてまったく眠たくなかった。

だから気持ちを落ち着かせる為に精神統一をする事にした。

『神道流』は古くから我が家に伝わる古武術の一種だ。

『神道流』には基本的な武術とは別にもう一つ・・・特別な技法がある。

それは・・・体内に眠る『氣』を体に纏い技を繰り出す技である。

『氣』とは己の中に眠る力・・・人であれば誰でも持っている力だ。

勿論誰でもそれを認識し、使えると言う訳ではない。

お爺ちゃんによれば素質・・・要するに才能が必要だという話だった。

『氣』は色々な事が出来る。

『神道流』では己の体に『氣』を練り上げ纏い、攻撃力・防護力等の様々な身体能力の向上を行う。

勿論それだけではない。

己の『氣』を相手にぶつける事で体の内側から攻撃する事も出来る。

そう言った特別な技法であり『氣』を使った型は危険である為、人に使つてはダメだと教え込まれていた。

そして『氣』を使った型はお爺ちゃんに認められた人にしか教えられなかった。

……はつきり言えば僕とお爺ちゃん以外に使える人を僕は知らない。

何故僕が『氣』の力を知っているかと言うと……それは以前『氣』の力を疑っていた時だった。

お爺ちゃんにその事を話したら不意打ちでお爺ちゃんに『氣』を叩き込まれたのだ。

拳自体は全く力がなかったのだが、僕はその場で戻してしまい、暫く立ち上がる事が出来なかった。

……つまり身をもつて『氣』の力を経験しているのだ。
門下生の人達の中では『氣』の事は『魔力』『呪力』とも呼ばれている。

彼等の話を聞いて僕の知っている『氣』の使い方とは全然違う使い方をしていて驚いた。

以前見せて貰った物では何もない所から剣を取り出したりしていた。

それが凄く格好良くて憧れた時もあった……お爺ちゃんに駄目だと言われて断念した。

『神道流』は本来『氣』を使う流派なのだが、それを教わる事が出来るのは当主に認められた者のみ。

であればそれ以外の人は一体何を学ぶのか……それは『氣』の使い方だ。

先も言った通り『氣』を使うにはそれ相応の才能がいる。
勿論才能だけで使いこなす事が出来るほど簡単な物では無い。

我が道場に通つて来る人達の多くは『神道流』の武術だけではなく『氣』の使い方にも学びに来ているのだ。

ここで僕の行う精神統一に戻るのだが、もちろん普通の精神統一とは違う。

己の『氣』の流れを感じそれを自在に操る事が『神道流』における精神統一なのだ。

僕は簡単に『氣』を自在に操れる様になったが、これが他の人にはかなり難しいらしい。

『氣』の流れを感じ取りそれを己の管理下に掌握していく。

それを体の隅々にまで行き渡らせると、次は体の一か所だけに纏わせていく。

体の至る所を順番に・・・そして次第にどんどん速度を上げて行く。

僕はこれが出来る様になるまで1年程かかったが、他の門下生の人達は体の表面に『氣』を纏わせる事すら悪戦苦闘していた事をよく覚えてる。

そうやって逸る気持ちを抑えていると漸くイタリア・ミラノの空港に到着した。

空港を出ると卒業旅行の企画者の父親が待つており、彼の用意した車に乗り込んでホテルへと向かった。

本当であればすぐにでも素晴らしい街並みをこの目と足で見えりたかったのだが、そこは我慢。

そして到着したのは普通だったら絶対に泊まれないであろう高級感溢れるホテル。

中に一歩足を踏み入れれば、エントランスの豪華さに呆気に取られてしまった。

泊まる部屋も豪華だった。

ベッドはふかふか、室内にある物はどれも磨き抜かれていて煌びやかに輝いていた。

僕達は部屋に荷物を置くとすぐにエントランスに集まった。

勿論観光する為だ。

だけど観光するにしても僕達だけでは心許無いので、日本人のガイドさんが付いた。

本当に至れり尽くせりだ。

・・・と思っただけだ。

「皆あゝ何処行っただよ〜」

現在皆とはぐれ絶賛迷子中。

どうしてこうなったのか分からない。

ミラノで有名な建築物を見たり、露店で買い食いをしたり、皆で記念撮影をしたり・・・。

僕は皆と一緒に歩いていた筈なのに・・・いつの間にか皆が居なくなっていた。

携帯に連絡しても誰も出ないし、ここが何処かもわからない。

ああ、どうしよう・・・何か泣きそうだ。

視界が潤んで来てパニック状態に陥っていた時・・・目の前に女神が舞い降りた。

「そのあなた・・・大丈夫?！」

話し掛けて来たのは160を少し超える身長で、赤みがかった煌めく金髪、繊細な造りの華麗な美貌。

そんな見目麗しい美しい女性が僕に向かって優しく微笑みかけて来た。

「あ、あの・・・え、えっと・・・」

ど、ど、ど、どうしよう・・・イタリア語わかんない。

涙目であたふたしている僕を見て、その女性は優しい微笑みを浮かべた。

「落ち着いて、日本語で大丈夫よ。」

「えっ!!ホントだ!!」

日本語が通じると分かり、ほっとする。

そして聞えながらも今の状況を話した。

「あ、あの・・・僕、卒業旅行に来てて。」

そ、その・・・皆と逸れちゃって・・・」

「そう・・・迷子なのね。」

他の人と連絡もつかないのよね・・・次に皆で行こうとしていた場

所はわかるかしら??

私で良ければ案内するわ。」

「あの・・・そんな・・・ご迷惑じゃ・・・。」

申し出は嬉しいけど、この人にも予定があるだろうし・・・。

皆と逸れて不安ではあるけれど、初対面の人にそこまでして貰うのは何だか気が引けてしまう。

けれどその女性は優しい微笑みを僕に向けてくれた。

「気にしなくていいわよ、ここで貴方を見捨てるのは淑女として私の矜持が許さないから。」

この言い回し・・・何処かのお嬢様なのかな?!

服装も簡易なドレスみたいだし、彼女の仕草にも上品さが醸し出されている様に見える。

僕はそんな彼女に見惚れてしまった。

「そう言えば自己紹介がまだだったわね、私はエリカ・ブランデツリ・・・あなたは??」

「は、はい、ぼ、僕は神藤 昴と言います!!」

見惚れていて反応が遅れてしまったが、何とか自分の名前を言う事が出来た・・・この時顔は真っ赤だった。

「それじゃさっそく行きましょうか。」

エリカさんはそんな僕の様子に笑みを浮かべると僕の手を取って歩き出した。

僕はいきなり手を繋がれたと事と、彼女の手の柔らかさに暫くドキドキが治まらなかった。

結局皆と回る予定の場所を順番に見て回ったが彼等と再会する事は出来なかった。

・・・本当に皆何処に行ったんだよお。

落ち込む僕を見かねたのか、エリカさんはそのまま僕の手を取って観光案内をしてくれた。

それも地元の人しか知らない場所ばかり・・・普通に観光に来たんじゃ絶対に見られない物を見る事が出来た。

僕はエリカさんに手を引かれて観光している時に、ふと懐かしい気持ちになった。

・・・前にもこんな事があった様な。

思い浮かぶのはもっと小さかった頃・・・僕が女の子に手を引かれて遊ぶ光景。

両親が死んだ時より前の記憶は殆ど覚えていない僕だけど・・・多分これはその頃の事じゃないかな。

隣を歩くエリカさんに視線を向けると、何だか胸の所が温かくなつた。

結局日が暮れる前までエリカさんにミラノの街を案内して貰った。

最後にホテルの前まで連れて来て貰い、そこで漸く皆と再会出来た。

「今まで何処行つてたんだよ。」「そうだよ、心配したんだからね。」「おい、その綺麗な女の人誰だよ。」

皆に取り囲まれ一斉に質問攻めにされる・・・皆に心配を掛けてしまったみたいだ。

そんな僕を優しく見つめていたエリカさんだったが、彼女の持つ電話が鳴ると少しばかり表情を強張らせ・・・。

「今日は楽しかったわ、昂。

機会があればまた会いましょう。」

「あっ!!今日は本当にありがとうございました!!」

エリカさんは僕のお礼に微笑み、そのまま踵を返し去って行った。短い時間だったけど彼女との観光はとても楽しかった。

彼女と別れるのは名残惜しいし、少し・・・いやとっても残念だが仕方がない。

・・・また会えるといいな。

その後皆からエリカさんの事や今日一日何をしていた等、沢山の事を聞かれた。

僕はエリカさんに付いては全部はぐらかした・・・だって彼女との思い出は僕だけの物だと思っただから。

・・・もう一つ言えばガイドさんと友達のお父さんにめちやくちや叱られた。

その日は到着早々沢山歩き回って皆疲れていた。

その為夕食をホテルのレストランで食べたなら、明日に備えて今日は休む事になった。

しかし休む事になったと言っても、友達との旅行・・・そう簡単に眠れる訳が無い。

幾つか借りている部屋の中で、僕ともう一人で使っている部屋に皆が集まっていた。

「それにしても今日は大変だったよなあ・・・主に昴が。」

「本当に心配かけてくれたよなあ・・・昴が。」

「こっちは心配してたってのに、その本人は金髪美人とデートだもんなあ・・・なあ、昴君。」

み、皆の顔が笑っているのに怖いです。

怖い笑顔で僕を見つめる彼等に必死に取り繕う。

「や、やだなあ、デートだ何て・・・。」

周りから見たら、弟にしか見えて無かったと思うよ??」

自分で言って悲しくなった。

・・・僕は同年代の男子に比べたら結構小さい方だ。

周りに160・・・大きい人だと170を超える奴がいるのに、僕は160も無い。

・・・でも大丈夫、高校生になったら身長ももつと伸びる・・・筈だ。

「うーくん、弟って言うより・・・妹に見られたんじゃねえか??」

1人がそんな事を言い出した。

思わず言葉が出ない・・・その間に他の皆も次々に話し出す。

「確かに、弟じゃなくて妹だよな!!」

「昴ちゃんはそこら辺の女子より可愛い顔してるからなあ。」

「髪が金髪で目の色が一緒だったら・・・何処からどう見ても妹だったな!!」

「・・・ぼ、僕は男だよ!!」

「いや、知ってるよ。」

「でも残念だよなあ・・・お前が女だったら絶対モテモテだけ。」

「余の男達が放っておかないよな!!」

余り嬉しくは無いが僕は背が小さくて女顔・・・可愛らしい顔立ちをしている。

小さい頃から女の子に間違われるし、中学の時も女子に化粧されてスカート穿かされそうになった事もある。

街を歩いていて男からナンパされた位だ・・・隣に居た友達に爆笑された。

僕の容姿に付いて思い思いに話す皆を見て今一度心に決める。

・・・いつか絶対かつこいい大人な男になって見せる!!

その後もずっと可愛い可愛い言って来るもんだから、遂に僕がキレてしまった。

その所為で皆が逃げる様に部屋を出て行き今日は解散になった。

暫く怒りが収まらなかつたが、同室の子に宥められて何とか落ち着きを取り戻した。

時計を見るといい時間になっていた。

僕達は散らかった部屋を片付けてからベッドに入った。

ベッド横になってから今日の事を思い出す。

・・・エリカさん綺麗だったなあ。

目を瞑るとあの優しい笑顔が鮮明に思い出される。

そこでふと何かが頭を過った。

何か思い出せそうな・・・うくん、何だったかなあ。

「あっ!!そうだった!!」

「わっ!!もう、びっくりしたなあ。」

「ぐっ、ぐめん。」

既に寝ようとしていた同室の子に謝ると飛び起こした体を再びベッドの中に戻す。

そしてベッドの中で思い出した事を考えてみる。

『エリカ・ブランデツリ』・・・何処かで聞いた事があると思ったらあの手紙だ。

確か差出人が・・・『パオロ・ブランデツリ』。

おんなじ苗字だったあ・・・どうして今まで気付かなかったんだろう。

今になって後悔が募る。

イタリアに「ブランデツリ」と言う苗字の人がどれだけいるのかわからない。

でも折角だから聞いておけばよかった・・・もしかしたらご家族の方だったかもしれないのに。

はあ・・・もう会う機会は無いだろうなあ。

僕は布団を深くかぶると、そのまま目を閉じて眠りについた。

夢の中でエリカさんに会えないかなあ・・・何て心の隅に思いながら。

第03話 エリカ・ブランデツリ

S i d e エリカ

私の名前は『エリカ・ブランデツリ』。

テンプル騎士団の系譜に連なる由緒ある魔術結社『赤銅黒十字』に所属する大騎士だ。

『赤銅黒十字』はただの魔術結社では無い。

武芸に長け気高き騎士道精神を受け継いだ、栄誉ある魔術師なのだ。

現在の『赤銅黒十字』の総帥が私の叔父『パオロ・ブランデツリ』であり、私の両親も結社の幹部を務めている事から、私は幼い頃から結社の力になる為鍛錬を続けてきた。

努力を重ねた私はライバル達に競り勝ち、将来は『赤銅黒十字』の筆頭騎士の証である『紅き悪魔（ディアヴォロ・ロツソ）』を受け継ぐ事が確定している。

それと同時に他の結社の同年代の中でもトップレベルの実力を誇っていた。

しかし……。

……今から丁度一年前の事だ。

日本に七人目の神殺し『草薙 護堂』が誕生したのだ。

彼はイタリア・サルデーニャ島にて軍神ウルスラグナの殺害に成功。

その後の彼の活躍は目覚ましく、女神アテナ・斉天大聖・ランスロットなど多くの神に勝利している。

そして最近よく耳にするのは……『最後の王』についてだ。

神殺しを殺す為に顕現すると言われている『最後の王』。

その神は顕現する度にその時代に生きる神殺し達を皆殺しにしていたと言われている。

今回の顕現でもこの神に挑んだ最古の王『デヤンスタール・ヴォバン侯爵』。

そして妖しき洞穴の女王『アイーシャ夫人』。

この御二方は最後の王に敗れ去り命を落としている。

まだ詳しい情報は入っていないが『草薙護堂』がそんな『最後の王』に勝利したらしい。

そして彼が神殺しを成し遂げたその場に居合わせた人物がいる。

それが魔術結社『青銅黒十字』の騎士であり私の幼馴染でもあるリアナ・クラニチャールだ。

彼女は幼馴染であると同時にライバルでもある。

同年代にあまり敵の居なかった私達はお互いに意識し合いながら育ってきた（リリイは認めないだろうけど）。

そんな彼女が『草薙 護堂』に気に入られ、彼の騎士の座に就いてしまったのだ。

彼女は『草薙 護堂』と共に行動している事もあって様々な経験をしている事だろう。

多くの神との戦いを目の当たりにして急激な成長を見せている。

・・・彼女にまた差を広げられてしまった。

才能に差があるとは思っていない。

私自身、努力を怠っているつもりはない。

原因があるとすれば、それは・・・環境だ。

私にはまつろわぬ神に遭遇した事が無ければ、カンピオーネの戦闘を間近で見た事も無い。

リリイがこの1年で得た経験が私には足りないのだ・・・この差は大きい。

私はまだ若い事もあってそういった経験をまだ積ませて貰えていない。

将来の筆頭騎士だという事もあって・・・お父様もお母様も叔父様も皆過保護なのだ。

そんな憤りもあって、鍛練にも身が入らなかった私は今特に用もなく街を歩き回っている。

・・・こうして街をゆつくり歩くのは久しぶりね。
リリイに差を付けられた事に気付かない内に焦っていたみたい。
見慣れた街並みを歩いていると心に余裕が生まれてきた。
気分転換にこのままショッピングでもしようかと思っている
と・・・。

ふと前に視線を向けると中学生と思われる日本人の少年（ボーイツ
シュな少女にも見える）が目には涙を浮かべながら周囲にきよろきよろ
視線を泳がせていた。

迷子かと思いい声を掛け様と少年の方に足を向ける。

しかし彼の動きを見た瞬間思わず歩みを止めてしまった。

この子、武術を嗜んでる・・・しかも、かなりの達人ね。

恐らく私と同等か・・・いや、それ以上の実力者。

華奢に見えて体幹がしっかりしている。

不安げな表情とは裏腹に動きの一つ一つが洗練されている。

一瞬何処かの魔術結社の人間かとも思ってたが、そんな考えはすぐに
切り捨てる。

・・・あの不安そうな顔、演技だとは思えないわね。

自分でも馬鹿らしいとは思ったが、心の隅に少しだけ警戒心を持つ
て彼に声を掛ける。

「そのあなた・・・大丈夫?！」

私の声に反応して彼はこちらに顔を向ける。

改めて近くで彼を見たが、一瞬女の子に見間違える程可愛らしい顔
立ちをしている。

男の子にしては身長も低いし、服の上からでは鍛え上げられている
肉体も分らない。

可愛らしい顔立ちと細身な体が相俟って、一目見ただけでは男の子
か女の子か見分けがつかない。

そんな彼は瞳を涙で潤ませながら、上目使いで私を見上げていた。

「あ、あの・・・え、えっと・・・。」

突然声を掛けた事であたふたし始めた彼に再び優しく声を掛ける。

「落ち着いて、日本語で大丈夫よ。」

「えっ!!ホントだ!!」

あ、あの・・・僕、卒業旅行に来てて。

そ、その・・・皆と逸れちゃって・・・。」

落ち着きを取り戻した彼は、聞えながらも自分の状況を話してくれた。

嘘を吐いている様にも見えないし、魔術関係者にも見えない。

予想通り、ただの迷子みたいだ。

気分転換に外を歩いていただけだから丁度いい。

私は彼の道案内を買って出た。

「そう・・・迷子なのね。」

他の人と連絡もつかないのよね・・・次に皆で行こうとしていた場所はわかるかしら??

私で良ければ案内するわ。」

「あの・・・そんな・・・ご迷惑じゃ・・・。」

「気にしないでいいわよ、ここで貴方を見捨てるのは淑女として私の矜持が許さないから。」

何て言ったがただの暇潰しに過ぎない。

「そう言えば自己紹介がまだだったわね、私はエリカ・ブランデツリ・・・あなたは??」

「は、はい、ぼ、僕は神藤 昴と言います!!」

『神藤 昴』・・・『神藤』・・・。

何処かで聞いた事のある名前だ・・・一体何処だったのだろうか。

しかし直ぐに思い出す事が出来なかつたので重要な事では無いのだろうと思つて考える事を止めた。

・・・折角の気分転換だ、そういう事は後で考えればいい。

「それじゃさっそく行きましょうか。」

笑顔を向けると昴の顔が赤くなつた・・・顔を赤くしながら私を見つめる彼が少し可愛く思えてきた。

そんな昴をからかう意味を込めて、彼の手を握る。

予想通り、昴はさらに顔を真っ赤にする。

それが何だか面白くて私の顔も自然に笑顔になつた。

昴達が行く予定だった場所を見て回ったが彼の友達とは会う事は出来なかった。

不安そうな顔をするので私はそのまま彼を色々な場所に連れ回した。

普通の観光では行かないであろう地元の人しか知らない様な所ばかり。

彼の顔に笑顔が戻った・・・本当に可愛いな。

弟がいたらこんな感じだろうか・・・。

そんな事を考えているとふと懐かしい記憶が頭を過った。

小さい頃、よく一緒に遊んでいた男の子の事を・・・。

確かいつも今みたいにあの子の手を引いて遊び回っていた。

ちらつと昴に目を向けると、楽しそうに周囲を見回していた。

そんな彼の様子が何処か懐かしく、胸を優しい温かさが包み込んだ。

結局1日中彼を連れ回し、その後日が暮れる前に彼の宿泊先のホテルに連れて行った。

ホテルに入れば昴を見つけた彼の友達が集まって来た。

・・・友人と合流出来たみたいで良かった。

それに私自身いい気分転換が出来た・・・あんなに楽しかったのはいつ以来だろう。

彼等の楽しそうな笑い声に笑みを浮かべながら見つめていると、ポケットに入れていた携帯が鳴り出した。

取り出して確認してみると表示には『パオロ・ブランデツリ』の文字があった。

叔父様から連絡が入るなんて・・・何かあったのだろうか??

緊急の要件だと判断した私は電話に出る為、昴に別れを告げる。

「今日は楽しかったわ、昴。

機会があればまた会いましょう。」

「あっ!!今日は本当にありがとうございました!!」

彼のお礼を背にその場を急いで後にした。

周りに人の居ない事を確認したら電話に出る。

「叔父様、エリカです。」

『エリカ、今何処にいる!!』

電話に出ると緊迫した様子の叔父様の声が耳に飛び込んできた。

いつも落ち着きのある叔父様がここまで取り乱している何て・・・
本当に緊急の用件だったみたいだ。

「今日は少し街に出ていました、丁度帰ろうとしていた所です。

・・・何かあったのですか?」

『そうか、それなら良かった。』

叔父様の安堵の様子が電話越しに伝わってくる。

しかしそんな様子も一瞬の事。

1拍間を置いたと思ったら此方の背筋が自然と伸びる様な真剣の
声音で語り掛けて来た。

『・・・少し厄介な事が起きたかも知れん。』

「どういう事でしょう?」

『確認はとれていないのだが・・・このミラノ周辺に『まつろわぬ神』
が顕現したという情報が入った。』

「つ!!それは本当ですか!!」

『・・・まだわからない。』

本来であれば、すぐにでも幹部メンバーを派遣して確認させるのだ
が・・・。

・・・今手の空いている人材がいないのだ。』

「お父様とお母様は??」

『ブラウとサーシャも別件で出払っている。』

叔父様の言葉に私の心が躍り出した。

・・・チャンスだ!!

私は浮かれ出しそうな心を鎮めながら、落ち着いて口を開く。

「・・・叔父様、私に行かせて下さい。」

『・・・・・・・・』

叔父様からの返事は無い。

私はこのチャンスに逃す訳にはいかないと再び口を開いた。

「叔父様、私はだって大騎士です。」

次期『紅き悪魔』を受け継ぐ者として経験を積みたいのです。」

『・・・お前は我らの宝だ。』

お前の実力は私も認めている・・・しかし如何せんまだ若い。

お前にはまだ学ぶべき事柄が多くある・・・神に近付くのはまだ早い。』

「それでは遅いのです!!」

私の叫びに叔父様の言葉が止まる。

叔父様も気付いているのだろう・・・私の想いに。

『草薙 護堂』の出現によって同年代の魔術師達が活躍。

遠い日本で起こった事であるにも係わらずここイタリアでも大きな注目を集めた。

そしてそれは・・・今までの私の功績が霞むという結果を生んでしまった。

「今のままでは私は『紅い悪魔』を受け継ぐ事は出来ません。

それは私自身がそれを許す事が出来ないから・・・。」

叔父様が今まで守ってきた荣誉ある『紅い悪魔』の名。

それを私が穢す事なんて出来ないから・・・。

しばらく無言の状態が続くと、電話の向こうから息を吐く音が聞こえた。

『・・・エリカ、今すぐ現場に急行しろ。』

「叔父様!!」

『お前にこの事を話した時点でこうなる事は予想していた・・・だが、決して無理はするなよ。』

お前の役目はまつろわぬ神の確認と、可能であればどういった神かを調べて来る事だ。

絶対に神を刺激するな・・・間違っても神殺しに何て挑もうとするんじゃないぞ。』

「わかっています、さすがの私もそこまで無謀ではありません。」

一度言葉を切り、背筋を伸ばし・・・そして高らかに宣言する。
「・・・その役目、確かにエリカ・ブランデッリが仰せつかりました。」
『ブラウ達にも連絡を入れる・・・勇気と無謀を履き違えるなよ。』
その言葉を最後に叔父様は電話を切った。
電話が切れた事を確認すると、私はその場を駆け出した。
・・・やつと私にもチャンスが巡って来た。
必ずこのチャンスをものにしてみせる。
その時の私は『まつろわぬ神』に遭遇できる高揚感と、功績を上げる事しか頭になかった。
そして私は『まつろわぬ神』がどれ程の存在だったのか・・・身をもって知る事となる。

私は『まつろわぬ神』が目撃されたと報告があった辺りに到着した。
・・・確かにこの近辺は濃密な呪力に満たされている。
少しでも気を抜くと私の方がおかしくなってしまうそうだ。
気を引き締め直して街の中を搜索する。

恐らくこの辺りに在住している結社の仲間も行動を開始している筈だ。

日が落ちた事もあり、町の中は閑散としている。
・・・そんな中で、ふと目に留まった人物の姿があった。
現代ではありえない妙に古めかしい服装。
誰もいない通りを真っ直ぐ歩いているだけの姿に・・・私は目を奪われた。

そして、その人物と目が合った瞬間・・・私は全てを理解した。
押し潰されそうな圧倒的存在感。
ただ目が合っただけだと言うのにその場に立っている事すら出来ず、彼の前に膝を付き頭を垂れていた。
・・・こ、これが、まつろわぬ神。

その時の私は初めて目の当たりにした圧倒的存在に呑まれ、一種のパニック状態に陥っていた。
だからだろうか・・・叔父様の言い付けが頭から抜け落ちていた。

「御身の御名を伺わせて頂きたく存じます、まつろわぬ神よ。」

『まつろわぬ神』は落胆した様子を隠す事もせず、深く息を吐いた。ただそれだけだ・・・たったそれだけの事なのに体の震えが止まらない。

そんな私に目もくれず、神は口を開いた。

「・・・もう見つかってしまったか。

もつと趣のある場所で高々と宣言する予定だったのだが・・・。」

神の声を聴いた瞬間、私は自分の失敗を悟った。

思わず顔を上げるとそこには・・・その表情を寧猛な笑みに変えた神の姿があった。

「問われたならば答えねばなるまい!!

我が名は『アグニ』・・・火神『アグニ』だ!!」

自分はこのにいると宣言する様に火神『アグニ』の呪力が爆発した。『アグニ』が放った呪力が街を覆い尽くす・・・その呪力は火神の真骨頂である炎に変わる。

街は瞬く間に炎に包まれ・・・そして私は意識を失った。

「・・・うつ・・・うろくん・・・。」

私は体に鈍い痛みと暑さを感じて意識が戻った。

ふらつく頭を振りながら周囲を見渡し、先程の事を思い出す

私は神の呪力を目の前で受けた事で勢いよく壁へと打ち付けられたのだ。

あの時咄嗟に防御魔術を自分に掛け何とか被害を最小限に抑える事に成功した。

何とか耐え切ったみたいだが、相手は神・・・無傷という訳にはいかなかった。

いつも瑞々しく保たれていた肌は至る所に火傷を負い、動ける様に着替えた服も焼け焦げている箇所がある。

私は改めて周囲を見渡し・・・自分の犯した愚かな行為の代償を突き付けられる。

・・・辺り一帯が火の海と化していた。

街は炎に飲み込まれ、この通り沿いにあった建物は全て崩壊している。

自分の軽はずみな行動で……いったいどれだけの人の命が失われたのだろうか。

私は浮かれていたのだ……『まつろわぬ神』に会う事の出来るこの状況に。

……それがこの大惨事に繋がってしまった。

それでも私は唇を噛み締めながら立ち上がる。

……ここで諦める訳にはいかない。

これでは信賴して送り出してくれた叔父様に面目が立たない。

そして何よりこんな失態で躓いていてはエリカ・ブランデツリとしての誇りが許さない。

ふらつく体を強引に動かし、次の行動に移す。

まずはこの状況を作り出した張本人……『まつろわぬアグニ』を探さなければ。

神はすぐに見つかった……神はゆったりとした速度で炎の中を悠然と歩いていた。

私はあの炎の恐怖で震え出した体を抑え付け彼の前に身を晒し、膝を折る。

「神よ……どうか御静まり下さい。」

神が私に目を向けたのが分かった……そしてただそれだけの事で呼吸が苦しくなる。

顔は見えないが神が……『まつろわぬアグニ』が此方をあの獰猛な笑みで見ている事は分かった。

「……先程の女か……どうだ、我の力は。」

一言……たった一言、言葉を耳にただだけで、振り絞った気力が崩れ落ちそうになる。

神話の火という存在は、人間の日常生活に必要な不可欠な物として描かれている。

しかし、一方で人間を死に至らしめる恐ろしい存在でもある。

ます。」

体中を煤に塗れ、至る所が黒く汚れている。

でもその可愛らしい顔立ちと、懐かしさを感じる笑顔は私の心を優しく包み込む。

力なく地面に座り込んでいる私に手を差し伸べてくれている少年。

それは今日1日を共に過ごした『神藤 昴』であった。

第04話 まつろわぬ神

Side 昴

「・・・っ!!」

卒業旅行の初日の夜。

疲れて深く眠っていた筈なのに突然感じた巨大な『氣』に当てられて目が覚めた。

・・・これはあの時と同じ位大きな『氣』。

僕の眠気は既に吹き飛んでいた。

このレベルの『氣』を感じた事が何度かある。

それは去年の事・・・。

中学三年生になったばかりの頃、夜に突然全ての明かりが消えた事があった。

その時に近くの公園で今回と質は違うがこれと同じ様な『氣』を感じた事がある。

・・・気になった確認しに行こうとしたらお爺ちゃんに怒られた。次の日のニュースでその公園が壊れていたと報道があった。

その後も家の近くだったり、有名な観光地だったり、場所は様々だったが何度か同じ様な事があった。

そしてその度に『氣』を感じた場所が破壊されていた。

お爺ちゃんに聞いて見た事があったが、はぐらかされて教えてくれなかった。

・・・でも、お爺ちゃんは嘘を吐くのが苦手だったから何か隠している事は一目見て分かった。

当時はお爺ちゃんに止められたが、今は僕を止める人はいない。

・・・僕はこの『氣』の正体がずっと知りたかったんだ。

そこからの動きは早かった。

ベッドから抜け出し物音を絶えず動き易い服装に着替える。

そして同室の子に気付かれない様に部屋を抜け出した。

誰にも見つからない様にホテルの外へ出ると、僕は一目散に『氣』を感じる方へ駆け出す。

『氣』を感じる方へ走っていると、その先の空が赤く光っていた。

・・・案外近いな。

近づくにつれ感じられる『氣』からの圧力が高まって行く事に、僕は氣を引き締める。

日本で『氣』を感じた場所は例外なく破壊されている。

もしそれが偶然でなかったとしたら・・・それは危険な事が起こっているかもしれないと言う事だ。

・・・それが分かっているながらも僕は足を止める事をしない。

今まで知る事が出来なかった事を知るチャンスだから。

好奇心に突き動かされながら、僕は漸く目的の場所に到着した。

・・・そして、僕は現実を知る事となる。

「・・・な、何、これ。」

今、僕の目の前で街が炎に飲み込まれていた。

街の中からは多くの人の悲鳴。

全ての建物が炎に包まれ、その殆どが既に倒壊している。

辺りを見渡せば多くの人がこの状況を放心状態で見上げていた。

・・・まるで目の前で起こっている事が信じられない様に。

僕自身目の前で燃え盛る炎に、高ぶっていた心が一瞬の内に静まり返った。

・・・危険があるとは予想していた。

けど、こんな・・・こんな大災害の様な事態になっている何て考えもしなかった。

「!!」

周囲と同様に放心していた僕の耳に子供の声が届いた。

そちらに目を向けると小学生程の女の子が泣き崩れている姿が見えた。

女の子は涙を流し炎に焼かれている街を指差しながら周囲に向かって何かを叫んでいる。

イタリア語の為僕には何と言っているのか分からなかったが・・・

大よその見当は付いた。

・・・まだこの街の中に大勢の人が取り残されてるんだ。

周りの人達は彼女を慰めたり、何処かに電話を掛けたりと様々だが、街に救出に行こうとする人は居なかった。

辺りが急に騒がしくなっていく中、僕はその様子をじつと眺めていた。

この状況で僕に出来る事は無い。

それに・・・僕はただ『氣』の正体が知りたくて此処に来ただけだ。そう思っているのに僕は泣き叫ぶ女の子から目を離す事が出来ずにいた。

理由は分かっている。

あの子の姿が昔の・・・父と母を亡くした頃の僕に被って見えるから。

・・・ずっと泣いていたあの頃の僕に。

あの子の泣き叫ぶ姿を見てこのまま帰るなんて・・・既に家族を失っている僕に出来る筈も無かった。

けど・・・どうしても後一步が踏み出せない。

あの炎の中に飛び込む勇気が・・・僕には無いのだ。

僕の心が葛藤に苛まれている時・・・お爺ちゃん最後の言葉を思い出した。

『誰よりも優しく・・・強く・・・生きるんじや・・・ぞ。』

この言葉が僕の心を決めた。

僕は近くでバケツを手に消化活動を始め様としていた人達の所へ駆け出した。

その内の1人から水の入ったバケツを奪い取ると頭からそれを被る。

僕の行動を見ていた人達から何やら声が掛かる・・・多分これから僕のやろうとした事が分かったのだろう。

それでも僕は止まらない。

僕は周囲の制止を振り切って炎の中に飛び込んだ。

燃え盛る炎の中を突き進む僕は己の内にある『氣』を体の隅々まで行き渡らせ身体能力を強化していく。

以前にも話したと思うが『氣』には様々な力がある。

自分の『氣』を自由自在に操れる僕は『氣』を自身の身に纏わせ体を守る事も簡単に出来る。

そして炎の中に入った事で気付いた事がある。

炎に飲み込まれた街から放たれている巨大な『氣』で見落としていた。

・・・この炎からも街の中心から感じる『氣』と同じ物を感じる。つまりこの事態を巻き起こしたのは、この巨大な『氣』の持ち主であるという事だ。

僕はこの事実には冷や汗を流しながら、周囲に人がいないか声を掛けながら走り回っていた。

人の声が聞こえれば其処へ駆け付け強化した身体能力を駆使して助ける。

ある時は瓦礫を退かし・・・ある時は炎を『氣』を使って掻き消し、取り残された人を助け出す。

・・・自分の行動が少しでも誰かの助けになる様に。

何人か助け出した辺りで僕は被害の一番大きい街の中心へと来ていた。

そしてその時には既に気付いていた。

・・・建物は全て崩壊してるし、人の姿も気配も感じられない。

これではもう・・・。

それでも諦める事無く、体中煤や泥だらけになりながらも炎の中を走り続けた。

この街に充満している『氣』が突然強くなったのはそんな時だった。その中心に目を向けるとその上空には途轍もない『氣』の込められた幾つもの炎の塊が街中に向けて降り注ぐようとしていた。

それを見た瞬間僕はそこに向かって走り出す。

今の僕にあの炎全て防ぐ事は出来ないけど・・・この事件の犯人を

止める事は出来るかもしれないから。

この巨大な『氣』に立ち向かう事に恐怖を覚えながらも走る速度を緩める事無く目的の場所へ辿り着く。

目を向けると、そこには2人の人物がいた。

1人は体から炎を撒き散らす人間とは思えない程の『氣』を放っている者。

そしてもう1人は女性で、自分の向ってくる放たれた炎の塊を自身の手に持つ盾で防ぼうとしていた。

・・・あれでは防げない。

炎に込められている『氣』の量からして、この街に放たれている炎とは比べ物にならない威力を持っている筈だ。

それを理解出来た僕はそのまま足を止めずにその人の前に躍り出る。

「はぁあっ!!」

何とか炎の塊との間に体を潜り込ませる事に成功。

僕はそのままの勢いで『氣』込めた拳を炎の塊目掛けて空へと殴り飛ばした。

あっつっ!!

炎の塊に触れた瞬間『氣』で拳を保護していたのにかなりの熱さを感じた。

炎の塊は何か軌道を変える事に成功して空の彼方へと消えたが・・・僕は未だ熱を持つ右手を確認していた。

右手の拳は赤く熱を持っていて、一部火傷をしている所がある。

・・・結構本気で『氣』を込めてたのに。

想像以上の相手の実力・・・その本人に目を向けてみたが彼は僕の事を視界にすら捉えていない。

いや・・・視界には入っているんだろうけど、気にも留めて無いと言った方が正しい。

僕の事を周りの風景としか思っていない・・・そんな目をしている。

正面で凄まじい『氣』を纏っている人物に目を奪われていた僕だったが、後ろで盾を構えていた女性が動いた気配で我に返った。

その人の方に振り返ると、幾つか傷を負いながらも綺麗な美貌をした女性が盾から此方を見上げていた。

そして僕にはその女性に見覚えがあった・・・いや、忘れる筈もない。

・・・どうしてこの人がこんな所に居るんだ??

そう思ったのは彼女も同じらしく、僕の顔を見て驚愕の表情をしている。

彼女が此処に居るのは疑問だけど、今はそんな事考えている場合じゃない。

僕は座り込んでいる女性・・・今日1日を共に過ごしたエリカさんに優しい笑顔を向けて手を差し伸べた。

「・・・エリカさん、こんな所で何してるんですか。

ここは危険ですから早く避難しましょう、僕が安全な所まで案内します。」

エリカさんは昼間とは服装が違っている。

あの時は簡易なドレスみたいな服装だったけど、今は動き易そうな格好をしている。

でも所々焼け焦げていて、肌が見えている所がある。

彼女の白く綺麗な肌は泥や煤で汚れているが、彼女自身それを気にしている様子は無い。

エリカさんは暫く驚愕で止まってしまっていたが、すぐに緊迫した声色で話し掛けてきた。

「何で貴方がこんな所に居るの!!」

「エ、エリカさん、落ち着いて・・・っ!!」

大声を出す彼女を宥め様とした所に・・・急に後ろから『氣』の高まりを感じて、背筋が凍る。

後ろの様子が見えていたエリカさんは立ち上がろうと足掻きながら、僕に警戒の声を掛ける

「昇!!危ない!!」

僕はエリカさんの声の前からその存在に気付き『氣』を込めていた。先程より強く『氣』を込めた右足を振り向きざまに蹴り抜いた。

「はああっ!!」

タイミングよく右足に当たった炎の塊は僕達の左側に飛んで行き激しい爆発を起こす。

今回は体に影響はない・・・あれを防ぐのにこれだけの『氣』が必要だなんて。

目の前で起こった事が信じられないのかエリカさんの先程とは違った驚愕の声が聞こえる。

「昴、あなたはいったい・・・。」

だが僕はそれに反応しなかった。

何故なら僕の視線は・・・既に僕達に向けて炎の塊を放って来た人物に向いているのだから。

僕は彼に向かって一歩前に出た。

そして・・・今まで溜め込んでいた感情を吐き出した。

「あなたは一体何をやっているんですか!!」

「ほう・・・先程私の余興を防いでいた様に見えたが、気のせいでは無かったか。」

「っ!!話を聞いているんですか!!」

街をこんな事にして、どれだけの人に迷惑が掛かったと・・・どれだけの人が亡くなったと思ってるんですか!!」

僕の叫びがもう街とは呼べない瓦礫の山に木霊する。

しかし僕の言葉は相手を逆撫でする要素しかなかったみたいだ。

始めて彼は僕を視線に捕える・・・それだけの事なのに僕の体は硬直してしまった。

な、何だ、あいつのプレッシャーは・・・。

視線は彼から離す事が出来ず、体も動かす事が出来ない。

凄まじい威圧を放つ彼は僕に向けてゆっくりと口を開いた。

「高々私の遊びを防いだ程度で神である私に指図するとは・・・身の程を弁えろ!!」

彼の言葉と共に膨れ上がった重圧に為す術も無く膝をついた。

体が言う事を聞かないと言う初めての感覚・・・指先一本も動かさない。

それは後ろに居たエリカさんも同様だ。

座り込んでいた体が膝を付き、頭を下げる姿へと変わっている。

「そうだ、それでいい。」

僕達をこの姿勢にした彼は満足そうに頷いているのが分かる。

自らを神と名乗るこの男・・・いったい何者なんだ。

口に出してない僕の疑問に答えてくれたのは後ろに居るエリカさんだった。

「気をしっかり持ちなさい、昂。」

神の言霊に屈してはダメよ!!」

「エ、エリカさん。」

エリカさんの声に我を取り戻し、少しだけ動く様になった口から声を絞り出す。

「貴方も理解したと思うけど・・・あれは『まつろわぬ神』、正真正銘の神様よ。」

「・・・『まつろわぬ神』??」

「あれは人が如何にか出来る存在じゃないわ。」

私が時間を稼ぐから、貴方は神の言霊を破って逃げなさい。

貴方が何者かは知らないけど、神の攻撃を防げる貴方になら出来る筈よ!!」

後ろに居るエリカさんから彼に比べたら微々たる物だが人並み以上の『氣』が放たれた。

すると彼女はこの凄まじい重圧の中、少しずつだが体を起こし始めた。

暫くしたら完全に立ち上がり僕の横で神を睨み付けている。

・・・そしてその手には銀色に輝く細身の剣を握り締めていた。

「エ、エリカさん、逃げるなら一緒に・・・。」

「・・・私はここから逃げられない。」

神を此処で暴れさせてしまった原因は・・・私にあるの。

自分の不始末は自分でつける・・・神殺しは無理でも何とか静まって貰わないと。」

彼に戦いを挑もうとしているエリカさんを止めようと口を開いた

が彼女の決心は固かった。

・・・あんな化け物を相手に戦える筈がない!!

僕は再び口を開こうとして・・・やめてしまった。

・・・エリカさんの剣を持つ手が震えているのが見えたから。

エリカさんは相手との力量の差が絶望的に開いている事を承知で挑もうとしてるんだ。

僕は体が動かない事を齒痒く思いながら、男に向かって行くエリカさんを見送る事しか出来なかった。

しかし・・・エリカさんの決意が報われる事は無かった。

僕達の・・・いや、エリカさんを思案気な表情で見ていた男が小さく呟いた。

「ふむ、余興はこの辺でいいだろう。

少女よ、此方に来い・・・お前を生贄に新たな『神』を招来させる。」

「っ!!」

男がそう口にした瞬間エリカさんの歩みが早まった。

此処から見えるエリカさんは苦悶の表情を浮かべている・・・必死に抵抗してるんだ。

「ほう、抵抗するか・・・そうでなくては生贄になる資格も無いがな。」

「エリカさんに何をするつもりだ!!」

僕は思わず叫んでいた。

まだ体は動かせず、この状況を見ている事しかできないけれど・・・叫ばずにはいられなかった。

しかし、男は僕の言葉に答える素振りも見せず、1人言葉を紡いでいた。

「やはり生贄は美しい少女に限る。

勿論相応の力を持っていないといけないが・・・私は運がいい。」
くそっ!!あいつは一体何をしようとしてるんだ!!

エリカさんの様子からも彼女が危険な状況である事は間違いない。

あの男が言った『生贄』と言う言葉・・・あれが言葉通りの意味だっ

たとすれば、エリカさんが危ない。

エリカさんも必死に抗っているが男との距離は後一步という所まで来てしまっている。

「エリカさんっ!!」

何も出来ない苛立ちと焦りから彼女の名前を叫んでいた。

僕の声のエリカさんがぎこちなく此方を振り返る。

その表情は苦しそうではあった・・・それでも必死に笑顔を此方に向けていた。

優しさを含むエリカさんの瞳は僕に「私は大丈夫だから」「早くここから離れなさい」と言っている様に見えた。

その笑顔を見た瞬間・・・僕の『氣』が爆発した。

エリカさんは不安だった僕にとっても優しくしてくれたんだ。

彼女と過ごした時間はとても楽しかったんだ。

そして・・・エリカさんの笑顔はとても暖かくて、何だか懐かしい感じがしたんだ。

エリカさんを生贄になんてさせない・・・絶対に助けるんだ。

僕の決心と共に体から『氣』が溢れだし、体に掛かっていた重圧も消えた。

それを認識した瞬間にはもう既に僕は男に向けて駆け出していた。

足に『氣』を込めて爆発的な脚力により人間とは思えない速度で男に飛び掛かる。

「はああああああああああっ!!」

雄叫びと共にそのままの速度で男を殴り飛ばす。

この手に伝わった感触は熱く熱した鋼を殴った様な感じがした。意表を突いた事で簡単に殴る事が出来たが・・・あの感触では大した効果は無いだらう。

突然の事に驚いたのはエリカさんも同様だった。

「昂・・・本当にあなたは何者なの・・・。」

拘束を解かれたエリカさんは隣に立つ僕を驚愕の表情で見つめて

いる。

でも僕はエリカさんを気にしている余裕はない。

殴り飛ばした男から今までの比では無い『氣』が感じられるからだ。ゆっくりと立ち上がった男は・・・初めて真っ直ぐ僕を視界に捉えた。

先程彼の言霊を受けた時は僕の事を何とも思ってた筈だ。

しかし今は僕の事を興味深そうに・・・凄まじい『氣』と共に見つめている。

「意表を突かれたとはいえ我を殴り飛ばすとは・・・面白いな人間。」

男の興味が完全に僕に移っている。

玩具を見つけた様に笑顔を僕に向けているが、彼から放たれている重圧は先程の比ではない。

隣に居るエリカさんでさえ体を震わし、その震えが僕にも伝わってくる。

・・・だからこそ、僕はもう逃げる訳には行かない。

此処で僕が居なくなれば男の興味対象が再びエリカさんに戻ってしまうかもしれない。

この男の力があればこの街以外にも多くの被害が出る可能性がある。

そんな事になればもつと悲しい思いをする人が出て来てしまう。

・・・そんな事はさせない、この人は僕が止める!!

この思いが僕の体の震えを止め、体中から『氣』を湧き上がらせ力を漲らせていた。

湧き上がる『氣』を全身に行き渡らせ、僕は初めて臨戦態勢に入る。

今迄武術を習って来て初めての経験・・・しかし、今の僕には何の迷いも無かった。

・・・本能的にそうしなくてはいけない事を分かっているからなのか。

それとも極度の緊張で感覚が麻痺してしまっているのか・・・僕には判断出来ない。

「まだお主には名乗ってなかったな。」

我が名は『アグニ』・・・火神『アグニ』だ!!」

「僕は『神藤』・・・『神藤 昴』。」

「神藤 昴・・・暫し私の遊び相手になって貰おうか!!」

「僕は貴方を止める・・・止めてみせる!!」

もう街を・・・この街に住む人達を悲しませない為に。そしてエ

リカさんを絶対に生贄に何てさせない・・・絶対に護って見せる!!」

僕は自然な動きでいつもの様に構え、そして腹に力を入れると気合

と共に叫ぶ。

「神道流当主『神藤 昴』・・・いざ参る!!」

僕は火神『アグニ』に向かって全速力で駆け出した。

第05話 神殺し

S i d e 昴

「無茶よ、昴・・・やめなさい!!」

後ろでアグニに向かつて駆け出した僕を呼び止めるエリカさんの声が響いたが僕は止まらない。

目の前に居るアグニは右手を僕に向けると、そこから数十の炎塊を放って来た。

『氣』の量から先程と威力の変わらない物が数十・・・あの程度の数と威力なら十分に対処出来る。

・・・けどここで『氣』を消費する訳にはいかない。

相手は僕よりもかなり多くの『氣』を持っている。

そんな相手に『氣』を普段の稽古の様に消費していけば・・・確実に僕が負ける。

そう判断した僕は脚にだけに『氣』を集めてアグニに近付くまで避け続ける事を選択した。

襲ってくる炎塊を体を少しずらす事によって避けて行く。

・・・この程度のスピードだったらお爺ちゃんの正拳突きの方が何倍も速い!!

避ける事に集中した為、走るスピードは遅くなってしまったが、炎塊は全て避ける事に成功した。

後ろに居たエリカさんもアグニが炎塊を放った事を確認すると射線上から退避したのは感じ取っていた。

そのお蔭もあって僕は避けるという選択肢を選ぶ事が出来た。

僕は一息つく時間も惜しいとアグニに向かう速度を上げようとした時だった。

アグニが僕の方を見て獰猛な笑みを浮かべていたのだ。

「ほう、この程度は対処するのか。

・・・ならば、これならばどうだ!!」

感心する様に呟いたかと思うと次の瞬間、百はあろうかと言う数の炎塊がアグニの近くに浮かび上がった。

アグニは再び僕に右手を向けると浮かんでいた炎塊が僕目掛けて一斉に襲い掛かって来た。

「くっ!!」

何て数だ・・・さっきの比じゃないぞ!!

この数を避けきる事は不可能だと判断した僕は立ち止まり拳を握り締める。

『氣』の消費を抑えたい僕だったが、そうは言ってもいられない。

可能な限り避けて行くが・・・炎塊の数が多すぎる。

僕は避けきれないと判断した炎塊は氣を込めた拳で防いで行く。

時間にして3分程だっただろうか・・・無限に思われた炎塊も何とか耐えきる事が出来た。

しかし、その代償に・・・服は至る所が焼け焦げ、炎塊を防いでいた両腕は酷い火傷を負い、『氣』も想像以上に多く消費してしまった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

あれだけの攻撃をしたつて言うのに、顔色一つ変えない何て・・・。それにさっきの攻撃を繰り返されたらこっちは体が幾つあっても足りないぞ。

くそっ、こっちは彼奴に近付かないと攻撃も出来ないって言うのに・・・。

このままじゃだめだ・・・何か作戦を考えないと。

アグニを倒す方法を考える為に彼から意識を逸らしてしまった。

・・・その一瞬の隙が命取りとなった。

「・・・昂っ!!」

エリカさん鋭い呼び声に我に返ったが・・・もう遅かった。

目の前に迫る炎塊・・・既に避ける事が出来ない距離まで迫っていた。

「がはっ!!」

正面から受けた炎塊は腹に直撃。

ギリギリの所で体を『氣』で覆い威力を削ぐ事に成功はしたが、全てを防ぎきる事は出来なかった。

腹に今まで酷使してきた腕以上の火傷を負い、エリカさんが居た辺りまで吹き飛ばされてしまった。

地面に倒れ込んだ僕にエリカさんが駆け寄ってくる。

「昂!!」

「・・・大・・・丈・・・夫・・・です。」

「大丈夫じゃないでしょう!!」

もういいから・・・後は私がやるから・・・貴方は逃げなさい!!」
「ダメです・・・僕がエリカさんを守るって・・・決めた・・・から。」
体を起こそうとするが力が入らず上手く行かない。

そんな時・・・アグニの眩きが耳に届いた。

「その程度か・・・暇潰しにもならなかったな。」

その言葉を聞いた瞬間、僕は『氣』を振り絞って痛めた体を強引に起こす。

腹に激痛が走るが歯を食い縛り耐える。

・・・こんな所で倒れる訳にはいかない。

僕が倒れればすぐにエリカさんを生贄にする為に動き出す筈だから・・・。

痛みで意識が飛びそうになるが、何とか立ち上がりアグニから視線を外さない。

立ち上がった僕にエリカさんの必死な呼び止める声が掛かる。

「やめなさい、昂!!」

「このままじゃ、貴方が・・・。」

「僕は逃げませんよ・・・此処で逃げたら・・・一生後悔すると思うから。」

僕は心配そうに見上げるエリカさんに笑みを向ける。

しかし・・・その瞳には絶対に逃げないという覚悟と力強さを宿していた。

前を向くと僕には興味を失ったと一目見て分かる程エリカさんだけを見つめるアグニの姿があった。

・・・エリカさんに手を出させない。

僕は力の入らない体に鞭打って、再びアグニに向けて走り出す。

彼は僕の動きが視界に入ったのか、僕を視界に入れた。

「くどいぞ・・・これで終わりだ!!」

興味を失った僕に片手間の様に手を向けると、先程の比ではない『氣』の込められた特大の炎塊を放って来た。

後ろでエリカさんの僕を呼ぶ声が聞こえたが、迫り来る炎塊の圧力に気にしている余裕はない。

しかし、僕はここに最大のチャンスを見出した。

・・・これなら行けるかもしれない!!

僕は今出せる最大の『氣』を拳に込め、その拳を炎塊に向かって振り抜いた。

炎塊に触れた瞬間、熔けるのではないかと思ってしまう程の凄まじい熱が拳を襲う。

それでも全力で振り抜かれた拳によって炎塊の軌道が逸れた。

振り抜いた拳は皮膚が焼け爛れかなり酷い無残な状態になっていたが・・・アグニまでの道が出来た。

感心した様に僕を見つめる彼の一瞬の隙を見逃す訳にはいかない。

『神道流移動術・瞬（またたき）』

小さく呟くと『氣』を込めた脚を使って全力で地面を蹴る。

さつきアグニを殴り飛ばした時にも使った移動法・・・『神道流移動

術・瞬（またたき）』

『神道流移動術』の初歩の初歩。

脚に『氣』を込めて全力で地面を蹴る事により爆発的な速さでの移動を可能とする移動術。

今迄は真つ直ぐにししか進めないという欠点があった為使用出来なかった。

しかし隙を作る事に成功した僕はこの技を使い一瞬の間にアグニの懐に入り込んだ。

「っ!!いつの間!!」

突然目の前に現れた僕に驚きを隠せないアグニ。

やっとな懐に入り込めた・・・ここは僕の間合いだ。

僕は拳に『氣』を込めるとアグニ目掛けて拳を突き出した。

『神道流攻式壱ノ型・波（なみ）』

繰り出した拳を相手に叩き付ける瞬間『氣』も一緒に叩きこむ。

攻撃の意思を持って叩き付けられた『氣』は相手の内部まで浸透して内側から攻撃する。

『神道流攻式壱乃型・波』は『氣』を全身に汲まなくダメージを与えて行く……『神道流』の基本となる技だ。

「ぐう!!嘗めるなあ!!」

彼は一瞬の呻き声の後、怒気と共に腕を振るい僕に襲い掛かる。

僕自身余裕は無かったのでその腕を避けると、そのまま後ろへと後退した。

何とか一発叩き込む事は出来たが……アグニの様子を見て気を引き締める。

「貴様、やってくれてるではないか……中々楽しませてくれる。」

「……全然効いて無いか。」

僕の攻撃を受けても何事も無かったかの様に僕に獰猛な笑みを向けてくるアグニ。

攻撃の感触から効いて無いのは分かっていた。

アグニに拳を叩き込んだ瞬間の抵抗感。

深く入り込み内部を攻撃する筈だった僕の『氣』は人では考えられない抵抗によって阻まれ……それは彼の表面を撫でるだけとなった。

……恐らくあの凄まじい『氣』が抵抗感の正体だろう。

彼の中に流れる『氣』が僕の流し込んだ『氣』よりも段違いに多く、技の威力も足りなかった。

その為、僕の『氣』を彼の中まで届かせる事が出来なかったのだ。

それにその前の特大の炎塊も1つの要因だろう。

拳の痛みのせいで『氣』の練りが甘くなった……微々たる要因かもしれないが。

でも、アグニに攻撃を当てる事は分かっただけでも試した甲斐はあった。

……もつと『氣』と威力を込めて攻撃すれば何とかなるかもしれない。

「そんな物では無いであろう!!もつと私を楽しませて見せろ!!」

先程の怒りは何処へ行ったのか・・・彼は寧猛な笑みで再び僕に向かって幾つもの炎塊を放ってくる。

今迄なるべく近付くまで『氣』を消費しない様に戦ってきたが、そんな事を気にしている余裕は無くなった。

酷い怪我を負っている状況で、出し惜しみしている場合じゃない・・・このままじゃさっきの二の舞だ!!

覚悟を決めた僕は迫り来る炎塊に標準を合わせた。

『神道流攻式式ノ型・さざ波』

僕は両手を正面に向けて腰辺りまで引く。

そして手に込めた『氣』を正面の炎塊に向かって一気に開放した。

バンツ!!

僕の両手から放たれた『氣』は正面の炎塊とぶつかると激しい爆発を起こした。

『神道流攻式式ノ型・さざ波』は両手に込めた『氣』を正面に放つ技だ。これを使って正面から迫っていた炎塊のみを相殺したのだ。

勿論正面全ての炎塊を相殺した訳では無い・・・その後ろから幾つもの炎塊が迫っている。

しかしそこに出来た小さな隙間を見逃さなかった。

そこを確認した瞬間、間を置かず空いた隙間に『瞬』を使ってアグニに肉迫した。

再び懐に入り込む事に成功した僕はさっき以上に拳を握り締める。

『神道流攻式参ノ型『連撃・波（れんげき・なみ）』』

『氣』で身体能力を上げた体を使い、まず鳩尾に右肘を叩きつける。

そのまま右手の拳で顎を殴り上げ、すぐに左手の拳を鳩尾へ。

最後に首に目掛けて回し蹴りを放つ。

流れる様な連続攻撃・・・それが『神道流攻式参ノ型・連撃』。

勿論攻撃の一つ一つは『攻式壹ノ型・波』を使って体の内部まで攻撃している。

淀み無い連続攻撃は見事に決まりアグニの体が吹き飛んでいく。

・・・さっきよりも『氣』を込めて決められたし、手応えもあった。

今出せる最高の攻撃が決まった・・・もしこれでダメだったら・・・。
「はぁ・・・はぁ・・・。」

「やるではないか、今のは些か効いたぞ。」

膝に手を付きながら声のした方へ顔を向ける。

そこには何事も無かったかの様に立っているアグニの姿があった。

いや、口の端に少し赤い物が付いている・・・僕の攻撃が効いていた証拠だ!!

初めて相手にダメージを与える事が出来た。

でも・・・普通の人間だったら立ち上がれない様な威力だった筈なのに彼は普通に立っている。

・・・致命傷には程遠いという事だ。

くそっ!!このままのペースで攻撃していたら確実に僕が負ける!!
でも考えている時間は無い・・・アグニはいつでも僕を攻撃出来る態勢でいる。

・・・威力が高く『氣』を多分に使った攻撃を続けたら何とかなると信じてやるしかない。

既に満身創痍な僕に彼は称える様な声音で話し掛けてきた。

「はははっ、人間にここまでダメージを与えられるとは・・・面白い、面白いぞ。」

褒美だ、私の本当の姿を見せてやろう。」

アグニが笑みを浮かべながらそう言った瞬間と彼の体が炎に包まれた。

それと同時に彼の氣が出鱈目な程に高まり、周囲に炎を撒き散らせていく。

「なっ!!」

今迄のプレッシャーが可愛く見える位の『氣』の奔流に体が震え出す。

呆然と見ている事しか出来ない僕の隣にエリカさんが歩み寄って来た。

「昴、今すぐ逃げなさい。」

「エ、エリカさん。」

「アグニが真の姿を見せるって事は貴方を敵だと認めたといい事よ。……貴方のお蔭で時間も稼げた……住民の避難も終わってる頃でしょう。」

貴方には感謝しているわ……私の失態の尻拭いをしてくれて。」
忠告と共に柔らかな笑みを向けて来るエリカさん……しかしその笑みには覚悟が隠れている様に感じた。

「でも、もういいわ……後は私が時間を稼ぐから早く逃げなさい。」
「っ!!此処で逃げる何て出来ませんよ!!」

エリカさんこそ早く避難して……。」

やっぱりだ……エリカさんは命を賭けてでも神を止める覚悟だ。
彼女の覚悟を感じ取った僕は彼女を守る為の説得の言葉を発したが……。

「逃げなさいって言うてるでしょ!!」

それは僕の言葉に被せる様に叫ばれたエリカさんの大声に掻き消された。

その時になって初めて気付いた……この状況の中でもいつも騎士の様に気高かった彼女の体が震えている事に。

エリカさんの手の中にある銀色の綺麗な剣もカタカタと震えている事が分かる程に……彼女の体は震えていた。

気丈に振舞ってはいるが、よく見れば顔色は悪い……かなり不味い状況だと理解させられた。

「何だ、逃げる相談か??」

折角楽しくなって来た所ではないか、もつと私を楽しませてくれ!!」

僕達は聞こえた声の方に反射的に顔を向けた。

その瞬間アグニの纏っていた炎が晴れた。

そこには赤色の体に炎の衣を纏い、二面二臂で七枚の舌を持つ先程までとは全く違うアグニの姿があった。

あれが彼の言っていた本当の姿なのだろう……纏っている『氣』も格段に跳ね上がっている。

そしてそれは今まで支えていた僕の覚悟を打ち砕く物だった。

やばい、体の震えが止まらない……意識を保つ事だけで精一杯だ。隣に居るエリカさんも同様だろう……今まで以上に体の震えが伝わって来る。

「どうした??かかって来ないのなら……此方から行くぞ!!」

アグニはそう言うのと四本ある内の二本の腕にそれぞれ剣と斧を持って此方に迫って来た。

大きな体で、周囲に火の粉を撒き散らしながら襲い掛かって来る『アグニ』。

逃げなくてはいけないと分かっているても恐怖による震えで体が動かない。

そうしている間にもアグニはどんどん近付いて来ている。

彼が射程内に僕を捕え様とした時……そんな時に僕の前に飛び出す人がいた。

……隣で同じ様に震えていた筈のエリカさんだ。

彼女は僕の方を振り返る事無くアグニから振り下ろされた剣を自らが持つ剣で受け流す。

「だから早く逃げなさいって言ったのよ!!」

気をしつかり持ちなさい、神の『神気』に飲まれては駄目よ!!」

そう叫びながらエリカさんはアグニを相手取って行く。

一目見て腕の立つ事が分かる剣捌き……しかしそれだけの腕を持つとしても『神』には届かない。

防戦一方の中エリカさんは周囲に氣を迸らせながら何やら言葉を紡ぎ始めた。

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！主よ、何故我を見捨て給う！

主よ、真昼に我が呼べど御身は応え給わず。

夜もまた沈黙のみ。

されど御身は聖なる御方、イスラエルにて諸々の賛歌をうたわれし者なり！」

エリカさんから放たれている『氣』が大氣を震わせ周囲の温度を恐

ろしい速さで下げていく。

彼女の変化にアグニも警戒したのか一度距離を取った。

「我が骨は悉く外れ、我が心は蠟となり、身中に溶けり。

御身は我を死の塵の内に捨て給う！」

狗どもが我を取り囲み、悪を為す者の群れが我を苛む！」

「ほう、呪詛の類か。

その剣ならば私を傷つける事も可能であろうな。」

アグニはエリカさんを感心した様に見つめている。

「我が力なる御方よ、我を助け給え、急ぎ給え！」

剣より我が魂魄を救い給え。

獅子の牙より救い給え。

野牛の角より救い給え！」

炎に囲まれていた筈の周囲の温度が急激に下がった。

それを起こしたのはエリカさんから放たれている冷やかな『氣』。

先程までとは質の変わった『氣』を放つエリカさんは僕の方を振り

返る事無く口を開く。

「今なら動けるわね・・・私が時間を稼ぐから早く行きなさい。」

「ほう・・・その呪詛を持って私に挑むか。」

エリカさんはそう言うのアグニに向かって走り出した。

彼女はアグニに迫ると鋭い斬撃を放つ。

しかし彼女の攻撃は簡単に躲かれ、未だ傷一つ付けられない。

「そろそろ、私も反撃するのでしょうか。」

彼はエリカさんの攻撃をいなしながら眩くと、今迄休めていた攻撃

を再開させ再びエリカさんに襲いかかった。

右からは剣が・・・左からは斧が・・・次々とエリカさんに襲いか

かる。

彼女も何とか捌いているが、彼女からの攻撃の手は完全に止まって

しまった。

激しい攻撃を捌く続ける中でエリカさんが一瞬の隙を付いて剣を突き出す。

それはアグニの頬に届き、そこからは一筋の血が流れた・・・神を相手に一太刀入れた瞬間だった。

エリカさんは喜ぶ事も無く、すぐにその場を離れアグニから距離を取る。

「ほう、私に傷を付けたか・・・中々の武を持っているな。

・・・ではこれならばどうだ!!」

傷を付けられた事を喜んでいるかの様に笑みを浮かべるアグニ。

彼は先程より強いプレッシャーを放ちながらエリカさんに襲い掛かる。

剣と斧を巧みに使い攻めるアグニをエリカさんも険しい表情を浮かべながらも何とか捌く。

「っ!!」

2人の攻防の中で今一度アグニに隙が出来た。

エリカさんもそこに気付いたのか再び剣先をそこ目掛けて突き刺そうとしている。

けど僕は気付いてしまった・・・それは罠だと。

剣と斧を持つ手・・・しかし今のアグニには腕がもう二本ある。

残る手の内の1つに炎塊を作り、突きを放とうとしているエリカさんを狙っていた。

僕は恐怖で震える体を奮い立たせ、エリカさんに向かって『瞬』を使つて飛び付いた。

「ぎゃっ!!」

「ぐうう・・・。」

ぎりぎり間に合い彼女に炎塊が当たる事を防ぐ事が出来た。

しかし動かない体を無理やり動かした所為で僕自身が避ける事が出来ず背中少し喰らってしまった

突然に横からの衝撃に驚くエリカさんだったが、僕の様子を見て口を噤む。

「昴、何するの・・・っ!!」

・・・その背中、私を庇ってくれたの??」

「これ位・・・気に・・・しないで・・・下さい。」

それより・・・エリカさんこそ・・・大丈夫です・・・か??」

「ええ、大丈夫・・・痛っ!!」

火傷を負った僕を心配して支え様としたエリカさんだったが、足を痛めたのか立ち上がる事が出来なかった。

僕は少し動かすだけで激痛の走る体を、精神力を総動員して起きます。

そして心配そうに僕を見つめるエリカさんに向かって優しく微笑んだ。

「・・・エリカさん・・・後は・・・任せて下さい・・・僕が・・・何とかしますから。」

「駄目よ、昂!!」

そんな傷で何言ってるの!!逃げなさいって言ったでしょ!!」

「僕は・・・貴女を置いて・・・逃げたり・・・何か・・・しませんよ。」

大丈夫・・・です・・・貴女は・・・僕が・・・絶対に・・・守り抜いて見せますから。」

僕はエリカさんの呼び止める言葉を無視し、痛む体を引き摺ってアグニに向かって歩き出す。

何を思ったのかアグニも満身創痍の僕に対して攻撃をして来ない。僕が彼の正面に立つと彼はおもむろに口を開いた。

「・・・それだけの傷を負ってもまだ私に挑んで来るか。」

「僕には・・・負けられない・・・理由が・・・あります・・・から。」
そう言うと言を落とすし拳を構える。

覚悟は決まった・・・もう揺るがない。

「貴方はここで僕が止めます。」

「何を言っている、これからもっと・・・もっと私は楽しむのだ!!お前は唯の余興に過ぎんっ!!」

「いいえ、終わりです・・・僕がここで終わらせます。」

そう言うと言を僕は『瞬』を使いアグニの懐に飛び込んだ。

アグニも予想していたのか、『瞬』の速度に慣れたのか、右手に持った剣で僕に切り掛かって来た。

しかし僕はその攻撃を気にする事無く拳を握り締める。

・・・僕はこの戦闘において幾つかわかつた事がある。
相手は神様・・・無傷で倒す何て無理なんだ。
それ相応のリスクを負わなくては勝機すら見出だせない。
そんな僕が唯一勝機を見出した戦い方は・・・インファイト。
最大限威力の込めた攻撃を、休まず一つでも多く相手に叩き込む。
回避は疎かになるが気にしている余裕はない・・・致命傷となる物
のみ判断して避ければいい。

僕はアグニの剣よりも早く拳を相手に叩き込む・・・その技は『神
道流攻式壱ノ型・針（はり）』。

『波』が全体を攻撃する技なら『針』は一点集中型。

より高い『氣』のコントロール技術が必要とされるが、その分体の
内部深くまで攻撃が届く威力の高い技だ。

本来ならば急所に向けて放つ一撃必殺の技なのだか、今回はそんな
事は関係ない。

僕の拳を受けて、首に目掛けて振り下ろされていたアグニの剣が一
瞬動きを止めた。

その隙に更なる攻撃を繰り出していく・・・相手に反撃の隙を与え
ない。

次々に繰り出される攻撃にアグニが少しずつだが苦悶の表情を浮
かべて行く。

アグニに拳を、蹴りを叩き込む。

朦朧とする意識の中で僕が考えているのは・・・『エリカさんを護
る』・・・唯それだけ。

その思いに突き動かされる様に休む事無く拳を握り締める。

「此奴・・・徐々に威力が!!」

このままでは危険だと判断したのかアグニが攻撃を繰り出して来
る。

既に避ける程体力が残っていない僕は即死する攻撃だけを無意識

に判断して避けて行く。

切り刻まれ、炎に焼かれていく体……それでも攻撃の手を緩めない。

「っ!!」

攻撃の流れの中で剣と斧を持つ手を弾き飛ばし、アグニの体を無防備な状態にした時だった。

今迄流し続けてきた血によって出来た血溜まりに足を取られ体勢を崩しその結果攻撃の手が止まってしまった。

その隙を逃す神ではない……残った腕で炎塊を瞬時に創ると僕目掛けて放つ。

不味い……これは避けられない!!

左右から迫る炎塊に絶体絶命のピンチに陥り、死を覚悟したその時……。

片方の腕に後方から飛来した剣が突き刺さり、炎塊をも弾き飛ばした。

腕に刺さる剣はエリカさんが使っていた物……そして好機が見えた。

剣の突き刺さった腕に気を取られ一瞬動きを止めたアグニ……もう片方の腕もその動きを止めている。

そして目の前には未だ無防備な状態の体……。
ここだ……ここしかない!!

僕は最後の力を振り絞り、体に流れる『氣』全てをこの一撃に掛ける。

『神道流攻式四ノ型『集撃・真槍（しゅうげき・しんそう）』』

『神道流攻式四ノ型・集撃』は『参ノ型・連撃』の上位技。

『連撃』とは違い狙うは一点集中……目標を一点に定め連続攻撃を繰り返す……その手数20以上。

『真槍』……貫通力を高めた『針』の上位技を組み合わせ、唯一点を狙って行く。

右の拳を・左の拳を・右肘を・左肘を・右足を・左足を・右膝を・左膝を……。

全て・・・アグニの心臓目掛けて・・・一点集中。
流れる様な動きを止める事無く・・・全ての攻撃を心臓へ。

「この私を嘗めるなあ!!」

「うおおおおおおお!!」

アグニも僕の攻撃を無視して反撃して来る。

幾つものアグニの反撃を食らっても、それでも僕は止まらない・・・
止められない。

「昂!!」

朦朧とした意識の中でエリカさんの声が聞こえた気がした。

でも、もうこれで・・・最後だ。

「ああああああああ!!」

体中にある『氣』を全て縛り尽くせ・・・そしてその全てを右手に。

僕は今までで一番の威力のある拳を振り向いた。

「ぐああああああ!!」

アグニの叫びが耳に届く・・・手応えはあった。

全てを絞り尽くした僕はそこで意識を手放した。

第06話 神殺しの誕生

S i d e エリカ

私の危機に駆けつけてくれた少年・・・『神道 昂』。
昂は重傷な体を引き摺って・・・再び神に戦いを挑む。
洗練された『魔力』を巧みに操り自身の身体能力を上げ、無理やり動かない体を動かす。

初めは炎塊に焼き殺されそうな所を助けられ・・・。
次に『まつろわぬ神』招来の生贄にされそうな所を助けられ・・・。
最後は私が油断した所を庇われ、命を救われた・・・。
何度も傷付き倒れながら・・・体中に重傷を負いながら立ち上がる小さな少年。

「僕は・・・貴女を置いて・・・逃げたり・・・何か・・・しませんよ。
大丈夫・・・です・・・貴女は・・・僕が・絶対に・・・守り抜いて見せますから。」
今にも倒れそうな彼から投げ掛けられた言葉に・・・。
心を和らげてくれる笑顔に・・・。
自分より小さな背中の中から与えられる安心感に・・・私は高鳴る胸の鼓動を押さえる事が出来なかった。

限界を超えている体で昂が選択した戦い方は・・・インファイトだった。

最初は『神』相手に真つ向勝負など無謀だと思ったのだが・・・昂は相手に攻撃の隙を与え無い。

一瞬の間に懐に潜り込んだ昂は強烈な攻撃を畳み掛ける様に絶え間なく繰り返す。

・・・昂はこれ程まで強かったのか。
幼いながらも鍛え上げられた肉体・・・重症の中戦い続けられる精神力・・・。

何より、高い魔力耐性を持っている筈の『神』に対してダメージを与える事の出来る見た事の無い『武術』。

しかしそれを可能としているのは武術の力だけでは無い・・・昂の類稀な抜群の『魔力コントロール』。

・・・今の私では足手纏いにしかならない。

それでも何か出来る事は無いかと『絶望の言霊』を維持しながら足に治癒魔術を掛ける。

脚の治療が終わり掛けた頃・・・昂が自分の流した血溜まりに足を盗られ体勢を崩した。

その一瞬の隙をアグニは見逃さず、昂に炎塊を持った2本の腕で襲い掛かった。

反射的な行動だった・・・私は咄嗟に愛剣『クオレ・デイ・レオーネ』を片方の腕目掛けて投げ付けた。

剣は狙い通りに腕の1つに突き刺さり片腕を弾き飛ばす。

突然の襲来に一瞬動きを止めたアグニ・・・そしてその隙を切っ掛けに昂の猛攻が始まった。

流れる様な美しさと、力強さを持った連続攻撃・・・その打撃全てがアグニの胸だけを目掛けて放たれていく。

昂はアグニの反撃を受け、幾つもの重傷を負いながらも、少しも動きが衰えない。

・・・そんな昂の姿に私の目は奪われ、無意識の内に彼の名前を叫んでいた・・・彼に届く様に・・・。

その直後だった・・・昂の右手に凄まじい量の『魔力』が集められていく。

あの体の何処にあれ程の『魔力』が残っているのだろうか。

そしてその拳を雄叫びと共にアグニに叩き込み、その最後の1撃はアグニの体を貫いた。

昂は全てを出し切り力尽きたのかその場に倒れ伏してしまった。

その隣で胸に穴を開けながらも未だ佇み地面に倒れる昂を見降ろすアグニ。

私は昂を庇う様にアグニの前に立つが・・・アグニは私には目もくれずに豪快に笑っていた。

「はははっ、こんな小さな人間にやられてしまうとは・・・本当に現界は面白い!!」

アグニは一頻り笑い終わると天を見上げ大声を上げた。

『パンドラ』よ、見ているのであろう。」

「もちろんよ、アグニ様・・・この子が私の新しい息子になるのね。」

何も無い空間から声が聞こえたかと思うと、私は突然感じた重圧に身動き一つ出来なくなった。

その重圧を発する人物はいつの間にか昴の隣に座っていて、慈しむ様に昴の髪を撫でていた。

彼女が『パンドラ』・・・神と人の居る所には必ず顕現する者。

そして、あらゆる災厄と一掴みの希望を与える魔女と言われている存在。

「・・・この間『最後の鋼』が打倒されたばかりだというのに。

このタイミングで新たな息子が誕生する何て・・・。」

優しい面持ちで昴の頭を撫で続けるパンドラ。

彼女がこの場に現れたという事は・・・神殺しを生み出す転生の秘儀。

エピメテウスとパンドラが行う愚者と魔女の落とし子を生む暗黒の生誕祭。

つまり・・・私は神殺しの誕生を目の当たりにしている。

パンドラは昴の頭から手を放すと、何事も無かったかの様に立ち上がり声高らかに宣言する。

「さあ皆様、祝福と増悪をこの子に与えて頂戴。

最も若き魔王となるこの子に、聖なる言霊を授けて頂戴。」

「いいだろう・・・確か神道 昴と言ったか。

神殺しの王として新生を遂げるお前に祝福を与えよう。

お前は私、火神の権能を篡奪した神殺しだ・・・何者よりも熱く・強く・生きて魅せよ!!」

パンドラの言葉にアグニは昴に『祝福』を与えた・・・彼の言葉には確かに言霊が宿っていた。

祝福を与え終わるとアグニの体は消え去り、それと同時に気付けば

パンドラの姿も消えていた。

神の姿を消した事でこの場に掛かっていた重圧が消えた。

しかし、先程の光景が目焼き付いていた私は動く事が出来ず、暫く立ち尽くしていた。

無理もないだろう・・・目の前で新たな神殺し誕生を目撃したのだから。

私は体の至る所に重傷を負いながらも静かに眠る『新たな神殺し・神藤 昴』に視線を向ける。

全身に大小様々な火傷があつた筈だが、よく見るとその傷が少しずつ治り始めている。

それを見て、私は改めて実感した・・・この小さな男の子『神道 昴』が神殺しを成し遂げたのだと・・・。

しかし、いつまでも放心している訳にはいかない。

我に返つた私は叔父である『パオロ・ブランデッリ』に電話を掛ける事にした。

叔父様は殆ど間を置かずに電話に出た。

「叔父様、エリカです。」

『エリカ!!無事だったか!!』

突然他の偵察メンバーから街が炎に包まれたと連絡があつたんだ。

それでお前に幾ら電話を掛けても連絡が付かないから心配していたんだ!!

まつろわぬ神はどうなつた??お前に怪我は無いか??』

よほど私の事が心配だったらしい・・・矢継ぎ早に話し掛けて来る叔父様は初めてだ。

大切に思われているのだと感じ嬉しくなるが・・・今は報告が先だ。

「私は大丈夫です、叔父様。」

まず要点だけ話します・・・まつろわぬ神は討伐されました。」

『なっ!!どういう事だ!!』

現在その辺りにカンピオーネの方が居るといふ報告はされていないぞ!!

「いったいどの御方が討伐されたと言うんだ!!」

「いいえ、叔父様・・・現存するカンピオーネの方では御座いません。」
『っ!!まさか・・・そんな事が・・・』

「はい、新たなカンピオーネが誕生致しました。」

電話の向こうで叔父様の息を呑む音が聞こえる・・・流石の叔父様も今回は驚いた事だろう。

暫くの沈黙の後、叔父様が重たい口を開いた。

『・・・今その御方は如何している。』

「今は静かに眠っておられます。」

負っていた怪我也徐々に治り始めている状態です。」

『・・・どういった経緯の持ち主か分かるか??』

「魔術師ではありません・・・後は日本人であり、友人と旅行に来ていた少年だという事位です。」

『そうか・・・。』

叔父様は私の報告に深く息を吐く・・・そして・・・。

『・・・エリカ、その御方はそのままにして今すぐ帰還なさい。』

私はそう言われる事は予想が付いていた。

イタリアには『剣の王』と呼ばれる神殺し『サルバトーレ・ドニ様』が君臨している。

それに名門と呼ばれる結社は特定の神殺しとだけ親密になるのを避けたがる傾向がある。

・・・それは『赤銅黒十字』も例外ではない。

こういった理由からまだ器量定かでない魔王を担ぐ何て事、『赤銅黒十字』の総裁としてする筈も無い。

それは理解している・・・でも・・・。

「・・・叔父様、私は彼に何度も命を救われました。」

何も知らない彼をこのまま此処に捨て置く等到底出来ません。」

『しかし・・・エリカも理解しているだろう??』

「もちろん理解しています・・・理解した上で彼の保護を願ひ出ているのです!!」

再び二人の間に沈黙が落ちる。

先に動いたのは叔父様だった・・・叔父様は観念した様に一つ息を吐くと・・・。

『・・・わかった、新たなる王の誕生だ・・・始めに恩を売っておくのも悪い事では無い。』

『その御方の保護を許可しよう・・・一緒に連れて帰って来なさい。』
「っ!!ありがとう、叔父様!!」

よかった!!これで一先ず昴の安全を確保する事が出来た!!

この世界の事を何も知らない彼が・・・もし悪い魔術師にでも誑かされたら・・・どうなるか想像に容易い。

『新たなる王に付いて何か他に知っている情報は無いか?』

『私が知っている事と言えば、彼が日本人であるという事。』

名前は神藤 昴・・・先程も言った通り友達と観光旅行に来ていた事位です。」

『神藤 昴・・・彼は本当にそう名乗ったのか!』

「そうですが・・・どうかなさいましたか?』

『他に・・・彼はどうやって神を殺めた?』

「見た事の無い武術を使っていました・・・確か『神道流』と言っていたと思います。」

とても動揺しながらも続けて質問してくる叔父様の様子を疑問に思いながら質問に答えて行く。

そして・・・『神道流』と言う言葉に電話越しにも叔父様が酷く驚いた事がわかった。

『『神道流』だ!!』

「叔父様は何か知っていますのですか!』

私の問いには何も反応を示さず、それきり叔父様は黙り込み何やら考え込んでしまった。

次に口を開いた叔父様は、とても真剣な声色だった。

『・・・事情が変わった。』

エリカ、その方は我等『赤銅黒十字』が責任を持って保護する・・・必ず連れ帰って来るんだ!!』

「いったいどういう事ですか!』」

突然の変わり様に戸惑いを隠せない。

しかし叔父様は何も教えてはくれなかった。

『詳しい事は戻り次第説明する。』

だから急いで戻って来なさい・・・すぐに迎えを送る。』

「・・・わかりました。」

有無を言わせぬ物言いにそう返事をする事しか出来ず、通話は切られる。

迎えが来るまでの間、静かに眠る昴を微笑ましそうに眺める。

・・・叔父様の様子がおかしかった。

この少年と居ると感じたあの懐かしい気持ち・・・あの感情と何か関係があるのだろうか??

物思いに耽っていると遠くから車のエンジン音が聞こえてきた。

其方に目を向けると瓦礫を蹴散らしながら、物凄いスピードで此方にやって来る一台の車の姿があった。

見覚えのあるその車を確認すると思わず溜息が出た。

その車は急ブレーキと共に私の横に停まると中から、メイド服を着た少女が飛び出して来た。

「エ、エリカ様!!」無事ですか!!」

「落ち着きなさい、アリアンナ・・・私は大丈夫よ。」

慌てた様子で私の体を確認してくる彼女は、私専属の部下である

『アリアンナ・ハママ・アリアルデイ』。

魔法の才能が無く結社を止め様としていた所を私が引き取った少女だ。

魔法の才能は全くと言って無かったが、その代わりに家事など一般的なスキルが高く重宝している。

幾つか致命的な欠点があるが、それも含めて面白い子だ。

・・・今回の様に疲れがピークに達していなければ・・・の話だが。

「・・・本当に」無事で何よりです。」

「心配させて悪かったわね。」

早速で悪いけど・・・そこで眠っている子を頼めるかしら??」

「・・・この子、ですか??」

「ええ、私の命の恩人なの・・・起こさない様に気を付けてね。」
「この子が!!わ、わかりました!!」

彼女は私の言葉に驚いていたが、その後は丁寧に昴の事を抱き上げ車に乗せていた。

私も重たい体を引き摺りながら車に乗り込み、座席に座りしつかりとシートベルトを締め、気合を入れ直す。

帰り道・・・彼女の運転に残った体力を全て持って行かれたのは言うまでもない。

第07話 魔術師の世界

S i d e 昴

「ん……う……ん。」

気が付くとベッドの上で横になっていた。

周囲を見渡してみるが……知らない部屋だ。

……此処は何処だろう??

体を起こして改めて室内を見渡してみるけど……こんな部屋に見覚えはない。

シックで落ち着いた感じの室内だが置いてある家具のどれもが目見て高級品だとわかる位に完成度が高い。

今座っているベッドもふかふかで……布団でしか寝た事の無い僕はちよつと落ち着かない。

……どうして僕はこんな所に居るのお??

目が覚めたら全く知らない場所にいた為不安になって来た。

流れ落ちた涙を拭いながら挙動不審に周囲を頻りに見渡していると、突然部屋の扉が開いた。

突然の出来事に体の動きが止まってしまい……不安と共に頬を涙が伝う。

「あら??目が覚めていたのね……気分はどうかしら??」

扉から入って来たのは知っている人……エリカ・ブランデツリさんだった。

しかし、心の中が不安でいっぱいなのは僕が恐る恐る言葉にする。

「エ、エリカ……さんですか??」

「ええ、そうよ。」

涙を流す僕に少々驚いていたが、すぐに綺麗な笑顔を浮かべ、ベッドの横に置いてあった椅子に腰掛けた。

エリカさんは椅子に座ると優しい笑みのまま僕の頭に手を置いて優しく撫でてくれた。

それだけで心に充満していた不安は綺麗に無くなった。

「突然知らない場所で目覚めて驚いたのね……」

大丈夫よ・・・貴方の傍には私が付いてるわ。」

エリカさんは頭に置いていた手を放すと僕の頬を伝っていた涙を拭う。

我に返ると、またエリカさんの前で泣いていた事が恥ずかしくて顔が熱くなるのを感じた。

そんな僕を微笑ましく見ていたエリカさんだったが、椅子に座り直すと真剣な面持ちで僕を見据えて来た。

「怪我の方はもう何ともなさそうね。」

・・・昴はあの時何があつたのか覚えてる??」

「あの時・・・??」

エリカさんの言葉に首を傾げる。

さつき怪我って言ってたし・・・僕は・・・。

「・・・あっ!!」

そうだ!!僕はこの時・・・アグニつて言う神様と・・・。

あの戦闘を鮮明に思い出した僕は思わずエリカさんに顔を向ける。

「あ、あの後どうなりましたか!!」

「落ち着きなさい・・・ちゃんと後で教えてあげるわ。」

・・・それよりも体におかしい所は無いかしら??」

「おかしい所・・・ですか??」

そう言われて改めて自分の体を確認してみる。

確かにあの時の戦いで負った怪我はかなり重症だった筈だ。

ベッドから体を起こして腰を捻ったりと体の調子を確認していたが・・・特に何処も変わった様子は無い。

服を捲って確認してみたけど傷痕一つ残っていないかった。

「特におかしな所は何処にも・・・あっ!!」

「どうかしたの!!」

何処にも異常が見られなかったのでそう報告しようとした時・・・初めて気が付いた。

僕の体を巡る『氣』の量があり得ない位増えている事に・・・。

な、何だこれ・・・僕の『氣』の量はこんなに多くなかったぞ・・・。

僕は自分の『氣』を操る事に関しては自信を持っていたので、急に量が増えた事に戸惑いを隠せなかった。

だからエリカさんの言葉にも反応する事が出来なかった。

暫く一人で考え込んでみたけど、結局理由は思い当たらない。

仕方なく顔を上げると、目の前に心配そうに僕の顔を覗き込むエリカさんの姿があった。

「うわあああ!!」

「キヤツ!!もう、驚かせないで!!」

それに声を掛けても全然反応しなくなるし・・・心配するじゃない!!」

突然声を上げた事に怒られてしまった。

でも仕方ないと思うんだ・・・だって、エリカさんとっても綺麗な人だし。

「す、すみません・・・その、エリカさんの顔が近くにあつて・・・お、驚いてしまつて・・・。」

「・・・ふう、それで・・・体に変化があつたのよね?」

「は、はい、あ、あの、実は・・・。」

全く動じないエリカさんは息を吐くと改めて質問をしてきた。

僕は心が落ち着かなかつたが、何とか口を開いて気付いた事を話そうと思つたその時・・・。

ぐう~~~~~

僕のお腹の音が盛大に鳴り響いてしまった。

ああ・・・恥ずかしい。

「・・・うふふ、少し待っていて頂戴。

今食事を準備する様に指示してくるわ。」

エリカさんは可笑しそうに微笑むと、そう言つて部屋を出て行った。

ど、ど、どうしよう・・・図々しいとか思われちゃったかな。

後悔を胸に顔を赤くして待つて居たら、すぐにエリカさんが戻つて来た。

「すぐに準備するそうよ、少し待つて頂戴ね。」

「い、いえ／＼／すみません／＼／ありがとうございます／＼／」
何とか感謝の言葉を絞り出したがエリカさんの顔が恥ずかしくて真面に見れない。

ああ・・・エリカさんに笑われてる気がするよお。

「さて・・・食事の準備が出来るまで、少し話でもしましょうか。」
「は、はい。」

まだ恥ずかしかったが、そう言われては相手の顔を見ない訳にはいかない・・・失礼だし。

エリカさんに顔を向けるとその顔は再び真剣な物へと戻っていた。

「さっき言い掛けていた事だけど・・・何に気付いたのかしら?？」

「ああ、それは・・・えつと・・・エ、エリカさんって『氣』ってわかりますか?？」

『氣』・・・それは貴方が戦っていた時に使っていた力の事かしら?？」
「はい・・・人によつては『魔力』とか『呪力』って言うみたいですけど。」

「その事なら大丈夫よ・・・私にとつては『魔力』の方が耳に慣れてるけどね。」

一応確認しておかないと・・・。

何も知らない人からしてみれば、ただの頭の可笑しな人になつちやうから。

「ああ、話し易い言葉で話してくれて大丈夫よ。」

「ありがとうございます。」

それで『氣』の事なんですけど・・・ちよつと考えられない位『氣』の量が増えてまして・・・。」

「・・・そうなの・・・やっぱり・・・。」

僕の気付いた事を報告すると顎に手を当て考え込んでしまった。

うん、とつても絵になります・・・ってそうじゃなくて!!

少しの間考え込んでいたエリカさんだったが、すぐに顔を上げ神妙な面持ちで僕に視線を向ける。

「・・・昴は『魔術師』なのかしら?？」

「『魔術師』ですか・・・?？」

『魔術師』って確か道場に『氣』の稽古に来ていた人達がそんな事を言っていた筈だけど・・・。

・・・って言うより、本当に『魔術師』だったんだ!!

「僕は違いますよ・・・ただ、僕の家は道場でして・・・。

『神道流』って流派何ですけど、『神道流』では『氣』を使って武術を教えているんです。」

「・・・貴方が使っていた武術ね。」

「でも『氣』を使った『神道流』本来の武術は当主に認められた人しか教えて貰えない決まり何です。」

「・・・随分と厳しいのね。」

「実際、僕と亡くなったお爺ちゃんしか使える人はいませんでした。」
亡くなったという言葉に少し反応を示したエリカさんだったが、その事に付いて口を挿む事は無かった。

「道場に通って来る人達の中には『氣』の使い方を教わりに来ていた人達も多く居たんです。」

「『氣』・・・『魔力』の使い方?？」

『神道流』は繊細な『氣』のコントロールが要求されますから、まずは『氣』を自在に操る術を学びます。

そしてそれが出来る様になって初めて当主に認めて貰えるんです。」

「つまり、貴方の家の道場には多くの『魔術師』が通っていた・・・という事かしら?？」

「今思えばそう何だと思えます・・・『魔力』や『呪力』と言う言葉もその時に聞きましたから。」

実際道場で『氣』の使い方を学ぶのは大人だけで、子供は僕一人だった・・・彼女が居なくなつてからは。

彼女の事を思い出して、少し懐かしい気持ちに包まれる。

しかしエリカさんはそんな僕に気付く事も無く少し考えた後、口を開いた。

「・・・なら先ずは私達『魔術師』に付いて話すわね。」

『魔術師』としても仕事は幾つかあるわ。

例えば古くから伝わる『魔術』を途絶えさせない事だったり・・・『魔術』を悪用する人を取り締まったり・・・色々ね。

その中でも最も重要なのは・・・『まつろわぬ神』が現れた際の対応よ。」

『まつろわぬ神』・・・確かエリカさんが『アグニ』の事をそう呼んでいた気がする。

魔術界にとって『まつろわぬ神』は周知の存在なのかな??

『まつろわぬ神』：人の紡いだ神話に背いて自僕に流離い、その先々で人々に災いを齎す神々を指すの。

決して朽ちない肉体を持ち、地上の武器や魔術も通じない。

闘いが生業の神であればデフォルトで人類最高峰以上の武技を持つ・・・そんな出鱈目な存在よ。

勿論貴方の戦った『アグニ』も『まつろわぬ神』の1人よ。」

自身の顔が青褪めて行くのが分かる。

彼がそんな出鱈目な存在だった何て・・・僕そんな奴と戦ってたのか。

僕がこうして生きている事は殆ど奇跡に近いという事か・・・今になって震えが。

『まつろわぬ神』は自分の神話と縁も無い土地にも表れて災厄を齎す事があるわ・・・今回はその例ね。

そして・・・神は唯其処に居るだけで人の世に多大な悪影響を及ぼすの。

今回の『アグニ』の様に火神であれば辺りは炎に包まれ、嵐の神であれば街は台風以上の嵐に見舞われる。」

災厄か・・・その通りだ。

炎に街が包まれた光景・・・今でも忘れる事が出来ない。

エリカさんの話が本当であれば、もっと色んな神様が居る筈だ。

もし違う神様が現れていたらアグニと違った被害が出るんだろう。

『まつろわぬ神』に対して幾つかの対処法があるわ。

まずは嵐か地震の様な物と割り切つてやり過ごす方法。

次に相手が神格の弱い神であれば、その存在を封じ込める方法。
・・・これには長い準備期間と多くの人員が必要になるから簡単に出来る方法では無いわね。」

確かに神と呼ばれるだけあってアグニの持つ『氣』の量は凄まじい物だった。

そんな彼等を封印するとなると・・・魔術師にとって命懸けの仕事なんだろうな。

「最後にもう一つ・・・神と戦い神を殺める事。」

「えっ!!」

エリカさんは神妙な雰囲気最後までそう言った。

その為彼女の言葉が嘘ではないと理解した・・・でもとてもじゃ無いけど信じられない。

神を殺す??・・・あんな化け物みたいな力を持った存在を??

エリカさんも言っていたけど、そんな事不可能なんじゃ・・・。

考えていた事が顔に出ていたのだろう・・・エリカさんは言葉を続けた。

「そう、普通なら天地が引つ繰り返っても在り得ない。

でもそんな所業を成し遂げる人間が実際に存在するのよ。

私達は神をも恐れぬ偉業を成し遂げた彼らの事を『カンピオーネ』と呼んでいるわ。」

『カンピオーネ』・・・。」

「イタリア語でチャンピオンと言う意味ね。」

現在この世界には六人のカンピオーネの方がいらっしやるわ。」

「ろ、六人もですか!!」

神に勝った人がそんなに居る何て・・・凄いなあ・・・。」

神を殺せる人が6人に居るなんて・・・素直に感心してしまう。

と言うより、その人達は本当に人間なんだろうか??・・・と疑ってしまう。

「もちろん滅多に誕生しないわ・・・過去に数百年不在だった事なんてザラにあるのよ。」

「ここ半世紀は異常なの・・・古参の『神殺し』は1人だけで、後の

方々はここ数十年で誕生したのよ。」

「そう・・・なんですか。」

「そうですね・・・『神殺し』何て偉業を成し得る人が簡単に現れたら苦労しませんよね。」

「今は此処イタリア、そしてイギリス・中国・アメリカ・日本に一人ずつ居られるわ。」

「に、日本にもですか!!」

驚いてはみた物の・・・心当たりがある。

去年の間に入った様々な騒動・・・並びにその時々感じた大きな『氣』。

あれは日本に居る『神殺し』と『まつろわぬ神』の戦いだったのか!!

今迄謎だった事が解明され1人満足感を感じていた時に、おかしな事に気が付いた。

「エリカさん、今6人いるって言ったのに5人しか言ってますんよ?!!」

この僕の言葉にエリカさんは深く息を吐いた。

そんな彼女の様子を見て僕は何とも言えない嫌な予感を感じた。

・・・もし、この続きを聞いてしまえば、後戻り出来ない様な・・・そんな予感を・・・。

「それはそうよ・・・六人目が誕生した事を知っているのは私を含め数人しかいないんだから。」

エリカさんは表情を真剣な物から優しい微笑みに変え改めて口を開いた。

・・・何故かその笑みは僕の様子を楽しもうとしている物にしか見えなかった。

「おめでとう、昴・・・貴方が新たに生まれた六人目の『神殺し』よ。」嫌な予感は見事に的中・・・僕はその言葉に思考が停止し、固まっ

てしまうのだった。

第08話 両親の誇り

S i d e 昴

「落ち着いたかしら??」

「・・・はい、もう・・・大丈夫です。」

エリカさんが渡してくれた水を飲み、混乱で熱くなった体を冷ま
す。

突然告げられた僕が『神殺し』になったという話に混乱していた思
考も落ち着きを取り戻す。

・・・あの時感じた嫌な予感の正体はこれだったか。

「あの・・・僕が『神殺し』って言うのは。」

「その話は後にしましょう・・・食事の用意が出来たみたいだわ。」

そう言つてエリカさんは僕の持っていたコップを受け取り立ち上
がった。

結構長い時間固まっていたから、その間に確認しに行つてくれたの
かな??

水も目が覚めた時には部屋に無かったと思うし・・・多分そうだろ
う。

僕もベッドから降り、エリカさんの後に続いて部屋を出る。

暫く歩くとエリカさんが一つの扉を開ける。

その部屋の中は八人程が座れる机と椅子が置かれた豪華な部屋
だった。

エリカさんが一つの席に進んで行き、椅子を引いてくれる。

「さあ、昴・・・ここに座って。」

部屋の煌びやかさに圧倒されていた僕は慌ててその席に着く。

エリカさんが僕の隣に座ると料理が運ばれて来た・・・料理を運ん
できたのはメイド服に身を包んだ女性。

穏やかな、おっとりとした印象の女性は僕と目が合うと、優しい微
笑みを浮かべ小さくお辞儀をしてくれた。

少しばかりの恥ずかしさを感じている間にメイドさんは着々と準
備を進めて行く。

僕が気付いた時には既に机の上に美味しそうな沢山のイタリア料理が並べられていた。

「遠慮しないで、沢山食べていいのよ。」

運ばれてきた料理の数々・・・そのどれもが僕の目には輝いて見える。

ぐうぐうきゆるるるる

思い出したかの様に僕の腹の音が鳴り響く・・・僕は羞恥心を隠す様にその料理の数々に齧り付いた。

本能に任せる様に料理を口に運ぶ。

体が訴えている・・・この体に足りない力を・・・。

この行動に迷いはない・・・戦う体を完成させる為に・・・。

机に置いてあった料理は全て平らげた。

スープもパスタも肉も魚もピザもデザートも・・・どれもこれもどれも美味しかった。

僕は満足気に椅子に凭れ掛かり、ナイフとフォークを置いた。

「満足出来たかしら?」

声のした方に顔を向けるとエリカさんが微笑ましげに僕を見ていた。

食べる事に集中しすぎて気付かなかったけど・・・もしかして食べた所をずっと見られてたのかな。

力漲る体を小さく縮こまらせながら、羞恥に顔が赤くなってしまった。

「さて、食休みに少しさっきの話の続きをしましょうか。」

エリカさんが恥ずかしがっている僕を気遣ってくれたのか、そう口にした。

それに僕は有り難く頷き付く。

「あ、はい・・・あの僕が『カンピオーネ』だって・・・。」

「ええ、そうよ・・・昂はあの時の戦闘をどれ位覚えてるかしら?」

「アグニとの戦闘ですか?」

・・・エリカさんの剣がアグニの手に突き刺さって。

その後『此処しか無い』と思つてあの時出来る最高の技を繰り出して……。

……すみません、その後の事は覚えていません。」

そう答えたらエリカさんは少し考え込む様な仕草をしてから、話し始める。

「そうなのね……なら、その後の話をしましょうか。」

……あの時昴が最後に放った一撃がアグニの体を貫いたの。

貴方はその一撃に全てを賭けていたんでしょうね……その直後、その場に倒れ込んだ。」

「そう……だったんですか……。」

『カンピオーネ』を生み出す転生の秘儀には『プロメテウス』の弟『エピメテウス』と妻『パンドラ』があらゆる災厄と僅かな希望を詰め込んだ箱の中から見つけたという伝承があるの……新たな神殺し誕生に気付いたのね、あの場にパンドラ様が現れた。」

「エリカさん、何もされませんでしたか!？」

別の神が現れたと聞いて驚くと共に、エリカさんに被害が無かつたのか心配になる。

僕の心配を嬉しそうに受け止めながらエリカさんは話し続ける。

「ええ、私何か眼中にも無い感じだったわ。」

『パンドラ様』は新たな『神殺し』の誕生を祝福する為に現れたの。それに応える様にアグニが貴方に言霊を授けて……2人共その場から姿を消したわ。

恐らくアグニは貴方に負けた事により、肉体を保てなくなって消滅。

パンドラ様は自らの役割が終わったから姿を消したんでしょうね。

その後、私がここ『赤銅黒十字』に連れて来たの。」

僕が神殺し??……信じられない。

エリカさんが嘘を吐いているとは思えないけど……現実味が全然ない。

「信じられないのも無理ないわ……でもそれが現実よ。」

貴方は新たな『カンピオーネ』としての生を受けてしまったのよ。」

エリカさんのその言葉を最後に二人に沈黙が落ちる。
現状が呑み込めず、沈黙が室内を包み込んでいる時・・・扉がノックされた。

それには心配そうに僕を見守っていたエリカさんが対応した。

「・・・どうしたの??」

エリカさんの声に扉が開かれ、そこから先程食事の用意をしてくれた女性が入って来た。

彼女は丁寧に頭を下げると・・・。

「パオロ様、ブラウ様、サーシャ様がお戻りになりました。」

「そう、叔父様達が戻られたの・・・ありがとうございます、アンナ。」

「さあ、昴・・・行くわよ!!」

「え!?!・・・行くって何処へ??」

エリカさんは混乱の中にある僕を引つ張って席を立たせ、そのまま手を引いて部屋から連れ出した。

アンナと呼ばれたメイドさんはその様子を穏やかな笑顔で見送っていた。

「あ、あの、エリカさん?!!」

「これから貴方の今後について話し合うのよ。」

「それってどういう・・・。」

僕はエリカさんに連れられ、一つの部屋の前に到着する。

僕に何も詳しい説明をする事無くエリカさんはその扉を叩く。

「叔父様、エリカです。」

『入りなさい。』

中からは低めの男性の声が聞こえた。

許可を貰ったエリカさんは扉を開け、僕の手を取ったまま中に入って行った。

訳が解らない中、取り敢えず部屋の中に目を向ける。

何処かの社長室かの様な机の配置・・・その前には2つのソファが置かれ、ドラマで見た事のある景色だった。

部屋の中には2人の男性と1人の女性が居り、彼等は部屋の入口の

傍で横に並んで立っていた。

2人の男性は同じ様な顔付きをしている・・・兄弟かな??

澄んだ青い瞳に、端正な顔立ち・・・そして服の上からでもわかる鍛え抜かれた鋼の肉体。

1人は軽く肩にかかる長髪、もう1人は短く刈り上げられオールバックの様な髪型になっている。

そして女性の方だが、この人はエリカさんにそっくりだ。

エリカさんが数年かしたら、こんな女性になるだろう姿形をしている。

しかし雰囲気は華やかな雰囲気のエリカさんと違い、かなりおっとりしている様に見受けられる。

何て不躰にも彼等の事を観察していた時、女性の方が僕に駆け寄って来たかと思ったら・・・。

ぎゅっ!!

突然優しく抱き締められた。

えっ!!ええっ!!何??どういう事??

ふわっと香る女性特有の甘い香りとその柔らかさ。

突然の事に驚いたけど・・・いい香りに頭がくらくらしてきた／＼

「お母様!!何してらっしゃるのですか!!早く離れて下さい!!」

エリカさんが隣で何か叫んでいるけど、僕にそんな事を気にする余裕はない。

女性は僕を抱き締める力を強めると、エリカさんに向けて口を開く。

「何??エリカちゃん嫉妬??・・・ちよっと位いいじゃない!!」

「なっ!!」

ああ、この女性はエリカさんのお母さんなのか・・・道理で似ている筈だ。

理性を保つ為どうでもいい事を考えている時、エリカさんが顔を真っ赤にして僕を見ている事に気付いた。

・・・エリカさんのこんな表情始めて見たなあ。

「サーシャ、その辺りにして擱きなさい。」

「もうちよつとこうして居たかったのに!!」

見兼ねたオールバックの男性が助け舟を出してくれた。

エリカさんのお母さん・・・サーシャさんも彼の言葉に漸く僕を開放してくれる。

「それにしても大きくなったわね・・・見違える程格好よくなっちゃつて。」

サーシャさんはそのまま離れるかと思ったら、じつくりと僕の顔を見つめて来た。

間近にエリカさん似の綺麗な顔がある為ドキドキして、顔が赤くなってしまうた。

そんな僕の様子を見たエリカさんが、再び声を荒げる。

「お母様!!」

「わかったわよ・・・そんなに怒ると美容に悪いわよ??」

サーシャさんは再びエリカさんに怒られた事で、やっと離れてくれた・・・かなり渋々と言った感じだったが。

彼女が元居た位置の戻ると、彼等は突然僕の前に跪いた。

隣に居た筈のエリカさんも、何時の間にか彼等の隣に居て、一緒に跪いていた。

え??何、この状況??

突然の事で折角落ち着いた思考が再び混乱に陥る。

そんな僕を余所に真ん中を位置取る長髪の男性が頭を下げたまま口を開いた。

「新たなる王の誕生、心より祝福致します。」

そして御挨拶が遅れた事、心から謝罪致します。」

ど、どうすればいいの!?

突然知らない大人達に頭を下げられ、何やら御大層な事を言われている。

どうすればいいのか分からず、挙動不審に視線を彷徨わせていると、女性二人が肩を揺らしてる事に気付いた。

・・・あ、あれ、絶対笑うのを堪えてるだろ!!

「ぶっ!!あははは!!」

「ごめんなさい、もう無理よ、我慢出来ない!!」

サーシャと呼ばれた人が我慢出来ずに声を上げて笑い出した。

それを切掛けに全員が立ち上がる・・・その表情は皆笑顔で僕に優しい視線を向けていた。

「いきなり驚かせて申し訳なかったね。」

新たな王への挨拶だ・・・こういう事はちゃんとして置かないといけなくてね。」

「い、いえ、確かに驚きましたけど・・・いったいどうして??」

『カンピオーネ』という存在は『まつろわぬ神』に対する唯一の対抗手段と言ってもいい。

そうなる私達魔術師は『カンピオーネ』に対して先程の様な姿勢を取る必要があるんだよ。」

・・・すると何か??

『カンピオーネ』の人達は『魔術師』に対して力がある事を理由に、無理な要求をしてるって事??

「まあ、全員がそう言う存在ではないんだけどね。」

それより自己紹介がまだだったね・・・私は結社『赤銅黒十字』の総帥『パオロ・ブランデッリ』だ。」

「私はパオロの弟で『ブラウ・ブランデッリ』だ。」

「私がブラウの妻でエリカちゃんの母親の『サーシャ・ブランデッリ』よ。」

久しぶりね、昴くん・・・また会えて嬉しいわ。」

「え、えっと、神藤 昴・・・です??」

皆さんに自己紹介をされたので、釣られて僕も挨拶を返したが、途中で疑問が頭を過る。

久しぶり??・・・さつきサーシャさん久しぶりって言わなかったか??

「あ、あの、久しぶりって・・・どういう・・・。」

「ああ、昴君が覚えていないのも無理はないかな・・・君は幼い時私達と会った事があるんだよ。」

はい??・・・僕はこの人達の事なんて何も・・・。

僕は彼等の事を全く知らない・・・失礼に思いながらも問い掛ける。

「あの、会った事があるって・・・。」

「そうだね・・・まず君はご両親の事をどれ位覚えてる??」

「両親の事ですか??・・・お爺ちゃんに僕が小さい頃に事故で亡くなったとしか聞いていませんけど。」

僕がまだ小さかった頃、僕の両親は事故で亡くなったとお爺ちゃんは教えてくれた。

両親が亡くなった後、その時は生きていたお婆ちゃんとお爺ちゃんが僕を引き取ったそうだ。

最初は両親が死んでしまった事に塞ぎ込んでいたらしく、見兼ねたお爺ちゃんが僕に『神道流』を教えてくれた。

両親も『神道流』を習っていた事を知った僕は稽古に打ち込み、暫くしたら元気を取り戻す事が出来た。

けど両親の死はかなりのショックだったのか・・・両親と過ごした日々の事は殆ど覚えていない。

僕がそう伝えるとパオロさん達は寂しそうに・・・でも何処か懐かしそうに両親の事を話し出した。

「そうか・・・君のご両親と私達は親友同士だった。」

彼等とは彼等が新婚旅行でイタリアに来ている時に会ってね・・・いや違うな・・・助けられたんだ。」

「そうだったな・・・私達が三人で調査をしている時、はぐれの魔術師連中が神獣の召喚に成功してしまっただけ。」

その時、危なかった所を彼等が助けてくれたんだよ。」

「危なげ無く神獣を倒す彼等の強さに感動してしまっただけ。」

頭を下げて私達『赤銅黒十字』に特別顧問として招いたんだ・・・嬉し・・・お父さん達はイタリアに居たんだ。いな。

僕は知らず知らずの内に両親と同じ地を踏んでいたんだ・・・嬉し・・・彼等には『魔力操作』の指導をして貰ったり、一緒に仕事を熟したりしながら楽しく日々を過ごしていた。

そんな彼等とも契約期間が切れてね・・・君の両親は日本に帰ったんだ。」

両親の事を話すパオロさん達はとても楽しそうで、とても両親と仲の良かった事が伺えた。

今まで口を閉ざしていたサーシャさんも笑みを浮かべながら口を開いた。

「直接は忙しくて会えなかったけど、彼等とは手紙のやり取りはしていたの。」

エリカちゃんが生まれて数年経った頃、彼等が突然訪ねてきたの・・・その時よ、初めて昴君に会ったのは。」

サーシャさんから向けられた視線は慈愛に溢れていた。

そんな視線をお爺ちゃん達以外から向けられた事の無かった僕は恥ずかしさに顔が赤くなった。

「当時の君は人見知りでね・・・彼等の傍を離れなかったんだ。」

けど、エリカちゃんが無理矢理外に遊びに連れ出してね。

私達が仕事から帰ってくると二人して仲良く遊んでいたわ・・・それはもう、本当の姉弟みたいだね。」

とても嬉しそうに話すサーシャさん。

エリカさんとも小さい頃に出会っていたのか・・・隣でエリカさんも驚いている。

けど、エリカさんに手を引かれた時に感じたあの懐かしい感覚・・・あれは気の所為何かじゃ無かったんだ。

「彼等は暫くイタリアに滞在すると言ったから、また一緒に仕事したりして過ごしていたの・・・。」

ここでサーシャさんの表情が暗くなり、それを見たブラウさんが代わりに口を開いた。

「ある日『まつろわぬ神』の目撃情報が入って、周辺の調査を行ったんだ。」

・・・私達が現地に到着した時には既に周囲にかなりの被害が出ていた。」

「私達は偶然イタリアに滞在していた神殺しの1人『アレクサンドル』

ガスコイン様』。

「・・・彼に連絡を取って対処して貰おうとしていたの。」

「連絡も終え、後は『アレク様』が到着するのを待つだけだった。

・・・そんな時、普段人間なんか気にも留めない『まつろわぬ神』が私達を視界に捉えたんだ。」

「いいえ、正確に言えば『魔女』の力を持った私を・・・よ。」

そう告げたサーシャさんの先程まで見せていた穏やかな雰囲気は身を潜め、鎮痛な表情を浮かべていた。

それは彼女だけでは無い。

彼女の隣に立つブラウさんは彼女を支え、パオロさんも当時を思い出し、酷く悲しそうな表情を浮かべている。

「その神は『魔女』に対して異常な執着を持っていてね・・・私に襲い掛かって来たの。」

・・・その時私を庇ってブラウが深手を負ってしまった。」

サーシャさんは涙を堪えられず、話す事が出来なくなってしまうた。

ブラウさんの目にも涙が見えたが、彼はそれを零す事無く泣き崩れたサーシャさんの背中を摩ってあげている。

続きを話し始めたのはパオロさんだった。

「私がブラウ達を連れて退却している間に殿を務めてくれたのが昴君・・・君のご両親だった。」

彼等のお蔭で私達は無事に退却、弟は命を取り留める事が出来た。

その後到着された『アレク様』に『まつろわぬ神』は討伐された。気丈に話し続けていたパオロさんの言葉がそこで詰まった。

・・・何となく予想は付いている。

「もう話さなくても大丈夫」だと言えればいいんだろうけど・・・それでも僕は最後まで聞きたいと思った。

「・・・だが戦闘が終わった後、私達の所に戻って来たのはアレク様だけだった。」

アレク様に抱えられる形で戻って来た君の両親は・・・既に息を引き取っていた。

『……遅れてすまなかった』……アレク様は最後にそう言い残して去って行った。

後に聞いた話だが、アレク様が現場に駆け付けた時には既に君のご両親は事切れていたらしい。

……しかし、その時『まつろわぬ神』もまた満身創痍だったと聞いた。

君のご両親は『まつろわぬ神』を後一步の所まで追い込んでいた……という事だ。」

パオロさんが口を閉じるとサーシャさんに寄り添っていたブラウさんが立ち上がり僕に頭を下げてきた。

サーシャさんもパオロさんも零れ落ちる涙を拭う事もせず謝罪を口にする。

僕の両親の事を始めて聞いたであろうエリカさんですら僕に頭を下げていた。

「本当にすまなかった。

……俺が怪我何てしなければ、5人で戦っていれば、君のご両親は死ななかつたかも知れない。」

「本当にごめんなさい……昴君のご両親が死んだのは……私達の所為なの!!」

「私はその時彼等もすぐに引き上げて来る物だと思っ込んでいた。

……私が……私があの時すぐに引き返していれば……彼等が死ぬ事は無かつた。

謝って済む事では無いと分かっている……だが、本当に……すまなかつた。」

僕はそんな彼等を黙って見つめていた。

父と母の死の真相を聞いた……というより初めて父と母の事を詳しく知った。

……お爺ちゃんもお婆ちゃんも余り教えてくれなかつたから。

僕は目を閉じ気持ちを落ち着かせる……そして1度深く深呼吸すると口を開いた。

「皆さん、頭を上げて下さい。」

しかし全員頭を上げ様とはしない・・・それでも僕は話し続ける。
「僕は皆さんを恨んで何かいませんよ。」

・・・確かに両親が生きていていれば思った事は何度もあります。
けど両親の話聞いて、それ以上に・・・僕は誰かの為に命を賭けられる両親を誇りに思いました。」

僕の言葉に顔を上げた4人の目を真っ直ぐ見据えて・・・僕の気持ち
が伝わる様に言葉を紡ぐ。

「御2人が助かって本当に良かったです。」

だって御2人が死んでしまつたら・・・エリカさんが悲しみますか
ら。」

そう言つて僕は微笑んだ・・・これは僕の心からの気持ちだ。

僕の思いが通じたのだろうか・・・パオロさん達は僕の手を取つて
涙を零した。

「すまなかつた」「ごめんなさい」・・・そして「ありがとう」と呟きな
がら。

そんな彼等に優しい言葉を掛けながら思う・・・ずっと自分を責め
続けていたんだろうな。

初めて聞いた両親の話・・・でも何処か両親らしいと思つている自
分が居た。

その時、懐かしい気持ちと共に二人の笑顔が脳裏に過つた。

懐かしさと喜びと嬉しさと・・・色々な感情が溢れて来て、僕の頬
に涙が伝う。

思い出した・・・僕に・・・僕だけに見せてくれていたあの優しい
笑顔。

全員の涙が止まるまで少しばかりの時間を要した。

泣き止んだ所で全員目が赤くなつている事に笑みが零れる。

「昴君は統一郎さんと同じ事を言うんだな。」

「お爺ちゃんですか??」

「統一郎さんに謝つた時も、私達が助かって良かったと・・・そう言つ
たんだ。」

「そうだったんですか・・・お爺ちゃんらしいですね。」

「昴君のご両親も同じ様な人だった・・・君は間違い無く彼等の子だな
!!」

本当にお爺ちゃんらしい・・・武道に関しては厳しかったけど、それ以外は優しい人だったから。

そして最後の言葉に僕の心は喜びと優しさと温かさに包まれた。

第09話 婚約者

S i d e 昴

落ち着きを取り戻した僕達は改めて話をする為ソファに腰を下ろしていた。

席は僕とエリカさん・・・対面にパオロさんとブラウさん。
サーシャさんは飲み物を用意する為、今は席を外している。

最初に口を開いたのはパウロさんだった。

「さて、昴君・・・急で悪いのだが、君に決めて貰いたい事がある。」
「・・・何でしょうか??」

「君は自分が『カンピオーネ』になった事を理解してくれたかな??」

「・・・そしてその存在が我々『魔術師』にとってどれ程大きな存在か。」

「はい・・・何となくですが。」

パウロさんは僕の言葉に満足そうに頷くと、真剣な表情で問い掛けて来た。

「だったらいいんだ・・・君は『カンピオーネ』として、これからどうやって生きて行く??」

「あ、あの・・・日本で今迄通りに過ごして往きたいんですけど。」

これは僕の切実な願いだ。

もうあんな怪物と戦う何て御免だ・・・もし目の前で人が襲われて
いるなら別だけど。

僕の答えにパオロさんは静かに首を横に振った。

「・・・すまないがそれは恐らく無理だろう。」

脅す様で悪いが『まつろわぬ神』を始め、他の『カンピオーネ』の
方達が君を放って置かないだろう。」

「それってどういうことですか・・・。」

「良くも悪くも『カンピオーネ』という存在は目立つんだよ。」

今は私達が誤魔化しているが、近い内に君の事は必ず魔術師界全土
に知れ渡る。」

実際今回の事件も新たな『カンピオーネ』が誕生したのではと騒が

れ始めている程だ。」

「それじゃ、僕の事はもう……。」

僕はもう逃げられないって事??

平穏な暮らしが送られなくなった事にショックを隠せない。

そんな顔色が悪くなつた僕の前に柔らかな香りのする紅茶が置かれた。

「紅茶が入ったから……これを飲んで少し落ち着いて。」

優しい笑みを僕に向けるサーシャさんの言葉に従って紅茶を口に運ぶ。

口に入れた瞬間柔らかく優しい香りが口いっぱいに広がり、心の動揺が収まって行くのを感じた。

「……とても美味しいです。」

「それは良かったわ!!」

サーシャさんは僕の言葉に嬉しそうな笑顔を浮かべるとそのままブラウさんの隣に座った。

僕が落ち着いた事を確認したパオロさんは再び口を開いた。

「近い内に君の正体がばれるのは避けられないだろう……だが、少しの間は大丈夫だ。」

昂君にも考える時間が必要だと考えてね……ちよつと仕事をさせて貰ったよ。」

「……工作ですか??」

「ああ、我々『赤銅黒十字』の総力を上げてあの場所に神を封印した様に細工をして来た。」

勿論、見る人が見ればすぐにばれるだろうがね……でも君が考える位の時間は確保出来る筈だ。」

僕の為にそこまでしてくれる何て。

……一歩間違えれば他の『カンピオーネ』に目を付けられて、結社の危機になるかもしれないのに。

僕の為にここまでしてくれたんだ……僕も逃げずに、真剣に考えてみよう。

「僕の為に……ありがとうございます。」

他の『カンピオーネ』の方達はどうか?」
「イタリアのカンピオーネ『サルバトーレ卿』は何処の結社にも属して
いない。」

「彼はその力だけでイタリアの敬愛と畏怖を我が物としている。」

「イギリスに本拠を置く『アレクサンドル様』は自ら結社を立ち上げて
いる。」

中国の『羅濠教主』も同様に自らの結社を持っている・・・と言う
より、中国全土を支配しているね。

「アメリカにいる『ジョン・プルートー・スミス様』はちよつと変わつ
た人ね。」

自分の正体を身近な人にしか明かさない・・・少数精鋭で活動して
いると聞いてるわ。」

パオロさん達が代わる代わる他の『カンピオーネ』のやり方を教え
てくれた。

僕の印象的には・・・皆さん色んな風に活動しているんだ・・・
と言った感じだ。

「最後に日本にいるカンピオーネ『草薙 護堂様』だ・・・この方は君
の一つ年上の高校二年生だ。」

「えっ!!高校生ですか!!」

「草薙様は何処の結社にも所属されていないが、自らの傍に数人信頼
出来る者を置いている。」

そして日本の呪術界とも協力関係を結んでいるという話だ。」

「草薙様が連れている1人にイタリアの大手結社の1つ『青銅黒十字』
の騎士が居るわ。」

そのおかげで『青銅黒十字』は彼といい関係を築けているみたい
よ。」

最後にエリカさんが付け加えた。

それにしても驚いた・・・日本のカンピオーネが僕と同じ高校生だつ
た何て・・・。

「さて、これで全員だ・・・何か参考になったかな??」

「い、いえ・・・余計にどうすればいいのかわからなくなりました。」
そうするのが一番いい形か分からない。

僕自身魔術の世界には疎いから、あまり想像出来ないのが現状だ。
出来る事なら平穩に暮らすのが一番だけど、それが無理だと言うの
であれば・・・

僕が考え込んでいるとパオロさんが思い出したかの様に真剣な表情で口を開いた。

「・・・そうだ、これだけは伝えて置かなくてはいけない。」

「何ででしょうか?」

「私達『赤銅黒十字』には君がどの様な決断を下そうとも、君を支え続ける準備がある。」

思考を止めてパオロさんに目を向けると、彼に言われた事に僕は啞然とした。

既にイタリアにはカンピオーネの方が居るのに・・・僕なんかを??

「私達にとって君の二両親は命の恩人だ。」

それにこの結社には君のご両親にお世話になった者が沢山いる。

これは私達だけじゃない・・・『赤銅黒十字』の総意なんだよ。」

そう言ったブラウウさんは決意の籠った視線で僕を見つめていた。

ここまで言ってくれるんだ・・・この時僕の中で覚悟が決まった。

僕の纏う空気が急変した事にパオロさん達は驚きながらも姿勢を正す。

『誰よりも優しく、そして強く生きろ』・・・それが祖父の最後の言葉でした。

分不相応にもこの様な力を手に入れてしまった僕ですが・・・僕はこの力を誰かの為に使いたい。

・・・それが祖父の最後の教えでもありましたから。

僕はまだ魔術界について何も知りません・・・どうすればいいのかも全く分からない。

だからお願いします・・・こんな僕で良かったら皆さんの力を貸して貰えないでしょうか。」

僕はこの部屋に居る全員に頭を下げた・・・精一杯の思いと覚悟を

乗せて。

頭を下げた僕にパオロさんの優しい声が掛かる。

「頭を上げなさい・・・王が簡単に頭を下げてはいけない。

それに・・・私達の考えは先程伝えた通りだ。

昂君が王としての道を歩むのであれば、我々は我々の全てを持って君を支えよう。」

パオロさんの言葉に僕は頭を上げる。

それを見たパウロさん達は僕の前に並んだかと思うと膝を付き、頭を垂れた。

・・・そして厳かに宣言する。

「これより我等『赤銅黒十字』は『神藤 昂』様を王とし、王の傘下となる事を此処に宣言致します。

・・・これから宜しくお願いします、我等が王よ。」

彼等から僕に向けられる敬愛の視線が何処かむず痒く、僕はそれを誤魔化す様に元気に返事をした。

「はい!!此方こそ宜しく願います!!」

『赤銅黒十字』と言う強い味方の出来た僕。

そんな僕はソファに座り直しパオロさん達と今後の方針を考えていた。

「・・・うん、今後の方針としてはこんな所でいいだろう。」

「そうですね・・・これから迷惑を掛けます。」

僕の頼みを嫌な顔一つせず真剣に考えてくれたパオロさん達には顔が上がらない。

話し合いも一段落した所で、サーシャさんがとてもいい笑顔で爆弾を投下してきた。

「昂君、言い忘れてたわ。」

「何ですか、サーシャさん??」

「それがね・・・昂君とエリカちゃん・・・実は婚約者同士なのよ。」

「えっ!!!」

僕とエリカさんの声が重なった。

エリカさんと婚約??・・・そんな馬鹿な!?

「お、お、お母様?!いい、いったいどういう事ですか!?!・・・私はそんな話聞いた事が。」

エリカさんも顔を真っ赤にして動揺している。

サーシャさんに詰め寄る剣幕が激しくて、怒っている様に見える。

僕が婚約者なのが嫌なのかな・・・何かシヨックだ。

「あら、エリカちゃん・・・顔を真っ赤にしちゃって。

でも、この話はあなた達が言い出した事なのよ?!

「えっ!!!」

再び僕達の声が重なる。

子供の頃に一緒に遊んでいたという話は聞いていたけど・・・そんな話覚えてない!!

「私達が仕事から帰って来た時だったわね。」

エリカちゃんが昴君の手を引いてやって来て・・・

『私昴と結婚するわ!!私が傍で守ってあげるの!!』ってエリカちゃんが言ったの。

そしたら昴君も『僕もエリカちゃんと結婚する!!エリカちゃんとずっと一緒にいる!!』って言ったのよ?!

2人とも絶句である。

ぼ、僕は子供の時とはいえ、そんな恥ずかしい事を言っていたのか・・・。

・・・恥ずかし過ぎてエリカさんの方が見れない。

でも、エリカさんの反応も気になって、ちらつと視線を送ってみる。

エリカさんはいつもの凜々しい表情を崩し、顔を真っ赤にして口をパクパクさせていた。

僕達の反応を面白がっている様子のサーシャさんは、更に言葉を続ける。

「それで折角だからって、2人を婚約者同士にしちゃったのよ。」

まあ、子供の時に決めた事だし、2人に既に好きな人がいたりしたら破棄してもいいのだけれど・・・。」

チラチラ見ていた僕の視線は、丁度僕に向いたエリカさんの視線と目が合ってしまった。

そして、何とも言えない恥ずかしさに2人して更に顔を赤くする。これに耐え切れなかったエリカさんは、矢継ぎ早に部屋を出て行ってしまった。

「っ!!私は先に失礼させて頂きます!!」

「あらあら、照れちゃって・・・それで、昴君はどうかしら?」

「あ、あの、僕は・・・」

逃げられた事にショックを隠し切れない僕はサーシャさんに詰め寄られていた。

最初はなんとか誤魔化そうと考えていたのだが、彼女の迫力に心が折れ、正直に話してしまった。

「エリカさんみたいな綺麗な人が婚約者なんて夢みたいです。」

・・・けど今も逃げられちゃいましたし・・・エリカさんが嫌なら解消した方がいいのかなって。」

僕の言葉に残っていた3人は口を開けて啞然としていた・・・僕、おかしな事言ったかな?!

最初に我に返ったサーシャさんが更に僕に詰め寄り、肩を掴んで激しく揺す振って来た。

「昴君、それホントに言ってるの!!」

「え、あ、いや、あの、ち、ちよ・・・はい。」

「ははは、エリカも大変だな!!」

「サーシャ、その辺にして置きなさい・・・昴君が限界だよ。」

パウロさん・・・笑ってないでサーシャさんを止めて下さい。

・・・気持ち悪くなっていききました。

ブラウさんの言葉で漸くサーシャさんが離してくれた・・・もつと早く止めて欲しかったです。

目を回している僕に笑みを零しながらパウロさんが告げる。

「昴君、今日の所はもう大丈夫だろう。」

他の事はまた明日すればいい、部屋まで案内させるから今日はもう休みなさい。」

「は、はい・・・今日はありがとうございます。」
時計を見ると結構遅い時間だった。
僕は気持ち悪さを我慢しながらお礼を言うと、その場を後にした。

気持ち悪さも収まって、食事も昼を用意してくれた女性が持って来てくれた物を食べた。

お風呂も部屋に付いていたシャワーで済ませた。

着替えが無くて焦ったけど、部屋で見つけたバスローブを借りた。
・・・初めて使つてドキドキしたけど、案外使い心地が良くて驚いた。

やる事も無くなって、そろそろベッドに入ろうとしていた時だった。

コンコン!!

夜も遅い時間、突然扉がノックされ誰かが訪ねて来た。

「ど、何方でしょうか?」

「私よ、昴・・・まだ起きてるかしら?」

遅い時間だから小さい声で聞き取り辛かったけど、その声は確かにエリカさんだった。

知っている人だと安心して僕は扉を開ける。

「起きてますよ・・・今開けますね。」

扉を開けるとそこにはやはりエリカさんがいた・・・でもその格好に視線を奪われた。

風呂上りだろうか・・・肌は薄っすらと赤く火照っていて色っぽい。
さらに、髪もしっとり濡れていて妖艶さを際立たせる。

そしてあろう事か・・・身に着けている物はバスローブだけだった。
「こんな時間にごめんなさいね。」

中に入れて貰ってもいいかしら??・・・少し話したいの。」

「・・・。」

「・・・昴?」

「す、すみません!!ど、どうぞ!!」

何も物を言わない僕に不思議そうに首を傾げるエリカさん。
思わず見惚れてしまい、声が出なかった・・・だつてとつても綺麗
だったから。

エリカさんは部屋に入るとベッドに腰掛けた・・・僕も他に座る所
が無かったから少し離れた所に座る。

エリカさんは座ってからじつと僕の顔を見つめて黙っている・・・
じつと見られると恥ずかしいな。

恥ずかしさを我慢出来なくなった僕は、意を決してエリカさんに声
を掛ける事にした。

「あ、あの、エリカさん・・・話つていうのは。」

「ああ、ごめんなさい。」

先ずはお礼を言わせて頂戴：あの時は助けてくれてありがとうございます。
突然面と向かってお礼を言われた。

最初は何の事か分からなかったが、恐らくアグニと戦った時の事だ
ろう、と思に至った。

「そんな、お礼何ていいですよ。」

あの時・・・エリカさんが居なかったら僕の方が死んでいました。

アグニを倒せたのはエリカさんのお蔭です・・・僕の方こそ、あり
がとうございました。」

「ありがとうございます、そう言ってくれると私も嬉しいわ!!」

僕の素直な気持ちを言葉に乗せてお礼と共に頭を下げた。

エリカさんも嬉しそうに僕の言葉を受け取ってくれた。

・・・そこで僕達の会話は終わってしまう。

どうしようも無い気まずさと感じていた時、ふとエリカさんが近付
いて来ている様な気がした。

・・・いや、気のせいじゃない・・・確実に近付いて来ている。

気付かない振りをして来たが、僕を見詰めるエリカさんの瞳は潤ん
でおり、思わず吸い込まれそうになる。

火照った体も、唇から零れる吐息も・・・その全てが彼女の魅力を
最大限に引き立てている。

そんな彼女は等々僕のすぐ隣まで近付いて来ていた。

そして緊張して固まった僕の手の上にそつと自分の手を重ねて来た。

どきっ!!

僕の心臓が跳ね上がる。

エリカさんの手・・・とても暖かくて柔らかい。

思わず本能が暴走しそうになる所を寸前で我に返り、理性を総動員して何とか抑える。

「エ、エリカさん、ど、どうしたんですか?？」

「最近は何をしても上手く行かなくて・・・ずつとイライラしてたの。でもね・・・貴方と一緒に街を回っている時、とても暖かい気持ちになっていた。」

久し振りに感じた心地よさに、懐かしさすら感じていた。」

エリカさんは強く僕の手を握り締め、僕の目をじつと見詰める。

とても真剣で・・・でも何処か凄く女らしい表情に僕も吸い込まれて行く。

「あの時は気付かなかったけど、今ならはつきりとわかるわ。」

忘れていた筈なのに・・・昴に会って、共に過ごしただけで、あの頃の気持ちを思い出してしまった。

私は貴方に恋したんだと思う・・・いいえ、していたと言うべきね。」
そう言つてエリカさんは微笑んだ・・・その笑みはまるで天使のようだった。

僕は突然の告白に驚きながらも、エリカさんのその笑顔に見惚れ、じつと彼女の言葉に耳を傾ける。

「そして貴方は私の命を救ってくれた。」

貴方の小さくて大きな背中に・・・あの見惚れる程華麗な武に・・・私の心は奪われてしまった。

ねえ、昴・・・私はこのまま貴方と結婚したいと・・・貴方と永遠に一緒に居たいと思ってるわ。

・・・貴方は私の事どう思ってるか聞かせてくれないかしら。」

エリカさんは潤んだ瞳で僕を見上げ、垂れかかる様に僕に体重を預ける。

心臓の高鳴りを押さえる事が出来ない。

突然の愛の言葉に驚きを隠せないし、動揺もしている。

でも、エリカさんの瞳に宿る僅かな『恐れ』を見れば・・・彼女の勇気を感じ取る事が出来た。

そして僕も・・・そんな彼女の気持ちに答えたいと思った。

僕は僕の体に寄り掛かるエリカさんの肩の手を置いて少し体を離すと、彼女の瞳を真剣の眼差しで覗き込んだ。

「僕もエリカさんと街を回っていた時、とても楽しかったです。

それに、エリカさんの横を歩いていると何故かとても安心しました・・・心が落ち着くんです。

あんな感覚は子供の頃以来でした・・・と言っても、子供の頃の事はあまり覚えていないんですけどね。」

はははっ・・・と少し笑ってみる。

うん、緊張して来た・・・自分の気持ちを伝えるってこんなに怖い事なんだな。

エリカさんは僕の言葉に真剣に耳を傾けてくれる。

「でも、昔エリカさんと遊んでたって教えて貰って・・・何となく当時の事を思い出して・・・わかりました。

・・・だからエリカさんと一緒だと安心するんだって。

それに神様に勝てたのだからってエリカさんを守る為に戦ったからだと思います。

・・・あの時はエリカさんを守る事しか頭にありませんでしたから。」

僕はそこで一度言葉を切り、改めてエリカさんの瞳を見詰める。

そして覚悟を決めて口を開く。

「エリカさん、僕も声を掛けてくれたあの時から。

・・・いいえ、子供の頃から貴女に恋をしていたんだと思います。

僕でよかつたら・・・ンっ!!」

それより先は言葉にする事は出来なかった・・・エリカさんの唇に口を塞がれたから。

柔らかい感触が唇から伝わっている・・・それと同時にエリカさんの温もりが僕を優しく包み込む。

「んっ!!・・・ちゅ!!・・・はぁ・・・ありがとう、昂・・・貴方の気持ち、とても嬉しいわ!!」

唇を放すと僕に抱き着き耳元で囁くエリカさん。

とても柔らかくて、いい香りが鼻腔を擦る。

僕も恥ずかしかつたけどエリカさんを優しく抱き締め返す。

「これから宜しくお願いしますね。」

「ええ、こちらこそ。」

私は私の全てを賭けて貴方の傍で、貴方を全力でサポートするわ。」

「僕は何があらうと・・・何が起こらうと・・・何があつても僕も全てを賭けて必ずエリカさんを守ります。」

僕の言葉にエリカさんは嬉しそうに笑みを深めると、僕はそのままベッドに押し倒された。

「ん・・・う〜ん。」

朝・・・柔らかな温もりに包まれながら目を覚ました。

体に纏わり付く柔らかい何かを感じながら、寝ぼけ眼で体を起す。

その時に初めて違和感に気付いた・・・僕何で服を着てないんだらうと。

いつもなら着ている筈の寝巻を着ていない事を不思議に思っていると、ベッドの中に誰かいる事に気付いた。

恐る恐る布団を捲ると、そこには、有りの俣の姿で気持ち良さそうに眠るエリカさんの姿があった。

彼女の在られも無い姿を見て昨夜の事を思い出した。

そうだった昨日の夜、エリカさんと・・・。

昨夜エリカさんと心を通わせ、そのまま体まで通わせた事を思い出し、顔が熱くなるのを感じる。

ど、ど、ど、どうしよう・・・。

こういう時どうすればいいのか分からず、あたふたしていると・・・。「んっ・・・。」

と言う艶めかしい声がエリカさんの唇から洩れた。
彼女の方に視線を向ける。

そこにはいつもの凜々しきは鳴りを潜め、あどけない少女の様な表情で目を擦るエリカさんの姿があった。

「・・・おはよう・・・昴・・・」

「お、おはようございます・・・エ、エリカさん・・・」

エリカさんはゆっくりと体を起こす・・・すると傷一つ無い真っ白な肌が露わになる。

ふくよかな胸も、括れた腰回りも、張りのあるお尻も・・・その全てが目の前で晒されていく。

見ちゃ駄目だと思いなながらも、視線を離す事が出来ない。

そんな僕を見て嬉しそうに微笑むと、エリカさんは両腕を僕の首に回し抱き着いて来た。

そしてそのまま唇を塞がれる。

「んっ・・・はあ・・・おはようのキスよ・・・」

「エ、エリカさん。」

目の前で妖艶な笑みを僕に向けるエリカさんは再度キスをしようと顔を近づけて来る。

僕もエリカさんの柔らかい唇を味わいたくて、流されるまま身を任せようと考えている時だった。

「昴君、朝ご飯が出来たわよ!!」

大きな声を上げながらノックも無しに部屋に入って来たのはサーシャさん。

裸で抱き合いキスをしようとしていた僕達と、それを見てしまったサーシャさん。

僕は我に返り、恥ずかしくて顔は真っ赤になり固まってしまった。
逆にエリカさんはすつと僕から離れ、シーツを体に纏わせると、優雅に挨拶を繰り出した。

「おはようございます、お母様。」

「・・・エリカちゃん・・・昴君。」

サーシャさんは僕達を見比べると、顔を俯かせ体を震わせ始めた。

その様子に怒らせてしまったと判断した僕はどうすればいいのかと焦り始める。

それはそうだろう・・・大事な一人娘の体を結婚前に傷付けてしまったのだから・・・。

何か言おうと口を開こうとした時だった・・・サーシャさんは興奮した様に声を上げた。

「あ、あの・・・。」

「やったわね、エリカちゃん!! 昴君もおめでどう!!

こうしちゃ居られないわ・・・ブラウにも教えてお祝いしなくちゃ!!」

そう言うとサーシャさんはあつという間に部屋を飛び出してしまった。

嵐の様に去って行ったサーシャさんを呆然と見送る。

そんな僕を見てエリカさんが諭す様に僕に語り掛けて来た。

「・・・お母様はああいう方よ。」

「そ、そう・・・だったんです・ね。」

エリカさんはベッドを降り、近くにあったバスローブを身に纏うとすつと僕に顔を寄せ僕に口付けを落とす。

触れるだけのキスの後、エリカさんは「また後でね」と微笑むと部屋を後にした。

僕はそんな彼女を見送りながら、朝から色々な事がありすぎて思考が停止してしまったのだった。

日本の魔王

第10話 神道流道場

S i d e 昴

エリカさんとの情事をサーシャさんに見られた朝・・・そのまま布団を被って現実逃避をしたかった。

けどそういう訳にも行かず、重たい体を何とか動かし皆さんの待つ部屋へと移動した。

そこで待っていたのは、にこにこ嬉しそうな笑顔を浮かべ食事の用意をするサーシャさん。

苦笑いを浮かべるブラウさんとパオロさん・・・そして何食わぬ顔で紅茶を優雅に口に運ぶエリカさんだった。

部屋に入って来た僕に最初に気付いたのはサーシャさんを見守っていた男性陣だった。

2人は僕に歩み寄ると微妙な笑顔を僕に向けながら切り出した。

「・・・おはよう、昴君。」

「お、おはよう・・・ごございます。」

「いや・・・今朝の事は妻から聞いたよ・・・その・・・災難だったね。」

ブラウさんが慰める様に僕の肩を叩く・・・それが何とも居た堪れない感情にさせる。

僕はブラウさんに頭を下げていた。

「すみませんでした・・・まだ結婚前なのに・・・。」

「謝る必要はないよ・・・君の事だ・・・エリカとの婚約を心に決めてくれたんだろう?！」

「は、はい・・・そ、その、エ、エリカさんの事を・・・。」

「ああ、そこまで聞ければ十分だよ・・・これからあの子の事・・・よろしく頼むよ。」

最後の言葉には重さがあった。

僕は神殺しとして戦い続ける事が運命付けられている。

という事は、将来的にエリカさんは僕と一緒に危険に晒され続ける

事を意味している。

それを分かっているブラウウさんの言葉には重さがあった。

僕も彼の思いに真摯に答える為姿勢を正すと、胸を張って答えた。

「僕の全てを賭けて・・・エリカさんを幸せにします。」

「・・・君がエリカの相手で良かったよ。」

そう言うのと嬉しそうに表情を綻ばせた。

僕達の間には穏やかな空気が流れた始めた時、背中が柔らかな温もりで包まれた。

後ろから首に腕を回し抱き付いて来たエリカさんだ。

「朝から胸の高鳴る告白・・・とても嬉しかったわ、昂。」

「エ、エリカさん・・・き、聞いてたん・・・ですか??」

僕の問いの返事の代わりに頬に唇を寄せるエリカさん・・・柔らかな感触に一瞬で顔が赤くなるのを感じる。

そんな僕を見て嬉しそうに微笑みながらエリカさんは耳元で囁いた。

「愛してるわ・・・昂。」

エリカさんからの甘い囁きに頭が真っ白になる。

真っ赤になって動けなくなった僕と、そんな僕に後ろから抱きつくエリカさん。

それをブラウウさん達は微笑ましく見守っていた。

「・・・エリカがここまで積極的になるとはなあ。」

「俺は予想が付いてたよ・・・だって、サーシャの娘だぞ??」

「そうだな・・・サーシャの娘だから・・・。」

後から聞いた話だけど、エリカさんの積極的な愛情表現の原因は母親であるサーシャさん。

元々愛情表現が豊かだったサーシャさんだったが、娘が生まれてからもその行為は収まる事は無かった。

・・・逆に愛する対象が増えた事で更に積極的に愛を振り撒く様になったと言う。

それを見て育ったエリカさんの愛情表現はサーシャさんに似たのだろうかブラウウさんは言っていた。

「その内慣れるだろうけど・・・適度に此方からも相手をしないと後々大変な事になるぞ。」

と言うのはブラウウさんからの忠告だ。

以前適当にあしらっていたらかなり酷い目にあつたらしい。

忠告をしてくれた時の彼の表情がその時に惨状を物語っていた・・・気を付けよう。

僕がイタリアに来てから数日が経った。

数日の間に結社の幹部に僕の事を話したり、エリカさんとの婚約を結社内ですら発表したりと色々な事があつた。

そう言えば手紙のお礼も言えた・・・お爺ちゃんが亡くなった事を聞いて力になればと送ってくれたらしい。

そんな忙しい日々も終わりを迎え、僕は日本に帰る為、空港に来ていた。

僕の事を見送りに忙しい中ブランデツリ家全員が来てくれていた。

「それじゃあ昂君、何かあつたら連絡してきなさい・・・幾らでも力になろう。」

「ありがとうございます、パオロさん・・・その時は頼りにさせて頂きます。」

パオロさんも僕で力になれる事があれば呼んで下さい・・・すぐに駆け付けますから。」

『神殺し』にしか対処出来ない事もあるだろう。

今はまだ簡単に動く事は出来ないが、必要に迫られれば必ず力になる覚悟がある。

・・・だつてここにいる人達は僕の新しい家族なんだから。

1人胸の内に改めて覚悟を決めていると、1人の女性が近寄つて来た。

彼女は切なそうな表情を浮かべ、僕の手を取った。

「昂、折角また会う事が出来たのに・・・また離れ離れになつてしまふのね。」

「エリカさん・・・僕だって寂しいです。」

折角再開出来たのに・・・婚約者だってわかったのに・・・。
好きな人と離れ離れになるってこんなに辛い事だったなんて・・・。
ここ数日はずっと一緒に居たから尚更そう思ってしまう。

本当に寂しそうな僕を見てエリカさんの表情は嬉しそうな笑顔に変わった。

でもその時のエリカさんの笑顔が、何処か小悪魔チックな笑顔だった事に僕は気付けなかった。

・・・この数日の間に彼女のその笑顔に何度も騙され、弄ばれたというのに・・・。

「もう、嬉しい事を言ってくれるわね。」

私に会えなくなる事がそんなに寂しいの??・・・たった数日の事なのに。」

「はい、寂しいですよ・・・だって・・・??」

僕は今自分の耳を疑った・・・今エリカさんは何て言った??
聞き間違えかも知れないという希望を持って聞き返す。

「エ、エリカさん??いい、今なんて言いました??」

たった数日って聞こえた気が・・・。」

僕の希望は無残に打ち砕かれる。

エリカさんとはとてもいい笑顔で僕に告げた。

「聞き間違いなんかじゃないわよ・・・だって、貴方を一人で日本に帰すのは心配なもの。」

だから、叔父様達と話し合って私が貴方の騎士として日本に着いて行く事が決まったのよ。」

「えっ!!そ、そんな話、き、聞いてませんよ!!」

「それはそうよ・・・だって昨夜、昴が眠った後で決まった事なんですもの。」

それに愛する人と離れ離れ何て寂しいわ・・・これからは2人でもつと愛を確かめ合しましょう。」

エリカさんはそう言いながら僕に顔を近付け頬にキスをする。

周囲に沢山の人があるこの場でキスされた事により、僕の顔は真っ

赤になっている事だろう。

この数日で彼女からのスキンシップにもある程度慣れたが、やはり恥ずかしい物は恥ずかしい。

しかし僕の思いとは裏腹に、僕達を見守っていたパオロさん達は優しく微笑んでいる。

・・・何でこの人達はこんなに寛容なんだ!!

「エ、エリカさん、な、何を!!」

「ふふっ、数日とは言え離れ離れになるのだから・・・ちよつとした挨拶よ。」

・・・本当は此処にキス・・・したかったんだけどね。」

そう言つて僕の唇を人差し指でゆつくりと触れて来た。

その行為と耳元で囁かれた甘い言葉に・・・もう顔から湯気が出そううだ。

「近い内に行くわ、待ってなさい。」

そう言つて最後にもう一度頬にキスを落とすとやつと離れてくれた。

その後気付けば飛行機の時間が来て、僕はイタリアを後にした。

僕が日本に帰国して最初に行った事は、一緒に卒業旅行に行った皆に連絡する事だった。

神様と戦つた後、僕が目覚めたのは二日後の事。

突然居なくなつた僕を皆心配してくれて、結構大きな騒ぎになつた。

そこでパオロさん達が魔術等を使って夜に散歩に出た僕が事件に巻き込まれた事してくれた。

無事救助されたと伝えただけ、一度も皆とは会えなかつたし、心配させたのは事実だ。

滞在日数もあつて皆は予定通りに先に帰国。

皆僕の事を気にして旅行を楽しめ無かつた筈だ・・・今度何かお詫びをしないと。

無事に帰国した事をメールで知らせると、1時間もしない内に家に皆が来てくれた。

「お前何やってんだよ!!」「勝手な行動するからだよ!!」「自業自得だよ!!」

皆本当に心配してくれたんだろう・・・掛けられた言葉の多くは辛辣な言葉だった。

けど帰り際に「無事に帰って来てくれて・・・本当に良かった」と涙ながらに言ってくれた・・・皆いい奴等だ。

帰国した次の日・・・僕は休んでいた道場を開ける事にした。

この道場は基本的に毎日開いている。

大人の人達は基本的に仕事終わりに寄ってくれるし、学生達は放課後にやって来る。

埃を被っていた道場を綺麗にしていると、早速門下生の人達がやって来た。

春休みで午前中という事もあり、やって来たのは近所に住んでいる小学生から高校生の皆。

今日は小学生が5人と、中学生が1人、高校生が3人の合計9人だ。いい運動になるとか、集中力が上がるとか・・・この道場の評判は結構いい。

その為小学生の子達は親に連れられて、中学生以上の子達は部活の合間に来てくれたりする。

「皆さん、おはようございます。」

今掃除をしますから、少し待って下さいね。」

「僕達も手伝いますよ!!」

皆が手伝ってくれた事ですぐに掃除を終わらせる事が出来た。

準備が整った事で道場に僕を前に一列に並ぶ。

全員が正座で姿勢を正した事を確認すると口を開いた・・・近くで見守る保護者にも伝わる様に。

「先日この道場の当主であった祖父『神道 統一郎』が亡くなりまし

た。

その為本日より僕『神道 昴』が当主として皆さんを指導する事になります。

若輩者ですがこれから宜しくお願いします。」

床に手を付き、頭を下げる。

夜になったら大人の人達にもやる予定だから、その予行練習だ。

高校生や保護者達は驚いた表情を浮かべていたが、すぐに我に返りいつもの様に礼をする。

「宜しくお願ひします。」

「それじゃあ、早速始めましょうか。」

笑顔を浮かべそう告げると一瞬皆動きを止めたが、すぐに動き始めた。

・・・高校生の女の子の顔が赤かった気がしたけど・・・気の所為かな??

最初は全員で黙祷から・・・『氣』の稽古という訳では無いから気持ちを落ち着かせて集中力を高める。

それが終われば小学生とそれ以上に分かれ稽古を始める。

小学生は受け身や基礎的な動き。

一通り終われば基礎体力作りに鬼ごっこなどをさせて、楽しめる様に工夫している。

逆に中学生以上の子達は運動量を増やす為結構激しい稽古をする。

基本的な動きが終われば、日によって様々だが柔道と言う乱捕りの様な事をしたりもする。

今日は久し振りという事もあって、軽く流す程度に僕が相手をしてあげた。

・・・そう告げた瞬間、皆の顔が引き攣った様な気がしたけど・・・どうしてかな??

稽古も一通り終わると丁度いい時間になっていた。

皆を集めて挨拶をすれば解散だ。

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます!!」

挨拶を終えると子供達は親に連れられ元気に帰って行く。
中学生以上の子達も汗が引くまで僕と軽い雑談をしながら時間を潰す。

今日来ていた人達の中に僕の通う予定の『城楠学院』に通っている人が居たから、色々教えて貰った。

全員を見送ったら僕も自宅まで戻りシャワーを浴びる。

さっぱりした所で昼食を取りながらこれからの事を考える。

僕には残った春休みの間にして置かなくては行けない事が幾つかある。

まずは高校の入学に向けた準備。

『カンピオーネ』になったからといって学業を疎かにしていい訳では無い。

それに『城楠学院』は進学校だから、しっかりと勉強しておかなくちゃいけない。

次に今日、早速開いた道場の事。

お爺ちゃんが亡くなって、これからは僕が『神道流』の当主だからね。

大人の人達も僕が稽古を付けなくちゃいけないから・・・しっかりとしなくちゃ!!

それに次いで僕自身の修業の再開。

イタリアに居た間挨拶や話し合いで碌に体を動かす事が出来なかった為、体が鈍ってしまっている。

話に聞いた『神殺し』の『権能』も・・・まだどんな力なのか分かっていない。

だからまずは体を万全な状態まで鍛え上げて置く事に決めていく・・・神と戦うのだった基本的な僕自身だしね!!

そしてこれが一番重要だ・・・これから日本で活動するに当たって味方を作る事。

これは日本に帰る前にパオロさん達と話し合って決めた事だ。

パオロさんの執務室に集まって今後の事を相談していた。

この場には僕とエリカさん、パオロさんの3人だけ・・・ブラウ夫妻は急な仕事で席を外していた。

話合いの中でこれだけはこの思いを口に出す。

「あの、僕の味方になってくれるのは嬉しいです・・・けど、僕はやっぱり日本で暮りたいです。」

皆さんには悪いと思うけど、これだけは譲れない。

だって、お爺ちゃんに任せられた道場を守らなくちゃいけないから。

僕の言葉にパウロさんは分かっていると言う様に頷いた。

「私達としては此処イタリアに居てくれた方が何かとサポートしやすい。」

でも、それを我が王は望んでいないんだ・・・ならば王が望む形でサポートするまでだよ。」

「ありがとうございます・・・すみません我が儘を言って・・・。」

「気にする事はないよ・・・王の我が儘を聞く事も私達の仕事みたいな物だ。」

・・・それよりも君が『カンピオーネ』として日本で活動するに当たって問題がある。」

我が儘を聞くのが仕事って・・・『神殺し』の人達って我が儘ばかり言っているのかな??

僕はあまり我が儘を言わない様にしよう・・・パオロさん達に迷惑は掛けられない。

そんな事を考えている僕はパオロさんの深刻な声で我に返る。

「・・・問題ですか??」

「日本には既に『草薙 護堂』様がいらっしやる・・・勝手に動き回れば色々厄介な事になりかねない。」

「そう言えば、日本にもう1人居るって言っていましたよね??・・・そんなに気難しい方向ですか?」

「いいえ、傍にいる騎士の話聞く限りじゃ進んで問題を起こす性格ではないわね。」

それでも用心するに越した事は無いと思うわ・・・彼の琴線が何処にあるのか分からないんだから。

それに・・・日本の呪術界はヨーロッパとは体系が違っていると聞くし・・・。」

「そう何ですか?？」

「ええ、私も詳しくは知らないけど・・・あの国の情報って意外と少ないのよ。」

エリカさんの言葉にパオロさんも頷く。

確かに日本って江戸時代まで鎖国してたし、外に情報を流さない様に情報規制されているのかも。

「そこでだ、君の事を正式に発表するのは日本で活動出来る様に体制を整えてからがいいと思っっているんだ。」

「・・・どうすればいいんですか?？」

「それは君の味方になってくれる人を作る事だろう。」

出来れば後ろ盾になってくれる様な・・・権力を持った人が好ましいね。」

簡単に言うが・・・無理じゃなからうか。

確かに家の道場に魔術関係者が通っている事は分かっている。

けど、どの人が候補になるのか・・・僕に判断する事が出来ない。

「僕にそんな事が出来るとは思えませんが・・・。」

「それについては大丈夫よ・・・私に考えがあるから。」

エリカさんの自信あり気な言葉に僕とパオロさんは首を傾げるも、頷いておく。

僕もエリカさんの事は信頼しているので頼る事にしよう。

「ならばこの件に付いてはエリカに任せるとして・・・。」

昂君は道場に通っている人の中で、信頼出来る人をピックアップして置いてくれ。」

「わかりました、頑張ります。」

という事で、僕は門下生の人もしくは門下生だった人の中から、信

頼出来る人をピックアップする必要がある。

とは言った物の・・・魔術関係者である『氣』を習いに来ていた人達は皆大人の人達だ。

皆さん唯一の子供である僕をいつも可愛がってくれていたけど・・・信頼となると話は変わってくる。

「・・・どうしようかなあ。」

取り敢えず頻繁に通って来ている人達の中でよく話す人達の名前を紙に書き出して置く。

僕に出来るのは此処までだな・・・後はエリカさんに任せよう。

昼食から2時間・・・腹ごなしに僕自身の稽古をする事にした。

胴着に着替えて道場に向かう。

道場の真ん中で正座をすると、精神統一を始める。

・・・改めて確認してみると『氣』の量が在り得ない程増えてるな・・・『神殺し』となってから『氣』の量が増えていいる事に気付いてはいたが、ちゃんと確認したのは今日が初めてだ。

今迄の『氣』の量がコップ一杯分だったとしたら・・・今は海程の量・・・底が見えない。

思わず全力で『氣』を放出してみた衝動に駆られたけど、パオロさん達との会話を思い出して何とか抑える。

『神殺し』の『魔力』の質は『神』のそれに近い。

神を殺した事により得た力・・・という事を考えれば当たり前だ。

容易に『魔力』をばら撒くと周囲の『靈氣』を刺激して、あらゆる騒動を呼び寄せる可能性がある。

それに特殊な『魔力』である事から、それを敏感に感じられる人も存在する。

今の時点で僕の正体がばれる事は協力してくれているパオロさん達に迷惑になるので我慢する。

気持ちを落ち着かせ、いつも通り自身の『氣』を掌握していく。

量が増えた事でいつも以上に時間は掛かったが、滞りなく作業を済ませる。

精神統一が終わると立ち上がり視線を前に向け・・・構える。
基本的の動きを中心に1時間・・・休憩も取らずに動き続ける。

・・・体を動かしていると、気付いた事がある。

体の調子がいい・・・気持ち悪い程に体がスムーズに動く。

数日間動かなかつたから鈍っていると思っていたのに・・・どうしてだ??

疑問も出たが今は考えても仕方がない。

午前中は出来なかつた体調の確認も出来たからよしとしよう。

夜にも稽古がある事を考え、今日の所はこの辺で止めて置き、道場を後にした。

夜までの時間は買い物に行ったり、勉強をしたりして時間を潰す。

そして・・・夜の7時を過ぎた辺りになると続々と門下生の人達が道場にやって来た。

男性女性・若い人は20代から上の方になると50代まで・・・20人程の人達が僕の前に正座で座っている。

皆さんそれなりに貫録があるから・・・午前中に比べて緊張が半端じゃない。

「本日より僕『神道 昂』が当主として皆さんを指導する事になります。」

若輩者で、至らぬ所が多々あるとは思いますが・・・これから宜しくお願いします。」

「『お願いします!!』」

うん、噛まずに言えた!!

その事に嬉しくなりながらも気を敷き締めて彼等に向き直る。

今回の稽古で僕が気を付けなくてはいけない事は唯一つ・・・『神殺し』だと気付かれない事。

使う『氣』を最小限に留め、いつもと変わらない稽古風景に見せる。量が増えたから『氣』の調整が難しくなったが、そこは僕の努力次第だ。

最初は柔軟・・・その後、基本的な動きに入る。

彼等との稽古は主に『氣』の扱い方を学ぶ事にあるので、そちらに多く時間を割いている。

それと体を疲れさせた方が『氣』の繊細なコントロールは難しくなる。

：：そう言った理由から、大人の方々には先に体を動かすメニュー作りになっている。

適度に体を動かした後は早速『神道流・精神統一』に入る。

姿勢を正し、心を落ち着かせ、自身に宿る『氣』に意識を向ける。

僕は自分の事に気を付けながらも周囲にも意識を向ける。

「千葉さんは少し体の力を抜いて見ましょう。」

五十里さんはもつと体の隅々にまで意識を向けて見て下さい。

：：皆さん、その調子です。」

お爺ちゃんという言葉を思い出しながら、伝わり易い様に言葉を選び指導を行っていく。

『氣』を扱う事は感覚的な所が大きく、やり方も人それぞれだ。

その為、決まった正解がない事が『氣』を扱う上で最も難しい所である。

「この位にして少し休憩にしましょう。：：皆さん、お疲れ様でした。」各自掛かった時間はそれぞれだが、全員がある程度『氣』を掌握した事を確認して今日の稽古を終える。

声を掛けた事で全員が深く息を吐く。：：集中力を必要とするだけあって、この稽古は結構きつい。

年配の方は熟練者という事もあって平然としているが、若い方々は額に汗を浮かべている。

彼等の様子を見て僕も安心する。：：良かった、ばれなかったみたいだ。

ただ単に感覚の鋭い人が居なかったのか、それともその人にも気づかれなかったのか。：：。

今の僕には判断出来ないが、兎に角今はばれなかった事を喜ぼう。

この『精神統一』の稽古を終えると時間も遅い為、帰宅する人と残って続ける人に分かれる。

帰宅する人は家に家族が居るとか、体力的に限界のある年配の方だ。

逆に若くて時間もあり、体力もある人達は残ったメンバーで組み手を行う。

今日残ってくれたのは・・・全員20代、男性が3人、女性が2人だ。

「人数が合わないので、誰か一人は僕が相手をしましょう。」

「「えっ!!」」

男性の三人が表情を引き攣らせた・・・女性陣はほっとしている様に見える。

僕とやるの嫌なのかな??・・・ちよつとショックだ。

僕の表情が沈んだ事により、彼等は慌て出す。

「どうすんだよ・・・俺達じゃ3人纏めても昴君に敵わねえぞ。」

「だよな・・・だからってこのままって訳には・・・。」

「・・・わかった・・・俺がやるよ。」

何やら小さな声で話し合っていた彼等だったがその内の1人・・・名前を『市原』と言う青年が前に出た。

僕は市原さんが前に出て来た事に気付いて顔を上げる。

「昴君・・・俺の相手をして貰ってもいいかな?」

「は、はい!!」

除者にされなかった事が嬉しくて思わず元気良く返事をしてしまった。

笑顔を浮かべる僕を見て誰かが「・・・可愛いな」と呟いた声は僕には届かなかった。

という事で早速組み手に入る。

夜に道場に来る人は全員が他の流派を習得している人達だ。

・・・その為最後の組手では様々な流派を見て、勉強する事が出来る。

最初は女性2人の対戦・・・二人は同じ年という事もあり仲も良く実力も拮抗している。

5分と言う制限時間の中でどちらにも有効打を与える事が出来ず……引分けとなった。

次は市原さん以外の男性2人の対戦……こちらは同じ会社の先輩後輩の中だ。

実力も先輩の方が上で後輩も善戦したが力及ばず……先輩の青年に軍配が上がった。

……そして僕と市原さんとの組手が始まる。

僕達は向かい合い礼を取る。

「宜しく願います!!」

二人同時に頭を上げると構えを取る。

僕は腰を落とし、いつでも動ける体制に……市原さんは脚を前後に開き、右手を前に左手を脇に構える。

2人向き合って構え後は合図を待っただけとなった時に……僕はスイツチが切替わったかのように体が軽くなった。

「始め!!」

号令と共に市原さんか僕に向かって駆け出して来る。

いつも以上に動く体とは午後に稽古をした時以上……しかも動体視力も格段に良くなっている。

先手必勝で突き出して来た市原さんの拳を最小限の動きで避けると、本能の赴くままに足を振り上げた。

「……えっ?」

思わず零れた市原さんの声。

彼の視線の先……顎下ギリギリの所に僕の右足が添えられていた。あつという間の出来事に誰もが言葉を失う……それは僕も同様だった。

暫し間を開けて我に返った審判が号令を掛ける。

「……そ、それまで!!」

固まっていた僕も我に返り、足を降ろして定位置に戻る。

市原さんも我に返って礼を取った事で今日の稽古は全て終了となった。

稽古終了後・・・僕はお風呂で今日の疲れを取っていた。

あの後興奮して声を掛けて来る彼等を「調子が良かっただけ」と笑って誤魔化した。

とは言え僕としてもあの体のキレは予想外だった。

午後の稽古の時は徐々に動きが良くなる感じだったが、さつきは全然違った。

市原さんと向かい合った時には既に体がベストコンディションになっていた。

この事から推理した僕の考えは・・・戦闘になると体が勝手に最高のコンディションなる・・・だ。

・・・僕は深く溜息を吐く。

反則にも程がある：『神殺し』の体がこんなに出鱈目な構造になって居る何て思わなかった。

『神殺し』と呼ばれるだけあって、この体は本当に『対神』仕様に創り替えられて居るんだろう。

これからは『氣』だけでは無くて、『体調』の事にも気を付ける必要がある。

「はぁ・・・。」

溜息を漏らす事も今位は許して欲しい。

最後に精神をごっそり削られた僕は、もう何も考えたくなくてそのまま布団に潜り込んだ。

第11話 婚約者と同棲

S i d e 昴

道場再開から数日・・・何とか『氣』の制御と力加減に慣れる事が出来た。

そのお蔭か僕の正体が『神殺し』だとばれる事も無かった。

帰国して1週間程・・・遂に『城楠学院高等部』への入学式前日を迎えた。

道場の方も今日から暫くの間は、新しい生活に慣れる為休む事にしている。

門下生の人達も「落ち着いたらまたお願いします」と許してくれた。という事で今日は少し体を動かす程度に留め、明日に備えてゆっくりと過ごしていた。

久し振りに堪能しているゆつくりと時間が唐突に終わりを告げたのは夕暮れ時だった。

「ピンポン!!」と家の呼び鈴が鳴り響く。

ソファで寛いでいる時に鳴り響いた大きな音に驚きながらも、一体誰だろうと玄関に向かう。

扉を開けると・・・そこには大量の段ボールを抱えた宅配業者の姿があった。

「神藤様のお宅で宜しいでしょうか?」

「は、はい。」

「それじゃ、荷物運び入れますね。」

「え、あの、ちよつと・・・。」

宅配業者の人はそう言うと、後ろに控えて居た人達にも声を掛け、どんどん荷物を運び入れ始めてしまった。

止める間も、説明も無く、あつという間に彼等は荷物を運び終える。

そして最後に「ありがとうございます」と全員で頭を下げ去って行った。

な、何だったんだ、今のは・・・それに、この荷物はいったい・・・。僕は突然起こった嵐の様な出来事に呆然として動く事が出来な

かった。

しかし再び「ピンポーン!!」と家の呼び鈴が鳴り響く。

我に返って「次は何だ!!」と扉を開けるとそこには……小悪魔の様な笑顔を浮かべるエリカさんの姿があった。

「数日振りね、昴……私に会えなくて寂しかった?」

「エ、エリカさん??な、何で此処に??」

「そんなの今日から此処で暮すからに決まっているでしょう?」

「……え、いや、そんな話1度も……」

「叔父様に昴はお爺様が亡くなって広い家に1人暮らしだつて聞いたの。」

もしかして1人じゃ寂しいんじゃないかと思って……という事で、これからお世話になるわ。」

突然やって来たエリカさん……それだけでも十分驚くべき事なのに今日から此処で暮す??

混乱の中僕が驚きで固まっていると、エリカさんの寂しそうな声が耳に届く。

「もしかして昴……私と一緒に暮らすのは嫌だったかしら?」

そんな事を潤んだ上目使いで言われたら断れる男が居る訳が無い。僕は反射的に口を開いていた。

「そ、そんな訳無いじゃないですか!

毎日エリカさんが近くに居ると思うと、とっても嬉しいですよ!」
「ふふっ!嬉しいわ、これからよろしくね!」

恥ずかしい事を口走った僕は顔を赤くし、エリカさんは嬉しそうに微笑んだ。

エリカさんは僕の隣を擦れ違う時、頬に柔らかな唇を押し付けるとそのまま家に入って行った。

我に返った僕は慌てて追いかかけ様としたら後ろからのんびりとした口調で声を掛けられた。

「あの……」

慌てて振り返るとそこにはイタリア滞在中にお世話になったアリアンナさんの姿があった。

「ア、アンナさん!!も、もしかしてアンナさんも・・・。」

「はい、私もエリカ様と神藤様のお世話をする為今日からお世話になります。」

今日から食事・掃除・洗濯・・・この家の家事は全て私にお任せ下さい!!」

見慣れてしまったメイド服に身を包んだ彼女は丁寧に挨拶をしてくれた。

おっとりとして、それでいて丁寧な挨拶に僕も思わず頭を下げていた。

「こちらこそ宜しくお願いします。」

「それでは私も失礼させていただきますね。」

彼女は癒しの笑みを浮かべるとエリカさんに続いて家の中に入って行った。

僕は突然の事が多過ぎて暫くの間、玄関の前で固まっていた。

我に返って彼女達の後を追い掛ける様に家の中に入る。

2人は家の中を見分して回っていたみたいで、きよろきよろと視線を彷徨わせていた。

「エ、エリカさん!!どういう事ですか!!」

「あら昴、やっと来たの?もし良かったら家の中を案内してくれないかしら?」

「あ、はい、わかりました・・・ってそうじゃなくて!!」

「冗談よ・・・勝手に此処で暮す事を決めたのは悪かったわ。」

理由としてはさつき言った通りよ・・・貴方1人だと寂しいと思っただから。

後は、そうね・・・何かあった時に近くに居た方が早く対処出来るから・・・かしらね。」

「・・・事前に教えて欲しかったですよ。」

「ふふっ、驚かせたかったのよ・・・ごめんなさいね。」

そう言えばエリカさんってこういう人だった・・・たった1週間前の事なのにどうして忘れてたんだらう。

楽しそうな笑みを浮かべるエリカさんを見て思わず溜息が口から

零れる。

そんな僕を見て笑顔のまま近寄って来ると、耳元で優しく囁かれた。

「もう1つあったわ・・・それはね・・・私が少しでも貴方の傍に居たかったから・・・よ。」

甘い囁きと誰もが見惚れる笑顔を間近で見た僕の顔は一瞬で赤くなる。

去り際に家に来て二度目のキスを頬にするとエリカさんは体を離れた後、口を開いた。

「改めて家を案内してくれるかしら？」

「・・・は、はい!!」

「あ、私は夕食の準備に入りますね。」

我に返った僕の返事の後アンナさんは早速キッチンの方へと消えて行った。

僕はエリカさんに腕を引かれながら家を案内する。

エリカさんは古い日本家屋である我が家を興味深げに見渡していた。

最後に案内した道場では目を輝かせてとても楽しそうにはしゃいでいる姿はとても印象的だった。

案内を終えてリビングに戻るとアンナさんの食事の用意も完了していた。

食材も時間も余り無かったと言っていたけど、机に並ぶ料理の数々はとても美味しそうだった。

・・・そして、煮込み料理が無かった事に心から安堵した。思い出したくもない・・・エリカさんに勧められて口にした瞬間

の・・・あの何とも言えない感覚・・・。

食事の後は3人で荷物の整理をする事にした。しかし、如何せん2人も女性という事で荷物の量も多い。その日の内にエリカさん達の荷物を片付け終える事は出来なかった。

日付が変わっても終わる気配が無かった為、明日から始まる学校の

事も考えその日は休む事にした。

・・・幸い、2人の部屋に眠るスペースは確保出来たので良かった。

入学式当日の朝。

稽古の為、早起きが習慣となつている僕はいつも通りの時間に目を覚ます。

今日は入学式だなあ・・・とか考えながら体を起こすとふと違和感を覚えた。

・・・何故だかいつもより体が重い様な気がするなあ。

昨日は夜遅くまで起きていたけど・・・ここまで体が重いと、体調でも悪いのかな??

しかし、そんな考えは布団の中に自分以外の膨らみがある事に気付いた瞬間消えた。

・・・ま、まさか、こ、この膨らみは・・・。

恐る恐る布団を捲ればそこには・・・生まれたままの姿で眠るエリカさんの姿があつた。

彼女の体を視界に入れた瞬間、すぐさま目を逸らせ・・・同時に思い出した。

・・・ど、どうして僕は忘れていたんだ!!

イタリアで過ごした1週間・・・毎朝、目を覚ますと彼女は何も身に着けず僕に寄り添って眠っていた。

確かに1人でベッドに入った筈なのに朝起きたら必ずエリカさんが横で寝ているのだ。

初日は思いが通じ合い、舞い上がっていた事もあつて『イケナイ事』をしてしまった。

しかし普段ああいう事に慣れていない僕は、毎朝エリカさんの姿を見て思考が停止していた。

しかもあの夜の事を思い出して体は勝手に反応してしまうのだ。

そして現在・・・すぐに目を逸らしたがエリカさんの体が目に焼き付いて頭から離れなくなっていた。

鼓動は高鳴り、顔は熱くなってくる。

思わず本能に任せて振り返ろうかとしている自分に気付いて我に返る。

「ダメだ・・・き、今日は入学式なんだ・・・そ、それに朝からこんな事してちや駄目だ!!」

自分に言い聞かせながら煩惱を振り払う為、頭を激しく横に振る。落ち着いた所でエリカさんを起こさない様に布団から抜け出す。

そして彼女を視界に入れない様に気を付けながら布団を掛け直し、素早く着替えて部屋を後にした。

リビングに行くのと丁度食事の用意を始め様としているアンナさんの姿があった。

「おはようございます、アンナさん。」

「えっ！お、おはようございます、昴さん。」

僕が朝早い時間から起きて来た事にアンナさんは少々驚いていた。しかしすぐにおっとりとした笑みを浮かべて挨拶を返してくれた。

「昴さんは毎朝この位の時間に起きられるんですか？」

「朝は習慣で稽古をしていますから・・・登校日はこれ位の時間ですね。」

あつ、朝御飯は稽古が終わってからで構いませんから、大丈夫ですよー。」

「そうですか？・・・でしたら稽古の終わる頃に食事出来る様に用意しておきますね！」

「よろしくお願ひします。」

アンナさんとの話を終え外に出た僕は体を温める為ランニングを始める。

15分ほどのコースを走ったらストレッチの後、道場でしっかりと確認しながら基本的な動きを行う。

朝の稽古では動きの確認が主・・・後は体を起こす為と言った所かな。

全ての動きを確認し終えた所で丁度1時間程・・・朝を流す為お風呂場へ向かいシャワーを浴びる。

さっぱりしてリビングへ戻ると机の上には美味しそうな朝食が並べられていた。

焼きたての食パンにふつくらとしたスクランブルエッグ、カリカリのベーコンに瑞々しいサラダ。

僕一人だったら考えられない豪華な朝食に目を奪われてしまった。

「お疲れ様です、昴さん。」

「あつ、アンナさん。」

朝御飯、とつても美味しそうですね!!」

「そうですねか? そう言って戴けると嬉しいです!」

興奮気味な僕は早く食べ様と急いで椅子に座る・・・とそこで、エリカさんがまだ来ていない事に気付いた。

「アンナさん、エリカさんはまだ起きてないんですか?」

「確かにそろそろ起きないと学校に遅れてしまいますね。」

私が起こしに行きますから昴さんは先に召し上がっていて下さい。」

そう言うとアンナさんはリビングから出て行った。

先に食べていてもいいと言われたけど、どうせだったら全員で食べたいと思って待つ事にした。

昨日知った事だが、エリカさんは実は僕の1つ年上だった。

そして彼女も今日から僕と一緒に『城楠学院』に転入と言う形で通う事になっている。

・・・うん、僕はもつと上のお姉さんだと思っていた。

だって大人っぽいし、落ち着きもあるし、綺麗だし・・・。

思っていた事を話すと笑われた後からかわれてしまった。

でも笑顔を浮かべていたから大人に見られて嬉しかったんだと思う。

今日は午前中に在校生の始業式と新生生の入学式が行われる。

その為僕とエリカさんの登校時間は同じなのだ。

此処から学校まで近いけど歩いて10分ほど掛かり、今より遅くな

るとギリギリの時間に登校する事になる。

初日は余裕を持って行きたいなあと考えている所にアンナさんが一人で戻って来た。

「エリカさんは？」

「あの・・・それが・・・。」

「はっ!!」

・・・そ、そうだった、どうして僕はこう物忘れが酷いんだ!!

僕のベッドで眠っているエリカさんの事を忘れる何て・・・どうかしてるよ!!

アンナさんに要らぬ誤解をさせたかと思って顔が熱くなる。

そんな僕を気にする事無くアンナさんは話し続ける。

「エリカ様は目を覚まされたのですが『今日は夫のキスで目覚めたいわ』と言って再び眠ってしまわれました。」

「へっ??:」

少しばかり頬を赤めらせながら告げたアンナさん。

一瞬何を言っているのか理解出来なかった僕。

しばしの沈黙の後僕は漸くアンナさんの言葉を理解して顔が真っ赤になった。

「はあああああああ!!」

ど、ど、どういう事ですか!!キ、キ、キスって・・・。」

「申し訳ありませんが、時間も差し迫って来ています・・・昴さん、起こして来て貰えませんか？」

・・・この人この状況を楽しんでる!?

頬を赤らめたまま、そして少しばかり目を輝かせながら言うアンナさんに唾然とする。

でもアンナさんの言う事も間違っていない。

このままだと入学初日から遅刻なんて事になりかねない。

遅刻は嫌だし、アンナさんの期待の籠った視線にも耐えきれなかった僕は自室へ向かった。

扉の前で気合を入れてから扉を開けると、ベッドから安らかな寝息

が聞こえてくる。

ベッドを覗き込むと、天使の様な寝顔で眠っているエリカさんの姿があった。

いつまでも見ていたいと思ってしまいう程に綺麗な寝顔に思わず見惚れてしまう。

「エリカさん、起きてください、朝ですよ。」

我に返った僕はなるべく彼女の体を見ない様にエリカさんの体を揺する。

暫くそうしていると漸く反応があった。

「ん……う……ん……昨日はあの後少し調べ物をしてたのよ。……もう少し寝かせてくれないかしら……。」

いつものエリカさんからは想像出来ない、甘い声にドキツとする。思わず『いいですよ』と言ってしまいそうになったが、心を鬼にして声を掛け続ける。

「駄目ですよ、起きて下さい。」

今日から学校なんですから……それにアンナさんも朝食を用意して待ってるんですから。」

「……鼻が『おはようのキス』をしてくれるのなら起きてもいいわよ。」

「うっ!!」

そう言うとエリカさんは顔を僕の方に向けて、しかもキスし易い様に自ら顎を上げた。

男なら引き寄せられそうなその顔に思わず唾を飲み込む。

……キ、キスしなきゃ遅刻するかもしれないんだ。

ち、遅刻しない為に、し、仕方のない事なんだ……。

心の中で誰にするでも無い言い訳を唱えながら、エリカさんに顔を近付けて行く。

そして彼女の唇にキスを落とした。

潤っている唇の柔らかい感触に思わずもっと味わっていたくなるが理性を総動員して顔を離す。

「ふふ、とてもいい目覚めだわ。」

愛する人の口付けで起こして貰えるなんて・・・私は世界で一番の幸せ者ね。」

胸の高鳴りが止まらない僕に表情を綻ばせ笑顔に向けて来るエリカさん。

彼女は僕からのキスの感触を愛おしむ様に自分の唇をなぞる。

その仕草がとても官能的で更に顔が赤くなってしまった。

エリカさんはシートで体を包み、ゆっくりと体を起こすと僕の頬に手を当てた。

「今日はいいい目覚めをありがとう・・・これは起こしてくれたお礼よ。」
そう言うのと彼女はキスをしてくれた。

柔らかい唇で数回僕の唇に吸い付くと離れた・・・短いキスだった。
「本当だったらもつと貴方を感じていたいけど・・・そういう訳にはいかないわね。」

私は部屋で着替えてから行くから、昴は先にリビングへ行つてなさい。」

エリカさんは耳元で囁くとベッドから降りて部屋を出て行ってしまった。

僕は朝の甘いひと時に暫く動く事が出来なかった。

我に返った僕は時計を見て急いで食事に戻った。

リビングにはあの時より頬を赤らめたアンナさんが待っていてくれた。

「はあ・・・初めて生でキスという物を見てしまいましたあ。」

何て吹きは聞こえなかった・・・。

アンナさんは僕に気が付くといつももの様におっとりとした笑みを浮かべ、僕に温かい珈琲を入れてくれた。

その後エリカさんも合流して慌しくも楽しい食事となった。

第12話 日本の神殺し

Side 昴

朝食を食べ終えた僕はエリカさんと一緒に学校に向けて歩いてい
る・・・腕を組んで・・・。

エリカさんが外国人・・・しかもとびっきりの美人という事もあつ
て周囲からの視線を集めていた。

「エ、エリカさん、やっぱり恥ずかしいですよ・・・。」

「あら、昴は私と腕を組むのは嫌なのかしら？」

恥ずかしさと、男子生徒からの視線が厳しくて訴えてみたが・・・
何も言い返せなかった。

確かに恥ずかしいけど・・・それ以上に嬉しいんだから仕方がない。
腕にエリカさんの柔らかさが伝わって暖かいし、それにエリカさん
からはいい香りが漂ってくる。

僕の方が背が低い事が少し気になるけど、好きな人と腕を組んで歩
いている事の方が嬉しく感じられる。

・・・そう思うと周囲の視線も気にならなくなって来たのだから現
金な物だ。

今回の入学に当たって一つ注意を受けた。

それはこの学園に通っている1つ上の先輩・・・日本のカンピオー
ネ・草薙 護堂先輩に付いてだ。

僕が日本で活動する為に避けては通れない人・・・それが草薙先輩
だ。

エリカさんは以前とある事件が切っ掛けで会った事があるらしい。
その時の話だと気性も穏やかでいきなり攻撃して来る人では無い
様だ。

草薙先輩に仕えているエリカさんの幼馴染という人も普段は穏やか
かな人だと言っていたらしい。

だが、僕が突然神殺しだと公表したら彼の琴線に触れる事があるか
もしれない。

その不安が拭えない以上やはり僕の正体は準備が整うまで隠す事に決まったのだ。

しかしエリカさんが以前顔を合わせている時点で彼との接触は免れない・・・しかも問題はもう1つある。

それは彼に仕えている内の1人に優秀な『霊視能力者』が居るという事だ。

彼女は魔力を敏感に感じられるらしく、もしかすると僕の正体が見破られる人かもしれないという事だ。

対策としては僕の『氣』を極力表に出さない様に・・・体の奥に押し込める事。

僕としてはそれだけで大丈夫なのかと心配になるが、エリカさんは・・・。

「昴の魔術コントロールは完璧よ・・・貴方が魔力を外に出さない限り気付かれる事はないと思うわ。」

でも一応、用心だけはしておいてね。
・・・と言われた。

エリカさんが大丈夫と言うならと納得して、一応その先輩に対して注意だけはして置く事にした。

家を出て凡そ10分・・・漸く学院に到着した。

学院に着くとエリカさんは僕の腕から離れた・・・ちよつとさみしくなったのは秘密だ。

「それじゃあここだね、私は職員室に行かなくちゃならないから。学校が終わったら一緒に帰りましょうね。」

「でしたら放課後エリカさんの教室まで迎えに行きますね。」
「ええ、待ってるわ。」

僕の言葉に微笑むとエリカさんは行ってしまった。
僕も張り出されているクラスを確認して自分の教室に向かった。

教室に入ると同じ中学だった奴等に囲まれ質問攻めにされた。

「あの綺麗な人誰だよ!」「あの人イタリアでお前とデートしてた人じゃなかったか!」

旅行で一緒だった奴がエリカさんの事を覚えていた事もあり、入学早々クラス中から注目を浴びてしまった。

しかも騒ぎを聞きつけた他のクラスの男子からも質問攻めに合う始末。

僕は彼等の攻撃に耐え切れず……。

「彼女は僕の婚約者だよ!!」

と口を滑らしてしまい、クラス中が大騒ぎになった。

女子は婚約者と言う言葉に色めき立ち、男子は恨みがましく僕に罵詈雑言を飛ばして来る。

……それは担任の先生がやって来るまで続き、朝から凄く疲れた。

今日の予定は朝の内に簡単な連絡事項……上級生達はその間に始業式を行っている。

先生の話が終われば次は入学式だ。

大人の長い話を聞き終えると今日はもう解散……授業は明日から少しずつ始まる事になっている。

最後の担任の話を聞き終えると、僕は朝みたいになる前に教室を抜け出し、エリカさんの教室に向かった。

僕の予想通り後ろから「神藤が逃げたぞお!!」と声が聞こえたから逃げて正解だった。

二年生の教室のある階に行くとエリカさんのクラスが分からない事に気付いた。

けど、周りに居た先輩達が金髪の留学生の噂をしていたからすぐにはわかった。

エリカさんのクラスに到着した僕は扉の所に立って居た先輩にエリカさんと呼んで貰おうと声を掛けた。

「あ、あの……」。

「ん?……お前1年生か?入学早々2年生の教室に何の様だ?」

「こ、このクラスに転入してきた、エ、エリカ・ブランデツリさ……先輩は居られますか?」

先輩は僕の来訪に不審そうにしていたが、エリカさんの名前を聞いて

た瞬間、一気に不機嫌になった。

「エリカさん・・・そう、エリカさんだよ。」

あんな美人な人がどうして、よりにもよってまた草薙何だ!!あんな男の何処がいいと言うんだ!!」

突然大声で騒ぎだした先輩にどうすればいいか分からない。

しかも彼の声に周囲に居た男の先輩達が同意する様に一緒に騒ぎ始めてしまった。

戸惑っている僕に優しく声を掛けてくれたのは女の先輩達だった。

「1年生がこんな所でどうしたのかな?」

優しい微笑みに安心した僕は男子の先輩にしたお願いを彼女にした。

僕の口からエリカさんの名前が出た事に驚き、興味深そうな表情を浮かべながら僕のお願いに答えてくれた。

「ブランデッリさんだったら放課後に入るとすぐに草薙君達に連れられて屋上に方向向かったよ。」

「・・・つて言うより君はブランデッリさんとはどういう関係なのかな?」

女性特有の勘で何かを嗅ぎ取ったのか、先輩は笑顔で僕ににじり寄って来た。

「・・・先輩の笑顔が怖いです。」

捕まったら逃げられないと悟った僕は全力でこの場から逃げる事にした。

「あ、ありがとうございます!!」

お礼を言うと共に踵を返し全力で走り去った。

後ろからは「あつ、ちよつと・・・」と声が聞こえた気がしたが振り返らなかつた。

会談まで逃げた所で足を止め、上の階に視線を向ける。

あの先輩はエリカさんが草薙先輩と一緒に屋上に行つたつて言っていた。

エリカさんの事だから大丈夫だと思うけど・・・やっぱり少し心配

だな。

唯待つのも嫌だし……ちょっと様子を見に行くだけ行ってみよう。そう判断した僕は改めて己の『氣』を奥に押し込めてから階段に足を掛けた。

屋上に続く扉の前に到着すると、扉の向こうから誰かが話してる声が聞こえた。

深呼吸をして覚悟を決めるとゆっくりと扉を開ける。

扉の先には、4人の人達が居た。

少し背の高い身体つきのしつかりしている男子生徒。

銀褐色の髪をポニーテールに纏めた妖精の様に可憐な女子生徒。

茶色身が強く長い髪をした、これぞ大和撫子という様な女子生徒。

最後にエリカさん……彼女は3人の生徒に囲まれて何かを話していた。

扉が開いた音に気付いた彼女達は僕に視線を向ける。

僕の姿を見たエリカさんは笑顔に、それ以外の人達は首を傾げた。

……恐らく入学早々屋上に来る1年生が珍しいのだろう。

僕は彼等の事を気にしない事にして、笑顔を向けているエリカさんに駆け寄った。

「エリカさん、探しましたよ。」

「ごめんなさい、少しこの人達とお話していたの。」

彼女に言われて改めて草薙先輩達に顔を向ける。

何故か全員僕とエリカさんのやり取りを見て呆気に取られていたが、気にせず挨拶をした。

「初めまして、1年生の神藤 昴です……これから宜しくお願ひします、先輩方。」

最初は茫然としていた彼等だったが反射的に挨拶を返してくれた。

「あ、ああ、俺は草薙 護堂だ……宜しくな、神藤。」

「万里谷 祐理と言います……こちらこそ宜しくお願ひします。」

「リリアナ・クラニチャールだ……おい、エリカ、やけに親しそうだが……そいつは誰なんだ。」

草薙先輩と万里谷先輩は丁寧に挨拶してくれたが、クラニチャール

先輩には「そいつ」呼ばわりされた。

確かこの人がエリカさんの幼馴染だったと思うんだけど・・・随分と性格が違うみたいだな。

「リリイ、彼に失礼な事言わないで頂戴。」

「ごめんなさいね、昴・・・私の幼馴染なの、許してあげて。」

「気にしていないので大丈夫ですよ。」

これから宜しくお願いしますね、クラニチャール先輩。」

そう言うとクラニチャール先輩は罰の悪そうに表情を浮かべ、エリカさんは僕の頭を優しく撫でてくれた。

頭を撫でられる感触はとても気持ち良く、安心した。

けど・・・ここには僕達だけじゃないんだと気づき、慌てて彼女の手を振り解いた。

「ふふっ、相変わらずこういう所は可愛いわね。」

エリカさんは僕の様子を面白がりながら呟いた・・・恥ずかしいから止めて下さい。

僕とエリカさんのほのぼのとした空気に、呆気にとられていた彼等だったが、我に返り質問をぶつけて来た。

「それで、エリカさん・・・神藤さんとはいったいどういったご関係何でしょうか？」

「ああ、そうだったわね・・・彼が貴方達の質問の答えよ。」

「どういう事だ？」

草薙先輩が首を傾げている。

僕も何の話か分からないので黙っておく事にした・・・余計な事を言っただけで正体がばれたら馬鹿みたいだしね。

「エリカ、お前ふざけているのか!!」

「落ち着きなさいリリイ・・・それにふざけて何かいないわ・・・彼こそが私が日本に来た理由よ。」

「だからどういう事だと聞いている!!」

クラニチャール先輩ははつきりと言わないエリカさんに対して随分と怒っているみたいだ。

エリカさんもエリカさんで、そんな彼女をからかって遊んでいる様

「……………」

いつまでも離れないエリカさんに万里谷先輩は注意を促す。
クラニチャール先輩は見た事の無い幼馴染の姿を心配そうに見つめ、溜息を零す。

草薙先輩は未だに呆然と僕達を見詰めている。

そして笑顔で僕を抱き締め続けているエリカさんと、脱出しようともがき続けている僕。

・・・傍から見ればとても可笑しな集団が出来上がっていた。

満足したエリカさんがやっと僕を離してくれた事により、漸く話が続けられた。

「それで・・・私が日本に来た理由は判って貰えたかしら？」

「あ、ああ・・・つまり婚約者の傍にいる為に日本に来たって事でいいのか？」

「ええ、その通りよ・・・それよりも今回はこの辺りでいいかしら。

私まだ日本に引越して来たばかりで家の片付けとか終わっていないのよ。」

「ああ、悪かったな・・・神藤もエリカをこんな所まで連れ出して悪かったな。」

エリカさんの言葉に草薙先輩は時計を見ると、申し訳なさそうに口を開いた。

草薙先輩の言葉にエリカさんが全くだという表情を見せると、僕の方を向く。

「それじゃあ、帰りましょうか。」

私は教室まで靴を取りに行かないといけないから、昴は先に校門の所で待っていてくれる？」

「はい、わかりました。」

先輩方、今日は話の途中で邪魔してしまつてすみませんでした。」
頭を下げてから僕達は屋上を後にした。

その後エリカさんと別れた僕は靴を履き替え校門でエリカさんを

持っていた。

幸運だったのは朝から興奮気味に僕に質問攻めにしていたクラスの人達が殆ど帰っていた事だ。

学校が終わって人が居ない校門でエリカさんを待つ事数分・・・彼女の気配に気づいて玄関の方に視線を向けた。

そこには笑顔で駆け寄って来るエリカさんの姿があった。

「ごめんなさい、遅くなってしまったわ・・・少しクラスの子達に捕まっ
てしまっつて。」

「気にしていませんよ・・・それじゃあ、帰りましょうか。」

そして僕達は並んで歩き出す・・・勿論すぐにエリカさんに腕を組
まれた。

暫く歩いているとエリカさんに話し掛けられた。

「そう言えば昴、彼等の事だけど・・・。」

「わかっています、草薙 護堂先輩・・・彼がカンピオーネですよね。」

でも、本当に資料の事をやって来た人とは思えませんでした・・・
普通にいい人そうに見えましたけど?」

「ホントよね、私も初めて会った時には拍子抜けしたわ。」

彼は言ってる事とやってる事が一致してないにも程があるんです
もの。」

「やっぱりエリカさん達の言う通り普段は争い事をあまり好まれない
性格みたいですね。」

「それに付いては間違いなさそうね・・・でも、用心に越したことはな
いわ。」

今彼の琴線に触れて戦闘になれば日本で活動する事が出来なくな
るのは確実・・・慎重に行きましょう。」

「わかっていますよ・・・それより僕、ばれなかったですよね?」

優れた霊視能力者だと言う万里谷 祐理先輩・・・彼女にばれなかつ
たのかが一番心配だった。

なるべく万里谷先輩に視線を向けない様にしていたし、内心ではビ
クビクしていた。

そして心配事はもう一つある・・・けど、それを伝える前にエリカ

さんが先に口を開いた。

「それは大丈夫だったんじゃないかしら？」

リリイは貴方が武術を嗜んでいる事に気付いたでしょうけど、恐らくそれだけだわ。

それに朝も言ったけど貴方の魔術コントロールは完璧よ。

幾ら優れた霊視能力者である万里谷 祐里だって貴方の事を見破る事は不可能な筈よ。」

「・・・そうだといいでしょ。」

僕の様子に何かを感じたのか、エリカさんが問い掛けて来る。

僕はもう一つの心配事を彼女に打ち明けた。

「何か心配事でもあるの？」

「はい・・・実を言うと草薙先輩を一目見た瞬間から彼が僕と同類だと気付きました。」

勘みたくない物・・・だったんですけど・・・だから先輩も同じ事を感じ取っていたらやばいなあって。」

そう、僕は先輩を見た瞬間に僕と同類だと気付いた。

なるべくそう言う仕草は見せなかつたけど、あの感覚が神殺し特有の物だったとしたら彼も気付いた事になる。

「そう・・・カンピオーネの方々は直感が鋭くなるとは聞いていたけど、こういう事なのかしらね。」

「どういう事ですか？」

「カンピオーネになるって事は、神から与えられた権能に適應する為に体を造り替える事を言うの。」

それによつて神と戦う為の体を手に入れるのよ。

例えば、骨が鋼よりも固く強固になったり、呪力の量が増えたり。その中に獣の様に感覚が鋭くなる事があるらしいわ。」

「そうだったんですか・・・確かに身体能力や、氣の量が上がっただけで神に勝てる様になるとは思えません。」

「おそらくそういう事よ・・・ホント、貴方達の体って不思議よね。」

「自分で言うのも何ですけど・・・本当に化け物染みてますからね。」

・・・それでは覚えてないでしょうが？」

「恐らくとしか言えないわね・・・彼の直感が何処までの物なのか。
・・・でも大丈夫でしょう。」

以前の彼の戦闘を見た時の感じだと、そういう事に関しては即断即決で行動するタイプだと思うのよ。

あの時何も言わなかったことは・・・。」

「確信が持てる程の物じゃなかったって事ですか？」

「そうだと思うわ・・・でも今後どうなるのかわからないから、時期が来るまでばれない様に気を付けてね。」

「わかりました、気を付けます。」

そうやって話している間に家に辿り着いた。

家に入れば優しさで出来た様なアンナさんの笑顔に迎えられて、僕達はほっこりした気持ちになったのだった。

第13話 草薙 護堂

S i d e 護堂

俺の名前は『草薙 護堂』・・・城楠学院に通う高校2年生だ。そして1年前・・・イタリア・サルデーニャ島で『軍神ウルスラグナ』を殺し神殺しとなった男だ。

それが波乱の幕開けだった。

その後すぐにウルスラグナと争っていた神『メルカルト』と戦う事になるし・・・。

俺の先輩にあたる神殺し『剣の王』サルバトーレ・ドニと戦い、勝手にライバル認定されてしまうし・・・。

この1年、『神』や『カンピオーネ』との戦い続き・・・しまいには時間旅行までさせられた。

そして神殺しとして最大の強敵だった『最後の王・ラーマ』を倒す事に成功した。

ホント大変だった・・・しかもまた何年かしたら復活するみたいな事を言っていたし・・・憂鬱だ。

神殺しになって様々な事件に書き込まれた波乱の1年だったけど、俺も高校2年生。

満喫したとは言えない春休みが終わって今日から新学期が始まる。

そんな俺は早朝・・・いつも通りに起きて日課のランニング。

シャワーを浴びてスッキリしたら爺ちゃんが作ってくれた朝食を食べる。

そして隣に座る妹『草薙 静花』から新学期早々白い目を向けられる。

「お兄ちゃん・・・もう何を言っても無駄だろうけど、高校生らしからぬハーレムを築くのはやめた方がいいよ。」

何て事をぐちぐちと言って来るが気にしない。

俺はそんな物作ってない・・・彼女達は俺の大切な人であり、パートナーだ。

妹の視線を無視し続け、朝食も食べ終わった頃……玄関の呼び鈴が鳴った。

「ほら、お兄ちゃん……お迎えが来たよ。」

妹の絶対零度の視線を華麗に受け流し、鞆を持って玄関に向かう。扉の先で待っていたのは、妖精を思わせる端正な顔立ちに可憐よりは凛々しいという言葉の似合う、銀褐色の長い髪をポニーテールに纏めた女の子……自称俺の騎士である『リリアナ・クラニチャール』だった。

「おはようございます、草薙 護堂、今日から新学期ですね。」

「おはよう、リリアナ……いつも迎えに来て貰って悪いな。」

「いえ、これも騎士の務めですから。」

彼女とは俺がカンピオーネになる少し前からの付き合いだ。

俺がサルデーニヤに行った時に偶然出会い、最初は俺が持っていた荷物に興味を持ったのだったか……。

俺を『はぐれ魔術師』だと警戒して届け先まで一緒に行ったんだ。そこで神の戦いに巻き込まれた俺はカンピオーネになってしまった。

そしてリリアナは俺が神殺しになってしまった事は自分にも責任があると……俺の騎士になってくれた。

……のだが、リリアナが所属している『青銅黒十字』の上層部の人達が反対してきた。

理由は俺が新米の神殺しだから……神殺しと言えど何の実績の無い俺には従えないという事だった。

その時俺に興味を示したサルバトーレ・ドニが勝負を持ち掛けた。ドニの野郎の提案で決闘の内容で判断すればいい……という事になり強制的に決闘する事に……。

結果的に何とか俺が勝利を収め、『青銅黒十字』の人達には俺の力を認めさせる事となった。

そして彼等は俺に協力してくれる様になり、リリアナも晴れて俺の騎士になった訳だ。

まあ、日本にまで付いて来たのには驚いた。

日本に来た当初は何でもかんでも俺の世話をしようとするし・・・はつきり言って大変だった。

でも、神との戦闘や、カンピオーネとのもめ事でいつも俺の事を助けてくれた・・・俺の大切な仲間の1人だ。

「それじゃあ行くか。」

そう言って俺達は学校に向けて歩き出す。

リリアナは俺と歩くときいつも少し後ろを歩こうとする。

理由を聞くと「騎士だから」と言われた・・・気にする事無いのにな。

「一緒のクラスになるといいな。」

「その事でしたら心配なさらなくても大丈夫です。」

「どういう・・・まさか!!」

「申し訳ありませんが少し細工をさせて頂きました・・・騎士としての王の御傍を離れる訳にはいきませんので。」

「あまりそういう事するなって言ってるだろ!!」

はあ・・・まあ、しちゃったのならしょうが無いけどさ。

それに何だかんだ言っても、リリアナと一緒にのクラスなのは嬉しいしな。」

そう言って笑い賭けると、リリアナは顔を逸らした。

何か顔が赤くなってる気がするな・・・何やらぶつぶつ言っていた気がするが、気にしない事にした。

前を向くとそこに見知った少女の背中を見つけた俺はその背中に声を掛けた。

「おはよう、万里谷。」

「おはようございます護堂さん、リリアナさん。」

俺の声に気付き、態々足を止めて振り返り、優雅に挨拶をする人物は・・・。

しつとりとした上品さと聡明さがうかがえる顔立ち。

茶色身が強く、長い髪をした大和撫子な女の子・・・名前は『万里

谷 祐理』。

彼女もまた俺に協力してくれる仲間の1人で、日本の『媛巫女』と

呼ばれる霊能力者である。

中でも靈感を読み取り未来を予測する能力……『霊視』の力が他者よりずば抜けて優れている。

彼女には何度も助けられ、『霊視』の力は何度も俺に道を示してくれた。

感謝してもしきれない……だからなのか彼女には全く頭が上がらない。

何やら呟いていたりリアナも我に振り返り挨拶を返す。

「おはよう、万里谷 祐理。」

「今日から新学期ですね。」

一緒のクラスだと嬉しいのですけれど……去年は私だけ違いましたから。」

「それなら心配いらなと思うぞ……リアナがやつてくれたらしい。」

俺がそう言うのと万里谷はリアナが何をやったのか気付き、慌てて詰め寄っていた。

「何を考えているんですか!!……こんな事に力を御使いになって!!」

「わ、私もやり過ぎかと思っただが仕方ないではないか……草薙 護堂の傍を離れる訳にはいかないんだ。」

「そ、それはわかりますが……。」

「それに万里谷祐理、貴女も同じクラスになる様にして置いた。」

「そ、それは……とてもありがたい事ですが……。」

何て会話が聞こえていたが、俺はそんなに信用が無いのか?……傷付くぞ。

しかしいつもの事だと割り切り、時間を確認すると彼女達に声を掛けた。

「2人共、早く行かないか?」

いい加減にしないと新学期早々遅刻するぞ。」

俺の言葉に彼女達は我に振り返り、俺の横に並んで再び歩き出す。

暫く歩くと、俺達の通っている学校が見えてきた。

玄関で靴を履き替え、教室前に張り出されている自分のクラスを確

認するとそのまま教室に入る。

・・・リリアナの細工通り3人とも同じクラスだった。

「リリアナさんを疑っていた訳ではありませんが、同じクラスでホツとしました。」

「ははは、ホントだな。」

万里谷の席は俺の左、リリアナは右だ・・・去年と同様この席も魔術で細工したんだろうな。

そう思つて苦笑いを浮かべていると突然リリアナが真剣な声色で切り出した。

「そう言えば草薙 護堂・・・少しお耳に入りたい話が。」

「何かあったのか?・・・もしかして厄介事じゃないだろうな!!」

彼女の真剣さから重要な案件だと考えるも、厄介事の匂いが漂つて来ている。

・・・正直に言つてあまり聞きたくはない。

「3月の終わりにまつろわぬ神がイタリアに顕現しました。

その頃はどのカンピオーネの方々も「最後の王」関連で疲弊されていて動けなかった時期です。」

「ああ・・・あの時期は皆大変だったもんな。」

「ええ、それで事に当たっていたのが結社『赤銅黒十字』です。」

『赤銅黒十字』・・・この結社には聞き覚えがある。

少し考えた後、以前リリアナに紹介された人物を思い出した。

「ドニの野郎が馬鹿やった時に手伝つて貰つた結社だったっけ?

確かリリアナの幼馴染がいた所だった筈・・・名前は・・・そう、エリカ!」

「はい、その通りです。」

彼等は神格の弱い神だった為、周囲に被害は出したものの神の封印に成功したと発表しました。

・・・彼女もこの件に関わっていたそうです。」

「へえ〜良かったじゃないか。」

そう言うとりリアナは少し訝しげな表情を浮かべた。

そんな彼女を不審に思つて思わず問い掛けてしまった。

「どうしたんだ？」

「それが・・・他の魔術師達が封印箇所を確認した所・・・封印魔術を使用した形跡は見つかったのですが。」

「・・・そこには何も封印されている様子が無かったそうです。」

「どういう事だ？」

「わかりません・・・赤銅黒十字に問い合わせても調査中の一点張りらしく。」

「それで、それがどうしたって言うんだ。」

「そう、この話で俺に関係する事は神様位だ。」

「だけど、封印を破っていたとしても、態々日本にまで来るとは思えない。」

「しかし彼女を口から聞かされた情報は全く想像を超えた話だった。」

「あくまで噂の域を出ないので・・・その時に誰かがまつろわぬ神と戦っていた・・・という噂があります。」

「その者がまつろわぬ神に勝利し新たな『神殺し』が誕生したのではないか・・・という噂が流れているんです。」

「そんな、まさか・・・。」

「はい、私もそう思います・・・単なる根も葉もない噂でしょう。」

「・・・しかし万が一という事もありますので、報告させて頂きました。」

「はあ・・・そうか、わかったよ・・・態々ありがとな。」

「しかし、やっと強敵との戦いもひと段落した所なのに、新しい同属の誕生?・・・冗談であってほしい。」

「そんな話をしている内に時間になりこのクラスの担任となる教師が入ってきた。」

「いきなりだがこのクラスに留学生が1人入る事となった・・・入って来て。」

「担任がそう言う・・・入って来たのは赤みがかかった金髪に、繊細な造りの美貌を持つ美少女。」

「俺は・・・俺達は彼女を知っている。」

「隣に座る二人も入って来た少女を見て驚いている。」

担任の隣に立つ少女は妖艶な笑みを浮かべて口を開いた。

「皆さん初めまして・・・私はイタリア・ミラノから来ました、エリカ・ブランデツリといいます。」

これから宜しくね。」

そう、その留学生はさっきの話にも出ていた人物・・・リリアナの幼馴染だった。

彼女は自己紹介を済ませると教師に指定された席には向かわず俺の方に歩いて来た。

そして俺の前に来ると膝を付き、恭しく礼を取って来た

「御久し振りで御座います、草薙 護堂様。」

この度は御挨拶が遅れた事・・・真に申し訳御座いませんでした。」
余りにも場違いな行動に教室内の空気が固まった。

そして俺は・・・絶句・・・言葉も出ない。

「勘弁してくれ、ここ学校だぞ。」

思わず呟いてしまった俺は悪くないと思う。

リリアナが来た時や、万里谷と仲良くなつてからも凄かったが今回は・・・この後を想像したくない。

「後程ちゃんとした形で御挨拶に伺わせて頂きますので・・・今回はこの辺りで。」

そう言うと彼女は何事も無かった様に立ち上がり、自分の席へと戻って行った。

これには担任も呆気に取られていたが、我に返り今日の予定に付いての説明して行くのだった。

担任が居なくなると、多くの女子生徒がエリカの元へ殺到した。

エリカもあれだけの大人数に囲まれているのに1人1人丁寧に対応していて・・・素直に尊敬する。

何て彼女を視線で負いながら現実逃避をしてみる。

・・・だって俺は現在、クラスの男子全員に囲まれているのだから・・・。

「なんで、なんでお前ばかり。」

「リリアナさんと万里谷さんだけでは足りないと言うのか。」

「あんな丁寧な挨拶をされて・・・いったいどういう関係だ！」

「羨ましい、羨ましいぞ草薙！」

等々皆さん好き勝手言っただけ。

どういう事だと問い質したいのはこっちの方だつてのに。

それとなく対応して何とか野郎共をやり過ぐす事に成功した俺は、待ちに待った放課後に突入した。

隣に居るリリアナと万里谷と目配せをして頷き合おうと、未だ女子に囲まれているエリカの元へと向かった。

「なあエリカ、少しいいか？」

「皆さんご免なさいね、少し失礼するわ。」

俺が声を掛けると分かっていたかのようにエリカは席を立つ。

「ここじゃ何だし場所を変えよう。」

エリカは黙って頷き、俺達4人はその足で屋上へ向かった。

流石にまだ新学期初日・・・好都合な事に屋上には誰も居なかった。

屋上に着くとエリカは俺の前に膝を付き、頭を下げる。

「先程のぐ無礼お許し頂きたく存じます。」

「ああ、待て待て・・・お願いだ、勘弁してくれ。」

前に会った時も言ったと思うけど、俺そういう事されるの苦手なんだよ。

頼むからもっと普通にしてくれ。」

「そう・・・王のご命令なら、従わせ貰うわ。」

俺がそう言うとすんなり立ち上がり、言葉もかなり崩れた。

俺達が最初に会ったのはアイーシャ夫人の権能に巻き込まれ時間旅行をする前。

ドニの奴が主催した悪巧みを事前に阻止する為に赴いたイタリア。その場でリリアナに紹介されたのが赤銅黒十字の総帥であるパオロさん・・・その後ろに控えていたのが彼女だ。

あの時はあまり言葉を交わさなかったけどこんな奴だったとは・・・。

「・・・久し振りだな、エリカ。」

「ええ久し振りね、リリイ。」

「馴れ馴れしく呼ぶな!!・・・親しくもない奴に愛称等で呼ばれたくはない。」

「あら、いいじゃない、幼馴染なんだし。」

「違う!!お前とは幼馴染では無く腐れ縁だ!!」

何て言い合いを始めてしまった2人を慌てて止めに入る。

「まあまあ、落ち着けて。」

それにしても久し振りだな・・・あの時はあんまり話せなかったけど、お前ってこんな奴だったんだな。」

「失礼な人ね・・・貴方が普通に話せて言ったんじゃない。」

貴方がカンピオーネで無かったら進んで関わる事何て、絶対に微塵も思わなかったでしょうね。」

エリカの高圧的な話し方に少タイラツとしたが、一々気にしても仕方ない。

気持ち静めて本題に入る事にした。

「悪かったな・・・それで、態々留学までして、お前は日本に何しに来たんだよ。」

1番気になっていた事・・・それは、どうして日本に、それも俺のいる城楠学院に来たのか。

大手結社の総帥候補が留学するのだ・・・普通に考えても裏があると思えない。

リリアナはイタリアで起こった事件の詳細が気になっている様で、続け様に口を開いた。

「それに、エリカ・・・先日あったイタリアでの件、どうなっている。」

「リリイ、それに付いては何も言えないわ。」

結社の方からそう指示されているの・・・ごめんなさいね。」

「お前、それで通ると思っっているのか!!」

「ええ、例えカンピオーネの命令であったとしても、私から言う事は何もないわ。」

完璧なる拒絶。

魔術師にとって神殺しは絶対的な強者だ・・・それを神殺しの命令でも話さない何て・・・。

たとえば死んでも話さない・・・彼女からはそう言う覚悟が見えた。
・・・これは本当に俺が聞いても話さないだろうな。

「くっ!!」

リリアナは悔しげな表情を浮かべている。

万里谷もエリカの拒絶に驚きを隠せない様子だ。

「それで、結局日本に何しに来たんだよ。」

「ああ、それは・・・。」

エリカが口を開こうとした時、後ろから屋上へ続く扉の開く音がした。

驚いて顔を向けると、そこには・・・黒髪で少し長めの髪、身長は小柄、顔は女の子にも見える中性的な顔。

男子の制服を着ていなかったら性別の見分けがつかない少年が扉から顔を覗かせていた。

こんな時間に新入生が来る何て・・・珍しいな。

少年は扉からきよろきよろ視線を彷徨わせると、俺達に気付いた。

俺達に・・・厳密に言うところエリカを見つけた瞬間、彼はとたんに笑顔になり、こちらに走り寄ってきた。

彼はエリカの傍まで来ると朗らかな笑顔を浮かべた。

「エリカさん、探しましたよ。」

「ごめんなさい、少しこの人達とお話していたの。」

エリカの言葉に初めて少年は俺達に顔を向ける。

俺はその笑顔を見た瞬間・・・何とも言えない感覚を感じ取った。

少年はそんな俺に気付く事無く・・・はきはきと丁寧に挨拶をしてくれた。

「初めまして、1年生の神藤 昂です・・・これから宜しくお願ひします、先輩方。」

「あ、ああ、俺は草薙 護堂だ・・・宜しくな、神藤。」

「万里谷 祐理と言います・・・こちらこそ宜しくお願ひします。」

「リリアナ・クラニチャールだ・・・おい、エリカ、やけに親しそうだ

が・・・そいつは誰なんだ。」

我に返った俺はさつき感じた感覚に疑問を思えながら挨拶を返した。

それに万里谷とリリアナが続いたのだが・・・リリアナ、お前ちよつと失礼だぞ。

同じ事を思ったのか、エリカが少し表情を険しくしながらリリアナを嗜めた。

「リリイ、彼に失礼な事言わないで頂戴。

ごめんなさいね、昴・・・私の幼馴染なの、許してあげて。」

「気にしてないので大丈夫ですよ。」

これから宜しくお願ひしますね、クラニチャール先輩。」

朗らかな笑顔をリリアナに向ける後輩・神藤・・・随分と出来た1年生だ。

エリカに頭を撫でられて気持ち良さそうにしている姿も、俺達に氣付いて慌てる姿も、随分と可愛らしい。

ほのぼのとした空気に包まれて、思わず目的を忘れそうになってしまった。

そんな俺達を現実に取り戻してくれたのは万里谷の問い掛けだった。

「それで、エリカさん・・・神藤さんとはいったいどういったご関係何でしょうか？」

「ああ、そうだったわね・・・彼が貴方達の質問の答えよ。」

「どういう事だ？」

言っている意味がよく分からず、俺は首を傾げる。

リリアナは笑顔のままのエリカがふざけていると判断して声を荒げた。

「エリカ、お前ふざけているのか!!」

「落ち着きなさいリリイ・・・それにふざけて何かいないわ・・・彼こそが私が日本に来た理由よ。」

「だからどういう事だと聞いている!!」

エリカの言う通り落ちつけ、リリアナ・・・彼奴は多分お前の反応

「それで……私が日本に来た理由は判って貰えたかしら？」

満足したのか神藤から離れたエリカの言葉に我に返った俺は慌てて言葉を返す。

「あ、ああ……つまり婚約者の傍にいる為に日本に来たって事でいいの？」

「ええ、その通りよ……それよりも今回はこの辺りでいいかしら。」

私まだ日本に引っ越して来たばかりで家の片付けとか終わっていないのよ。」

「ああ、悪かったな……神藤もエリカをこんな所まで連れ出して悪かったな。」

俺は彼女の言葉に時計を確認する。

彼女と話し始めてから結構な時間が過ぎていた事に初めて気付いた。

俺の謝罪にエリカは全くだと無然とした表情を浮かべると、神道に顔を向けた。

「それじゃあ、帰りましょうか。」

私は教室まで鞆を取りに行かないといけないから、昴は先に校門の所で待っていてくれる？」

「はい、わかりました。」

先輩方、今日は話の途中で邪魔してしまってすみませんでした。」
最後まで丁寧な可愛らしい後輩は笑顔でエリカと去って行った。

彼等の後姿を見送った後、俺達は屋上に残り話し合いを始めた。

「2人の事どう思う？」

「エリカがどういう積りかは判りませんが……彼に対する気持ちは嘘ではないでしょうね。」

「そうか……。」

「但し……彼が唯の一般人という事はあり得ません。」

「どういう事だ？」

確信を持ったりリアナの言葉に俺と万里谷は首を傾げる。

「彼の動きは武道を嗜んでいる者の動きでした……少し彼に着いて調べてみる必要があります。」

「ただ武術を学んでるってだけだろ……万里谷は何か感じたか？」

「いえ、私は何も……特に気付いた事はありませんでした。」

……そうか、万里谷の霊視では何も感じられなかったのか。

彼女の言葉に少し考え込んでいるとリリアナに声を掛けられた。

「何か気になる事でも？」

「いや……何て言葉にすればいいか分からないんだけど……何か気になるっていうか。」

神藤の笑顔を見た瞬間に感じた感覚……あれは一体、何だったんだろうか。

はつきりと言葉で表現出来ない事がもどかしく思う。

俺の表情から何かを感じ取ったのか2人も真剣な表情を浮かべ出した。

「貴方が気になるという事は……『まつろわぬ神』か『カンピオーネ』という事になります。」

「いや、もし神藤が『カンピオーネ』だとしたら万里谷が気付かない訳ないだろ。」

「確かにそうですが……万里谷 祐里、本当に何も感じなかったのか？」

「はい、私は彼からは何も感じ取れませんでした。」

「だろ、だったら俺の気の所為だつて。」

しかし俺の言葉に2人は首を横に振る。

「いえ、貴方の直感は無視出来る物ではありません……彼に付いて早急に調べてみる事にします。」

……万里谷 祐理が判らなかつた事も何かの権能による可能性もあります。」

「神藤さんが神殺しかどうかは別として、エリカさんの婚約者です。」

何かしら魔術界に関係のある人物と言うのは確実でしょう……調べて損をする事は無いと思います。」

2人の意志は固いみたいだ。

確かにあの感覚を無視するのは少々難しいとは俺も思う。

俺は1つ息を零すと口を開いた。

「考え過ぎ……って事は無いのか?」

「それを確認する為に調査するのです。」

それに、こう考えれば赤銅黒十字の不可解な行動も説明が付くかもしれない。

「どういう事だ?」

リリアナは一つ一つ指を折りながら推測を話し出した。

「イタリアでの件……事に当たっていたのは赤銅黒十字。」

仮に神藤 昴が神殺しであるならばその場でエリカと接触していた可能性がありません。

彼の命令か赤銅黒十字の方針か分かりませんが、その縁で赤銅黒十字が神藤 昴の傘下に入った。

……そしてエリカが日本まで神藤 昴を追って来た。

まだ何の確証ありませんが……可能性としてはあると思います。確かに……証拠も何もないが、可能性と言う話だけならあり得なくもない。

まあ……神藤が『神殺しだった』としたら……という話だ。

調べるだけなら別にいいか……もしかしたら何か厄介事の前触れかも知れない。

準備して置くに越した事はない……それがこの1年戦ってきた中で覚えた事だ。

「まあ、程々にな。」

「沙耶宮 馨にも報告して手伝って貰いましょう。」

俺の程々と言う言葉は聞こえていなかったのか、リリアナは勢い込んで話す。

そんな彼女を仕方ないなあ……と言う視線を送ると、同じ表所をした万里谷と目が合い苦笑し合う。

そして俺達も下校する為、屋上を後にするのだった。

後日・・・リリアナからイタリアの事件の時に神藤が卒業旅行でミラノに行っていたという情報が入った。

馨さんからはとある古武術の当主だという情報も・・・。

その話を聞いた俺達は神藤 昂と言う後輩を少しばかり警戒する様になった。

第14話 日本の呪術界

S i d e 昴

入学式から幾日か経過した。

登校時には毎日エリカさんと腕を組んで登校。

既に学校中が僕とエリカさんの関係を知っている・・・噂が広がるのって早い。

女子の方達は微笑ましく見て来るだけだが、男子は日に日に殺氣立って来ている。

教室に入ると学年の男子に囲まれ、授業が始まるまで耐える事が日課になりつつある。

昼食はエリカさんと食べる事にしている。

まだ少し風は冷たいが、屋上でエリカさんと合流しアンナさんの手作り弁当を食べる。

最初はエリカさんと2人きりで食べていたのだが、最近僕達以外に数人その中に加わる事が増えた。

それは例の草薙先輩御一行だ・・・何でも去年からお昼は屋上に集まって食べていたらしい。

最初は僕達の邪魔をしては悪いと思っていたそうだけど「せっかくだから」と一緒に食事する様になった。

最初は何処となく接し方がぎこちなかったけど、何度か一緒にする度に普通に食事が出る仲になった。

ぎこちなかったのは、エリカさん曰く・・・僕の情報を探んで、警戒してたんじゃないか・・・という事だ。

僕は「彼等に近付かない方がいいのでは？」・・・と聞いてみたが、エリカさんは今のままでいいと言っていた。

理由として・・・急に距離を取ったら余計に怪しまれるとの事だった。

という事で、今日も僕達は草薙先輩達と昼食を摂っている。

何も変わった所のない、至って普通の食事風景だ……僕とエリカさんは。

最初見た時は普通に夫婦かと思った。

万里谷先輩とリリアナ先輩が甲斐甲斐しく草薙先輩のお世話をしているのだ。

しかも草薙先輩も満更じゃない……毎回の様にとつても甘い空間になるので、少し自重して欲しい。

……そして後もう2人。

1人は先輩達に囲まれた草薙先輩を睨み付けている。

その子は草薙 静花さん……草薙先輩の妹さんで、この学院の中等部3年生だ。

何でも去年から女の人を侍らし始めたお兄さんが、これ以上ふしだらにならない様に監視しているらしい。

……もう、手遅れじゃないかな??

最初はエリカさんを見て警戒していたけど、僕と婚約している事を知ってからは仲良くして貰っている。

年下だけどつてもしつかりしているお兄さん思いの優しい子だ。……でも毎日の様にお兄さんの愚痴を言ってくるのは勘弁して欲しい。

そしてどうやら彼女は先輩の正体は知らないらしい……まあ、簡単に話せる事じゃないか。

そしてもう1人は草薙先輩達の事を楽しそうに眺めながら食事を勤しんでいる。

彼女は万里谷ひかり、今年中等部に入学したばかりの1年生にして、万里谷先輩の妹さん。

エリカさんによると彼女は何年かに一人の貴重な魔術を使える逸材で優れた巫女でもあるらしい。

何でも、以前草薙先輩に助けられ、そして兄の様に慕っている先輩の後を追ってこの学院に入学したそうだ。

このメンバーで食事をしていると時折鋭い視線を感じる事がある。
・・・リリアナさんがじっとこっちを見ているのだ。

最初は全員があからさまに警戒している様子だったが、数日経てば収まった。

しかし、彼女は別だ・・・時折今の様に鋭い視線を僕に向けて来る。それを見た草薙先輩が注意するまで続くので、結構疲れる。

しかし、ばれる訳にもいかないので、こればかりは仕方がないと割り切り、無視する事になっている。

放課後になると部活に所属しない事に決めた僕はまっすぐ家に帰る・・・理由は道場があるからだ。

道場は現在、エリカさんの提案で僕が神殺しだと発表するまでは休む事に決めた。

本来ならば学校に慣れて来れば道場を再開しようと思っていたが、今は慎重に行動する時だと言われ、納得した。

エリカさんだが、放課後になると日本の魔術界の情報を集める為1人で何処かに行ってしまう。

その為下校時は1人で帰る事が多い。

いや・・・一度だけ、部活が休みだと言う静花さんと一緒に帰った事がある。

あの時も帰り道の間ずっと愚痴を聞いてあげたなあ・・・大変だった。

家に帰るとまず道場に行く。

道場を開かないとしても僕自身の稽古は毎日しているからね・・・それに掃除だつてしなくちやいけない。

掃除を終えれば、びっしより汗を掻く程体を酷使すれば、その日の稽古は終わりだ。

お風呂でゆっくり1日の疲れを取り、その後アンナさんの作った美

味しい夕食を頂く。

・・・この時までエリカさんは帰って来ていない。

エリカさんは毎日遅くまで動いてくれている。

「無理しなくてもいい」・・・と言った事があつたが、彼女は首を横に振った。

「これは時間との勝負だから」・・・と言って毎日夜遅くに帰って来る。

僕は朝の稽古がある為エリカさんが帰宅する前に布団に入る。

そして・・・朝起きたら生まれたままの姿で僕の布団で眠るエリカさんの姿にドキドキする。

これが今の僕の日常だ。

4月最後の週の休日。

休日はお昼頃までゆっくりとしているエリカさんが、朝から慌しく出掛けて行った。

僕はと言うと、朝の稽古を終えゆっくりとした時間を過ごしていた。

そろそろ昼食の時間が迫りアンナさんがキッチンに向かった頃、エリカさんが帰って来た。

「昴、漸く情報が纏まったわ・・・今から少しいかしら？」

「ええ、今日は特に予定はないですから大丈夫ですよ。」

エリカさん、僕の為に・・・ありがとうございます。」

「お礼何て必要ないわ・・・貴方をサポートする為に私が居るんだから。」

僕のお礼に彼女は笑顔で答えてくれた。

エリカさんが僕の正面に座り資料を広げようとした所でアンナさんが昼食を持ってやって来た。

エリカさんの話は食事が終わってから・・・という事になった。

エリカさんが僕の為に行ってくれていた情報収集は真っ先にやるべき急務だった。

日本の呪術界の情報は海外では全くと言っていい程無い。

大手結社である『赤銅黒十字』を持つてしても、情報を持つていなかった位だ。

その為エリカさんは放課後から夜遅くに掛けて、毎日情報収集に明け暮れていた。

本来であれば学校を休んで情報を集めていればもつと早く情報を集める事が出来た。

しかし草薙先輩の近くで僕だけにするのは心配だという事でエリカさんも学校には毎日出席していたのだ。

その為情報を集めるのに1ヶ月近く掛かってしまったと言つていた。

食事を終えた僕達はリビングに移動してエリカさんの報告を聞く事にした。

「まず日本の呪術界に付いてわかった事を教えるわね。」

日本の呪術師や霊能者を統括しているのは『正史編纂委員会』と呼ばれる政府直属の秘密組織よ。

彼等は魔術の関わった事件の情報操作等を行つていて、世間にばれない様にするのが主な仕事みたいね。

国内の呪術師や霊能者はこの組織に協力する義務がある様ね。

呪術師や霊能者に対して守秘義務を課しているみたいで、情報を集めるのに苦労したわ。」

「・・・本当にありがとうございました。」

エリカさんの険しい表情からも彼女の苦労が伺えた。

エリカさんは僕のお礼に1つ頷き続ける。

「正史編纂委員会には代々強い呪力と権力を持った『四家』と呼ばれる一族達がいるわ。」

主に彼等が日本の呪術界を仕切っているみたいなの。

更にその上に『古老』と呼ばれる人達が居て・・・『四家』もこの人達の指示には逆らえないそうよ。

まあ滅多に動かないみたいだし、今は頭の片隅にでも止めて置けば

いいわね。

後は万里谷姉妹の様な『媛巫女』と呼ばれる存在ね。

日本の呪術界の高位の巫女・・・恐らく何か1つに秀でた能力者の総称の様な物でしょう。

『媛巫女』に付いてはあまり分からなかったわ・・・余程隠したい秘密でもあるのかしらね？」

ここでエリカさんは1つ息を吐く。

そして何やら意味深な笑みを浮かべながら僕に1枚の資料を渡してきた。

「貴方が以前挙げてくれた名前の中に・・・1人居たわよ・・・心強い味方になれる凄い力を持った人が。」

僕はエリカさんから渡された資料に目を通し・・・再び彼女に顔を向けた。

その時の僕は、それはもう驚愕の表情をしていた事だろう。

エリカさんは笑みを浮かべながら再び口を開いた。

「四家と呼ばれる一族達が日本の呪術界を仕切ってるって言ったでしょ？」

1つは清秋院家・・・武力と政治力を持っていて、草薙 護堂の近くにも清秋院家の者が1人仕えているわ。

2つ目は九法塚家・・・日光東照宮の西天宮って所の守護を担っているそうよ。

3つ目が連城家・・・そして最後の4つ目が私達にとって重要一族。

この家は正史編纂委員会のトップを勤める智者の一族で・・・その名前は『沙耶宮家』。」

エリカさんの言葉に僕は何の反応も返す事が出来なかった。

何故なら僕の心は既に懐かしさと驚きで埋め尽くされていたんだから・・・。

「沙耶宮・・・『沙耶宮 馨』・・・『馨お姉ちゃん』??」

僕の呟きにエリカさんの笑みが深まった。

「そうよ、貴方が纏めた資料の中で真っ先に挙げた名前・・・『沙耶宮 馨』。」

彼女は現在、若くして『正史編纂委員会・東京分室・室長』を務めている程の人物よ。」

馨お姉ちゃんとは家の道場で知り合った。

当時両親を亡くして元気の無かった僕を気に掛けてくれたのが：：馨お姉ちゃんだ。

落ち込んでいる僕に積極的に話し掛けてくれたり、一緒に稽古をしたり、時には一緒に遊んでくれたり・・・。

馨お姉ちゃんが居たから元気になる事が出来たと言ってもいい位、仲良くしてくれた。

最初は馨お姉ちゃんの事を男の子だと思っていたけど、ある時偶然着替えを見ちゃって女の子だと知った。

びっくりしたお姉ちゃんが大きな声を出した事により・・・その後お爺ちゃんにめちやくちや怒られた。

でも馨お姉ちゃんは僕が謝ったら笑って許してくれた。

・・・その時頬を赤く染めていたお姉ちゃんにドキツとしたのを覚えてる。

それから暫く経った頃、馨お姉ちゃんが家の用事で道場をやる事になった。

一番仲が良かったし、当時の僕にとって心の支えでもあった馨お姉ちゃんが道場をやめる事が凄く嫌だった。

止めると聞いた時・・・泣きわめいて・・・大暴れして・・・道場の皆を困らせた事を覚えている。

お爺ちゃんに習い始めていた『神道流』まで使って暴れていた為、かなり危険だったそう。

その時は駆け付けたお爺ちゃんが僕を気絶させて事無きを得たが、目を覚ました僕は再び塞ぎ込んでしまった。

そんな僕にお爺ちゃんが「男なら女を悲しませる様な事をするな」と叱咤した。

顔を上げた先に見た馨お姉ちゃんの困った様な、悲しそうな表情・・・僕はそんな彼女の顔を見て決心したんだ。

馨お姉ちゃんが道場に来る最後の日・・・その時にある約束をした。
「馨お姉ちゃん・・・僕、強くなるよ。」

馨お姉ちゃんを心配させない位・・・馨お姉ちゃんを守れる位・・・強く。」

「そうか・・・ならその時は頼りにさせてもらおうかな。」

その時見た馨お姉ちゃんの笑顔はとても嬉しそうで・・・とても綺麗だった。

その日から馨お姉ちゃんとは一度も会ってなかったが、この間初めて手紙が来た。

・・・お爺ちゃんが亡くなった事を知った手紙だった。
葬式に出席出来なくて申し訳なかったと・・・何かあったら力になる、頼ってくれと手紙には書いてあった。

手紙の事を思い出した僕はリストの中の一番上に馨お姉ちゃんの名前を入れた。

僕の事を覚えていてくれたから・・・僕にとって何年経っても、たった1人のお姉ちゃんだから・・・。

今でも家族以外で一番信用出来る人だから・・・。

「昴、この人は本当に信用出来る人なのよね？」

確認する様に問い掛けて来るエリカさんに僕は自信を持って答える。
「はい、家族以外で一番信用出来る人です!!」

「あら、私が一番じゃないのね。」

僕の自信あり気な言葉が気に触ったらしく、エリカさんが少し拗ねてしまった。

そんな彼女を始めて見た僕は少し驚いたが、笑顔でちゃんと伝えて

あげた。

「何言ってるんですか?? エリカさんは僕の婚約者何ですから・・・もう家族も同然じゃないですか!!」

「そうね・・・そうよね・・・ありがとう、とても嬉しいわ。」

エリカさんは僕の言葉に目を見開いて驚いたが、次の瞬間にはとても綺麗笑顔で微笑んでくれた。

そしてエリカさんは僕の隣に移動したかと思うと、僕に寄り掛かって来て僕に体重を預ける形になった。

心地いい重さと、すぐ近くから薫る甘い香り。

そして、自分が言った恥ずかしいセリフを思い出して顔を赤くしてしまったのは・・・仕方のない事だと思う。

「でも、幾つか心配な事があるのよ・・・例え貴方が信頼している人でもね。」

エリカさんはその甘える様な姿勢のまま続きを話し出した。

僕の心臓が持たないから少し離れてくれると助かるが・・・うん、諦めよう。

「馨お姉ちゃんがどうかしたんですか?」

「さっきも言ったでしょ、彼女は『正史編纂委員会・東京分室・室長』だって。

という事は、既に草薙 護堂との面識があつて、何度も彼等に協力しているって事よ。」

「・・・つまり、既に草薙先輩側に付いているから、協力してくれない可能性があるって事ですか?」

「簡単に言えばそう言う事よ。」

確かに言われてみればその通りだ。

草薙先輩は1年前から日本で活動している。

この辺りを管理している馨お姉ちゃんが先輩に協力しているのは確実だろう。

不安な表情を浮かべた僕にエリカさんが優しく声を掛ける。

「でも、協力者となれば心強い人物でもあるわね。」

ハイリスク・ハイリターンではあるけれど、後は交渉次第でどうと

でもなるわ。」

「じゃあ……。」

「昴の信頼出来る人何でしょう??なら取り敢えず一度会ってみましよう。」

協力して貰えなくても、昔可愛がっていた昴の事を危険に晒す様な事はしれないと思うわ。

もし危険だと判断したら……そこはカンピオーネとして命令すればいいのよ。」

そう言っただけで笑っていたエリカさんの笑顔は少し怖かった……。

そして味方になればとても心強いという事と、僕の信頼する人という事で彼女に会う事になった。

……何年振りかに会う馨お姉ちゃんに今からドキドキしてきた。

第15話 味方

S i d e 昴

後日、手紙に書いてあつた連絡先に電話をして馨お姉ちゃんと近いに会う約束を取り付けた。

電話に出た人は違う人だったけど・・・僕のドキドキを返せ!!

そして約束の日：僕達は学校からは少し離れた場所にあるカフェで馨お姉ちゃんを待っていた。

学校から離れた所にしたのは草薙先輩達に見つからない様にする為だ。

先に到着した僕は馨お姉ちゃんと会える事を嬉しく思いながらも、久し振りの再開に緊張していた。

僕達が店に入ってから10分が過ぎた頃・・・店の扉が開いた。

扉の音と共にそつちを見ると、そこに居たのは美少年とも美少女とも取れる美しい顔立ちをした人物だった。

彼女を瞳に移した瞬間、僕は思わず立ち上がっていた。

とつても大人っぽくて、あの頃よりも凄く綺麗になつてるけど・・・間違いない。

「・・・馨・・・お姉ちゃん・・・。」

立ち上がった時に大きな音を立てていたからか・・・それとも僕の眩きが聞こえていたのか・・・。

店内を見渡していた馨お姉ちゃんと目が合った。

馨お姉ちゃんは優しくも懐かしむ様な笑みを浮かべながら、僕の方へ歩み寄つて来る。

「馨・・・お姉ちゃん・・・だよね？」

「僕の事をまだ『お姉ちゃん』と呼んでくれるのか・・・久し振りだね、昴君。」

嬉しそうに微笑むお姉ちゃんと数年振りに再会した瞬間だった。

いつまでも立たせる訳にも行かないから、馨お姉ちゃんに席に座つて貰った。

注文を取りに来た店員さんと話す馨お姉ちゃんを見て・・・僕は懐かしい気持ちになっていた。

・・・本当に馨お姉ちゃんは変わらないな。

勿論、あの頃と違って背も高くなってるし、とつても綺麗になっている。

でも雰囲気というか何というか・・・。

馨お姉ちゃんと一緒に居ると落ち着くこの感じは全然変わってない・・・凄く安心する。

僕達の方に向き直った馨お姉ちゃんと改めて向き合う。

久し振り過ぎて何と声を掛ければいいのか迷う僕に、懐かしさに目を細める馨お姉ちゃんが先に口を開いた。

「本当に久し振りだね、昴君・・・とつてもいい男になって・・・。」

馨お姉ちゃんが考え深そうに僕の事をじつと見つめてくる。

温かい視線にちよつと恥ずかしくて、照れ臭くなってしまう。

「馨お姉ちゃん・・・そんなにじつと見詰められると恥ずかしいよ。」

「はははっ、悪かったね。」

そう言つて僕達は自然に笑い合った。

数年振りに再会した事もあつて、少しの間二人で話していると・・・。

「2人で楽しそうに話している所、ごめんなさい・・・そろそろいいかしらっ。」

エリカさんが少し怒った様子で言葉を発した。

久し振りに馨お姉ちゃんに会つて浮かれていたとはいえ、エリカさんの事を忘れる何て・・・。

「ご、ごめんなさいエリカさん。」

え、えつと、馨お姉ちゃん紹介するね・・・こちらエリカ・ブラン

デッリさん。」

慌ててエリカさんの事を紹介した。

エリカさんは表情は笑顔だけど、視線は鋭い眼差しで馨お姉ちゃんを見据えてながら口を開いた。

「初めまして、沙耶宮 馨さん。」

赤銅黒十字所属の大騎士エリカ・ブランデッリよ。」

「僕の事は知っているとありますが、正史編纂委員会・東京分室・室長、沙耶宮 馨と言います。」

エリカさんの視線を表情一つ崩す事無く同じ位鋭い眼差しで答える馨お姉ちゃん。

自己紹介する二人の言葉がやけに力強い気がする。

何か2人の間に火花が見える……いや、僕の気の所為だ……そうに決まってる。

「それで……イタリアの騎士様がどうして昴君と一緒にいるのかな？」

「簡単な事よ……私と昴は婚約者同士……私達は常に共に居るべきなのよ。」

「ほう……婚約者……ですか。」

誇らしげに宣言するエリカさん。

いつもの僕だったら恥ずかしさに身悶えするだろうけど……今の僕にそんな余裕はない。

だって……馨お姉ちゃんの機嫌が一気に悪くなったんだから。

今でも忘れない……子供の頃に一度だけ馨お姉ちゃんを怒らせてしまった時の事を……。

うん……心臓に悪いから思い出すのは止そう。

それよりも目の前で始まりそうな彼女達の戦いを止める方が先決だ。

僕は恐る恐る声を掛ける事にした。

「あ、あの……馨お姉ちゃん？」

僕の声に気付いてくれた馨お姉ちゃんがエリカさんとの睨み合いを止めて僕の方を向いてくれた。

そのお蔭で店内に充満していた緊張感が無くなり、店員さんがほっとしているのが見えた。

「何かな、昴君。」

「今日馨お姉ちゃんに来てもらったのは助けて欲しい事があるからだ。」

「昴君の頼みだ……僕に出来る事だったら何でも言ってくれて構わな

いよ。」

僕が切り出そうとした所をエリカさんが遮った。

「その前に1つあなたに情報を与えてあげるわ。」

「・・・何でしょうか？」

「3月の終わりにイタリア・ミラノに現れたまつろわぬ神については知っているかしら？」

「今その情報を魔術界で知らない人はいないでしょう。」

勿論僕達の所にも入って来ていますよ・・・赤銅黒十字が何やら隠し事をしている事も・・・ね。」

「その事に関する情報を特別に教えてあげるわ。」

そう言ったエリカさんに対して、馨お姉ちゃんは訝しげな視線を向けていた。

「以前護堂さん達は教えて貰えなかったと聞いています。」

それに、赤銅黒十字も頑なに口を閉ざして何も話そうとしない事を・・・僕にですか？」

「これから話す事は他言無用よ・・・勿論、草薙 護堂にもね。」

「それが無理な事は貴方が一番わかっているでしょう？」

「・・・それは話を聞いてから改めて判断して頂戴。」

「まず・・・あの事件についてのどの位情報が入って来ているのかしら？」

「イタリア・ミラノにまつろわぬ神が降臨した事。」

そのまつろわぬ神が炎に関する神である事。

この件について赤銅黒十字が何かを隠している事。

この件にあなたが深く関わっていた事。

そして・・・この時昴君がイタリアを訪れて居た事・・・これ位ですかね。」

ちらつと僕の方に視線をやる馨お姉ちゃん。

エリカさんは難しい顔をして何やら考え込んでいる。

「昴君の事はリリアナさんが独自に調べた事ですが・・・日本にもこの程度の情報は入って来ています。」

ヨーロッパの方では、更に多くの情報が出回っているでしょうね。」

「・・・やはりもつと早く行動して置くべきだったわね。」

エリカさんは小さく呟くと、馨お姉ちゃんに向き直り、あの日在った事を話し始めた。

「あの日は叔父様にまつろわぬ神が顕現なされたと聞いて、その対処に私が向かう事になった。」

まつろわぬ神を見つけた私は失態を犯してしまった。

初めて遭遇した神に舞い上がっていた私は・・・恐れ多くも何も考えずに話し掛けてしまった。」

「それは・・・やつてしまったね。」

「・・・ええ、本当に。」

エリカさんは悲痛に表情を歪めたが口を閉ざす事無く話し続けた。

「私が神に気付いた事によつて、その場で神は暴れ出した。」

そのまつろわぬ神の名は『アグニ』・・・インド神話の火神よ。」

「火神アグニ・・・やはり火に纏わる神だったか。」

「ええ・・・そして辺り一帯は火の海になった。」

私も自分の招いた事だから何とかしようとしたのだけれど・・・駄目だね。」

エリカさんは自分のしてしまった行動を今でも悔いているんだ。

あの時の光景が、自分が原因で引き起こされたんだとしたら・・・忘れる事何て出来ないだろう。

「何も出来ずに私も死になつた時に・・・私を助けてくれた人が居たの。」

私はその人に助けられて今もこうして生きていられる。

そして・・・その人は無謀にも神に戦いを挑んだ・・・傷つけられながらも、何度も・・・何度も。」

そこでエリカさんが言葉を切った。

じつと馨お姉ちゃんの瞳を覗き込み、馨お姉ちゃんも何かを感じ取ったのか息を呑む。

「エリカさん・・・もしかして・・・本当に・・・？」

「ええ、今、貴方が予想している通りよ。」

その人は私の目の前で神殺しを成し遂げた・・・あの光景を忘れる

事はないでしょうね。」

エリカさんはその時の事を思い出したのか、とても誇らしそうだ。

馨お姉ちゃんは困惑しているのか、驚いているのか・・・何とも言えない表情を浮かべている。

「此処まで話せばあなたはもう想像が付いているでしょう？」

私が・・・昂が貴方に話したい事の内容を・・・。」

「・・・昂君。」

馨お姉ちゃんは困惑の籠った視線を僕に向けた。

僕はちらつとエリカさんに目を向けると、頷く彼女を見て真っ直ぐ馨お姉ちゃんを見つめた。

「僕がイタリアへ卒業旅行に行った日の夜・・・大きな『氣』を感じたんだ。」

去年からあの『氣』の正体が知りたかった僕は気になってこっそり見に行ったんだ。

そしたら街が炎に包まれてて・・・僕、見て見ぬ振り何て出来なくてさ。

炎の中に飛び込んで逃げ遅れた人達を助けて回ってたんだ。

そしたらエリカさんが全身から炎を吹き出してる・・・化け物みたいな『氣』を持った人に襲われてて。

僕はエリカさんを助ける為にその人と戦ったんだ・・・後は、エリカさんが話した通りだよ。」

「・・・じゃ、じゃあ、昂君は本当に・・・。」

「うん・・・僕、『神殺し』になっちゃったんだ。」

僕の言葉に言葉を無くした馨お姉ちゃんは手に顎を置き、目を閉じた。

僕達は黙って待つしかなかった。

暫くして馨お姉ちゃんが深く息を吐くと、口を開いた。

「護堂さんから昂君の事を知っているかと聞かれた時から、何となく予想は付いていたんだ。」

・・・でもひとつ聞かせてくれ。

赤銅黒十字の様な大きな結社には昴君に付くメリットが無いんじゃないのか？」

「確かにその通りよ……でも昴のご両親に赤銅黒十字は大きな借りがあるのよ。」

「借り？……昴君のご両親に？」

「そうよ、彼のご両親は赤銅黒十字の特別顧問をしていたの。」

「当時から皆がともお世話になっていたと聞いわ。」

「そして……私の両親の命の恩人でもあるの。」

「まさか、彼のご両親が亡くなったのは……。」

「私の両親を逃がす為に、昴のご両親は神に戦いを挑み……命を落としたの。」

「私達には彼のご両親に多大な恩がある……だから赤銅黒十字は彼の傘下に降る事を決めたわ!!」

「馨お姉ちゃんは腕を組んで考え込んでしまった。」

「暫くして今まで見た事の無い真剣な眼差しを僕に突き付けながら問い掛けてきた。」

「……それで、僕にお願いって言うのは？」

「うん、それ何だけど……パオロさん達はイタリアで活動しないかって言ってくれたんだ。」

「その方が色々と支援もしやすいからって。」

「けど僕にはお爺ちゃんが残した道場もあるし、日本で活動したいって事になったんだ。」

「そこで日本に君臨するカンピオーネである護堂さんの事が問題になった……と。」

「草薙先輩が既に治めている日本で勝手に活動すると、問題が起こるかもしれない。」

「だからまずは日本で活動出来る様に地盤を固めてからって事になって。」

「そこまで話すと馨お姉ちゃんは納得した様に頷いた。」

「そこで僕に白羽に矢が立ったって訳か……。」

「東京呪術界のトップだから草薙 護堂との関わりもあって危険だと

思ったわ。

けど昴が貴方なら信頼できる……って言ったからこうして全てを話す事にしたのよ。」

僕は立ち上がり馨お姉ちゃんに頭を下げた。

「馨お姉ちゃん、お願いします。」

僕に出来る事だったら何でもしますから……僕の味方になって下さい。」

隣に座っていたエリカさんも立ち上がり一緒に頭を下げてくれた。けれどそんな僕達を見て慌てた様子で馨お姉ちゃんだ止めに入る。

「昴君、エリカさん、頭を上げて!!」

僕は場所を思い出し、周囲の視線を気にしながら席に座った。

……あまり人が居なくて良かった。

「……まず僕にも多少なりとも霊視の力があるんだけど、昴君からは神の神気が欠片も感じられない。」

まあ、昴君の事だから、完璧にコントロールしてるんだと思うんだけど……。」

もし良かったら少しばかり昴君の『氣』を見せてくれないかな？」

「流石、馨お姉ちゃん……その通りだよ。」

僕はそう言うとはんの少し『氣』を放つ。

すると馨お姉ちゃんは納得がいったのかしつかりと頷いた。

「ありがとう、もう大丈夫だよ。」

お姉ちゃんの言葉に僕はすぐに氣を放つのをやめた。

もし誰かに気付かれでもしたら今迄の努力が水の泡になっちゃやしね。

僕が神殺しだという事が確認された事で、馨お姉ちゃんの表情が少し険しくなった。

「昴君が神殺しか……1年前ならすぐに協力体制を作る事が出来ただろうけど……今はね。」

「やはり難しいかしら?」

「難しいね……僕達はすでに何度も護堂さんには助けて貰っている。正史編纂委員会としてもここで鞍替え何て怖くてとてもじゃ無い

けど出来ないね。」

「・・・やっぱり無理だよ。」

無理だったと思えば落ち込んでしまう。

難しい事を頼んでいると分かっていたけど、やっぱりショックだ。

「委員会を動かして君の方に就くのははつきり言つて無理だ。

既に委員会の中には護堂さんを王と崇めている者も多く居る。

特に清秋院家は娘が1人護堂さんの側近として付いている事も

あつて、今更昂君に靡くとは考えられない。」

馨さんはここで言葉を溜め・・・そして、今までの険しい表情を一変とさせると・・・。

「僕個人としてなら今すぐにでも委員会を辞めて昂君の力になろう。」

はつきりと言つてくれた。

僕はもう断られた物だと思つていたから彼女の言葉が信じられなかった。

「あ、あの、どうして・・・。」

「ん？・・・僕が昂君の味方をしない訳が無いだろう。

それに約束だったからね・・・何かあれば力になるつて。」

そう言われて安心したのか涙が出て来た。

エリカさんも隣でホッと息を吐いているのを感じた。

「ほらほら、泣くな。」

馨お姉ちゃんが身を乗り出して、ハンカチで僕の目元を拭つてくれる。

彼女に行動に・・・以前もこんな事があつたなあ・・・と懐かしくなつた。

「ありがとう、馨お姉ちゃん。」

「どういたしまして・・・と言いたい所だけど、安心するのはまだ早いですよ。」

僕1人だけだと大して力になれないからね・・・お爺様に昂君の事を話して沙耶宮家を味方に引き入れる。」

安心したのもつかの間、馨お姉ちゃんの提案にエリカさんの視線が鋭くなる。

「そんな事が出来るの？」

「確証はないけど・・・恐らく大丈夫だよ。」

先生・昴君のお爺さんと僕のお爺様は古くからの友人・・・いや、親友同士だったらしい。

お爺様は昴君の事を気に入っていたから、きっと協力してくれる筈だ。」

「そうなるとしても心強いわね。」

「任せて置いてくれ。」

自信を持つて言う馨お姉ちゃんがとても頼もしく見えた。

そんな馨お姉ちゃんはふと視線を外に向けると穏やかな表情を浮かべた。

「さて外も暗くなってきたし、今日はこの辺りで終わりにしよう。」

そう言われて僕は初めて外が暗くなっている事に気付いた。

馨お姉ちゃんが味方になってくれた事に浮かれる僕と、そんな僕を面白くなさそうに見るエリカさん。

そんな僕達が外に出る準備をしている時、馨お姉ちゃんが思い出した様に声を掛けて来た。

「あつと・・・最後に1ついいかい？」

「どうかしたの、馨お姉ちゃん？」

「昴君とエリカさんの婚約について何だけど・・・やっぱり昴君が神殺しになったからなのかな？」

突然の疑問に首を傾げる僕を余所に、エリカさんが答える。

「それに付いては関係ないわ・・・私達が子供の頃に親同士が決めた事みたいだから。」

まあ、今は私達の意味で婚約しているのだけけどね。」

自慢する様に答えたエリカさんに、真剣な眼差しで馨お姉ちゃんが問う。

「それは、彼を愛しているという事でいいのかな？」

「勿論・・・私は彼の愛しているわ。」

それを聞くと馨お姉ちゃんは一瞬眉を寄せたが、次の瞬間には僕に

近寄ってきて……。

「あ、あの、か、馨お姉ちゃ……んっ……。」

僕は馨お姉ちゃんに唇を奪われた。

馨お姉ちゃんの柔らかい唇の感触……さらに零距离という事で女性特有に甘い香りが鼻腔を擦る。

「んっ……ちゅ……ふはっ。」

……途中から舌も入ってきて、僕の思考は止まってしまった。

唇が離れた後も動かない僕をエリカさんが奪い返す。

「ち、ちよつと馨さん、私の昴にいったい何をしてるのよ!!」

「いや……僕も婚約者としての挨拶をと思っただ。」

「こ、婚約者ですって!!」

エリカさんの怒声に悪びれる事無く馨お姉ちゃんは言葉を返す。

そして僕はその言葉に我に返り、エリカさんも驚きの声を上げた。

「ああ、そうだよ……僕と昴君の婚約は僕達のお爺様同士が決めた事だ。」

今だから言うけど、僕は当時から昴君の事が好きでね。

けど、媛巫女修業の為に道場を止め、昴君と離れ離れになる運命だったんだ。

その時、我儘も言えず1人で泣いていた僕に気を利かしたお爺様が婚約者にしてくれたらしい。

僕自身その事を知ったのは修行を終わらせて正史編纂委員会に入ってからだったけどね。」

……と笑顔で言う馨お姉ちゃん。

そんな話を全く聞いた事が無かった僕はかなり驚いている。

し、知らなかった……お爺ちゃんも何勝手な事してるんだ。

せめてひと言位言っ置いてくれても良かったんじゃないか!!

「家に正式な書状があったから昴君の家にもあると思うよ。」

それとも……僕が婚約者だと嫌だったかな?」

「いや……その……。」

言葉に詰まる僕に馨お姉ちゃんは優しい笑みで話し掛けてくれた。

「突然の事だったからね……嫌なら嫌で構わないんだよ。」

でも、僕は子供の頃から変わらず昴君の事が大好きだよ・・・もちろん、異性としてね。

それじゃ、進展があつたらまた連絡するよ。」

そう言つて馨お姉ちゃんは何から出て行った・・・とんでもない爆弾を投下して。

突然の事で頭を回らない僕は、隣で悪魔の笑みを浮かべているエリカさんに気付かなかつた。

第16話 沙耶宮 馨

S i d e 馨

私には弟の様に可愛がっていた男の子がいる。その子と知り合ったのは私の通っている道場・・・彼は先生のお孫さんだった。

私自身、始めは彼の事を気にしていなかった。

あの頃は暗い男の子が居る・・・としか思っていなかったからだ。彼が道場に通り始めて数日が経った頃・・・。

私は先生と僕をこの道場に入門させた張本人・・・御爺様が話している事を偶然聞いてしまった。

それはいつも1人で道場の隅に居る先生のお孫さんの事だった。

彼が暗い理由・・・それは先日ご両親を亡くされたから・・・。

当時の私は両親が亡くなっている事を想像できなかったが、悲しく辛い事だと言うのは分かった。

動揺した私は先生達に見つかり、1つの頼まれ事をした。

その内容は、彼の面倒を見てやって欲しい・・・という事だった。

それが彼との関係の始まり・・・。

彼の境遇を聞いていた私は一種の正義感に駆られ、二つ返事で頷いた。

その日から稽古をしている時以外は道場の隅っこで蹲っている彼に声を掛ける様になった。

最初は全然反応が無かった。

けれど、稽古の時にも話し掛けたり、休憩時間にずっと傍に居たり、道場の無い日にも遊びに行ったり・・・。

そうした日々を過ごす内に、彼は次第に元気を取り戻して行った。

彼が年頃の子供と変わらない位明るくなった頃、私は彼にお姉ちゃんと呼ばれる様になった。

まあ、最初は私の事を男の子だと思っていたらしいけど・・・着替えを見られた時は正直驚いた。

彼は私が道場に居る時はいつも近くで笑顔を振り撒き、後を付いて来る。

何だか本当の弟の様に思えて来て、より一層彼の事を可愛がる様になった。

1年も経てば武術も魔力のコントロールも凄まじい速さで上達し、あつという間に私を追い抜いて行った。

今では長く道場に通っている大人達よりもキレのある動きをする様になっていた。

やはり先生のお孫さん・・・才能だろう。

姉として悔しい気持ちもあつたが・・・それよりも彼の成長が誇らしかった。

そしていつの間にか彼の繰り出す技の一つ一つに見惚れる様になつていた。

繊細であり、尚且つ力強い。

真剣な表情の中に僅かに見える純粋な楽しむ気持ち。

そんな彼に見惚れ、私は初めて弟と思つていた彼を『男の子』として意識してしまった。

それからの私はこの気持ちを彼に悟られない様にいつも通りに振る舞つた。

笑顔を向けられる度に高鳴る鼓動・・・私はいつまでも彼と一緒に居たかった。

・・・でもそれは無理な話だった。

私は『沙耶宮家』の一人娘であり、『媛巫女』でもある。

沙耶宮家の長女として・・・そして媛巫女として、その職務を全うする為の修業をしなくてはならない。

小さい頃から言われ続けていた事だから・・・いつかは彼と離れ離れになる事は分かつていた。

それでも彼と離れたくない気持ちでいっぱいになり、1人で涙を流

す事もあつた。

そんなある日、部屋で泣いている所をお爺様に見られてしまった事があつた。

殆ど人前で泣く事の無かつた私を見たお爺様は、優しく抱きしめながら泣いている訳を聞いて来た。

お爺様の優しさと暖かさに私は堪え切れず全て話していた。

・・・怒られると思つた。

沙耶宮家としての誇りを持ってと言われて育つて来たから・・・。

しかしお爺さまは優しく笑いながら「彼の事が好きか？」と聞いてきた。

私は思わず「離れたくない」と答えていた。

そしたらお爺様は「わしに任せておけ」と言つて私の頭を優しく撫でてくれた。

これがどういう意味だったのか知つたのは、修業から帰つてきて暫くしてからだつた。

何年か経ち、等々道場を辞め、本格的に媛巫女としての修業に入る事になつた。

私は彼に近い内に道場を辞める事を告げると彼は最初何を言っているのか分からなかつたのだろう。

しかし次第に言葉の意味が理解できて来たのか、涙を流しながら私に詰め寄つて来た。

「何で？」「どうして？」と騒ぎ始めた彼。

それに気付いた大人達が彼を落ち着かせようとしたが・・・彼が止まる事は無かつた。

私も必死に説得しようとしたが、痲癩を起こして暴れ始めた彼に私の声は届かなかつた。

最後は騒ぎを聞きつけた先生が彼の意識を奪つて事無きを得た。

・・・それから彼が道場に顔を出す事は無かった。
先生から以前の様に塞ぎ込んでしまっている・・・と言われた。

私が道場に来る最終日。

お爺様と共に最後の挨拶に来ていたが・・・そこに彼の姿は無かった。

・・・最後に少しでも彼の姿が見たかったな。

そう思いながら先生達の話の傍で聞いていた時だった。

「馨お姉ちゃん!!」と毎日の様に聞いていた声に思わずそちらに顔を向けた。

そこには目を赤く腫らし、涙が零れそうになりながらも、必死に笑顔を作っている大好きな少年の姿があった。

彼は私の前に立つと今まで見た事の無い程真剣な表情で僕に宣言した。

「馨お姉ちゃん・・・僕、強くなるよ。」

馨お姉ちゃんを心配させない位・・・馨お姉ちゃんを守る位・・・強く。」

少年の真剣な表情に・・・真っ直ぐな瞳に・・・想いの籠った強い覚悟に・・・。

私は胸の高鳴りを押さえる事が出来なかった。

「そうか・・・ならその時は頼りにさせてもらおうかな。」

私は今にも抱き締めて自分の思いを零してしまいそうになるのを必死に飲み込む。

そして精一杯の笑顔と共に彼と別れた。

私が道場に来る事はもう無いだろう。

『媛巫女』としての修業が終われば、次は『沙耶宮家』として学ばなければならぬ事が沢山ある。

ここを通っている暇はない。

彼は私の事を覚えていてくれるだろうか・・・私は彼の事をずっと忘れないだろうな。

彼との別れから数年……私は正式な媛巫女となり正史編纂委員会・東京分室・室長という肩書を得た。

その忙しい日々の中でも彼の事を忘れる事はなかった。

まあ、女子高に通っていた事もあって、男との出会いが無かった事もあるが……。

代わりに女の子からデートの誘いを受ける事が増えた。

自分で言うのも何だが、僕は中性的な容姿をしているからな……。彼女達を喜ばせる為、男の様に対応していたら癖になってしまった。

僕が高校3年になった頃。

仕事に余裕が出来たので久し振りに彼に会いに行こうとした時があった。

……しかしそんな時に限って厄介事が舞い込んできた……。それも特大の。

この日本に初めての『神殺し』が生まれたのだ。

その人物は至って普通の一般家系の出……。名前を『草薙護堂』という高校生になったばかりの少年。

彼自身はとても好印象を与える人柄だが、その戦闘による被害は相当な物だった。

彼の出現によりその対応に追われ瞬く間に忙しくなり、僕は彼に振り回される事になった。

大学進学も決まり『最後の王』との戦いもひと段落ついた頃、先生が亡くなったという話を聞いた。

葬式も全て終わって後に御爺様から話を聞いた為、彼に何もしてあげる事が出来なかった。

本当であればすぐにでも駆け付けて支えてあげたい。

しかし……。僕が彼を最後に会ったもう何年も前の事だ。

彼も僕の事を忘れているかと思うと……会いに行く事が出来なかった。

せめてもと思い、何かあれば力になると言う手紙だけは出して置いた。

大学入学も近付いて来た3月の終わり。

イタリアでまつろわぬ神が顕現され、その神を地元の結社が『封印した』と言う報告が入った。

……何やら胡散臭い話だった。

案の定、後日の調査で封印式は見せ掛け、其処には何も封印された形跡がなかった事が分かった。

そしてその封印を行ったとされる結社の名は、あの有名な『赤銅黒十字』。

その騎士エリカ・ブランデツリが日本の王である草薙護堂の学校に留学して来たと言う報告が上がって来た。

何やらきな臭い事になってきた。

何か面倒事が起こりそうな予感がする。

そんな僕の予感は見事に的中した。

エリカ・ブランデツリ来日から数日後……護堂さんが祐理達を連れて僕の下にやって来た。

用件はエリカ・ブランデツリの調査。

「彼女の事ならリアナさんの方が詳しいんじゃないのかな？」

「勿論私の方でも調査はしている。」

私が聞きたいのは彼奴の婚約者だと言う……『神藤 昴』に付いてだ。」

彼女の言葉に僕の思考は思わず止まってしまった。

……ここ、婚約者だって……彼女と彼が？……いったいどういう事だ!?

思った様に考えが纏まらない僕に気付く事無く、リアナさんの話は続いて行く。

「彼奴の動きは素人の物では無かった。」

沙耶宮 馨には彼の事に付いて調べて欲しいと頼みに来たのだ。」

反応の無い僕に不審に思ったのか、護堂さん達に大声を掛けられた事により、我に返る。

話を聞いていなかった事を詫びてもう一度同じ事を話して貰い、一旦頭の中で整理してから口を開く。

・・・彼等に余計な情報を与えない様に気を付けながら・・・

「彼の事なら、良く知ってるよ。」

「本当か!!」

「彼の家は古武術の道場をしていてね。」

僕は姫巫女の修行に入る前にそこに通っていた事があるんだ。」

「・・・じゃあ、リリアナの予想通り武術家だったって事か。」

「エリカとの・・・赤銅黒十字との繋がりがあつたか分かるか?」

「いや、そこまでは・・・。」

でも、先生の交友関係は広がったから・・・もしあつたとしても不思議はないよ。」

その日は彼の事がある程度知る事が出来たと、満足して彼等は帰って行った。

数日の間、彼は護堂さん達から警戒されるとは思うけど・・・今は仕方がない。

僕も独自で彼と・・・そして彼とエリカ・ブランデツリとの関係を洗わなければ・・・。

わかった事は彼女の留学して来た理由が婚約した彼の傍に居たかったから・・・。

その彼女だが、日本では彼の家に一緒に住んでいるらしい・・・何と羨ましい事だ。

そして日本の呪術界について日夜調べて回っているみたいだ。

折角日本に来たのだから、情報収集に余念がないのだろう。

最後にもう一つ・・・イタリアにまつろわぬ神が顕現していた時、彼

がイタリアに旅行していた事が分かった。

この時から僕は予感がしていたんだと思う……彼が……。

5月に差し掛かろうとしていた頃、僕の所に一本の連絡が入った……彼からだった。

その時は所要で僕自身が出られなかったが、何でも相談したい事があるらしい。

折角彼に会える機会が巡って来たのだ……何とかスケジュールを調整し、彼と会う時間を作る事に成功した。

そして今日……既に指定されたカフェは見えている。

無意識に速度が速まるが、僕自身気付く事は無い。

店の前に辿り着き息を整え、意を決して店内に入る。

中に入り周囲を見渡すとそこには、嬉しさを顔に滲ませた夢にまで見た大好きな少年の姿があった。

僕もゆつくりとした足取りで彼の下に向かう。

「馨……お姉ちゃん……だよね？」

「僕の事をまだ『お姉ちゃん』と呼んでくれるのか……久し振りだね、昂君。」

僕は漸く愛しの彼……『神藤 昂』との再会を果たした。

其処で聞いた話には僕は驚愕すると共に、予想していた分余裕もあった。

……それにしても神殺しとは。

あれから努力を惜しまず才能を磨き続ければ……神殺しに至る……か。

話によれば、彼女を守る為に神に挑んだと聞いた。

あの頃と変わらず、優しく、真っ直ぐに育った事が僕は嬉しかった。

彼のご両親の話など初めて聞く話に驚いたりしたが、彼等の頼みと
いうのもある程度予想できた。

恐らく昴君の頼みというのは、日本で活動する基盤作りを手伝って
くれ・・・と言った所か。

予想通りの頼み事に思わず苦笑いを零す。

・・・僕の立場と護堂さん達との繋がりを知っても尚、僕に頼むの
か。

まあ、僕の心はあの時から既に決まっているけどね。

僕は目の前で頭を下げている2人を席に座らせる。

一応確認に神殺しとなった昴君の力を見せて貰うと、改めて口を開
いた。

「昴君が神殺しか・・・1年前ならすぐに協力体制を作る事が出来た
だろうけど・・・今はね。」

「やはり難しいかしら？」

「難しいね・・・僕達はすでに何度も護堂さんには助けて貰っている。

正史編纂委員会としてもここで鞍替え何て怖くてとてもじゃ無い
けど出来ないね。」

「・・・やっぱり無理だよな。」

落ち込んでしまう彼を慰めたいとは思いますが現状はちゃんと伝えて
置かなくてはいけない。

心を鬼にして話し続ける。

「委員会を動かして君の方に就くのははつきり言って無理だ。

既に委員会の中には護堂さんを王と崇めている者も多く居る。

特に清秋院家は娘が1人護堂さんの側近として付いている事も
あって、今更昴君に靡くとは考えられない。」

・・・そんなに悲しそうな顔をしないでくれ。

もう断られると思ひ込んでいる彼の目をしっかりと見て口を開い
た。

以前から変わらない僕の想いが伝わる様に・・・。

「僕個人としてなら今すぐにでも委員会を止めて昴君の力になろう。」
昴君には今日一番の動揺が見て取れる。

僕の言葉が信じられないみたいだね。

「あ、あの、どうして……。」

「ん？……僕が昴君の味方をしない訳が無いだろう。

それに約束だったからね……何かあれば力になるって。」

しつかり伝えてあげると、安心したのか彼の目から涙が零れて来た。

隣で同じ様に安心していているエリカ嬢を横目に彼の目元を拭ってあげた。

「ほらほら、泣くな。」

昴君は恥ずかしそうだったが、何処か嬉しそうでもあった。

しかしそんな僕の行動に鋭い視線を向けて来たのがエリカ嬢だ。

僕は彼女の視線を受け流しながら昴君から体を離れた……彼女に視線を向ける事を忘れずに。

「ありがとう、馨お姉ちゃん。」

「どういたしました……と言いたい所だけど、安心するのはまだ早いよ。」

僕1人だけだと大して力になれないからね……お爺様に昴君の事を話して沙耶宮家を味方に引き入れる。」

僕の言葉に視線の鋭いままのエリカ嬢が口を開く。

話の内容と僕への警戒から先程よりも視線は鋭い。

「そんな事が出来るの?」

「確証はないけど……恐らく大丈夫だよ。」

先生：昴君のお爺さんと僕のお爺様は古くからの友人……いや、親友同士だったらしい。

お爺様は昴君の事を気に入っていたから、きっと協力してくれる筈だ。」

「そうなるととても心強いわね。」

「任せて置いてくれ。」

僕は彼女と視線をぶつけ合う。

僕としてもここで退く訳にはいかないからね。

帰り間際・・・僕は最後の勝負に打って出た。

「あつと・・・最後に1ついいかい？」

「どうかしたの、馨お姉ちゃん？」

「昴君とエリカさんの婚約について何だけど・・・やっぱり昴君が神殺しになったからなのかな？」

昴君は質問の意図が分からず首を傾げているが、エリカ嬢は自慢するかのようにならなくてくれた。

「それに付いては関係ないわ・・・私達が子供の頃に親同士が決めていた事みたいだから。」

まあ、今は私達の意味で婚約しているのだけけどね。」

「それは、彼を愛しているという事でいいのかな？」

「勿論・・・私は彼の愛しているわ。」

・・・そう言う事だったのか。

でも、彼に対する気持ちで負ける訳にはいかないよね。

彼女の言葉に一瞬イラツとしたが、次の瞬間には僕は覚悟を決め昴君に顔を寄せていた。

「あ、あの、か、馨お姉ちゃ・・・んっ・・・。」

僕は昴君の唇にキスしていた。

衝動的な行動ではあったが、長年待ち続けた彼の温もりに心が満たされる。

昴君の柔らかい唇の感触・・・我慢出来ず舌まで使って彼を感じていた。

「んっ・・・ちゅ・・・ぶはっ。」

唇が離れた後すぐにエリカ嬢に昴君を奪われたが、気にする必要はない。

既に宣戦布告は済ませた。

「ち、ちよつと馨さん、私の昴にいったい何をしてるのよ!!」

「いや・・・僕も婚約者としての挨拶をと思ってね。」

「こ、婚約者ですって!!」

エリカ嬢の怒声に悪びれる事無く僕は言葉を返す。

「ああ、そうだよ・・・僕と昴君の婚約は僕達のお爺様同士が決めた事

だ。

今だから言うけど、僕は当時から昴君の事が好きでね。けど、媛巫女修業の為に道場を止め、昴君と離れ離れになる運命だったんだ。

その時、我儘も言えず一人で泣いていた僕に気を利かしたお爺様が婚約者にしてくれたらしい。

僕自身その事を知ったのは修行を終わらせて正史編纂委員会に入ってからだったけどね。」

今までお爺様しか知らなかった僕の心の内を曝け出す。

純粹に僕の事を姉として慕っていた昴君は随分驚いている。

あの様子だと先生から婚約の話は聞いてなかったみたいだね。

「家に正式な書状があつたから昴君の家にもあると思うよ。

それとも・・・僕が婚約者だと嫌だったかな？」

「いや・・・その・・・。」

突然の事で動揺を隠せない昴君は言葉に詰まってしまった。

そんな彼に僕は優しく微笑んで見せた。

「突然の事だったからね・・・嫌なら嫌で構わないんだよ。

でも、僕は子供の頃から変わらず昴君の事が大好きだよ・・・もちろん、異性としてね。」

それじゃ、進展があつたらまた連絡するよ。」

そう言つて僕は店から出た・・・最後にエリカ嬢に視線を送る事を忘れずに。

絶対に昴君は諦めない・・・そう言う思いを込めて。

エリカ嬢も同様の力強い視線を僕に向けていた。

僕は店から離れた所で漸く足を止め息を吐く。

今になつて顔が熱くなってきた。

・・・昴君、カッコよくなつてたな。

強引だったけどファーストキスも上げる事が出来た。

エリカさんというライバルは居るけど、昴君に僕を異性として見て貰える様には出来た。

彼との関係もこれからの頑張り次第だな。

・・・とここで思考を切り替える。

これから忙しくなるな。

まずはお爺様に今日の話をし、その後お父様の説得。

恐らく彼と関係を持つ以上、正史編纂委員会に身を置く事は出来な
い。

引き継ぎの準備も進めておかなくてはいけないな。

僕は気合を入れ直して、その場を後にした。

・・・昴君とのキスの感触を思い出して、頭の中で悶えながら・・・。

第17話 VS エリカ・ブランデツリ

S i d e 昴

あれから数日が経ち僕は今、東京都内のとある屋敷の一室にいた。畳20畳は有ろう大きな部屋にエリカさんと二人で正座して、ある人達を待っている。

暫くすると奥の襖が開き荘厳な老人と強面の40後半であろう男性、その後ろに馨お姉ちゃんが入って来た。

入って来た3人は並んで僕達の前に座り、頭を垂れた。

「この旅は私共の呼び出しに応じて下さり誠にありがとうございます。」

呼び出して置きながら王で在らせられる神藤様を待たせてしまい、ご容赦頂きたく……。」

「あ、あの、そんなに畏まらないで下さい。」

僕はとても丁寧な言い回しに恐縮してしまつて思わず止めてしまった。

そしたら皆さん漸く頭を上げてくれた。

「そうは言われましても……王になられた方に対して気軽に声を掛ける等……。」

「勘弁して下さい、源蔵様。」

お互い知らない間柄では無いのですから……。」

ここは沙耶宮家の屋敷の1つだ。

休日に突然馨お姉ちゃんがやって来て此処に連れて来たのだ。

そして僕達の前に座っている人は……。

そこにいるだけで存在感が凄まじい老人が沙耶宮家前頭首『沙耶宮源蔵』様。

その隣に座っている源蔵様に劣らない存在感を放っているのが沙耶宮家現頭首『沙耶宮 千尋』様。

そしてその後ろに控える様にして馨お姉ちゃんが座っている。

源蔵様が馨お姉ちゃんのお爺様で、千尋様がお父様だ。

「例え見知った間柄でもこういう事は必要なのじゃよ。」
そう言った源蔵様の表情は先程と違い好々爺といった感じになっている。

これが僕をよく知っている源蔵様・・・源蔵お爺ちゃんだ。

源蔵お爺ちゃんとは何度も遊んで貰った事がある。

馨お姉ちゃんが道場に来た切掛けが源蔵お爺ちゃんと僕のお爺ちゃんが友人同士だったからだ。

偶に送り迎えに源蔵お爺ちゃんが来ていた事もあり、自分の孫の様に僕の事も可愛がってくれた。

勿論お爺ちゃんの葬式にも参列してくれた。

「お初に御目に掛かります、神藤 昴様。」

私が沙耶宮家当主であります沙耶宮 千尋と申します。

以後お見知りおきを・・・。」

そう言ったのは源蔵お爺ちゃんの態度を無視する様に挨拶をくれた千尋様だった。

千尋様とは会った事は無い・・・ここに来るまでに馨お姉ちゃんに少し話を聞いた位だ。

「初めまして、神道流当主の神藤 昴と言います。」

「エリカ・ブランデッリです。」

エリカさんは名前だけの簡単な挨拶をする。

・・・恐らく僕の事を立ててくれているんだろう。

「さて、昴君・・・馨から話は聞いたよ、何やら大変な事になっているみたいじゃな。」

「はい、色々ありました・・・。」

「その事に関してじゃが、わし等の方でも確認を取った。」

馨から聞いた話とも辻褄も合うし・・・本当の情報だと思っておる。
儂としては奴の孫でもあり、儂自身孫同然に可愛がっていた昴君の頼みだ。

協力したいと思っておる・・・のだが・・・。」

そう言っって源蔵お爺ちゃんは隣に座る千尋様を見た。

「確かにあの時に新たな神殺しが誕生した事は限りなく本当の事でしょう。」

しかしそれが神藤様だと断定できる証拠がありません。」

「お父様!!それについては僕が霊視したと・・・。」

「お前も霊視の成功確率が低い事位わかっているだろう・・・失礼致しました。」

そして仮に神藤様が神殺しだったとしても私共と致しましては、神藤様に付くメリットが御座いません。」

確かにそうなのだ・・・この国には既に草薙 護堂先輩が居るのだ。今迄の恩義があり、実績のある方に就くのは当たり前だ。

今更新しい王など必要ない。

「そう言う訳ですので・・・。」

「私から少し発言の許可を頂いても宜しいでしょうか。」

このまま断られると思った時にエリカさんが口を開いた。

「エリカ・ブランデッリ様ですか・・・何でしょうか。」

「我が王に付くメリットが無いと仰りましたが、少なからずメリットは発生致します。」

「どういう事でしょうか？」

既に草薙王が存在する時点でメリット等は無いと判断しておりますが・・・。」

源蔵様も興味があるらしく真剣な表情でエリカさんを見つめている。

この重圧が掛かる場面で一切怯む事無くエリカさんは口を開く。

「二つ目は草薙王が何処の結社にも所属していないという点。」

更に彼の王は自らの気分次第で誰にでも味方をする御方。

彼の振る舞いに振り回された事も少なくないのではありませんか？」

「・・・。」

事実なのか誰も言葉が発さない。

「彼の近くに控えている媛巫女『万里谷 祐理』も草薙王に付いていくと明言。

確かな情報筋から、いずれは自らの結社を持つ事を考えておられると聞いています。

あなた方正史編纂委員会から離れていく可能性も捨てきれない……。」

エリカさんの言葉に千尋様の表情が少し崩れた。

「そうなって来ると正史編纂委員会としてどう動く事になるのか。

勿論古老と呼ばれている方々も黙って静観する事はないでしょう。」

「……確かにそうじゃな。」

「それで……神藤様に付くメリットというのは……。」

エリカさんは少し笑みを浮かべながら話し続ける。

「推測に過ぎない話でしたが、可能性としては低くないと思っております。」

そこで、我が王です……何も傘下に降る必要はありません。

四家の内、既に清秋院家が草薙王に付いていると聞いています。

あなた方も遅れは取りたくない筈です。

今の内に協力者として信頼関係を築いておけば、もし草薙王が離れて行った場合にも沙耶宮家は我が王のご寵愛を受ける事が出来る。」

「だが……神藤様が本当に神殺しか……。」

「その点もご心配に及びませんわ。」

私が騎士の誇りに懸けて我が王が神殺しである事を証明致します。」

彼女の言葉に僕も思わず顔を向けた。

其処には相応の覚悟を持ったエリカさんの姿があった。

「……どうする御積りですか？」

「私がお相手を務めます……それを見て判断して頂きたく存じます。」

エリカさんの顔は真剣であった。

彼女の覚悟の前に僕達は何も言う事が出来なかった。

「……わかりました。」

それでは場所を移しましょう。」
そう言つて千尋様は立ち上がり、僕達も彼等の後に続いた。

場所を移して屋敷内にある大きな庭にやつて来た・・・とても見事な日本庭園だ。

千尋様達に付いて広い庭園の中を歩いている時、隣にいたエリカさんが謝つてきた。

「昴・・・ごめんなさいね。」

「何の事ですか？」

「こんな方法しか思いつかなかった。」

他にもっといい方法があったかもしれないのに・・・。」

「気にしないで下さい。」

こうやつてチャンスが生まれたのはエリカさんのお蔭です・・・ありがとうございます。」

エリカさんが居なかつたら最初の時点でこの話は終わっていただろう。

だからこそエリカさんには感謝の気持ちしかない。

「そう・・・でもね、昴・・・これはかなり分の悪い賭けなのよ。」

「どうしてですか？」

「神殺しって言うのはね、神や同じ神殺し・神獣なんかじゃないと真の力を発揮できないと言われているの。」

それに神殺しになってまだ間もない昴は、まだ自分の権能も把握していない。

私の力で貴方の力を引き出せるかと言われたら・・・かなり厳しいでしょうね。」

「そうだったんですか・・・でも僕はあまり心配していませんよ。」

何とかなる気がするんです・・・勘ですけどね。」

そう言つて僕は「それに・・・」と続けてエリカさんに笑い掛ける。

「僕はエリカさんの事・・・信じてますから。」

僕の言葉に一瞬目を見開いたエリカさんだったが、次の瞬間花が開く様な笑顔を見せてくれた。

「そう・・・ありがとう。」

私も今回の事は本気で行かないとね・・・貴方が命の危機を感じるくらいじゃないと意味が無いから。」

「わかっています、遠慮なくお願いしますね。」

話している内に前を歩いていた千尋様が立ち止り此方に振り返った。

「この辺りでしたら大丈夫でしょう。」

そこは庭園から少し離れた所にある運動場の様な所だった。

この屋敷はどれだけ広いんだ・・・流石由緒ある一族。

「それじゃあ・・・昂。」

「はい。」

僕達は少し距離を離して向かい合う。

2人の間に訪れる静寂・・・先に動いたのはエリカさんだった。

「鋼の獅子と、その祖たる獅子心王よ、騎士エリカ・ブランデツリの誓いを聞け。」

我猛き角笛の継承者、黒き武人の裔たれば、我が心折れぬ限り、わが剣も決して折れず。

獅子心王よ、闘争の脊髄を今こそわが手に踵し給え!!

クオレ・デイ・レオーネ!!」

エリカさんが紡いだ言葉と共に刀身の薄い長剣がエリカさんの手に現れる。

エリカさんは剣を握り締めると素早い動きで間合いを詰めて来た。

素早く正確な突きが僕の心臓目掛けて放たれる。

急な先制攻撃に驚いたが、僕は落ち着いてそれを横に体をずらす事で避ける。

エリカさんは続けて僕の首目掛けて切り払いを仕掛けてくる。

そうした彼女の連続攻撃を躲している中で、体の調子が上がって来たのを感じる。

・・・稽古の中でも感じていた感覚。

相手の動きが良く見える・・・体に滾る氣が零れ出しそうになる。

それは稽古の時以上の高まりだった。

その微妙な違いに対応しながらエリカさんの攻撃を躲し続ける。

「・・・昂、反撃しないのかしら？」

「すいません、体の変化に戸惑ってしまって・・・。」

そう言っただ元目掛けて放たれた斬撃を『氣』で強化した蹴りで弾き、一度距離を取る。

そんな僕を見てエリカさんは一度息を吐いた。

「ふう・・・この程度では全然ダメみたいね。」

「そんな事は無いと思いますよ。」

『氣』で強化したのに弾いた足が切られています。」

僕は薄っすらと切られた足を確認する様に視線を向ける。

エリカさんも僕の足を見ると呆れた様に息を零した。

「普通なら切断してる筈・・・何だけどね。」

なら・・・少し戦い方を変えてみましょうか。」

エリカさんはそう呟くと彼女から氣が溢れ出した。

「鋼の獅子に使命を授ける。」

引き裂け、穿て、噛み砕け！

打倒せよ、殲滅せよ、勝利せよ！

我は汝にこの戦場を委ねる。」

エリカさんは刀身を愛おしげに撫で、軽く口付けると、劍を上に向けて投げた。

すると劍が膨れ上がり、徐々にその形は獅子を模した物へと変わっていく。

大きさも普通の獣とは桁違いに大きく、低いうなり声を上げながらこつちに襲い掛かってきた。

「うそっ!!・・・ぐっ!!」

流星に驚いて反応が遅れてしまった。

避けきれず爪の先が当たり吹っ飛ばされてしまう。

少し掠った程度なのに服が切り裂かれ、体も少し傷付いている。

吹き飛ばされたが、姿勢を整え上手く着地する。
大した怪我じゃない、全然大丈夫だ。

でも・・・流石にあれを倒すのは難しそうだな。

何て考えながら次々と襲ってくる目の前の獅子を観察する。

動き本物の獅子・・・体中が剣の様に鋭く、普通なら少し当たっただけで切り裂かれるだろう。

そんな更なる強敵にさらにテンションが上がってくる。

・・・僕こんなに関心するのが好きだったかな？

ふと疑問に思ったが今考え事では無いと、思考を振り払う。

大きな爪による攻撃を見切り、紙一重で躲して獅子の懐に入り込む。

『神道流攻式壱ノ型・波』。

拳を打ち込み内部まで攻撃を浸透させながら浮き上がらせる。

この体になって初めて攻撃らしい攻撃をした。

本当であればさっきの一撃で破壊してしまう積りだったが、少し加減しすぎたみたいだ。

神様にだったら手加減は必要ないんだろけど・・・やっぱり力加減が難しいな。

・・・でも、もう覚えた!!

獅子の体が浮き上がった所を追撃。

エリカさんのいる方向に蹴り飛ばす。

限界を迎えたのか蹴った衝撃で獅子を形作っていた鋼はバラバラに崩れ去った。

「ふう〜。」

「まあ、この程度じゃこんなものよね・・・でも準備は整ったわ。」

そう言ったエリカさんの手に砕かれた獅子の残骸が集まり、また剣を形作った。

そして彼女から先程とは比べ物にならない『氣』が放たれた。

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！主よ、何故我を見捨て給う！」

主よ、真昼に我が呼べど御身は応え給わず。

夜もまた沈黙のみ。

されど御身は聖なる御方、イスラエルにて諸々の賛歌をうたわれし者なり！」

周りの温度が急激に下がった感覚。

あの戦いの中で感じたエリカさんの冷たい『氣』。

対応している今だからわかる・・・とても危険な『氣』がエリカさんから溢れて来ている。

「神をも傷つける事の出来る『絶望の言霊』・・・威力は先程の比じゃないわよ。」

そう言つて駆け出したエリカさん。

瞬く間の間に僕との距離を無くし、剣の切っ先を僕に向ける。

スピードが上がってる!!

先程との誤差に反応が鈍り、何とか躲すが体制を崩される。

体制を整えようとするが、その前に斬り掛かられ攻撃に移れない。

「さあ、あなたの内に秘める力を開放させなさい!!」

その速さにも慣れ、余裕を持って対応できる様になった頃だった。

首を狙ってきたエリカさんの剣を避け様とした時、彼女はその口元に笑みを浮かべていた。

訝しみながらも頭を傾げる事でその攻撃を避ける。

「なっ!!・・・くっ!!」

しかし、突如剣先が曲がり避けた先にある僕の首目掛けて迫ってきた。

咄嗟の反応で後ろに転がり回避しようとしたが、避け切れず首から血が流れ出す。

エリカさんが神との戦いにも用いただけはある。

・・・本当に危なかった。

エリカさんの表情の変化に警戒していなかったら、さっきの一撃で終わっていた。

傷付けられた首元に手をやり、流れ出る血を確認する。

それを見た瞬間、あの時以来感じていなかった死の恐怖が体を掛け廻った。

そして恐怖を跳ね除ける様に、思考の奥底から浮かんできた言葉を

声に出して紡いでいた。

「天上にあつては太陽、中空にあつては稲妻、地にあつては祭火。世界に遍在する火、惑わしの罪を取り除き、善き路によって富を導く者なり。」

聖句を口にすると共に、体から『氣』が迸り、放たれた『氣』が炎へと変化する。

僕に近い位置にいたエリカさんはその強い熱風に吹き飛ばされた。でも今の僕に彼女の事を気にしている余裕はない。

突然膨れ上がり、暴れ回る『氣』を制御するので精一杯だ。

現に今も炎は広がり続けており、黙って見守っていた沙耶宮家の人達も慌てだした。

僕は内に意識を集中させる。

迸っている『氣』を内に留める様に……。

そうして自らの今までとは違う、力の持った『氣』を徐々に掌握していく。

少し時間は掛かるが周囲に放たれた『氣』にも意識を向けその範囲を広げて行く。

すると徐々に周囲に広がった炎は霧消し、消えていく。

そして周囲に僕の放った炎が見られなくなった頃……僕は自分の権能を掌握した。

背に炎の輪を背負った姿……それはまるで神々しい日輪を背負っているかの様な姿だった。

「やったわね、昴。」

権能を掌握出来たみたいだし、その姿とても神々しいわ。」

「そうですか?……自分ではよくわからないんですけど……。」

「とても素敵よ、思わず見惚れてしまう位にね。」

後、ここまで圧倒的な力を見せたのだから十分よ……私達の戦闘も終わり。」

「そ、そうだった!!エリカさん、怪我は有りませんでしたか?!」

「気にする事ないわ、少し火傷を負った程度よ。」

こんな怪我よりもあなたが権能を掌握してくれた事の方が嬉しい

わ。」

あの時吹き飛ばされていたエリカさんを思い出す。

慌てて権能を解除し彼女の体を確認するが、エリカさんの言った通り庇ったであろう腕が少し火傷を負っていた。

そんな僕を見てエリカさんはとても嬉しそうに微笑んでいた。

「早く冷やさない」と慌てる僕の所に、近くで見守っていた沙耶宮家の方達が近寄ってきた。

3人は僕に近寄るとその場に膝を付き、頭を下げた。

「神藤様の御力、篤と拝見させて頂きました。

これまでの御無礼申し訳ありませんでした。」

千尋様達の対応に、どうしていいか分からず周囲を見渡した時に気付いた。

・・・に、庭が大変な事になってる!!

「あ、あの、こちらこそすみません。

綺麗だった庭をこんなにしてしまつて・・・。」

そう、幾ら火を消したと所で被害まで消える訳じゃない。

あの綺麗だった庭園は見るも無残な焼け野原になっていた。

「この位どうという事はありません。

・・・それよりも神藤様、一つお聞きしたい事があります。」

「な、何ででしょうか?」

千尋様の真剣な眼差しに僕も背筋を伸ばす。

真つ直ぐ見据えた視線で僕を射抜き千尋様は問い掛けた。

「神藤様はそのお力で何をされ、何を目指す御積りですか?」

「この力は理不尽を覆す事のできる力です。

僕はこの力を自分の為に使いたいとは思わない。

この力は必要としている人の為に・・・圧倒的な理不尽で苦しんでいる人達の為に使いたい。」

僕は目を真つ直ぐ見詰めてそう告げる。

千尋様は目を閉じると・・・何かを噛み締める様に呟いた。

「馨、お前の言う通りだったな。」

「言ったではありませんか、昴君はそういう男だと。」

馨お姉ちゃんに言葉に薄っすらと笑みを浮かべると・・・千尋様は宣言した。

「今この時点を持って我ら沙耶宮家は『神藤 昴』を王と仰ぎ、ここに絶対の忠誠を誓う事をお約束致します。」

「ありがとうございます!!これから宜しくお願いします!!」

僕に力を貸してくれる人が増えた事が嬉しくて、僕は頭を下げている。

頭を上げてくれた千尋様はすぐく穏やかな顔をしていた。

「こちらこそ・・・そして娘を・・・馨を宜しくお願いします。」

「はい・・・えっ!!」

お、思わず返事をしてしまったけど・・・今、何やら凄い事を言われた気が。

そんな僕を気にする事無く、今まで以上に真剣な顔付きで馨お姉ちゃんに顔を向ける千尋様。

「馨、昴様を絶対に離すなよ。」

彼は今迄と全く違った王になる・・・私はそんな気がしてならん。」

「心配には及びません、お父様。」

子供の頃より僕の心は決まっております。」

馨お姉ちゃんはそう言うのと立ち上がり僕に寄り掛かって腕を絡めてきた。

ふわっと薫る優しい香りと、押し付けられる柔らかい感触に動揺を隠せない。

「お疲れ様、昴君。」

さっきの戦闘見惚れてしまう程かっこよかったよ。」

「う・・・あ・・・。」

僕が戸惑っているとそう言っ僕の頬にキスをしてきた。

それを見て黙ってなかったのがエリカさんだ。

「昴、私頑張ったわよね・・・何かご褒美が欲しいわ。」

エリカさんも反対の腕に抱きついて来て、僕の頬にキスをしてきた。

どちらの腕からも柔らかい物が押し付けられ、さらに甘い香りが

漂ってくる。

僕は顔を真っ赤にして盛大に慌てふためいていた。

そんな僕達を源蔵お爺ちゃん達は楽しそうに笑って見守っているのだった。

第18話 厄介事

S i d e 護堂

新学期が始まって既に1ヶ月が過ぎた。

今の所何事もなく日々を過ごしている。

エリカが留学して来て何か起こるかとも思っていた時もあったが、特に接触してくる様子も無い。

リリアナは例の噂・・・イタリアに現れた『まつろわぬ神』の事を気にして色々を探りを入れている。

俺もエリカと例の後輩がこれに深く関わっているとみているのでリリアナの事は静観している。

・・・まあ、今は彼に付いて大して心配していない。

しかしリリアナはそうでは無い様で、今も彼女達の周辺を洗っている。

・・・が、余り状況は芳しくなく、これといった情報を掴んでないらしい。

だからか、エリカから少しでも情報を取ろうと昼と一緒にしてはどうかと提案して来たりもした。

別に断る理由もなかったので承諾し、今では毎日ではないが一緒に食事をする仲になった。

リリアナが気にしている相手の1人・・・エリカの婚約者だと言う

俺の一つ下の少年。

名前を神藤 昴。

線が細く、顔も中性的で女の子だと言われても納得してしまう様な顔付きだ。

彼の事を知らない人は学年を問わず学校中居ない程、神藤 昴は有名になっっている。

理由は勿論エリカと婚約関係だと学校中に知れ渡っているから。

リリアナが言うには彼は何か武術を嗜んでいるらしい。

勿論ドコの奴や姉さんの様な達人級ではないだろうけど、それなり

の腕ではあるらしい。

彼が本当にカンピオーネだったとして、もし戦う事になったとしたら・・・厄介だな。

・・・こんな事を考えてしまう辺り、俺もこの体質に慣れてしまっているのかも知れない。

しかし今思えばその程度で神に勝てるとは思わない。

今迄の情報も単なる偶然で、俺の感じた感覚もやっぱり気の所為だったんじゃないかと今では思っている。

彼とは普通に話せる位には親しくなった。

始めは距離を感じていたが、今となつては神藤も俺の事を先輩として慕ってくれている。

俺も可愛い後輩だと思つて何かと世話を焼く様になった。

・・・神藤と話していると万里谷達が何やら意味深な視線を向けてくる事がある。

どうしたのか聞いても「私達、信頼してますから」としか言ってくれない。

一体何だつていうんだ・・・。

五月も終わりそろそろ梅雨の時期に入ろうかという頃に俺の携帯に着信が入った。

「久しぶりだな、元気にしてたか。」

『うん、恵那は全然元気だよ。』

お浄めも終わったから、そろそろ王様の所に顔を出そうと思つてたんだ。』

「そうだったのか、会えるのを楽しみにしてるよ。」

電話の相手は『清秋院 恵那』。

俺の持つ相棒『天叢雲剣』の使い手であり、媛巫女の1人だ。

彼女は降臨術師という稀有な能力を持っている。

これによって『神がかり』という自分に神の力を宿す事が出来る。

しかし『神がかり』は心身共に負担が激しく、何度も使う事の出来ない大技でもある。

更に街等に出て体内に俗気を溜めると『神がかり』が出来なくなる。その為定期的に靈山に籠り心身共に清める必要があるのだ。

初めは日本で初めての神殺しである俺の近くに異国の者……リリアナがいるのが許せなかった様だ。

どちらも譲れない物があり二人は争っていたが和解……今では背中を預ける事の出来る仲間となっている。

彼女は俺にとっても大切な存在だ。

「用事はそれだけか？」

『そうだった……あのね、久し振りに頼み事を聞いて貰ってもいいかな？』

「厄介事か？」

『大した事じゃないよ……最後の王に比べたら……』

「それ大した事あるよな!!また神様絡みの厄介事じゃないか!!」

『……えへへ。』

可愛らしく笑い声を零す彼女に思わず溜息が零れた。

確かに彼女とは会える時間が少ない為かこうして頻繁に連絡を取り合っている。

しかし、彼女から連絡が来た時は限って何かしらの厄介事を頼まれるのだ。

「はあ、せっかく平和を満喫してたって言うのに……それで、どうしたんだ。」

『うん、1週間位前にエジプトから考古学者がある発掘品を日本に持ち帰って来たんだ。』

「ちゃんと許可も取ってたんだろ、別に問題ないじゃないか。」

『それだけなら何も問題なかったんだけどね……その持ち帰った発掘品が神気を発してたんだよ。』

「それじゃあ、その人は何も知らずにゴルゴネイオンみたいな奴を日本に持ってきてちゃったって事か。」

『そういう事になるね……それに逸早く気付いた清秋院家が回収する事に成功したんだけど……』

「おい……まさか……。」

『数日前にエジプトでまつろわぬ神が現れたんだって……すぐに姿を
眩ましたらしいんだけど。』

それで、間違いなく今回の件と関係があると思うから、一応王様に
持って置いて貰おうと思うんだ。

それにそっちには祐理がいるし、序に鑑定して貰おうと思ってるん
だ。』

「はあ、それで俺はどうしたらいいんだ。」

『恵那も今からそっちに向かうよ、詳しい事は皆で直接話し合った方
がいいと思うからね。』

「わかった、リリアナ達には俺から話しくよ。」

『よろしくね王様……後最後にもう一つ。』

「何だ?」

ふと彼女の声が剣呑な雰囲気変わった。

何かに警戒する様な彼女に俺も自然と真剣に耳を傾ける。

『恵那は山に入ってたから詳しい事はわからないんだけど……最近沙
耶宮家の様子が可笑しいらしいんだ。』

「沙耶宮家って馨さんの所だったよな?」

『うん……何か極秘裏に企んでるみたいってお婆ちゃんが言った。

王様の方からちよつと聞いてみてくれないかな? 王様のいう事な
ら逆らえないと思うし……。』

「……わかった、俺の方でも確認してみるよ。」

『ありがと、王様……それじゃあ、恵那も直ぐにそっちに行くからね
……。』

そう言っただけで電話が切れた。

平和だった日々が終わってしまった。

幾つかの懸念事項はあるが、今は気にする事では無い。

そう思っただけで俺はリリアナ達に連絡を取るべく、そのまま携帯をとっ
た。

僕は今一人の男性と共に身を潜めていた。

「それにしても素晴らしい隠形ですね。」

私も『忍』としてそれなりに自信があつたんですけど……自信を無くしそうです。」

「そんな事ありませんよ……甘粕さん。」

貴方の方が上手く気配を消せているではありませんか……僕なんてまだまだです。」

「いえいえ、立場が違いますよ。」

昴さんはカンピオーネであり、私とは魔力の量も桁違いに多い。

その事や年齢を考えると私等より素晴らしい技術をお持ちだ。」

そう言って褒めちぎってくれるのは正史編纂委員会所属の馨お姉

ちゃんの片腕である『甘粕 冬馬』さんだ。

「僕の片腕だから」と馨お姉ちゃんが強引に僕達の側に引きずり込んだ……少し可哀想な人だ。

初めて会った時僕がカンピオーネだと知るととても驚いていた。

何でも昔僕のお爺ちゃんに教わった事があるらしい……少し懐かしそうに僕を見ていた。

巻き込まれた当初「安定した収入が……」何て言っていたけど、馨

お姉ちゃんとお話しした後は一転。

とてもやる気に満ち溢れていた……馨お姉ちゃん何を言ったんだろう？

そして僕達は今、とある広場を見渡す事の出来るビルの一室でそこに居る人達を監視していた。

話は先日に遡る……。

「それじゃあ、『まつろわぬ神』がその発掘品を追って日本に来るかもしれないって事ですか？」

「今の状況だとそうなるね……時間的にも封印は間に合わないだろうし……。」

「まったく……面倒な事になったわね。」

あの人達だけで片付けてくれればいいのだけれど……。」
「僕達はまだ表だつて動けない。

それに僕はまだ東京分室の室長の身だ……護堂さんへの協力は拒めない。」

僕達が日本で活動出来る様にする為色々な準備をしていた頃、一つの問題が転がり込んで来た。

それは考古学者の人がエジプトで発見された発掘品を研究の為に持ち帰って来た事だ。

それだけなら何も問題はなかったのだが、それが神に纏わる代物だったのだ。

同時期にエジプトに『まつろわぬ神』が現れた事も確認されている。恐らくその発掘品を狙ってくるだろうっていうのがエリカさん達の見解だ。

僕達はこの件についての様に対処するか話し合っていた。

その話し合いの最中にエリカさんの携帯が音を立てる。

エリカさんは電話相手の名前を確認すると少し複雑そうな表情を浮かべた。

「少し外すわね。」

彼女はそう言うのと腰を上げ、部屋を出て行った。

そんな彼女らしからぬ感じに首を傾げる。

「誰だったんでしょう?」

「大体予想はつくよ……。」

馨お姉ちゃんは電話の相手に予想が付いているのか、エリカさんと同じ様な表情だった。

エリカさんが居ない状態で話を進める訳にも行かないので、その間僕達は雑談をして待っている事にした。

「と言っても今回の件についてだったけど……。」

「今回現れる神様ってどんな神様なんでしょう?」

「詳しい事は全然わかってないよ。」

発掘された品は何かの獣の形をしていたみたいだけど……ごめんね、僕の所まで情報が降りて来て無いんだ。」

「馨お姉ちゃんって確か東京で一番偉い人だった筈だよな？」

「その筈・・・何だけどね。」

最近僕達沙耶宮家が何かを企んでいるんじゃないかって・・・主に清秋院家から疑われているんだ。」

「それって・・・僕の事・・・ですよね。」

「そうだね、いったい何処から漏れたのやら。」

馨お姉ちゃんは軽くその事を話していたが、僕の所為で沙耶宮家の人達に迷惑を掛けている。

落ち込み始めた僕に「気にする事は無い」と馨お姉ちゃんは僕の頭に手を置いた。

「昴君に味方をするよと決めた時点でこうなる事は予想出来ていた。」

僕達沙耶宮家はそれをわかった上で君の配下になる事を選んだんだ。」

「でも・・・。」

「ほら、そんな顔をするな。」

これから君は僕達の王になるんだよ？

トップがそんな事じゃ皆が不安になるだろう？」

そう言っ僕達の頭を優しく撫でてくれた。

その状態のまま「それに・・・」と口を開く。

「・・・もうあの地位に対して何の執着も無いんだ。」

今の僕には昴君の隣で、昴君を支えていく事にしか頭に無いよ。」

「馨お姉ちゃん・・・。」

撫でる手を止め僕の顔を覗き込んでくる彼女の顔はとても嬉しそうに笑っていた。

そしてその顔は徐々に近づいて来て・・・。

「んっ、うん・・・私がない間に何しているのかしら？」

後ろから掛けられた声に慌てて馨お姉ちゃんから距離を取る。

ぼ、僕は何を・・・さっきの事を思い出して自然と顔が赤くなってきた。

そんな僕を余所に2人の間では火花が散っていた。

「案外戻ってくるのが早かったね・・・もつとゆっくりしていても良

「かつたんだよ。」

「要件は簡単な物だったから・・・残念だったわね。」

僕の二人の婚約者は怖いです・・・。

「エ、エリカさん、電話は誰からだったんですか？」

声を掛けると二人は睨み合いを止め僕に意識を向ける。

僕の問いに対してエリカさんは少し困った顔をして「少し面倒な事になったわ」と切り出した。

「どうかしたんですか？」

「さっきの電話リリアナからだったんだけど・・・今回の件で協力してくれないかって要請が来たわ。」

「やっぱりそうだったか・・・。」

「ええ、私も予想はしていたけど・・・本当にそんな事を言ってくる何てね。」

「仕方ないよ、君はそれだけの騎士だ。」

何か緊急事態に陥った時に手を貸してくれる人材は多い方がいいからね。」

「光荣ね・・・私からしたらいい迷惑だけど・・・。」

でも、断れなかったわ・・・今の段階で王の命令に逆らう訳にはいかない。」

「今はまだ・・・ね・・・。」

先程とは打って変わってテンポよく会話が進んで行く・・・まるで長年一緒に居る親友同士みたいだ。

僕は二人の話に口を挿む事が出来なかったが、会話の切れた所で不安事項を口にした。

「でも、大丈夫何ですか？」

神様との戦いの最前線に立たされる何て・・・何か危ない事を任せられるんじゃない。」

「前回の戦いに比べたらそこまでの危険ではないと思うわ。」

今回本当の最前線に立つのは草薙王だし、彼のサポートも近衛騎士

であるリリアナ達がするでしょうから。

私は何かあった時の為の彼等全員のサポートよ。」

「そうですか・・・それなら安心しました。」

危険な事には変わらないけど、エリカさんが神に挑む事が無さそうで・・・心の底からほっとした。

後は・・・。

「僕はどうすればいいでしょうか？」

「・・・昂には家で待つて居て貰いたいのだけれど・・・嫌・・・よね？」

「当たり前です!!僕だけ家で待つて何て出来ませんよ!!」

エリカさんが危険な所に行くのに僕だけ安全な所で待つて何て出来る訳が無い。

僕の強い言葉に説得は難しいと判断したのか、馨お姉ちゃんが代案を出してくれた。

「・・・だったら、こうしよう。」

護堂さんに限って無いとは思うけど、もし彼が破れてしまった時の為に昂君には近くに控えていて貰う。

何かしらの緊急事態になったら僕達の計画は狂うけど・・・仕方がない・・・昂君に対処して貰おう。」

「昂が黙って待つていられない様だし、それが妥当ね。」

「わかりました、僕は気付かれない様に近くで待機して置けばいいんですね。」

「昂君には甘粕さんを付けるよ。」

彼は優秀だから、何かあったら的確に対応してくれる。」

そして僕は甘粕さんと一緒に草薙先輩達を監視しているのだ。

先輩達は発掘品を封印する事を既に諦めている。

馨お姉ちゃんの言っていた通り封印する時間が全然足りなかったからだ。

それに万里谷先輩の霊視によって発掘品が神様の重要な力の一部である事が分かっている。

だから、まだ完全に復活していない『まつろわぬ神』を迎え撃つ事

に決めたとエリカさんから報告があった。

その時ふと、何か強大な力が近付いて来るのを感じた。

それと同時に僕の体にも変化が起きる。

・・・この感覚は・・・。

「甘粕さん、来ましたよ。」

僕は視線を遠方に向けながら甘粕さんに声を掛ける。

僕は初めて自分以外の神と神殺しの戦闘を見る事となった。

第19話 監視

S i d e 護堂

結局清秋院の持ってきた発掘品は万里谷の霊視の結果、神に纏わる代物だとわかった。

封印をするにしても、今からでは時間が掛かり過ぎる。

恐らく準備の段階で発掘品を狙う『まつろわぬ神』が現れる可能性が高い。

そこで俺達は封印を諦め、神を迎え撃つ事に決めたのだ。

現在、俺達は『まつろわぬ神』との戦闘に備えて周囲に何も無い場所に移動していた。

本当はこんな命が幾つあっても足りない事したくは無い。

けど、封印する時間もないみたいだから仕方がないと俺は既に割り切った。

この場には俺の大切な仲間達であるリリアナ、万里谷、清秋院の他にエリカが居る。

今回はリリアナ達に加えてエリカにも協力して貰う事になったのだ。

彼女の参加を薦めて来たのはリリアナだ。

そのリリアナ曰く「近くに使える人材があるのですから活用しない手は無いですよ」との事だった。

危険な事に巻き込む事は申し訳ないと思わないでもない。

でもリリアナの強い推薦もあり、頼んでみたら二つ返事で承諾してくれたので甘える事にした。

神の顕現を待つ間、俺達は特に緊張する事も無くリラックスしている。

……今までの経験上常時張り詰めていても良い事は無いと経験で知っているからだ。

エリカは俺達に遠慮してか、少し遠くに控えている。

そんな彼女に清秋院が歩み寄り声を掛けていた。

「・・・貴女がエリカ・ブランデッリさん？」

「貴女は確か・・・清秋院 恵那さんであつていたかしら？」

清秋院はにつこり笑い掛けると不躰にエリカを観察し始めた。

しかし、一通り見渡すと落胆したかの様に溜息を吐く。

「はあ、リリアナさんから貴女の話聞いて少しは期待してたんだけどなあ・・・期待外れだったよ。」

「・・・どういう意味かしら？」

正面切つてそんな事を言われれば気分を害してもおかしくない。

しかしエリカは少々眉を顰めただけだった。

「そのままの意味だよ・・・貴女からはそんなに強さを感じない。」

それだけ言うとエリカに興味を無くしたのか清秋院は俺達の方に戻つて来た。

だがエリカは大して反応を示す事無く、そのまま黙つて目を閉じた。

何とも言えないこの場の空気を変えようと俺はリリアナに声を掛けた。

「・・・エ、エリカつて言う程弱いのか？」

「いえ、そんな事は無かつた筈です。」

私が貴方と出会う前は彼奴との實力に対して差は無かつた筈です。

この一年の経験で差が出ているとしても、清秋院 恵那があそこま
で言う程弱くは無い筈です。」

それを戻つて来た清秋院が聞くと訝しさを表情に浮かべる。

まあ清秋院はその性質上感覚の鋭い所があるから、リリアナの言つ
ている事が信じられないんだろう。

「リリアナさん、それ本当？」

恵那にはあの人になんな實力があるとは思わなかつたんだけど
な・・・。」

「いや、最近彼奴と手合せする機会も無かつたからな。」

この一年で私が思っているよりも實力が離れたのか・・・あるいは
エリカが何かを隠しているのか。」

「ふっくん・・・ねえ、祐理はどう思う？」

清秋院が今まで話に加わってなかった万里谷に声を掛けた。

「私ですか？・・・私は後者ですね。」

エリカさんから内に力を溜めている・・・そんな感じがします。」

「へえ、祐理はそう思うんだ・・・それが本当だったら、楽しみだなあ。」
獲物を見つけたかの様に再び視線をエリカに向ける清秋院。

そんな彼女を万里谷が窘めた。

「駄目ですよ恵那さん。」

これから戦いになると言うのに、不謹慎です。」

「ごめんごめん、冗談だからそんなに怒らないですよ。」

2人らしいやり取りによって和やかな空気が流れる。

しかし、そんな時間は瞬く間に掻き消された。

「・・・っ、護堂さん!!」

「ああ、来たみたいだな・・・。」

万里谷の警告の次の瞬間、体に力が漲って来た。

・・・まつろわぬ神が近くに來ている。

この場に居る全員が警戒を最大限に高める中、それは突如として現れた。

俺達が警戒する姿を嘲笑うかの様に暗闇より現れたのは犬・・・犬種に例えるならジャツカルに近い。

しかしその大きさは普通じゃない、通常の犬よりも遥かに大きい。

見上げる程の大きさがある訳ではないが、人と同じ位の大きさはある。

その犬は・・・いや、『まつろわぬ神』は俺達に・・・正確には俺だけに視線を向ける。

犬らしからぬ知性ある視線に違和感を覚えるが、俺をその眼を逸らす事無く睨み返す。

「我が力の欠片を辿りここまで来たが・・・貴様、神殺しだな。」

よもやこの様な異邦の地で巡り合うとは・・・これもまた運命か・・・。」

「お前が此処に来た目的は……これだろ？」

俺はそう言うのとポケットに入れていた発掘品……獣の形をした置物を取り出す。

『まつろわぬ神』はそれを視線に捕えると牙を剥き出しにした。

「それは我が物……我の力だ、渡して貰おうか!!」

「……これを渡したら大人しく帰ってくれるのか？」

「ふん、何を馬鹿な事を……。」

鼻で笑った奴が続けた言葉に俺の心は決まった。

「我が力が完全な物となれば、主達を蘇らせる事も不可能ではない。

更に折角格好の獲物が目の前に居るのだ……肩慣らしをする事も吝かではない。」

「そうか……だったら尚更これは渡せないな。」

そう力強く言い切り『まつろわぬ神』を睨み付ける。

俺の好戦的な発言にこの場の空気は一気に重圧が掛かったかの様に重たくなった。

唸り声を上げ、牙を剥き出し威嚇しながら『まつろわぬ神』が吠える。

「ならば力尽くで奪うのみだ。

覚悟してもらおうか、神殺し!!」

S i d e 昴

突如として先輩達の前に現れたのは巨大な犬だった。

いきなりの出現に驚いたが、今の僕はそれ所じやなかった。

「神藤君!? どうしました!!」

隣で僕の異変に気付いた甘粕さんも慌てた様子で声を掛けてくれたが僕は返事をする余裕も無い。

僕は今、あの犬を見た辺りから滾り溢れようとする自分の『氣』を抑えるのに必死だった。

……エリカさん達から事前に聞いていた通りだ。

神殺しは神に会うと体が勝手に戦闘態勢に移行する。

今迄も自身が少しでも戦いに向かおうとすると、体のコンディションが最高潮にまで勝手に高まっていた。

しかし今はあの時の比では無い。

唯あの犬の姿を目で捉え、アグニと類似する『氣』を感じ取っただけで体の底から力が湧き上がって来たのだ。

・・・折角隠れているのに今ここで見つかる訳にはいかない。

僕はこの感覚に慣れるまで溢れ出る『氣』にのみ意識を集中させた。

最優先は先輩達・・・特に万里谷先輩に気取られない様に『氣』を体から漏らさない事。

漲る力を強引に抑え付け、少しずつコントロールしていく。

漸く落ち着きを取り戻したこの体に安堵しながらゆっくり目を開ける。

「神藤君、どうしたんですか?」

目を開けた僕に気付いた甘粕さんは心配そうに聞いてきた。

そんな彼を安心させる様に額に出来た汗を拭いながら笑い掛ける。

「ご心配をお掛けしました、もう大丈夫です。

神様を確認してから自分を『氣』を抑えるのに少々苦労しただけですから。」

「そうでしたか・・・確かにカンピオーネの方々は戦闘になると色々とパワーアップする体質ですからね。」

甘粕さんは僕の言葉に納得した様に頷いた。

僕の戦いは武術も然る事ながら『氣』のコントロールが重要になってくる。

その為先程の様に自身の体の制御が聞かない状況になると戦い辛くなってしまう。

これが戦闘中だったと思うと・・・ぞつとする。

「先輩達の方はどうなりましたか?」

僕が目を閉じていた間に彼等の状況がどうなったのか確認する為に視線を外に移した。

・・・そこで繰り広げられる光景に僕は理解が追い付かなかった。

まず神の姿が変わっていた。

最初は巨大な犬の姿をしていた筈だ。

だが先輩達の前に立塞がっているのは人の体に犬の頭・・・物語でよく見る犬の獣人の様な姿をした神だった。

そして最初の頃よりもあの神から感じられる強さが跳ね上がっている様に感じられた。

次に今神と戦闘を繰り返しているのは草薙先輩では無くクラニチャール先輩と清秋院先輩だった。

特に清秋院先輩には目を見張る物がある。

僕はまだ直接お目に掛かった事は無いけど、此処からでも彼女の異質な強い力が窺える。

・・・あれが馨お姉ちゃんの言っていた『神がかり』なのかもしれない。

高い攻撃力を持った清秋院先輩を的確にサポートするクラニチャール先輩。

息の合った動きで神相手に全く引けを取っていない。

そして最後に・・・。

必死に戦っている彼女達の後ろで草薙先輩と万里谷先輩が・・・その・・・すつごく濃厚なキスをしています。

エリカさんはそんな二人を護る様に立っているのが見える。

そんな戦闘中とは思えない光景に啞然としている僕に甘粕さんが教えてくれた。

「御分りになると思いますがあのだの被り物が、『まつろわぬ神』です。

あの容姿から私はエジプトの冥界神『アヌビス』だと予想します。

最初は神の力が完全では無かった為か、草薙さん達が優勢に事を運んでいました。

しかし草薙さんが油断した一瞬の隙を付かれ、彼に神具を奪われた事で形勢が逆転・・・。

ピラミッド等で良く見るあの姿が恐らく本来の姿なのでしょう。

本来の力を取り戻した神により、草薙さん達が押され始めました。

・・・ですが行幸な事に神が本来の姿を取り戻した御蔭で祐理さんが霊視を得る事に成功しました。

その為現在は時間稼ぎの為にリリアナさんと恵那さんが代わりに戦っています。」

大まかに今までであった事を教えてくれた甘粕さん。

しかし僕が一番気になっている事柄に付いて全然説明して貰えていない。

僕は先輩達の行為から何とか目を背け、甘粕さんに尋ねた。

「そ、それで・・・あ、あの行為には、い、いったい何の意味が？」

動揺が大きく言葉に詰まってしまった。

それに今の僕は顔が赤くなっている事だろう。

不思議そうに僕の方に顔を向けた甘粕さんは、僕の顔色を見て思いだしたかの様に付け足した。

「ああ、神藤君は草薙さん達の戦いを見るのは初めてでしたね。

あれは彼の権能の1つ『戦士』の権能を使う為の儀式の様な物です。」

「・・・儀式・・・ですか？」

「彼が『軍神ウルスラグナ』から篡奪した権能の事はご存知ですか？」

「はい・・・資料に書いてあった程度ですが。」

「彼の『戦士の権能』は神の知識を言霊に乗せて相手の神力を切り裂く智慧の剣です。」

そしてその使用条件が相手の神の知識を得る事。」

「その事とあの行為の繋がりが見えませんが・・・。」

「神藤君も知っていると思います、カンピオーネは強い魔術耐性を持っています。」

普通に魔術を掛ければ友好的な物も例外なく全て弾かれる。

まあ、何事にも抜け道は存在します。

その一つとして挙げられるのは、今の彼等の様に経口摂取で直接魔術を体内に送り込む方法です。」

「じゃ、じゃあ、あれは・・・。」

「あれは祐理さんが霊視した内容を『啓示』の魔術によって草薙さんの

頭に直接教えているって所ですね。」

想像すら出来なかった理由に驚きを隠しきれない。

・・・そして、僕は気付いてしまった。

もし僕だったら恥ずかし過ぎて・・・想像しただけで顔が熱くなつてしまいそうな可能性に・・・。

「も、もしかして・・・毎回あれをやっているんですか!?!」

「まあ・・・そうですね。」

甘粕さんの肯定に思わず外に視線を向けてしまった。

其処には今田万里谷先輩と熱い口づけを交わす草薙先輩の姿があった。

・・・あんな恥ずかしい事を戦闘の度に毎回・・・。

い、いや、話を聞いた後だとやり慣れてる感が見える気がする。

「彼、平和に過ぎすからって神様について全く勉強しないんですよ。」

でも私は確信犯だと思っています・・・あつ、今のは内緒ですよ?」

少しおちゃらけた様に甘粕さんは言った。

先輩達の情事に見入ってしまった僕は「はっ」と我に返り慌てて視線を逸らす。

逸らした視線の先でにやにやと笑う甘粕さんと目が合って、更に顔が赤くなってしまうのだった。

僕達が話している間も戦闘は続く。

『アヌビス』はクラニチャール先輩達の巧みな連携により足止めをされてる。

2人掛りとはいえ、神を相手に善戦している彼女達は称賛に値するのだろう。

・・・と考えている時、僕は『アヌビス』に対して違和感を覚えた。確かにクラニチャール先輩達の実力は並外れた物がある。

だが些か神に対して善戦し過ぎている様に感じた。

僕自身が相対している訳では無いから確かではないが、別の事に意識が向いている様に思えた。

そんな事を考えている間に戦況に変化があった。

突如力が解放されたかの様に草薙先輩から力が溢れだした。

そしてその力に呼応する様に先輩の周りに幾つもの金色の玉が出現したのだ。

「・・・あれが。」

「はい、あれが護堂さんの切り札ともいえる権能の1つ・・・『戦士の権能』です。」

クラニチャール先輩達は草薙先輩が金色の玉を携えて前に出て来た事により後ろに下がった。

此処からではよく見えないが先輩はずっと何か言葉を発している様に見える。

そしてそれに反応する様に金色の玉はアヌビスに目掛けて飛んで行く。

あの権能にどういった力があるのか分からなかった僕だったが、アヌビスに当たった事で漸く理解した。

「・・・アヌビスの『氣』が切り裂かれた？」

「流石は昴君ですね。」

『戦士の権能』は神の知識を言霊に込める事で智慧の剣を創りだす物です。

あの光球には神の神力を切り裂く力があります。」

僕の呟きに反応した甘粕さんが補足で説明してくれた。

この事にはアヌビスも気付いたらしい・・・先程よりも警戒を深めた様だ。

其処からは一進一退の攻防が続く。

戦況は先輩達に傾いたかと思っただが、俊敏な動きをするアヌビスを捕えきる事が出来ない。

どちらも決定打を負わせられないまま、少なくとも時間が過ぎた。

そんな緊迫した攻防の中、突如アヌビスは戦闘中にも関わらず意識を先輩から外したのだ。

それが決定的な隙となった。

先輩はその隙を見逃す事無くアヌビスに攻撃を仕掛けるのだった。「これは決まりですかね。」

先輩の一撃が入った事で甘粕さんが安堵の声を漏らした。大量の『氣』を切り裂かれたアヌビスの動きは著しく低下。

それを確認した草薙先輩は東の空を指差しながら叫んでいた。

「あれは『白馬の権能』ですね。」

護堂さんの持つ権能の中でも最大級の威力を持つ物です。

条件として確か大罪人にしか使え無かった筈です。

今回はアヌビスが冥界神という事もあって、恐らく移動中にでも罪を犯していたのでしょう。

実際この戦闘でも死と言う概念を撒き散らしていましたから……。」

……何か違和感がある。

隣で甘粕さんが何か言っているが僕には届いていない。

あの時感じた違和感が再び僕の頭を埋め尽くしたのだ。

一度ならず二度も感じた違和感を僕はもう無視する事は出来なかった。

この時僕は凄まじい集中力を発揮した。

そして気付いた。

全員が白馬による攻撃に視界が覆われた時、アヌビスの後ろに黒い靄の様な物が出現した事に……。

「……………っ!!甘粕さん、緊急事態です!!」

「いきなりどうしたんですか、もう決着はつきましたよ?」

「甘粕さんはアヌビスの後ろ出た物に気付かなかったんですか!?

僕の予想が正しければまだ戦いは終わりません……というより今のままでは先輩達が危険です。」

急いで馨お姉ちゃんに連絡して下さい……僕は今から先輩達の所に行きます。」

「い、いったい何を言っているんですか!?

「詳しく説明している暇はありません!!このままでは先輩達が危ないんです!!」

それだけを言い残すと僕は部屋を飛び出した。

S i d e 甘粕

私は部屋を飛び出して行った神藤君を止める事が出来なかった。突然の事に思考が追いつかないまま、慌てて携帯を取り出し上司へと電話を掛ける。

「馨さんですか？」

緊急事態です、神藤君が飛び出してしまいました。」

『そうか・・・結局そうなってしまったか。』

・・・わかった、甘粕さんはそのまま監視を続けて。』

まるで予想していた様な口振りの上司の指示に了承した後、疑問を投げかけた。

「・・・大幅に計画が狂う事になりますが、どうするおつもりですか？」

『何、少し予定が早まるだけさ。』

今回の話を聞いた時からエリカさんと相談して既に計画を前倒しにして進めてるんだ。

まあ、これから少し忙しくなると思うけど引き続きよろしくね。』

そう言っただけで電話は切れた。

神藤君と幼馴染らしい私の上司は今回の彼の突然の行動を予測していたみたいだ。

落ち着いた上司の対応に私の思考も正常に戻って来た。

言われた通りに監視を続けていると、神藤君が護堂さんの危機を間一髪で救っていた。

それを見て思わず言葉が零れた。

「我等の王は本当に『正義の魔王』を目指すみたいです。」

第20話 参戦

S i d e 護堂

「我が元に来たれ、勝利のために……。」

俺はこの戦いに決着を着けるべく『白馬の権能』を行使した。

戦闘中に日も落ち、既に周囲は闇に染まっている。

だと言うのに東の空が明るくなり、朝日が昇ったかの様に辺りを照らす。

しかしアヌビスはこのピンチの中、何故かその顔に笑みを浮かべていた。

俺は何か言われぬ違和感を持ったがもう遅い。

『白馬』によって呼んだ太陽の欠片がもうそこまで迫っていた。

俺の心配を余所に太陽の欠片は轟音と膨大な熱と共にアヌビスへ降り注ぐ。

その時……俺は見た。

辺りが白の世界へと覆い尽くされる中、煌めく一筋の矢が『白馬』の向きを変えた所を……。

「なっ!!」

強引に外された『白馬』はアヌビスに届く事無く地面に衝突して爆発した。

大きな爆発音に包まれて大量の土煙が舞う。

『白馬』の攻撃が収まった所でリリアナ達が傍に寄ってきた。

「お疲れ様です、草薙護堂……どうかされましたか?」

「気を付けろ!!まだ終わってないぞ!!」

先に言霊の剣で神力を削られていたアヌビス。

勝負あったと気を抜いていた彼女達に対して声を荒げ、注意を促すと瞬時に全員が気を引き締め直した。

土煙が晴れた先に居たのは『白馬』の影響を一切受けていないアヌビス。

そしてその後ろには、今までこの場に見受けられなかった狼の頭をした新たな神の姿があった。

い。

隣にいるリリアナ達に目を向けるが彼女達も首を振る。そんな時、後ろから声を掛けられた。

「ウプウアウト・・・その名の意味は『道を切り開く者』。」

確か死者の魂を冥界へと導く為に道を切り開く者・・・だったかしら？

エジプトの神でアヌビスの息子とも言われている神よ。」

「エリカ・・・お前エジプトの神話も詳しくあったんだな。」

「詳しく何てないわよ。」

今回の事でちよつと調べただけで、この程度の事しか知らないもの。」

エリカが後ろから奴に関する情報を教えてくれた。

俺達が急遽頼んだ事とはいえ、エジプト神話に付いてまで調べてくれた何て・・・。

・・・本当に凄い奴だ。

それにしても・・・これからどうする。

この状況で戦うのは厳しすぎる。

俺の権能は一日一回しか使えない。

しかも先のアヌビスとの戦闘でその殆どを使ってしまったている。

・・・今残っている権能でこいつを倒す事が出来るかどうか。

「私は我が父『アヌビス』様に召喚された身だ。

義理立ての為、私と戦って貰おうか。」

あちらは既に戦うつもりでいるらしい・・・不味いな。

今にも襲い掛かるとして居るウプウアウトに警戒していると、隣からリリアナが声を掛けて来た。

「草薙護堂、ここは退きましよう。」

「ああ、わかってる・・・でも・・・彼奴がそう簡単に逃がしてくれとは思えない。」

「・・・私達が殿を務めます、その間に貴方は退いて下さい。」

そう言っつてリリアナと清秋院の2人が目を合わせ前に出ようとする。

だがそれを俺が急いで止めた。

「駄目だ・・・お前達も、もう殆ど魔力が残ってないだろ。」

「しかし・・・!!」

俺が止めるとリリアナ達から抗議の声が上がったが、それを遮る様に彼女が前に出た。

「そうよ、貴方達は下がりなさい・・・殿は私が務めるわ。」

「お前もか」と呼び止めようとしたが、彼女から溢れだす魔力量に思わず声が出なかった。

エリカは赤と黒のケープをその身に纏い、その手には刀身の薄い長剣が握られている。

「エ、エリカ・・・お前、その魔力は・・・。」

「今はそんな事を説明している余裕はないでしょう。」

殿と言っても今の私ではそう長い時間を稼ぐ事は出来ない。

だから、早く行きなさい!!」

エリカは魔術で剣を盾と槍に変形させると、強く地面を蹴ってウアアウト目掛けて駆け出した。

「エリカツ!!・・・くそっ!!」

俺は駆けだした彼女を呼び止めるが彼女が止まる事は無かった。

思わず後を追おうとした時、そんな俺の腕をリリアナが抑えた。

「草薙護堂さん・・・今は退きましよう。」

「リリアナツ!!エリカー1人を置いて行ける訳が無いだろう!!」

「分かっていますっ!!・・・ですが、今の貴方には何も出来る事はありません。」

「そうだよ、王様・・・恵那も今は退く時だと思う。」

「護堂さん・・・エリカさんを信じて今は退きましよう。」

リリアナの意見に賛同する万里谷と清秋院。

こうしている間もエリカは俺達とウアアウトの間に陣取り、彼女の進攻を食い止めてくれている。

「・・・くそっ!!」

今も必死に戦うエリカを尻目に俺はこの場から退く事を決めた・・・そんな時だった。

「気を付けて、そっちに攻撃が行ったわ!!」

今正にこの場を後にしようとしていたその時、エリカの声が俺達に届く。

その声に反応して振り返ると上方から数本の矢が俺達目掛けて迫っていた。

その時ちらつとエリカ越しに見えたウプウアウトの目は、真っ直ぐに俺を捕えていた。

まるで逃がさないと言っているかの様に……。

エリカの声に反応したりリアナと清秋院が矢を打ち落とす為動くが、幾つか撃ち漏らしてしまう。

残った矢の数は3本。

あの速さの矢を避ける事は容易ではない……それに俺は既に『鳳の権能』を使ってしまっている。

俺の後ろには万里谷が居る……もし俺が避けられたとしても、彼女に被害があつたら元も子もない。

くそっ……これしかないか。

俺は体を張る覚悟を決めた。

万里谷を庇う様に更の前に出て、即死を防ぐ為腕で顔を覆う。

多少の傷なら『駱駝の権能』で我慢する事が出来る。

重傷を負ったとしても『雄羊の権能』を使って蘇る事が出来る。

真っ直ぐ俺目掛けて迫る矢を目にしながら、俺は体に入力を入れる。

……しかし衝撃が来る事は無かった。

矢が俺に当たる寸前、何か矢と共に俺の前を通り過ぎたのだ。

突然の事に啞然とするも、俺はその何かの方へ視線を向けた。

「間に合ってよかったです。」

……そこには軽く体に付いた土を払いながら笑う、最近知り合った後輩の姿があつた。

S i d e 昴

僕が広場に到着した時、そこにアヌビスの姿は無く、狼の顔をした人とエリカさんが戦っていた。

狼から感じる『氣』からして彼も神様だろう。

その神様と繰り広げるエリカさんの戦いはとてもいい物とは言えなかった。

繰り出す攻撃はどれも相手にされておらず、神様の視線はその後方に居る草薙先輩に向けられている。

それでもエリカさんは必死に神様の動きを止めようと攻撃を繰り返していた。

・・・多分エリカさんの目的はあの神様の足止め。

さっきの戦いで消耗した草薙先輩達を逃がそうとしているんだ。

何とか自分に意識を向ける為泥臭くも攻撃を繰り返す彼女の姿を見て僕はそう判断した。

だったらとエリカさんを援護する為動き出そうとしたその時、エリカさんと対峙する神様が先に動いた。

タイミング的には丁度先輩達が撤退を始め様としていた時・・・。それに勘付いた神様が初めて攻勢に出たのだ。

今まで避けると言う選択肢しか選んでこなかった相手に対して、エリカさんは咄嗟に対応する事が出来なかった。

突き出した槍を掴まれ、そのまま投げ飛ばされてしまった。

彼女自身はうまく着地に成功し怪我も無かったが、神様はその隙に攻撃準備を完了させていた。

「気を付けて、そつちに攻撃が行ったわ!!」

エリカさんの鋭い声が飛ぶ。

それと同時に神様の手から弓に番えた矢が放たれた。

それにいち早く反応したのはクラニチャール先輩と清秋院先輩だった。

放たれた矢は一本だったが、空中で幾つもの矢に分裂した。

それを二人は的確に落とすしていく。

しかしさっきの戦闘が響いているのか、2人の動きにはキレが無

かった。

その全てを落とす事が出来ず3本の矢が草薙先輩目掛けて迫る。それを見た瞬間、体が動いていた。

今迄押さえていた『氣』を解放し全力を持って駆けだした。

矢の狙いは先輩の眉間・・・3本全てが一直線に飛んでいる。

だったら狙うのはあの一点・・・丁度、矢が重なり合う所。

先輩は後ろに居る万里谷先輩の事を思い、腕で頭をガードしながらその場を動かない。

先輩が動かないなら好都合と、僕は速度を落とさず前に飛び上がる。

そしてそのまま先輩にあたる直前の・・・丁度重なり合った矢を纏めて蹴り飛ばした。

バキッ!!

蹴りを喰らった矢は押し折られ、それと共に消え去る。

僕は勢いを殺し切れず、地面を滑りながら着地した。

少し土煙が上がってしまったから、体に付いた土を落としながら後ろを振り返った。

「間に合ってよかったです。」

そう言う草薙先輩は凄く驚いた顔で僕を見ていた。

どうして僕が此処に居るのか分からない・・・そんな表情だ。

「・・・神藤・・・だよ・・・な。」

何とかといった感じで発せられた言葉に僕が返そうとした時、別の所から声が掛けられた。

「・・・昴。」

声の方に振り向くとエリカさんの姿があった。

その顔は「仕方ないわね」と半ば諦めている・・・そんな顔をしていた。

そしてその後方には以前戦った鋼の獅子が神様相手に奮迅しているのが見えた。

僕と話をする為の時間を稼いでいるんだ・・・でも、神様相手にあれでは大した時間は稼げない。

「すいません、エリカさん……折角協力してくれていたのに台無しにする様な事をしてしまって……。」

「昴、今は目の前の事に集中しなさい!!」

時間の無い事が分かっているエリカさんは謝り始めた僕に喝を入れる。

そしてそのまま僕に顔を寄せると頬にキスをしてくれた。

「私にかっこいい所を見せて頂戴。」

彼女の喝に気持ちがりセットされ、彼女の温もりが僕に力を与えてくれた。

自分でも少し現金だと思うけど、この際気にしない。

「思う存分やりなさい、何かあればサポートするわ。」

そう言うのとエリカさんは僕から離れ、後ろに下がって行った。

気持ちを入れ替えた僕は神を見据える。

彼は既にエリカさんの創りだした獅子を粉々に砕いてしまっていて、真っ直ぐ僕だけを見据えていた。

此処で初めて僕達の視線が合わさった。

ここに来てから溢れ出ようとする『氣』を抑えるのが大変だった。

でも……もう抑える必要はない……全力で戦える。

「貴様も神殺しだな。」

しかし今は貴様の相手をするつもりは無い……其処を退いて貰おうか。」

「それは無理な相談です。」

先輩と戦いたいのなら、僕を倒してからにして下さい。」

神はそれ以上何も言わず、僕を睨み付けながら弓を構えた。

これ以上の問答は無駄……と言う事か。

「神道流当主・神藤 昴……いざ参る!!」

そして僕が神殺しになって初めての『まつろわぬ神』との戦いが始

ま
っ
た。
。

第21話 VSウプアウト

S i d e エリカ

「エリカ、これはどういう事だ!!」

私が昴を送り出しと後すぐ、怒りの表情を隠す事無くリリイが詰め寄って来た。

無理もない・・・いきなり戦場に現れたかと思ったら、神と戦い始めたのだから。

草薙護堂含め、此処に居る全員が消耗していなかったら昴の事を見逃す事は無かつただろう。

「リリアナ、少しは落ち着け。」

でも、エリカ・・・説明はあるんだろうな。」

リリイの事を諫めながらも、私に視線を向ける草薙 護堂。

その視線には有無を言わせぬ力があつた。

・・・これが1年間戦い続けてきた王の覇気・・・今の昴に無い物ね・・・。

いつもと違う力強い雰囲気汗を流しながらも、私は頷いた。

「勿論よ・・・流星に隠し通せる事じゃないしね。」

貴方達ももう予想は付いているでしょう?・・・彼は新たに誕生した神殺しよ。」

私の言葉に草薙護堂や姫巫女の二人は驚きながらも、何処か納得がいかない・・・そんな表情を浮かべていた。

リリイは相変わらず私の事を睨んでいる。

「・・・何故今まで黙っていた。」

「必要だったから。」

「それだけではわからないだろ!!」

「リリアナ、だから落ち着けて。」

今にも剣を取り出しそうな勢いの彼女を再び草薙護堂が宥める。

彼の言葉に何とか落ち着いてくれるが、鋭い視線は変わらない。

私達がこうして話している間に昴とウプアウトの戦いは始まっ

ていた。

私は視線を彼等から外し、昴と神の戦いに目を向ける。
現在戦況は膠着状態と言ってもいい。

ウプウアウトが矢を放ち攻撃するのに対して、昴の戦闘スタイルは接近戦だ。

昴は矢による攻撃を上手く避けているが、その数の多さに近付けないでいた。

そんな彼を見守りながら私は口を開いた。

「彼は今年の3月の終わりに神殺しになったわ。」

以前リリイが詳しく話せて言ってきた、あの事件の時よ。」

「やはりそうか・・・だが何故『赤銅黒十字』程の大結社がこんな大事な事を隠していた。」

私は昴から目を逸らさない。

そしてリリイの疑問に答えるつもりも無かった。

私達『赤銅黒十字』の恩人の最後を軽々しく口にする事は出来なかったから・・・。

だから私はリリイの疑問を無視して話を続けた。

「彼は私を助ける為に神に戦いを挑み・・・そして重傷を負いながらも勝利を手にし、神殺しとなった。」

私は昴に救われたから、今此処に居る。

皮肉な事に私の両親も、彼のご両親に命を救われた事があるわ。

・・・私達には彼に返し切れない恩がある。

だから『赤銅黒十字』は彼の傘下に降る事を決めたの。」
リリイの息を呑む声が聞こえた。

何故なら大結社である『赤銅黒十字』には一人の神殺しに肩入れするメリットが少ないからだ。

実際リリイの所属している『青銅黒十字』は草薙護堂の恩恵は受けているが彼の傘下に入った訳では無い。

その事がわかってからリリイは驚いたのだろう。

「彼がイタリアで活動するんだったら、すぐにでも公表出来たわ。」

でも、彼は日本に戻る事を望んだの・・・そこで問題になったのは・・・。」

「・・・俺か。」

「そうよ、日本にはもう既に貴方と言う神殺しが居た。」

あの時神殺しだと名乗りあげても、正史編纂委員会は今迄仕えて来た王に付いたでしようね。

それに貴方がいきなり誕生した後輩にどういった対応をするのか予測が付かなかった。

もし戦いにでもなつて、負ける事があれば日本で活動出来なくなる可能性があつた。

いいえ、日本に居場所がなくなる事も考えられた。

だから私達には日本で活動する為の準備が必要だったの・・・。」

私の説明に一応は納得してくれたのか、草薙護堂の強い視線は無くなつていた。

こうして話している間、昴の戦いには変化が無かつた。

大量の矢の弾幕に昴は近付けない。

何とか隙を見て踏み込もうとしても、距離を取られるか、強い一撃を繰り出して昴を足止めさせる。

昴自身ダメージらしきダメージも負っていないが、この膠着状態に痺れを切らす頃だろう。

・・・そろそろ昴が動く頃かしらね。

そう思った時、昴の背から炎が立ち上つた。

S i d e 昴

・・・このままじゃ埒が飽かない。

戦闘が始まってから今まで、神様の繰り出す大量の矢に近付く事が出来ないでいた。

ただ単に矢を放ってくるだけならまだしも、彼の攻撃には一つ一つに意味があつた。

例えば、近付ける隙があつたかと思つたらそれが罠だったり・・・。

避け続けた先に絶対に避けられない攻撃を仕掛けてきたり……。此処までの攻防で大きな怪我は追っていないものの、彼の攻撃に手も足も出ない……。といった所だ。

何とかしないと……。

このままでは一方的にやられるだけだと判断した僕は1つの決断をした。

未だ途切れる事無く迫る矢から一度大きく距離を取る。

恐らくこの距離でも彼の射程内ではあるだろうがさつきよりは余裕を持てる。

今まで近付こうとしていた僕が距離を取った事で、神様も警戒してか攻撃の手を止めた。

「少しはやる様だが、逃げてばかりでは、私に勝つ事は出来んぞ。」

神様はそう言うのと再び弓を構える。

距離を取って余裕があるとはいえ、あの攻撃を避けながらだと集中できない。

そう思った僕はすぐに自身の中に眠る言霊を紡いだ。

「天上にあつては太陽、中空にあつては稲妻、地にあつては祭火。

世界に遍在する火、惑わしの罪を取り除き、善き路によって富を導く者為り。」

言霊を紡ぐと共に体から『氣』が漲り、体が内から熱くなる。

本当だったら、初めての神殺しとしての戦闘……。権能を使わずにどこまで通用するのか試したかった。

でもこのままじゃ自分の戦いが出来ないと判断して今回は諦めた。それに出し惜しみしてやられたら元も子もない。

膨れ上がった『氣』は言霊を通じて熱を持ち、徐々に炎へと変わっていく。

今回は前回の様に辺りを火の海にする様なへまはしない。

溢れ出ようとする『氣』を完璧に内に留め、限界まで耐える。

……とその時、僕の異変に気付いた神様は今迄で最速の矢を放つて来た。

今迄とは比べ物にならない音速を超える速度で迫る矢。

でも僕は焦る事無く右手を前に掲げ、内に留めてきた『氣』を解放した。

「ごおおおおお!!」

その瞬間僕の右手から火炎放射が放たれた。

目の前まで迫っていた矢を一瞬で焼き消したそれは勢いを止める事無く、神様の居る所まで襲い掛かる。

「くっ!!」

神様は悔しそうな声を上げるも、僕の放った火炎放射を横飛びで簡単に躲す。

まあ、僕もあの程度で攻撃を食らわせる事が出来るとは思っていない。

だけど時間を稼ぐ事は出来た・・・僕は自然と口角が上がっていた。

右手から放たれた火炎放射はそのまま進行方向を変え、僕の方に引き返してきた。

・・・と言うより、僕がそうなる様に操っている。

そしてそれをそのまま僕の所に突っ込ませ、それと同時に溜めていた『氣』を爆発させた。

突如僕から立ち上る火柱。

僕は火柱の中で自身が作り上げた炎・・・その全てをコントロールして背中に集束させる。

外からは炎が収縮する様に見えると思う。

背中に集められた炎は徐々にその形を変え、大きな輪を形成していく。

そして僕の姿はあの時と同じ日輪を背負っている姿となった。

「ほお・・・火の神、火神から篡奪した権能か・・・面白い。」

そんな僕を見た神様からそんな言葉が零れた。

その表情を嚚猛に歪め僕の事を睨み付けながらも、その口角は上がっている。

でもそれが決定的な隙となった。

彼の見せた一瞬の間・・・それを見逃す程僕は甘くない。

『神道流移動術・瞬（またたき）』を利用して彼との距離を一瞬で詰める。

その時気付いたが『氣』を込めた瞬間、僕の足に炎が灯った。
・・・そうか、この権能はこうも使う事が出来るのか!!

権能の使い方の1つを理解した瞬間だった。

だけど今はそんな事を気にしている時では無い。

そのまま地面を蹴り、炎の軌跡を残しながら神様の懐に飛び込んだ。

「なっ!!」

一瞬の隙を付いた速攻に神様は反応する事が出来ない。

僕は拳にも足同様に『氣』を込める。

そしてそれは自然と炎へと変化していた。

それを認識した瞬間、僕は口角が上がる事を押さえられなかった。

『神道流攻式壺ノ型・波（なみ）・焰（ほむら）』

僕は拳を叩き込んだ。

『波（なみ）』による攻撃に炎の権能が加わった事によって、体中を炎が駆け巡っている筈だ。

「ぐっううううううう・・・おおおおおお。」

苦悶の声を上げる神様。

此処で勝負を決めるつもりで更にもう一発叩き込む。

しかし、そうしようとした所で、突如彼の手にメイスが現れたのだ。

その事に気付いた時にはもう遅かった。

彼は表情を痛みで歪めながらも的確にメイスを振り上げていた。

「ぐはっ!!」

まさか反撃が来るとは思っておらず、僕は腹に重い一撃を喰らってしまふ。

そのまま吹き飛ばされ、ごろごろと暫く地面を転がり続けた。

「はぁ・・・はぁ・・・くっ!!」

暫くして漸く止まる事が出来た。

急いで体を起こそうとしたが、激しい痛みには体の動きが止まってしまふ。

それでも気合と根性で起き上がり神様に視線を向けると、彼も僕を睨み付けていた。

その彼も僕と同様、肩で息をしている。

互いが始めて貰った一撃・・・それがかなりの威力を持っていたという事だ。

「はははっ・・・流星は神殺しと言った所だな、先程の一撃は中々に効いたぞ。」

「・・・それは僕も同じですよ。」

思わず僕達の顔に笑みが浮かぶ。

だがそれはすぐに互いを睨み合う鋭い視線をと変わった。

ウプウアウトの手には再び弓が構えられる。

それを見た僕は痛む体に鞭打って構え直す。

そしてウプウアウトの弓から矢が放たれた瞬間に僕達の第二ラウンドが始まった。

第22話 決着

S i d e エリカ

昂は私との戦いで発現させた炎の権能を行使し、ウプウアウトに一撃を入れた。

しかし、それと同時にカウンターによる一撃を喰らい、再び距離を取らされた所だ。

これから彼等の第二ラウンドが始まる。

「エリカ、1つ聞いてもいいか?」

そんな時、声を掛けて来たのは草薙護堂だった。

本当の事を言えば、昂の戦いに集中させて貰いたい所だけど無視する訳にはいかない。

「何かしら?」

「俺達はこれまで神藤と多少なりとも交流してきた。

でもその間、万里谷が神藤の事を『神殺し』だと気付けなかったのは何でだ?」

彼奴は今使ってる権能以外に、別の権能を持っているのか?」

私も今日の戦いで万里谷祐理の霊視能力の高さには驚かされた。

はつきり言っつて今まで見てきた霊視能力者の中でも抜きん出ている。

それに彼等が彼女の霊視をどれだけ頼りにしているのかも・・・。

本当であれば言わなくてもいいのだが、まあこれ位なら言っても問題ないだろう。

「違うわ、彼の権能は見ての通り炎に関する物だけよ。」

「だったらどうしてだ?」

「それは彼の技術によるものよ。」

私の言葉に草薙護堂が首を傾げる中、別の所から声が掛かった。

『神道流』・・・魔力を操り、その力を持って武術を収める。

確か古くから伝わる古武術の1つだったかな。」

『神道流』?・・・リリアナが言っていた神藤が使う武術の事だろ。

それがいったい何の関係があるんだ?」

「うーくん、恵那も正直信じられないんだけどね。」

『神道流』は魔力を完璧に操れる様になって初めて、その真髓を当主から教えて貰えるらしいんだ。

で、その完璧って言うのが文字通り『完璧』じゃないと駄目みたいなんだ。」

「どういう事だ？」

言葉の意図が理解できずリリイが口を挿んだ。

そんな彼女に清秋院恵那が少し悩みながら問い掛けた。

「リリアナさんは体中に流れる全魔力を指先だけに集める事って出来る？」

「・・・無理だな。」

元々魔術を使う時に練り上げる時位にしか魔力を意識しない。」

「私達からしたらそれが普通だよね。」

・・・でも、神道流の当主に認められた者はそれを呼吸するのと同じ様に熟すんだよ。」

「なっ!!」

この話をよく分かっていない草薙護堂。

清秋院恵那の話に驚きを隠せないリリイ。

そして、今まで何やら考え込んでいた万里谷祐理が何か思い付いたか「はっ」と顔を上げた。

「もしかして、彼は神より与えられた権能の力すらも完璧に操っているというのですか!!」

「まあ、半分正解と言った所ね。」

別に昴は権能の力を完璧に操っている訳では無いわ。

でも神殺しになった事で質も量も変わった魔力・・・彼はその全てを完全に掌握しているわ。」

私の言葉に草薙護堂を除いた全員が戦慄する。

「ど、どういう事だよ。」

「簡単に言うとな、彼は例えどんな時だろうと自分の呪力を思いのままに操れるんだよ。」

「つまりはこういう事です、草薙護堂。」

神藤昂は自身の呪力を完璧に操り、神殺しの膨大な呪力を一切外に漏らす事なく己の内に抑え込んでいた。」

「恵那達も時々隠行で気配を消す事があるけど、彼の場合は常にそれを行っていたって事……。」

「日常生活の間、絶えずそんな事をするとは……普通ではありません。」

この時になって漸く昂の規格外さに気付いた草薙護堂は現在も戦い続けている昂に視線を向けた。

その眼にはリリイ達同様驚きの色が浮かんでいた。

そんな彼等の様子が可笑しくて思わず笑みが零れる。

馨さんの話だと彼の技術は歴代でも類を見ない程の圧倒的な物らしい。

誰にも真似出来ない、昂だけの強み。

彼は自分だけの武器を手に今も必死の表情で神との戦いに挑んでいる。

再び距離を取って始まった戦闘。

始めは最初の頃同様、ウプウアウトの矢の弾幕に中々近付く事が出来なかった昂だった。

しかし背にある日輪から『炎玉』を形成し、矢の相殺に成功した事によって形勢が逆転した所だ。

1つ気がかりなのは昂が背負う日輪が心なしか小さくなったかの様に思えた事。

暫くの間全員が口を閉ざし昂の戦いに集中していた時、清秋院恵那が再び口を開いた。

「エリカさんから感じ取れる魔力量が少なく感じられるのはそのせいなのかな？」

「……その通りよ。」

私は情報収集の傍ら、昂から稽古を付けて貰っていたの。

魔力効率も上昇傾向にあるし、お蔭で魔術の威力も制度も上がったわ。」

「……そうだったんだ。」

流石に無視出来ず、本の少し視線を外した時だった。

突如、世界が闇に覆われた……。

Side 昴

再び距離を取った所で始まった第二ラウンド。

開幕は戦闘開始同様、相手からの矢の弾幕から始まった。

一切の隙なく襲い掛かる矢に僕は近付く事が出来ないでいた。

……くそつ、折角一撃与えた所なのに。

このままじゃさつきと一緒だ……何とかしなくちゃ。

其処で頭に浮かんだのはアグニの使っていた『炎玉』だ。

数多襲い掛かる矢を躲しながら新しい事をやろうとするのは苦

難の技だが、そう言っていられる状況では無い。

僕はあの時の戦闘を明確に思い浮かべる。

すると体が、思考が、何かに至ったかの様に動き始めた。

僕はそれに逆らう事をしない。

それがこの状況における最善手だと信じているから……。

『氣』の動きから背中の日輪より幾つかの『炎玉』が生まれ出たのが分かる。

やり方を覚えた僕は自分の意志でそれを加速させる。

……よしつ、これなら行けそうだ。

彼の放つ矢に対抗する為、僕は瞬く間に数え切れない程の『炎玉』を形成した。

そしてそれを彼目掛けて一気に撃ち放った。

「くっ……小癩な!!」

突然の反撃に不意を突かれた形になった神様。

丁度彼の放った矢と相殺する形で、僕達の間で幾つもの爆発が起こった。

両者遮られた視界。

僕はこの隙に神様に近付こうと爆煙の中に飛び込んだ。

しかしその中で待っていたのは、眼前に迫る鉄の塊だった。

遮られている視界の中での不意打ちを如何にか間一髪で躲す。

「なっ・・・何がっ!!」

「ハハハっ、お前の動き等御見通しだ!!」

正面から聞こえた声は対峙する神様の声。

声によつて彼がかなり近くに居る事は理解したが、肝心の彼の姿が確認出来ない。

そんな中で彼は恐らく先程のメイスによる、息もつかせぬ連続攻撃を繰り返してきた。

突如として襲い掛かる攻撃の数々に反応が遅れ、幾つか攻撃を食らつてしまう。

視界の悪い中で的確に頭や脚等を攻撃して来る事に僕は動揺を隠せない。

「ぐっ・・・どうしてっ!!」

「お前は神殺しになって、まだ日が浅いのではないか？」

その証拠に自身の状態すら正確に認識出来ない。

お前の背に輝く太陽の如き日輪・・・あの爆煙の中でもお前の動きがはつきりとわかつたわ!!」

神様の言葉に僕は恥ずかしくなった。

目の前の事にいっばいっばいで、自分の状態すら分かっていない。

そんな初歩的なミスを犯すなんて・・・。

劣勢の中、更なる動揺から生まれた隙は大きかった。

それでなくとも視界が悪いのだ・・・等々神様の攻撃を躲しきる事が出来なくなっていた。

あの時を様な強烈な一撃は一つも無いが、的確な攻撃にダメージが蓄積されていく。

しかし、痛みによる刺激に冷静さが戻つて来た。

・・・接近戦になれば勝てる何て甘い考えがこの状況を招いたんだ。でも反省は後だ。

まずはこの状況を如何にかしないと・・・。

攻撃を喰らつてあちこち痛いけど、気合で動かす。

爆煙が晴れ始め、視界も戻り始めている。

そのお蔭で思考がクリアになった僕は徐々に攻撃を躲す回数が増え始めた。

僕の調子が上がった事に気付いた神様は小さく舌打ちすると、大きくメイスを振り上げた。

・・・やらせない!!

神様の魂胆は分かっている。

一度喰らった事で強烈な一撃は必ず避けると踏んでいるんだろう。その一撃によって土煙を上げ再び距離を取るつもりだ。

僕はそうはさせないと、避ける事無く自分から彼に向かって飛び込んだ。

「ふんっ!!」

予想と反した僕の行動に驚くも、彼の動きは止まらない。風を切る音と共に一段と加速しながら迫る一撃。

「はあああ!!」

僕は迫るメイスを純粋な火力と威力で迎え撃った。

最初の一撃以上の炎を拳に宿し・・・一気に振り抜いた。

バキッ!!

この攻防・・・軍配は僕に上がった。

神様の手には粉々に砕かれたメイス。

僕の右手も多分骨が折れただろうが、今止まる訳にはいかない。

『神道流攻式参ノ型』『連撃・波・焰（れんげき・なみ・ほむら）』

お返しとばかりに繰り出す連続攻撃。

一撃一撃が決まる事に彼の体を駆け巡る炎。

後半は対応し始めた神様だったが『波（なみ）』による攻撃が例え防いだとしても内へダメージを負わして行く。

最後の回し蹴りも防がれ、同時に距離も取られたが、彼に僕以上のダメージを負わせる事に成功した。

「はあ・・・はあ・・・その武術、中々に厄介だな。」

そう言いながら手に持つ砕かれたメイスに視線を落とす。

メイスの状態を改めて確認した神様は口元に笑みを浮かべると、持ち手だけとなったメイスを放り捨てた。

「敵を甘く見ていたのは私も同じだという事か……。」

彼は呟くと徐に弓を呼び出す。

その事に僕は警戒心を高めるが、彼はその弓を僕ではなく空へと向けた。

「……そろそろ本気を出す事にしよう。」

そう言った彼は僕に牙を剥く。

その時、今迄で最大級の警笛が頭に鳴り響いたが、もう遅かった。彼の放った矢は真つ直ぐ天へと昇り、空を切り裂いていく。

……そう、空が切り裂かれたのだ。

矢の軌跡に沿う形で空に一本の線が描かれる。

そしてその線が開いたかと思うと、そこから闇が吹き出した。

見た瞬間やばい物だと確信した僕は瞬時に『氣』を高め、身を守る事に専念する。

その直後だった。

溢れだした闇は瞬く間に辺りを覆いつくし、僕は闇に飲み込まれた。

「これはいつたい……。」

一寸先も見えない暗闇の中、辺りを見渡す。

しかしこれが神様の仕業である以上警戒を弱める事は出来ない。

それにこの闇は何か嫌な感じがする。

周囲の気配を探ってみたけど、あの神様の強い『氣』しか感じられない。

……いや、1ヶ所だけ違う所がある。

これは……クラニチャール先輩？

かなり微弱だがクラニチャール先輩の『氣』を感じ取れた。

でも彼女だけという事は無い筈だ、エリカさん達も同じ場所に居ると考えた方がいい。

等と思索している時だった。

僕は考えている最中も警戒を怠ってはいなかった。
それなのに・・・突然、何かに左肩を貫かれたのだ。

「ああああああああああ!!」

くっ・・・はあ・・・はあ・・・い、いったい何が・・・」

突如襲う激しい痛み之苦悶の声を押しやる事が出来なかった。

いったい何が起こったのか検討もつかない。

そんな中、痛みの中心である肩に視線をやると、そこには深々と矢が刺さっていた。

間違はなく神様からの攻撃。

痛みに耐えながら更に警戒心を高めたが、それは意味を成さ無かった。

続け様に背中・右太腿の裏・右腕と激しい痛みが襲う。

「ぐうっ・・・ぐああ・・・あああ・・・」

連続した気配の無い攻撃に為す術無く傷付けられていく。

そんな時、全方向至る所から神様の声が響き渡った。

「私は軍神としての力だけでは無く、死者の魂を冥界に導く為の力も有している。

今回は私の力で『死』を現世に呼び込ませて貰った。

咄嗟に呪力を高めていたが、流星の神殺しも長時間この闇に触れ続けると・・・死ぬぞ。

・・・まあ、その前に私自身の手で決着を付けてやるがな。」

神様は最後に何とも楽しそうに締めくくった。

僕は彼の言葉を聞きながら、体に刺さる矢を握り締めた。

構造上中々向けない作りになっている矢。

しかしこのままでは満足に動く事が出来ない事から、激しい痛みを堪えながら我慢して引き抜く。

・・・でも、このままじゃいけない、何か対策を考えないと。

矢を引き抜きながらも僕は考える事を止めなかった。

神様は既に勝負を決めに来ている。

此処で僕も勝負に出なければその先に待っているのは・・・確実に死だ。

でも、どうやって気配の無い攻撃に対応する？

いつその事、周囲に炎の壁でも作って矢を全部燃やし尽くすか。

いや、そんな事をすればすぐに僕の『氣』が無くなってしまう。

それでなくてもさっきの神様の言葉が気になって、いつもより強く『氣』を纏っているのに。

・・・でも、これしかないか。

僕はこの状況を打開するこれ以上の方法が思い浮かばなかった。

恐らく次の攻撃が始まったら僕は為す術なくやられてしまう。

だから、そうなる前に行動を開始した。

先程の『炎玉』同様に日輪から『炎壁』をドーム状に形成する。

『炎玉』で掴んだ感覚のお蔭で簡単に作る事が出来た。

欠点は予想通り・・・壁を作り続ける間『氣』の消費が止まらない事。

「その炎でいつまで耐える事が出来るかな？」

その言葉と共に『炎壁』に何かが当たった感覚があった。

神様の攻撃が始まったんだ。

でも嬉しい事に矢が『炎壁』を突き抜けてくる様子は無い。

その事に安心を覚えた時、ある事に気付いた。

・・・『炎壁』に当たっている事は感知出来ている？

だったら『壁』である必要はない!!

気付いてからは早かった。

『氣』を大量に消費する『炎壁』から『炎膜』と呼べる所まで極力薄く

『炎壁』を調整した。

本当なら炎の権能を使つてやる必要は何処にもない。

でも権能を使っている間は『氣』を使うと僕の意味とは関係なく強制的に『炎』に変換されてしまう。

これが僕の権能の制約なんだと思う。

後の問題はこの傷付いた体でどこまで対応しきれるか・・・。

でも感知さえできるなら・・・やってみせる。

薄くなつた事で矢は簡単に『炎膜』を突き破ってくる。

多方向からの一斉に射撃が襲い掛かるが、その全ての矢を最低限の

動きで避けきった。

よし、上手く行った!!

防御に関してはこれで暫くは耐えられる。

「ほう……面白い。」

声だけなのに神様の獰猛な笑みが想像できる。

そして予感的中……猛攻が襲い掛かって来た。

最初の攻防の様に大量の矢が四方八方から迫る中、僕はまるでステップを刻む様に避ける。

目に頼れなくなつた事で難易度は格段に上がったが、それでも諦める事なく避け続ける。

その中で僕は徐々に焦燥に駆られて始めていた。

問題点は多々ある。

傷付いた体から止まる事なく体力と共に流れ続ける『血』。

『炎膜』を張り続けている事によって『氣』も消費し続けている。

そしてこれは全く予想していなかった。

……背にあるに日輪が徐々に小さくなり始めたのだ。

今まで何故気付かなかつたのか……。

この日輪……最初に権能を発動させた時から炎を消費するばかりで増やす事が出来なかつたのだ。

つまりこの権能には……。

1. 『氣』を込めたら強制的に『炎』へと変換される。
2. 『炎』の量は権能発動時に込めた『氣』の量で決まる。
3. 権能を発動したら最後『炎』の量を増やす事が出来ない。
……と言う制限が存在する事が分かつた。

そして最大の問題は……攻撃の糸口が見つかっていない事だ。

それで無くとも多くの問題点から戦闘のタイムリミットが近付いて来ている。

以前止まない猛攻をいつまでも凌ぎきれぬ訳が無い。

防ぎ続けられたとしても、攻撃に回す『体力』『氣』『炎』が無くなつてしまう。

1つあるとすれば……『炎膜』の中は神様の呼び出した『闇』の影響を受けていない……という事だ。

つまり『炎膜』の範囲を広げれば『闇』に紛れる神様の居場所を突き止める事が出来る可能性がある。

だけどリスクが高すぎる。

まずは相手に気取られない様に『炎膜』の広域展開を一瞬で終わらせなければならぬ。

そして見つけたとしても、今の僕の状態だと展開出来るのは持つて数秒。

その間に捕えきれなければ、その時点で勝負がついてしまう。

……とその時、視界の隅にきらりと光る物が移った。

ん？……あれは何だ？……何かの金属片？

あっ、そうだ!!あれはエリカさんの獅子像の残骸だ!!

矢を避けている間に移動していたみたいだ。

良く見たら、至る所に大きき様の様々な金属片が転がっていた。

それに気付いた時、エリカさんの言葉を思い出していた。

『思う存分やりなさい、何かあればサポートするわ。』

僕を送り出す時に言ったあの言葉。

その言葉を思い出した時には、もう覚悟が決まっていた。

神様の猛攻にも一瞬の事だが攻撃が止む瞬間が存在している。

その瞬間が訪れた時……僕は動いた。

内に残る少ない『氣』を放ち『炎膜』を一瞬で広範囲に展開する。

瞬く間に闇に覆われた世界が元の世界へと戻って行く。

そしてそれはエリカさん達の所にも届いた。

僕は一瞬エリカさんに視線を向ける。

交差する視線……それだけで十分だった。

次の瞬間『炎膜』が神様を捕えた。

方向は僕の右前方。

視線を向ければ神様の表情がよく見えた・・・予想していなかった事に驚きを隠せていない。

だけど僕の視線に気付くと真っ直ぐ僕を睨み付けてきた。

この時点で『炎膜』を極狭い範囲に収縮させた。

背負う日輪も小さくなり、『氣』も残り少ない。

再び姿の見えなくなった神様だったが、関係ないとばかりに全力で一直線に駆ける。

普通ならもう別の場所に移動していると判断する・・・でも僕には確信があつた。

神様の姿を再び視認した瞬間、思わず笑みが零れた。

そこには足先に鎖が絡みついた神様の姿があつたから・・・。

戦闘後そのまま放置されていた獅子像の残骸。

エリカさんはそれらを遠方より操り、鎖とし、神様を捕えたのだ。

忌々しそうに鎖を睨み付ける神様。

もう次の瞬間には強引に鎖を振り解き見失ってしまうだろう。

でも、折角エリカさんが作ってくれたこのチャンス・・・無駄にはしない。

僕は今ある力全てを出し尽くす勢いで『氣』を解放した。

突然の強襲に驚き、隙を見せる神様・・・その顎を真上に蹴りあげ吹き飛ばす。

上空に高く打ち上げられた神様を僕も追い掛ける様に飛び上がる。

『神道流攻式伍ノ型』獅子連弾・焰（ししれんだん・ほむら）』

神様に追い付くとそのまま追撃を開始する。

背後から炎を纏いし右足を振り上げ、相手の右脇腹に叩き込む・・・が神様も反応し防ぐ。

「甘いぞ!!」

「まだまだ!!」

でも、それも想定内。

すぐさま極限まで炎を込めた左手を握り締め、真下に向け裏拳を叩き込む。

「ぐはっ!!」

続け様の攻撃に神様は反応できず、諸に喰らい地上へと向かう。

まだ、終わりじゃない……と僕も後を追ひ、残った全ての『氣』と『炎』を左足に籠める。

それにより左足は轟々と燃え上がり、辺りを真っ赤に染め上げる。

「うおおおおおおお!!」

そして神様が地面に衝突すると同時に、雄叫びと共に炎を纏いし左足を神様に叩き付けた。

ズドーーーーーン!!

凄まじい爆発と揺れが辺りを駆け巡る。

僕は自分の起こした衝撃によつて飛ばされたが、震える体に鞭打つて体を起こす。

手足は震え、真っ直ぐ立つ事も出来ない状態。

それでも、衝撃の中心に向かって叫んでいた。

「はあ……はあ……これで……どうだ!!」

「……ははははははははっ。」

僕の言葉に反応する様に神様の笑い声が木霊する。

徐々に土煙が晴れていく中見えたのは、神様が声を上げて笑いながら倒れている姿だった。

その様子に「まだ動けるのか」と何とか動こうとするが、もう力が入らない。

立っているのがやつとの中、それでも何とかしようともがき、神様を睨みつける。

でも一向に神様の笑い声は収まらないし、動く気配もない。

そして完全に土煙が晴れた先にあったのは上半身と下半身が分かれたれている神様の姿だった。

僕達の視線が交差する。

いつの間にか神様の笑い声は消えていた。

最後に満足気に笑みを浮かべると神様は塵になって消えてしまった。

・・・そうか、僕は勝ったんだ。
僕は勝利を手にした事に拳を握り締め、空に突き挙げる。
そして今まで張りつめていた緊張感が切れ、そのまま意識を失っ
た。

第23話 これから

S i d e エリカ

一帯を飲み込んだ闇に逸早く反応したのはリリイだった。残り少ない魔力を駆使して瞬時に防御結界を展開したのだ。

「ありがとう、リリアナ。」

「いえ……ですがこれはいったい何なのでしょう？」

「万里谷は何かわかるか？」

「……恐らく『死』だと思います。」

彼女の言葉に私達は少し肝を冷やす。

確かにウプウアウトは『死者の魂を冥界へと導く為の道を切り開く者』という記述があつた筈だ。

恐らく冥界への道を作り現世に呼び込んだ……と言う所だろうか？

「……ですがこの状況が続くと、我々も危険です。」

「確かにそうだよね。」

この辺りに『死』が覆っているって事は、私達はこの結界内から出られないって事。

多分王様以外が結界から出たら、あつという間に死んじゃうよ。」

「それに私も先の戦闘で魔力を使い果たしています。」

「この結界を維持できるのもそう長くはありません。」

「なっ!!」

彼女達の言葉に彼は驚愕の表情を浮かべ、その表情を険しくさせた。

「……だったら、今すぐ俺をここから出してくれ。」

「大人しくしていなさい、草薙護堂。」

貴方の考えている事は分かるけど、貴方がここから出ようとすると私達が死んでしまうわ。」

私の言った事に彼は戸惑いを見せる。

……どういう事か分かっていない。

彼は本当に『1人では戦えない王』……という事ね。

彼の戸惑いに答えたのは清秋院恵那だった。

「結界を解いたら次の結界を張る時間も無く、恵那達が『死』に包まれちゃうよ。」

「っ!!・・・そう・・・だったのか。」

「私達がここから動けない以上、この闇が晴れるまで昴を信じて待つしかないわ。」

自分でそう言いながら固く拳を握り締め、音すらも感じられない暗闇へ視線を向けた。

この闇の中、命懸けで戦っているであろう最愛の人の無事を祈りながら・・・。

今は何も出来ないけど、その時になったら絶対に貴方の助けになれる。

そして、その布石も既に準備してある：：だから頑張りなさい、昴。

無音の闇の状態が続く。

周囲にも変化は見られず、未だ昴の状態も確認できない。

そして次第にリリーの顔色が悪くなってきていた。

額には汗が浮かび、苦しげに肩で息をしている。

・・・そろそろリリーは限界ね。

今なら私が代わりに結界を張る事が出来る。

でも、それをすると、もしもの時に動けなくなる。

そんな私の心が揺れ動いている時、突如私達を覆い隠していた闇が払われたのだ。

正に一瞬の出来事。

リリーの展開する結界に火の粉が舞ったかと思うと、それと同時に世界に光が戻った。

草薙護堂達は何が起こったのか分からず反応が遅れたが、私にはわかっていた。

すぐに周囲に視線を走らせる・・・戦い続けているだろう彼の姿を探して。

見つけた先には、多くの血を流しながらも立ち続ける昴の姿があった。

その時ほんの一瞬私達の視線が交わった。

何か言葉を発した訳でも、頷いた訳でも無い。

ただ視線が重なり合っただけ・・・たったそれだけで昴の思いが伝わって来た。

『信じてます』

昴はもう違う場所を向いている。

そして私も・・・彼の視線の先に目を向けながらも動き始めていた。

昴が見る先にはウプウアウトの姿。

一度戦ったからわかる。

今の私では『まつろわぬ神』相手に数分の時間稼ぎしか出来ない。

だからこそ頭を使う。

神は人間に殆ど興味を示さない。

しかも近くに神殺し・・・自身の敵がいるならば尚更だ。

其処を突く!!

私はこんな時の為に回収しなかった戦場に散らばるクレオ・デイ・レオーネの欠片。

それを瞬時に鎖に錬成し直し、ウプウアウト目掛けて撃ち放った。

その時には世界は再び闇に覆われている。

それでも昴の示した所へ迷わず鎖を向かわせた。

恐らく私が失敗すれば昴の負けは必至だろう・・・でも・・・。

騎士としての誇りを持つ私が・・・。

彼の騎士として忠誠を誓った私が・・・。

昴の絶対的信頼を受け取った私が・・・。

そして、最愛の人の危機にこの私が・・・。

失敗するなんてありえない!!

鎖の何かを捕えた感覚。

絶対に離すまいと、鎖を地面に打ち付け固定する。

だがそれも一瞬の事……。

次の瞬間には鎖は引き千切られた。

手応えの無くなった感触に止めていた息を吐き、視線を上へと向ける。

其処にはこの闇の中、神々しい程に燃え上がる揺らめく光が見えた。

それが霞んだかと思うと、強烈な爆発が辺りを包み込んだ。

地震と見紛う程の揺れと、至近距離で爆弾が爆発したかのような衝撃。

爆発と同時に闇は晴れ、代わりに舞い上がった土煙が視界を遮る。

この時点で昴の勝利を確信していた私は、彼の無事な姿を確認したくて堪らなかつた。

土煙が晴れ、リリイが結界を解いた瞬間に駆け出した。

後ろで草薙護堂が何かを言っているが気にしない。

向かった先には小さなクレーターが出来ていた。

ウプウアウトの姿は無く、その中心から少し外れた所に昴が倒れていた。

「昴っ!!」

倒れている彼を見つけ慌てて彼に駆け寄る。

あの時は一瞬でちゃんと確認できなかったが、昴の体はボロボロだった。

仰向けに倒れている彼の体には見えるだけでも左肩と右腕に穴が開いていた。

出血量からして他にも大きな怪我があるわね。

それに幾ら神殺しの体が頑丈だと言っても、早く治療するに越した事はない。

恐らく戦いが終わった事は甘粕冬馬を通じて馨さんに入っている。

ならばもう既に移動や治療の手配をしてきている筈だ。

……と、これからの事を思案している時草薙護堂達が追い付いて

きた。

「お、おい、大丈夫か!？」

昴が倒れている所を見て心配そうに声を掛けて来る草薙護堂。

私は彼に視線を向ける事無く言葉を返した。

「神殺しとは言え、このまま放つて置けば危険よ……すぐに病院に連れて行くわ。」

「それがいいと思います……護堂さんの様に蘇生の権能を持っている訳では無いでしょうし。」

魔力を使い果たしたリリイを支えていた為、少し遅れて追いついた彼女達。

右側から肩を貸す万里谷裕理が私に言った。

「今回ウプウアウトを倒した事で新しい権能を手に入れたと思うけど、恐らく違うでしょうね。」

「確かに『雄牛の権能』を使う時と使わない時とじゃ全然違うからな。

早く病院に連れて行って休ませた方がいい。」

「そうさせてもらおうわ。」

私は体が血で汚れる事を気にする事なく、昴を背中に背負う。

そしてそのままこの場を立ち去ろうとした所でリリイに呼び止められた。

「待て、エリカ……まだ聞きたい事を全て聞いた訳では無いぞ。」

「……手短にお願ひ出来るかしら?」

「先程言っていた準備期間の間に何を企んでいた。」

「企むだ何て人聞きの悪い……唯、日本で活動できる様に地盤固めをしていただけよ。」

「日本での支援者を作っていたという事か……。」

リリイの言う通りだが態々答える必要はない。

今後彼等とどういう関係を築くのか……まだ定かではないのだから……。

「ねえ、エリカさん……日本で出来た支援者って誰なのかな?」

リリイが考え込む中、唐突に問い掛けて来たのは清秋院恵那だった。

しかし私はその問いに答えなかった……いや、答えられなかった。何も言わない私を見て彼女は更に言葉を続ける。

「私達には言えない相手なのかな？」

彼女達の関係は聞いている。

この1年親交があつた事も、清秋院恵那達と幼馴染だということも……。

それに同じ四家同士という事もある……私が口を挟まない方がいいだろう。

「……もしかして沙耶宮家じゃないかな？」

「ち、ちよつと待て、沙耶宮家って馨さんの所じゃないか!!」

「王様には言ったでしょ？沙耶宮家が何か企んでいるかもしれないって……。」

「確かに聞いたけど……。」

「それで、エリカさん……どうなのかな？」

私は静かに首を横に振った。

「その事については何も言えないわ……ご自分で確認して貰えるかしら。」

私達は少しの間視線を合せた。

その時彼女が何を思っていたのか分からないが、瞳が揺れ動いていた。

視線を先に逸らせたのは彼女の方だった……それと同時に深く息を吐く。

「何となく分かつてたんだ……恵那の勘つて良く当たるし……。」

うん、エリカさんからはもう何も聞かないよ。

確かにこういうのって本人から聞いた方がいいしね。」

そう言うとき彼女は口を閉ざした……その表情は何処か悲しそうだった。

そんな彼女を横目に今度こそ歩き出そうとした時、次は万里谷裕理が口を開いた。

「私からも一つ宜しいでしょうか？」

「何かしら……早くして貰える。」

早く昴を病院に連れて行きたい思いから、言葉が強くなってしまった。

それを感じた彼女は謝りながらも、質問してきた。

「す、すみません。」

あ、あの、神藤さんは日本で何をやるおつもりなのですか？」

「・・・それは今話す事では無いわ。」

こんな事になったんですもの、近い内に話し合いの場が持つ心算でいるわ。

それまで待つてくれるかしら？」

「は、はい。」

本来出ればもっと強く問い詰める筈だ。

それをしないのは昴の体の事があるから・・・。

私は「でも・・・」と続けていた。

「でも・・・これだけは言って置くわ。」

昴は純粹に慕っている草薙護堂とは争いたくはないと思っているわ。

勿論私もクラスメイトである貴方達と・・・何より幼馴染であり友でもあるリリイとは戦いたくないわ。」

私の言葉に一番驚いていたのはリリイだった。

柄にもない事を言った事は分かっているが、私の本心でもある。

若干顔が赤くなっていたが、そんな事をおくびにも出さず、今度こそ彼等に背を向ける。

「そろそろ失礼するわ。」

「・・・あ、ああ、また学校でな。」

私は漸くその場を後にする事が出来た。

そして広場を出た所で車に乗る甘粕冬馬と出会え、そのまま病院へ向かったのだった。

S i d e 昴

僕は目を覚ますと、そこは何もない空間だった。

僕は周囲を見渡してみるが本当に何も無い。
全てが灰色に塗り潰されている不思議な空間。

「目覚めたね。」

ここは『生と不死の境界』、簡単に言うと『あの世の直前』みたいな感じ?」

突然声を掛けられ事に驚き、反射的にそちらに顔を向ける。

そこにいたのは小さな女の子・・・綺麗というより、可愛いと言った方が合う子だ。

戸惑いながらも僕も口を開く。

「あの・・・あなたは?」

「私は『パンドラ』・・・あ、ちゃんとした女神だからね。」

息子の顔を見る為に態々『不死の領域』から会いに来たのよ。」
とても楽しそうに話すパンドラさん。

そんな彼女を余所に今言われて気になった事を尋ねる。

「・・・息子って僕の事ですか?」

「そうよ・・・『ママ』って呼んでもいいのよ?」

凄く期待を込められた視線を向けられる。

・・・断れる雰囲気じゃない。

でも『ママ』なんて言った事ないし・・・少し恥ずかしい。

「・・・『お母さん』じゃ駄目ですか?」

恐る恐る問い掛けると、パンドラさんはプルプル肩を震わせながら俯いてしまった。

やっぱり駄目だったかと、不安になって慌てて訂正しようとしたが・・・。

「あ、あの駄目でしたか? 駄目なら『ママ』って・・・。」

「・・・う・・・うわーーーーーい!!」

「うわっ!?!」

パンドラさん・・・もとい『お母さん?』がいきなり飛び付いて来た。

そんな彼女の小さい体を抱き留めながらも、頭には?が浮かんでいた。

「こんなに素直な子が新しい息子だ何て・・・お母さんとっても嬉しいよ。」

「いいよ、いいよ、これからお母さんって呼んでね。」

「わかったよ、お母さん／＼／＼」

自分より小さい子を『お母さん』と呼ぶのに違和感があった。

でも、そう呼ぶと彼女が嬉しそうに笑ってくれるので気にしない事にした。

「それにしても最初の実戦から勝利を掴む何て素晴らしいね、お母さんも鼻が高いよ。」

でも気を付けなきゃ駄目よ。

私と旦那の子供って中々長生きしてくれないのよ。

この間も2人死んじやったし・・・。」

そんな彼女の話に突然頭に知識が浮かんできた。

「っ!?!?・・・神殺しは『エピメテウス』と『パンドラ』の落とし子?」

「おお、その通り、特に私は神殺しの支援者でもあるの・・・気紛れだけどね。」

でもヒントを与える位はするのよ・・・まあ、今回は必要なかったけどね。」

「そうだったんですか・・・でもそうやって気に掛けてくれる人が居るってわかって嬉しいです。」

「本当にスバルは素直で可愛いはね。」

そう言って頭を撫で始めた。

自分より年下に見える人に撫でられるのは流石に・・・恥ずかしい。

「は、恥ずかしいよ。」

「ごめん、ごめん。」

やっとなめてくれた。

今更だけど自分より幼く見える母親ってどう何だろう?

そんな僕の想いとは裏腹に、お母さんは人差し指を立てて話した。た。

「折角会えたんだから1つアドバイスをしてあげようかな。」

神殺しになる様な子は大抵自分の戦い方を弁えている物なの。

今いる子供達も剣の天才だったり、武術の天才だったり・・・色々ね。

だからこれからも自分の戦闘スタイルを貫き通しなさい。」

「・・・自分を貫き通す。」

「そうよ、それが出来れば貴方は世界最強よ。」

「ありがとう、お母さん、これからも頑張るよ。」

とてもいいアドバイスを貰えた。

自分が戦いたい様に戦う。

この言葉を胸に刻んでこれからも頑張つて行こう。

気合を入れ直した僕に「でも・・・」と話を続ける。

「でも・・・ここでの事は地上に帰ると忘れちゃうんだ。

だけど教えた内容は無意識領域に残るから、安心してね。」

お母さんの言葉に少しショックを覚えてしまった。

それに気付いたお母さんは慌てた様子で僕に声を掛ける。

「ど、ど、どうしたの。」

大丈夫だよ、覚えてないけど覚えてるから・・・。」

「・・・ううん、知識の事はいいんだ。

でも・・・お母さんの事も忘れるんだと思うと・・・。」

折角お母さんが出来たのになあ・・・。

覚えていられないなんて・・・寂しいよ。

落ち込んでいる僕をお母さんは優しく抱き締めてくれた。

お母さんの腕の中は暖かくて・・・体だけじゃない、心まで暖めて

くれる・・・そんな気がした。

それは多分、無意識化に彼女が自分をもう一度生んだ母だと認識し

ているからだと思う。

「ありがとう、そんな事言ってくれたのはスバルが初めてだったよ・・・

大丈夫、また会えるから。」

僕はお母さんに抱きしめられている内に意識が徐々に途切れて

行った。

それでも、最後まで包まれている暖かな感触は無くなる事は無かった。

目を覚ますと其処は病室だった。

ベッドの脇にはエリカさんと馨お姉ちゃんの姿が見える。

僕が目を開けた事に気付いた二人は安心した様に微笑んでくれた。

「目が覚めたようね、昴。」

「気分はどうだい？」

体を起こす為に力を入れてみたけど、何処も問題はない。

少し肩と背中に違和感はあるけど、気にせずそのまま体を起こした。

「ご心配をお掛けしました。」

体の方も肩と背中に違和感はありませんが大丈夫そうです。

「なら、良かったわ。」

それにしてもカンピオーネの体って凄いのね。

細かい傷はすぐに完治してしまったもの。」

「護堂さん程早くは無かったけど、凄い回復速度だったね。」

まだ完治してないのは、矢を受けた背中・右太腿・左肩・右腕だけ。

体の至る所で骨が折れたり、罅が入ったりしていたけど、そっちはもう治ってるよ。」

体を確認すると言われた所に包帯が巻かれていた。

言われてみると、背中と左肩だけじゃ無くて右太腿と右腕にも違和感が残っている。

あれだけ痛い思いをしたのに、もうこんなに治ってる何て・・・改めて自分の異常さを再確認した。

確認を終えた僕が2人に顔を向けると、彼女達の表情が真剣な物になっていた。

「昴君に報告する事がある。」

「・・・僕の事ですよね？」

「そうよ、貴方が眠っている間に・・・というより貴方が参戦した時から馨さんが準備を始めたわ。」

「甘粕さんから連絡を受けて直ぐに僕の家と『赤銅黒十字』に連絡を入

れた。

まあ、準備はしてきたからそれ程大変では無かったよ。そして・・・もう発表する準備は出来ている。」

僕の勝手な行動の所為で色々と迷惑を掛けたみたいだ。

表情を暗くさせた僕を見て馨お姉ちゃんは明るく励ましくれた。

「気にする事は無いさ。」

僕の家族もエリカさんの家族も君らしいと笑っていたよ。」

「それでも皆さんには迷惑を掛ける事になってしまいました。」

「そう思うなら私達の王としてこれから頑張って行けばいいわ。」

それに今回の功績を褒める人はいても、怒る人なんていないわよ。

初の神殺しとしての戦闘で勝利して、新たな権能を得て、更に草薙

護堂に貸を作る事が出来たんですもの。」

「そ、そうだ・・・草薙先輩は怒っていませんでしたか？」

あの時は無我夢中だったし、勝てた事は嬉しいけど・・・僕は先輩

の戦いを横取りしちやっただ。

・・・怒ってたらどうしよう。

「そんなこと気にする必要はないわよ。」

彼等も助けられたとは思ったも、横取りされた何て思わない筈だから。

ら。」

「そうだよ、護堂さんは基本的には優しくて常識的な人だから・・・心配

しなくてもいいよ。」

「・・・そうですね、良かったあ。」

ほっと一息ついて再び気合を入れる。

まだ話は終わっていないんだから・・・。

「それで、僕はこれからどうすればいいんですか？」

「さっきも言った通り、貴方の事を発表する準備は整ってるわ。」

後は貴方が一言、言ってくれさえすれば今すぐにも・・・。」

そんな彼女の言葉にすっと目を閉じる。

そして深く深呼吸をすると、真っ直ぐ彼女達を見据えた。

「これからエリカさんと馨お姉ちゃんには沢山迷惑を掛けると思います。」

でも2人の事は僕が絶対に守ります・・・勿論僕を支えてくれる他の皆さんの事も・・・。

だから、これから宜しくお願いします。」

「ええ、もちろんよ。」「こちらこそ、宜しくね。」

2人は力強く頷いてくれた。

その日新たな王の誕生が世界中に発表された。

日本人の高校生がカンピオーネになったと・・・。

草薙王の戦闘に介入して彼の王を獲物を横取りしたと・・・。

僕の事を知っていて報告しなかった『赤銅黒十字』はやはり非難された。

しかしそこは僕の名前を出して貰った。

パオロさん達は渋ったが、僕の所為で彼等が非難されるのは我慢出来なかった。

だから・・・『王の命令』で仕方が無かった・・・そういう風になる様に情報操作をして貰った。

だからかイタリアを始めとしたヨーロッパで僕は『ヴォバン爵の再来』と呼ばれている。

僕はどうせ神殺しだ・・・親しい人に本当の事を知って貰ってれば、それでいい。

しかし日本ではそんな噂は全くと言っていい程流れていない。

勿論沙耶宮家の皆さんが他方に口添えしてくれた事も大きい。

でもそれ以上に僕と先輩の仲が友好的であると、清秋院家が発言した事が大きかった。

馨お姉ちゃんの話では先輩自身が口添えしてくれたらしい。

そして沙耶宮家だが正史編纂委員会から追放されるかと思われた・・・がそうはならなかった。

実際の所、沙耶宮家の人間はその多くが重要な要職に就いている。

その為、そう簡単に追放する事が出来なかったのだ。

それに正史編纂委員会としても、僕と先輩の仲が良好ならば、態々

片方に付く必要が無くなった事も大きい。

でも、馨お姉ちゃんは今から僕を傍で支えると言って、東京分室室長の座を退いた。

現在『赤銅黒十字』『沙耶宮家』には僕に関する情報を少しでも得ようと多方から電話が殺到しているらしい。

予想はしていたみただけど、その数が想像以上だったみたいで対応に参っているそうさ。

そして僕の事を発表した数日後・・・僕が病院を退院し、エリカさん達と家に到着した時の事・・・。

僕達が家に到着すると、其処では荷物の運び入れが行われていた。

「えっと・・・何事ですか？」

「これ、もしかして馨さんかしら？」

「流石エリカさん、良くわかったね。」

東京分室室長も辞めたし、これからは堂々と昴君と一緒に居られるからね。

という事で、今日からお世話になるよ。」

そう言っただけ何も無く、家の中に入って行った馨お姉ちゃん。

それに多少不機嫌になりながらも、諦めた様に続くエリカさん。

僕は突然の事に暫くの間その場で呆然としていたのだった。

第24話 会談

S i d e 昴

あの戦いから既に1ヶ月：：僕は落ち着いた日々を過ごしていた。7月も間近に迫り日に日に気温が上がる中、今日は梅雨明け最後だという雨が降っていた。

気温はそれ程上がっていないが、ジメジメとした梅雨らしい一日だ。

僕は家の道場に居る。

正面には正座で座る2人の姿：：エリカさんと馨お姉ちゃんだ。

2人は真剣な表情で目を閉じ、意識を集中させ、体に『氣』を纏わせている。

・・・エリカさん達の間では『魔力』や『呪力』と言うらしい。

『神道流』には幾つかの決まり事がある。

その中に神道流の神髄ともいえる『氣』を使う型は神道流・当主に認められなければ教わる事が出来ないという物がある。

認められる条件は幾つかあるが、その中でも一番厳しいのは『氣』を自由自在に操れなくてはいけない事だ。

それが出来る様になって初めて『神道流』の神髄を教わる事が出来る。

その『氣』のコントロールの基準が厳しく難しい為、型の習得まで至った人を僕は知らない。

真剣な表情で『氣』を操っている2人を見て改めて自分が規格外だったと実感する。

身内だから最初から一般向けの動きと共に『氣』の使い方を見せて貰えた。

僕は周りの大人達を横目に普通なら数十年・・・いや、一生を掛けて習得する物を1年程で習得したのだ。

お爺ちゃんに「才能がある」と凄く褒められていたから、もつと稽古に励んで行った事を覚えている。

「今日はこの位にしましょうか。」

僕の声に2人は深く息を吐き、体の緊張を解いた。

そんな2人に用意していたタオルを手渡しながら、指摘していく。

「馨お姉ちゃんは流石ですね。」

でも時間が経つに連れて少しコントロールが甘くなっています。

其処が改善できれば、次のステップに進む事が出来ますよ。」

「そうかな？」

でもそう言ってくれて嬉しいよ。」

馨お姉ちゃんは汗を拭いながら嬉しそうに笑みを浮かべた。

「エリカさんも最初の頃に比べたら凄く良くなっています。」

一度に正確に操る事の出来る『氣』の量も増えて来てますし、この調子ならすぐに馨お姉ちゃんに追い付けますよ。」

「自分の事は自分が一番わかっているわ・・・私なんてまだまだだよ。」

エリカさんは悔しさを滲ませながら首を横に振った。

彼女はその悔しさからかタオルの持つ手には力が籠っていた。

僕は力の入った彼女の手を取ると、優しく話し掛けた。

「そんな事ありません。」

エリカさんが稽古を始めて3か月・・・道場に通う誰よりも早いペースで上達しています。

大丈夫です、当主である僕が保証します。

きつとパオロさん達が今のエリカさんを見たら絶対に驚きますよ。」

「・・・ありがとう、昴。」

でも、もつと頑張らなきゃ。」

エリカさんの顔に笑顔が戻った。

その笑顔が凄く輝いて見えて、とてもドキドキしてしまった。

「皆さん、朝食の準備が整いましたよ。」

僕を我に返らせたのはアンナさんの声だった。

自分のしていた事に顔が赤くなり、慌てて握っていたエリカさんの手を放す。

エリカさんは少し残念そうだったが、それでも嬉しげな笑顔のまま立ち上がった。

「昴、今日も稽古を付けてくれてありがとう。」

とてもいい勉強になったわ。」

そうお礼を言うと、最後に僕の頬に口付けをして道場から出て行った。

馨お姉ちゃんが来てから過度のスキンシップは控える様になったエリカさんだったので、突然のキスに更に顔が赤くなる。

そうして固まっていると背中から誰かに優しく抱き締めら、それと同時に拗ねた様な口調で囁かれた。

「・・・エリカさんにだけ優しく手を握ってあげる何て狡いなあ。」

「か、馨お姉ちゃん!？」

「僕も昴君の婚約者だって事を忘れないでくれよ。」

馨お姉ちゃんはそう言うのとエリカさんとは反対の頬にキスをして僕から離れた。

朝から少々刺激の強い出来事に僕は再びアンナさんが呼びに来るまで暫し呆然としていたのだった。

時間は流れて、夕食の時間。

今日は珍しく全員が食卓に付いている。

普段は放課後になると各自の用事があったりするので夕食時に全員が揃う事はあまりない。

エリカさんは日本でのコネクションを作る為に今でも色々と動いてくれている。

その為夜遅い時間に返って来る事も多い。

馨お姉ちゃんは東京分室・室長の座を退いたとは言え沙耶宮家次期

当主としても、媛巫女としても学ばなくてはならない事がまだまだ沢山あるらしく、家を空ける事も珍しくない。

それでも朝食は全員で取る様にしている。

折角同じ家で暮しているのだからと、僕の我が儘を聞いてくれたのだ。

2人が僕の為に動いてくれていた事を知っていたから言い辛かったが、2人共嬉しそうに賛同してくれた。

久しぶりの皆での夕食に少しテンションが高くなり、口数も多くなっていた。

現在の話題は今日のお昼の事だった。

「そう言えば先輩はどうしたんですか？」

「ああ、彼の事ね。」

「何かあったのかい？」

「草薙先輩が最近毎日お昼と一緒に食べる様になっていたのに今日は来なかったんです。」

「授業が終わった後すぐ彼の携帯に電話が掛かって来たのよ。」

まあそのお蔭で私は久しぶりに昴と2人きりで食べられたから嬉しかったわ。」

綺麗な箸使いでご飯を口に運びながら、表情を緩めるエリカさん。

逆に馨お姉ちゃんは少し羨ましそうだ。

「そ、それでその電話が何だったのか分かったんですか？」

「電話に出る時から不機嫌になっていたから相当嫌っている相手みたいな。」

教室に戻った時もまだ不機嫌そうだったから聞けなかったわ。

「一体誰だったのかしらね。」

「それなら予想は付くよ。」

「馨お姉ちゃんは電話の相手がだれか分かるんですか？」

「普段温厚な彼が電話だけで機嫌が悪くなる相手なんて数が限られるよ。」

それにあの方もそろそろ我慢出来ずに動き始めたんじゃないのかな？」

「馨さん……もしかして。」

「多分『イタリアの盟主・サルバトーレ卿』で間違いないだろうね。あの方は根っからの戦闘狂だから。」

新しく神殺しになった昴君について護堂さんに聞こうとしたんじゃないのかな?」

「それであの人機嫌が悪かったのね。」

エリカさんは納得したみたいだけど、僕はさっぱりだ。

「どういう事ですか?」

「草薙護堂はサルバトーレ卿を毛嫌いしてるのよ。」

けどサルバトーレ卿は彼の事をライバルだと思っていて、とても気に掛けてるって聞くわ。」

「平和に暮らす事が身上の護堂さんにとって彼は厄介者以外の何物でもないからね。」

彼等は今まで2回ほど衝突した事があるけど、その2回共護堂さんが勝っているよ。」

確かサルバトーレ卿は草薙先輩よりも早く神殺しになっていた筈。

自分より多くの経験をしている相手に全勝している何て……。

「やっぱり先輩は強いんですね。」

「そうね、この1年で1番戦闘を経験して成長したのは彼でしょうね。」

「護堂さんは勝負になると手段を選ばない人だからね。」

サルバトーレ卿の様に剣技で来ると分かっている人よりも戦い難いと思うよ。」

まあ、彼と戦う未来が来ない事を願うしかないね。」

「大丈夫ですよ、この間ちゃんと契約したじゃないですか。」

不穏な会話をする二人に僕は自信を持って答えた。

時間は僕が退院した翌日まで遡る。

先輩側からの要請もあり、僕達はすぐに草薙先輩達と話し合いの場を持った。

会談の場は沙耶宮家の別邸。

「それにしても神藤が俺と同じだった何て今でも信じられないな。

でも助けてくれてありがとな、御蔭で命拾いしたよ。」

「気にしないで下さい。」

僕も今まで黙っていてすみませんでした。」

僕達はいつもと変わらない雰囲気では話を始める事が出来た。

まあ先輩の後ろに控えるクラニチャール先輩はずっと険しい表情を浮かべていたけど……。

僕達の会話にひと段落ついた所で本題を切り出したのはクラニチャール先輩だった。

「神藤昂、お前の事はある程度エリカから聞いたが、今一度詳しい説明をして貰ってもいいだろうか。」

「昂の事はあの時話した事が全てよ。」

それに昂に付いての報告書にも同じ話が書いてあったでしょ。

態々時間を無駄にする話をする必要はないわ。」

「それじゃあ恵那から馨さんに質問……どうして王様を裏切ったのかな？」

エリカさんに論破され押し黙ったクラニチャール先輩が変わって清秋院先輩が口を開いた。

彼女は鋭い視線で馨お姉ちゃんを睨み付けている。

しかし当の本人である馨お姉ちゃんはしれっとした態度で答えた。

「裏切った何て人間きの悪い。」

僕が護堂さんを手伝っていたのは、正史編纂委員会東京分室室長という立場だったからだよ。

別に僕個人が護堂さんに忠誠を誓った訳じゃない……君達と違ってね。」

この言葉には今まで静観していた万里谷先輩も表情が変わる。

一瞬の間を置いて先輩達の驚きの声が響き渡った。

「神藤昂、お前はエリカと婚約しているのではなかったのか。」

「・・・神藤さん、見損ないました。」

「何時の間に・・・恵那だってまだ王様からプロポーズされてないのに・・・。」

「・・・。」

クラニチャール先輩と万里谷先輩からは非難の視線が・・・。

清秋院先輩からは羨ましそうな視線が・・・。

草薙先輩は話について行けてないのか放心している。

「まあまあ落ち着いて。」

僕は子供の頃に神道流の道場に通っていた事があってね、昂君とは幼馴染なんだよ。

当時から昂君の事が好きだった僕は、お爺様に泣きながらその事を言ったらいつの間にか婚約者になっていたんだ。」

「エリカはそれで納得しているのか。」

「私達の中でこの事はもう決着が着いているわ。」

私達二人共生涯を掛けて昂を傍で支える覚悟と想いがある。

だったら態々いがみ合う必要はないわ。

昂も王に為ったのだし、女を2人侍らせる位やって貰わなくちゃ。

それにそつちも似た様なものでしょ?」

暗に僕だけが非難される謂れはないと反論するエリカさん。

その指摘に先輩が顔を赤くしながら、慌てて口を開いた。

「前にも言っただろ、皆とはそう言うんじゃないって。」

「・・・ほんと貴方の何処がいいのか全然分らないわ。」

草薙先輩の言葉に呆れるエリカさん。

クラニチャール先輩達は何処か寂しそうに見えた。

「この話はこれ位にして、そろそろ本題に入ろう。」

何とも言えない空気を変えたのは馨お姉ちゃんだった。

それに乗っかる形でクラニチャール先輩も続く。

「沙耶宮馨の言う通りだな。」

草薙護堂、どうされますか？」

いきなり話を振られた先輩は首を傾げる。

「どうするって・・・何の話だ。」

「はあ・・・ここに来る前に説明した筈です。」

今回の会談は我々と彼等とがどう付き合って行くか話し合う場だと。」

「あつ、ああそうだったな。」

・・・と言われてもなあ・・・神藤達はどうするつもりなんだ？」

先輩からの問い掛けにちらつとエリカさんを見ると黙って頷き返してくれたので、事前に決めていた内容を話す事にした。

「僕は可能な限り神様やそれに類する災害に対処していきたいと思っています。」

勿論僕はまだ学生なので『赤銅黒十字』の皆さんや『沙耶宮家』の皆さんに助けて貰いながらになると思いますけど・・・。」

「へえ・・・そんな事を考えていたのか、凄いな神藤は。」

「先輩はどうされるんですか？」

感心している先輩に今度は僕が問い掛けると、先輩は間髪入れず答えた。

「俺か？俺の考えはずっと変わらない。」

俺はこれからも平和に暮らしたと思ってるし、もう厄介事はごめんだよ。」

「なら今後日本で起こりうる全ての神の対処を昂に任せて貰えると言う事でいいのかしら。」

先輩の言葉にエリカさんは悪魔の様な笑みを浮かべると、間を置かず問い掛けた。

けど素早い反応を見せたクラニチャール先輩が草薙先輩が答える前に割り込んできた。

「ふざけるなつ、そんな事許される訳が無いだろう。」

「黙りなさいリリイ、私は草薙王に聞いているのよ・・・それでどうなのかしら。」

「ああそれで構わないよ、好きにすればいい。」

神藤に押し付ける形になって心苦しくは思うが、俺としては厄介事が無くなって万々歳だ。」

言質をとったからか、エリカさん達の顔がすごく笑顔だ・・・はつきり言ってる怖いです。

逆にクラニチャール先輩達は険しい表情をしている・・・満足そうなのは草薙先輩だけだ。

そんな彼に万里谷先輩達が声を掛ける。

「本当に宜しかったのですか、護堂さん。」

「厄介事を全部引き受けてくれるって言っているんだし、願ったり叶ったりじゃないか。」

「考えが短絡的過ぎます。」

「そうだよ、王様。」

向こうは今後一切日本で起こる神に纏わる出来事には手を出さなってるんだよ。

それでもいいの?」

「そのどころが問題なんだよ。」

「大問題です、考えても見て下さい。」

これから起こりうる全ての出来事ですよ。

その中には期せずして護堂さんが持ち込んで来てしまう出来事もあるでしょう。

例えば未だ決着のついていない『あの神』との戦いもそうです。」

その言葉に草薙先輩の表情が変わった。

「そういった事が起こった際、全て神藤さんに任せると・・・貴方はそう仰ったんですよ。」

「それは・・・。」

「だから言ったのです、考え方が短絡的すぎると・・・。」

いい加減王としての自覚をお持ち下さい。」

「・・・。」

草薙先輩は何も言い返す事が出来ず、等々口を閉ざしてしまった。

其処にエリカさんがわかっていながら、凄くいい笑顔で問い掛ける。

「どうかしたのかしら?」

「・・・エリカ、もし良かったらさつき言った事を取り消してもいいか。」
「あら、貴方は平穏な暮らしがしたいから、全部私達に任せてくれるんじゃないかったの?」

「いや・・・それは・・・。」

「エリカさん・・・彼には今まで日本を守ってきた実績があるんだ。」

それに新参者は僕達の方なんだよ?

幾ら昂君の庇護を受けているとは言ってもそれ以上は不敬になるよ。」

意地の悪い事を言うエリカさんを警お姉ちゃんが窘めると、エリカさんは態とらしく息を吐いた。

「・・・それもそうね、だったらこう言うのは如何かしら。」

まず前提としてあなたは平穏な暮らしをしたい・・・そうよね?」

「あ、ああ・・・。」

「だったらこうして仕舞いましょう。」

何か事件が起こったら双方相手側に連絡を入れるの。

そして連絡を入れた方が責任を持って事件に対処する・・・どうかしら?」

「・・・それだと幾つか問題点があるんじゃないか?」

「そんな事は分かってるわ。」

でもこれが一番蟠りのない方法だと思っただけ・・・違うかしら?」

これなら貴方は戦いたい時だけ戦えるし、私達も貴方に振り回されずに済む。」

エリカさんの提案に草薙先輩はクラニチャール先輩達と相談したりして吟味していく。

暫く待っていると考えが纏まったのか僕達の方に向き直った。

「わかった、その提案に乗ろう。」

「だったらもっと細かく案を詰めましょうか。」

そうして双方の案を取り入れながら僕達の間で交わされた契約はこうだ。

1. 日本に置いて何かしらの事件が起こり、それに関わった際は必ず相手側に連絡を入れる。

2. 連絡した側が責任を持って事件に対処し、相手側は基本的に干渉しない。

3. もし双方が同じ事件に関わっていた場合、先に連絡した方が事件に対処する。

4. 連絡を受けた際不満があれば交渉する権利がある。しかし最終的な決定権は連絡した側にあり、必ずその指示に従う事。

5. 以上の内容を反故にした場合、会談の場を持ち相手側に1つ要求する事が出来る。違反側はその要求を断る事が出来ない。もし要求を断る事があった場合、決闘を持って雌雄を決する。

最後は何とも物騒な事になってしまった。

僕と先輩は必要ないと言ったのだが、エリカさん達が念の為だと書き加えた。

・・・決闘が起こる事態にならない事を祈るしかないかな。

契約内容も決まり、後はお互いの確認に入った時だった。

先輩が突然僕に真剣な表情で声を掛けて来た。

「神藤・・・最後に1ついいか。」

「何ででしょうか。」

「もし大切な人の命が掛かっていたとしても、お前はこの契約を守れるのか。」

もしエリカさんや馨お姉ちゃんの命が掛かっていたら・・・。

先輩の問い掛けに思わず想像してしまう。

2人の事を失う恐怖と、そんな事態を招いた自分自身に対する怒りが沸き起こる。

僕はそんな感情を押し殺し、深く息を吐き真つ直ぐ先輩を見据える。

「・・・守ります。」

「自分で助けたいとは思わないのか。」

「勿論自分で助けたいです。」

でも・・・それが契約を反故にしている理由にはなりません。
それに先輩になら任せられます・・・信頼してますから。」

「・・・そうか、ありがとな神藤。」

先輩は目を見張ったが、最後は嬉しそうにお礼を言ってくれた。
そして先輩は僕に手を差し出す。

僕はその手をしっかりと握り返した。

「これから宜しくな。」

「はい、宜しくお願いします。」

「あの人は、その場その場で考えを変える人だからなあ。」

「警戒するに越した事は無いのよ。」

「・・・わかりました。」

不満そうな僕を見て2人は苦笑していた。

と、話題が切れた所でエリカさんが思い出した様に口を開いた。

「それよりも昴、もうすぐ夏休みだけど何か予定はあるのかしら?」

「夏休みですか?」

いえ、まだ何も決めていませんけど。」

「そう、ならそのまま予定を開けて置いて貰えるかしら。」

「何かあるんですか?」

「折角の夏休みなのよ・・・有効的に使わなくちゃね。」

大丈夫よ、悪いようにはしないから。」

そう言うエリカさんの顔はとても楽しそうだった。

欧州での戦い

第25話 思わぬ遭遇

S i d e 昂

季節も夏に移り変わり7月の下旬、僕も含めた世の学生は夏休みに突入した。

そして僕は今、飛行機の中にいる。

何故こうなったかと言うと、それは昨日の事だ。

僕が神殺しになった当初は事情により休んでいた道場だったが、夏休みを機に再開した。

そして1日の殆どを道場で過ごす様な生活を送っている僕。

久し振りに道場を開けた事と、夏休みだという事もあり多くの学生達が足を運んでくれるのだ。

彼等の相手をしていると気付かない内に結構な時間が経ち、いつの間にか夕方になっていく日もあった。

勿論夜になると魔術関係者の人達が門を叩いて来る。

当初は殆どの人が神殺しになった僕を敬遠して来なくなった。

来てくれたのは僕が道場に出始めた頃から可愛がってくれていた常連の方達。

理由を尋ねると「昂君は昂君だからね」と昔の様に優しく頭を撫でてくれた。

恥ずかしくもあったが、それ以上に皆さんの変わらない態度が嬉しかった。

数日も経てば常連の方達が声を掛けてくれたのか、皆さん道場に来

てくれる様になっていた。

最初は何処か他人行儀だったり、畏怖の表情を浮かべていたりしていた人達も暫く経てばいつも通りに戻っていた。

そんな生活を一週間程送っていたある日の事。

その日は珍しく2人共夕食の時間には帰宅していた。

稽古後という事もあってよく進む箸を手に、エリカさん達と他愛のない会話で盛り上がる。

楽しい食事も終わり、アンナさんが入れてくれた美味しいお茶に舌鼓を打っている時だった。

席を立とうとしていたエリカさんが突然思い出した様に話し掛けていた。

「そうだ、忘れてたわ。」

ねえ昴、夏休みの間に一度イタリアに戻ろうと思うのだけれど……一緒にどうかしら?」

「イタリアですか? パオロさん達にも御挨拶したいですし、僕は全然構いませんよ。」

「なら良かったわ。」

じゃあ、出発は明日だから準備をしておいてね。」

そう言い残し、エリカさんは笑顔で部屋に戻って行った。

ど、ど、どういう事?

さっき明日って言わなかった!?

何かの聞き間違いだよね?

突然の事に固まってしまった僕だったが、我に返ってすぐにエリカさんの所に向かった。

けど既に部屋の電気は消えていて、起こしてしまうのも憚られたので事情を知っていきそうな馨お姉ちゃんの前に向かう事にした。

部屋に居なかった馨お姉ちゃんだったが、御風呂上がりだったのか台所にてノースリーブに短パンとラフな格好で冷蔵庫の中を漁っていた。

「馨お姉ちゃん、聞きたい事があるんだけど……。」

「どうしたんだい、こんな時間に。」

僕に気付いた彼女は手に水を持って振り返った。

風呂上りで赤く上気している肌、短く切り揃えられた髪は軽く湿っていて何とというか・・・とても扇情的だ。

それに寝間着の代わりなのか、薄着だから下着の有無もわかってしまふ。

どういう事かというと・・・む、胸が・・・ってそうじゃなくて！

僕はなるべく馨お姉ちゃんの方を見ない様に注意しながら問い掛ける。

「馨お姉ちゃんは知ってたの。」

明日からイタリヤに行くって事。」

「その事なら前々から決まっていたじゃないか。」

今更何を言っているんだい。」

「いったい何時決まったの。」

僕さつき初めてエリカさんから聞いたんだよ。」

「さてはエリカさん、君を驚かそうと思って黙ってたな。」

だからあの時あんなに驚いていたのか。」

そう言う馨お姉ちゃんだが、彼女の顔も笑っている。

絶対に彼女もエリカさんと一緒に態と言わなかった口だ。

「もう、笑い事じゃないよ。」

それにどれ位滞在するかも聞いて無いし・・・今から準備なんて間に合わないよ。」

「ごめん、ごめん。」

ほら、僕も手伝ってあげるから。」

その後、馨お姉ちゃんに手伝って貰いながら急ぎ旅行の準備を始めた。

日程についてもその時教えて貰ったが、残った夏休みの殆どを向こうで過ごす事に驚いた。

それと同時に門下生の方々に道場を休むと伝えられない事に気付く。

連絡しようにも既に夜遅い時間。

どうしようか悩む僕だったが馨お姉ちゃんは「心配いらぬ」と言ってくれた。

「此処の門下生の人達の殆どは魔術関係者だからね。

委員会の方に顔を出せば誰かしら会えるんだ。

だから僕の方で明日から休む事は伝えて置いたから大丈夫だよ。」

「でも、学生の人達には……。」

「そっちはアンナさんが帰り際に伝えたと言っていたよ。」

その言葉に僕は思わず準備の手を止めてしまった。

突然キスをして来たり、朝起きたらベッドに潜り込んでいたり、僕の理性を削って来る二人とは違って、いつも穏やかで優しい（ちよつと天然ではあるけれど）彼女にまで内緒にされていた事にショックを隠せない。

そ、そんな、『我が家の良心・アンナさん』まで旅行の事を内緒にされていた何て……。

衝撃の事実を知りショックを受けながらも準備を続け、何とか終える事が出来た。

かなり遅い時間になってしまったから早く寝よう。

そう思つてベッドに足を向けると、そこには穏やかな寝息を立てている馨お姉ちゃんの姿があった。

「……う、うそ。」

確かに準備が終わる頃から馨お姉ちゃんと言葉を交わしていなかったけど……まさか寝てるとは思わなかった。

呆れながらも静かに眠る馨お姉ちゃんに視線を向ける。

いつもは凛々しくて綺麗で格好いい馨お姉ちゃんだけど、寝顔からは保護欲を掻きたてる様な可愛らしさも垣間見える。

普段と違った表情に僕の胸は高鳴った。

まじまじと見入ってしまい、揚句には整った吐息を零す口元に視線が行ってしまう。

あの柔らかい感触を思い出して、無意識に唾を飲み込んでいた。吸い込まれそうになった僕だったが、何とか我に返りベッドから距

離を取ろうとしたその時だった。

突然腕を掴まれベッドに引きずり込まれたのだ。

突然の事に反応出来ず、為すがままにされた結果……僕は馨お姉ちゃんの胸に抱えられ、彼女の抱き枕になっていた。

目の前には慎ましくも柔らかい胸。

足にはすべすべな生脚が絡みついている。

抱き締められている事で全身に感じる女性特有の柔らかかな感触に、鼻腔を擦る甘い香り。

その全てが僕の理性を凄まじい勢いで削っていた。

本能に任せて襲い掛かってしまいそうなこの状況の中で、それを止めたのはぼつりと零れた馨お姉ちゃんの言葉だった。

「……すばる君……僕は……ずっと君の……味方だから……すう……」

囁かれる様に零れたその言葉に本能に染まりそうだった僕の心は、暖かな気持ちに上書きされた。

そして夜遅かった事もあり、安心に包まれた僕はそのまま微睡みの中へと落ちて行った。

「……ありがとう、馨お姉ちゃん。」

「さあ、行くわよ。」

大きな音と共に掛けられた声に驚いて目を覚ました僕。

周囲を見渡すといつも朝が弱い筈のエリカさんが、完璧な姿で立って居た。

気付けば馨お姉ちゃんは居なくなっているし、僕は急かされるままに準備を始め、準備を終えたらそのままエリカさん達に連れられイタリア行きの飛行機に乗ったのだった。

馨お姉ちゃんだが、僕より先に起きて準備を始めていたらしい。

僕の事も一緒に起こしてくれたら、あんなに急がなくて済んだのに。

そんなこんなで飛行機に乗った僕だったけど、今とても眠いです。睡眠時間が足りていない僕はフライト中少し寝ようと考えていたけど、いつもよりテンションの高いエリカさん達が話し掛けて来るから全然寝られなかった。

旅行が楽しみなのは僕も一緒だけど・・・少しでいいから寝させて欲しかった。

そんな淡い願いは届けられる事は無く、睡眠は取れぬまま飛行機はイタリアに到着した。

「さあ、まずは『赤銅黒十字』に行くわよ。」

「はい。」

「僕は初めてだから、とても楽しみだよ。」

エリカさん先導の下、僕達は空港に着いたその足で『赤銅黒十字』へと向かった。

ちなみに僕の眠気は天元突破され、現在絶好調だったりする。

「流石イタリア随一の大結社、立派だねえ。」

表向きは立派に金融業を営む『赤銅黒十字』は大きなビルを丸々使用している。

そのビルを見上げながら馨お姉ちゃんが零した言葉にエリカさんが微笑む。

「あら、ありがと・・・じゃあ、行きましようか。」

僕なら尻込みしてしまいそうな立派なビルにエリカさんは堂々と入る。

着いて入れば皆エリカさんに気付き頭を下げていた。

一般の社員にも認知されているエリカさんに感心しながら、エレベーターに入り込む。

『赤銅黒十字』では昴君の事はどう認知されているのかな？」

「叔父様達含め大騎士の方達とは以前滞在していた時に会っているから問題ないわ。」

問題はそれ以外の騎士や、騎士見習いの子達かしらね。

昂の気持ちを汲んで叔父様達も行動しているだろうから、末端まで情報を共有してはいないんじゃないかしら。」

「もしそうだとしたら『昂君Ⅱ魔王』だと思われる可能性があるね。」

「うっ・・・自分で言った事ですけど、想像しただけでちよっと精神的に来そうですね。」

「そんなに心配しなくて大丈夫よ。」

今日から一ヶ月も近くに居れば噂がデマだったと皆わかる筈よ。

叔父様達もそう考えたからこそ、余計な口出しをしないのだと思うわ。」

そんな話をしている内にエレベーターは到着したのだが、どうやら様子がおかしい。

エレベーターを降りた先では幾人もの人が忙しなく行き交っている。

何人かはエリカさんを見て頭を下げたけど、とにかく忙しそうだ。

そんな彼等呼び止める事も憚られた僕達は以前使っていた部屋に向かった。

「少しここで待っていて頂戴。」

この騒動の原因を聞きに行く為だろう、エリカさんはすぐに部屋を後にし、残された僕達はエリカさんが戻って来るまでゆっくりする事にした。

「いい部屋だね、流石は『赤銅黒十字』と言った所かな。」

「はい、前回も思いましたが凄く綺麗な部屋です。」

でもここまで豪華だと、何だか逆に気を使ってしまうます。」

不埒で備え付けられていたソファに腰掛けながら、ゆっくりとした時間を過ごす。

その後30分程経った頃にエリカさんが戻ってきた。

「ごめんなさい、少し遅くなったわ。」

知り合いを見つけたから事情を聴いて来たのだけれど・・・どうもサルバトール卿がこの辺りに潜伏しているとアンドレア卿から連絡が来たそうなの。」

「サルバトール卿が!？」

「確か『剣の王』と呼ばれている神殺しの1人・・・でしたよね。」

エリカさんは僕の言葉に頷くと続けた。

「恐らく新たな同胞に興味が湧いて、昴と繋がりを持っている『赤銅黒十字』を見張っているという事らしいわ。」

その所為で現在結社を上げてサルバトール卿の搜索中。

だから大騎士を始め、叔父様も私の両親も今席を外しているの。」

「・・・大変な事になってるんですね。」

詳しい事情は分からないが、大きな騒ぎになっている事は分かった。

そんな僕の隣で「僕も何か手伝おうか？」と言う馨お姉ちゃんの申し出にエリカさんは首を横に振った。

「大丈夫よ、この位私達の手で何とかするわ。」

でも・・・そうね、もし良かったら貴方達少し外を歩いて来ないかしら?。」

「こんな時に僕達だけそんな事をする何て出来ませんよ。」

「心配しないで、ちゃんと考えがあつての事よ。」

彼女の言葉に首を傾げると、エリカさんは順を追って説明してくれた。

「昴はサルバトール卿にまだ顔が割れていないわ。」

それを利用してサルバトール卿を探して来て欲しいの。」

昴なら持ち前の鋭さで一目見ればわかるだろうし、馨さんはサルバトール卿の顔を知っているしね。」

「そう言う事でしたか。」

「序に観光もして来るといいわ。」

前回は色々あつてゆっくり見て回れなかったのだから、丁度いい機会よ。」

そう言ったエリカさんは優しく微笑んでいた。

此処まで言われ、外に行く大義名分まで与えられたのに断るのは逆に失礼だ。

馨お姉ちゃんも頷いてくれたので、エリカさんの優しさに甘える事にしよう。

「分かりました、少し外を歩いてきますね。」

「何か分かったらすぐに連絡するわ。」

貴方達もサルバトーレ卿を見かけたら連絡を頂戴。

それじゃあ2人共、宜しくね。」

そうして僕達はエリカさんに見送られて結社を後にした。

外に出た僕達はゆっくりとした歩調で進みながら、これからの事を話していた。

「何処に行きましようか。」

「うくん、僕もローマに詳しい訳じゃ無いからなあ。」

僕が前回来たのは姫巫女の修行の時だし、その時は修行ばかりで全然観光できなかったからね。」

「それならローマの有名観光地を回りませんか？」

折角イタリアに来たのに、見逃す何て勿体無いですよ。」

「ハハハっ、昂君楽しそうだね。」

「・・・確かに結社の皆さんに申し訳なく思っています。」

でも折角エリカさんが気を利かせてくれたんですから、楽しまないとそれこそ失礼ですよ。

それに馨お姉ちゃんと2人で出掛けるのって、凄く久し振りだから・・・その、楽しいんです。」

少し恥ずかしそうに零した言葉に馨お姉ちゃんは一瞬きよとんとしたが、次の瞬間嬉しそうに顔を綻ばせた。

「実を言うと僕もこの状況を凄く楽しんでるんだよ。」

この旅行中、昂君と2人切りで過ごす時間何て出来ないと思っただからね。

でもこうしてエリカさんが時間をくれたんだ、一緒に楽しもう……
勿論頼まれ事も忘れずにね。」

ウインクしながら最後に付け加えた馨お姉ちゃんは僕に手を差し出す。

少しばかり恥ずかしかったが、僕はその手をしっかりと握り返した。

その後僕達は色々な所を見て回った。

サンタ・マリア・マツジョーレ大聖堂に、去年草薙先輩が破壊し現在再建中のコロッセオも見に行った。

悪戯心で先輩に工事中の写真を撮って送ってあげた。

そして良い時間になった頃、最後にトレビの泉へとやって来た。

「綺麗な所ですね。」

「ああ、本当に綺麗だ。」

一頻り感動した後は、恒例のコインを投げ入れたりして大いに楽しんだ僕達。

そろそろ帰ろうかと2人で話していた時だった。

「あれ？財布が無いな……何処かに落としちゃったのかな。」

「大丈夫かい、お客さん。」

そんな会話が耳に入った。

声の方に視線を向けると、屋台のジュエリート店で困り事があった様だ。

お客さんの服装は場所に全然合っていない派手な色のアロハシャツを着た青年だ。

そして肩には筒状の入れ物を担いでいる。

どうやら彼は財布が無い様で、頻りにポケットの中を漁っている。

僕は何故か彼から目が離せなくて、困っている様だし僕は声を掛ける事にした。

馨お姉ちゃんにその旨を伝え、駆け出す。

後ろから「ち、ちよつと待って」と呼び止める声が聞こえた気がしたけど、その時には既に声を掛けていた。

「どうかしましたか？」

「ん？日本人・・・観光客かな？」

「いや、ちよつと財布を無くしちゃってね、困ってたんだよ。」

「僕で良ければ、お金貸しますよ。」

「ホントに！」

「ありがとう、助かるよ。」

この時初めてこの青年と目が合った。

彼はとても整った顔をしていて、俗にいうイケメンの部類だろう。

そして彼と目を合わせてしまったが故に気付いてしまった。

この人っ!?

僕は不自然にならない様に視線を逸らせ、財布を取り出す。

「これだけあれば足りませんか？」

「十分だよ・・・いや、日本人はやっぱり親切だね。」

彼は僕から受け取ったお金をお店の人に渡して精算をする。

その時後ろから「やっと見つけたぞ」とスーツを着た男性が駆け寄って来た。

彼は逃げ出そうとしたが、男性がその前に肩を掴むと諦めた様に溜息を吐いた。

「あゝああ、もう見つかったか。」

「本当にいい加減にしろ、毎回毎回・・・。」

スーツを着た男性は凄く怒っている様で、その怒りが今にもオーラとなって見えそうな勢いだ。

でも、怒られている人は全然堪えていない・・・と言うより聞いていないみたいだ。

すると、今まで怒りが口から零れていた男性が僕に気付いた。

「おい、この子は？」

「この子は困っている僕にお金を貸してくれたんだ。」

「はあ・・・大変ご迷惑をお掛けしました、これで足りるでしょうか。」

男性は財布を取りだし、僕にお金を差し出す。

僕は先程の怒った彼を思い出して、思わず受け取ってしまった。

「それでは私達はこれで・・・おい、行くぞ。」

お金を受け取った僕に頭を下げると、男性は青年の首元を掴み、引き摺りながら歩き出した。

「ち、ちよつと、もう逃げないから。」

あつ、助けてくれてありがとね。」

そうして2人は嵐の様に去って行った。

2人が見えなくなると馨お姉ちゃんが僕の所に歩み寄って来た。

「大丈夫かい、昴君。」

「はい、大丈夫です……ちよつとお金を貸しただけですから。」

「ならいいんだけど……それよりも……。」

馨お姉ちゃんの真剣な表情に、僕は頷いた。

「うん、分かっています。」

目が合った時に気付きました……あの人がサルバトーレ卿……

『剣の王』ですね。」

「流石に鋭いね……そうだよ、あの方が此処イタリアに君臨する神殺し『剣の王』サルバトーレ・ドニ様だ。」

……でも、びつくりさせないでくれ。」

突然卿の所に向かうものだから僕は気がじゃなかったよ。」

「す、すみません……あの人がサルバトーレ卿だと思ひもしなかったの。」

「はあ……でも、何事も無くて良かったよ。」

向こうは昴君の事に気付いてなかったみたいだしね。」

かなり心配を掛けたみたいで、馨お姉ちゃんは少し乱暴に僕の頭を撫でて来た。

僕も結構危険な橋を渡っていた事に気付いたので、暫くの間我慢した。

「エリカさんと連絡が付きませんね。」

気を取り直した僕達は、早速エリカさんに連絡を取ろうとしていたのだが、一向に連絡が付かなかった。

僕もパオロさん達に電話をしてみたが全員繋がらない。

「・・・何かあったんでしようか？」

「さつきサルバトーレ卿を連れて行ったのは『アンドレア・リベラ』・・・彼の騎士だ。」

もし彼が見つかった事を利用して正面から『赤銅黒十字』に乗り込んだのだとしたら・・・。」

「っ!! 今すぐ結社に戻りましょう。」

馨お姉ちゃんも賛同し、僕達は急ぎ『赤銅黒十字』に戻った。

しかし時既に遅く、結社に一步踏み入れたそこは重たい空気に支配されていた。

エントランスホールに入るとそこには片膝を付き、頭を下げているパオロさん達の姿があった。

そして勿論、その中にはエリカさんの姿もあった。

その姿を見た瞬間、僕は少なくとも苛立ちに見舞われる。

・・・誰が彼女達に膝を付かせているのかと。

・・・彼女達は僕の大切な人達なのにと。

その苛立ちが僕の内に蓄えられている『氣』を漏れ出させた。

その瞬間全員が僕の方に振り返った。

けれど僕の視線は唯一人に縫い付けられている。

それはさつきまでパオロさん達が頭を下げていた人物。

それはついさつき僕がお金を貸してあげた人物。

僕は真っ直ぐ彼に歩み寄る。

その青年は驚いた様に僕を見たが、次の瞬間にはその顔に寧猛な笑みを浮かべていた。

「君はさつきの・・・そうか、君がそうなんだね。」

始めまして、僕達の新しい同志よ。

僕の名前はサルバトーレ・ドニ・・・さっそくだけど僕と決闘しないかい？」

第26話 剣の王

S i d e 昴

正面から視線をぶつけ合う僕達だったが、その表情は正反対だ。彼は寧猛な笑みを浮かべ、僕は怒りの籠った感情を彼にぶつけている。

そんな僕達の間流れる雰囲気は今にも戦いが始まるのではないかと言う程緊迫していた。

この時の僕は大切な人達が頭を下げさせられている状況に怒りを感じていた。

今迄も・・・そしてこれからも僕を助けてくれると言ってくれた人達。

だからこそ僕も『神』や『神殺し』からの理不尽から彼等を護ろうと心に決めていた。

それが何だ!! こういう時に彼等を護ると決めたんじやないのか!!

僕の心内はこの状況を作った彼に対する怒りと、それ以上の自分に対する不甲斐無さに怒っていた。

そんな僕の心を静めたのは肩に置かれた暖かな手と、同時に掛けられた優しい声だった。

「落ち着いて、昴君。」

「っ!!」

はっと我に返る僕。

狭まっていた視野が広がり、彼の後ろに控えて居たエリカさん達の表情が目に入る。

彼等は僕の事を心配そう見やり、そしてこの空気に緊張している様で表情を強張らせていた。

それを見た瞬間、すつと怒りが治まった。

漏れ出ていた『氣』も体の内に留め、彼に対する威圧を無くした。

それにより周囲に蔓延っていた張り詰めた緊張感は霧消した。

それと同時に安心からか深く息を吐く音が幾つか耳に届く。

緩まった空気が漂い出した時、対峙していた彼から残念そうな声が上がった。

「あくああ、折角やる気になってくれたと思ったのに。」

彼に視線を戻すと、不満そうな彼の姿があった。

何処か楽しそうでもあつた獰猛な笑みは為りを潜め、何処かおちやらけた様子が窺える。

そんな彼に意識を向けながらも、彼の後ろに控えて居るエリカさんに視線を向けた。

それに気付いた彼女は頷くとすつと立ち上がり僕達の方へ歩み寄つて来た。

エリカさんは僕の横（馨お姉ちゃんの反対側）に立つと口を開いた。

「御久し振りで御座います、サルバトーレ・ドニ様。」

「あれ、君は確か・・・何処かで会つたかな？」

「何度か御会いする機会が御座いました・・・エリカ・ブランデツリと申します。」

現在は『赤銅黒十字』の大騎士であり、同時に彼の騎士をしております。」

「へえ、そう・・・そんな事より、君がやつぱり新たな僕達の同族なんですよ。」

さつきの呪力といい、威圧といい、間違いないと思うんだよね。」

エリカさんの言葉何て何のその、サルバトーレ卿の視線は僕に釘付けだ。

僕も何か言つた方がいいんだろうけど、さつきの事もあり口を開く勇氣は無かつた。

だからこそ、此処はエリカさんに任せる事にした。

「サルバトーレ卿が仰る様に、彼が新たに誕生した神殺しであります。」

「うんうん、やっと会えたね。」

新しい仲間が誕生したって言うのに、同じ日本人の護堂は何も教えてくれないしき。

仕方ないから傘下に入ったって言う『赤銅黒十字』を見張っていた

んだ。

でもこんなに簡単に会えるんだったら隠れて見張る何て遠回りな事はせずに、最初から堂々と正面から聞きに来るんだったよ。」

1人頷くサルバトーレ卿。

色々突つ込み所があつたが、誰も何も言わない。

エリカさんですらどう返したらいいのか分からず、言葉が出ない状態だ。

サルバトーレ卿は一頻り頷くと、思い出した様に僕に向けて口を開いた。

「それでさ……君、僕と決闘しないかい？」

「はい？」

思わずそう言つてしまったのは仕方がない事だと思う。

今思い返せば最初に同じ事を言っていた様な気がする。

でも、普通『決闘しよう』何て初対面の人に言われないよ。

判断に困っていると、そんな僕を知つてか知らずか、続けて声を掛けて来るサルバトーレ卿。

「あつ、そう言えば君の名前つて何だったつけ？」

「も、申し遅れました、神藤 昴といいます。」

思わず丁寧に戻してしまった。

その事にサルバトーレ卿に仕えている男性が驚いていた。

しかしそんな小さな事を気にするサルバトーレ卿では無い。

「それじゃあ、昴……改めて、僕と決闘しよう。」

同じ体質になつた君にならわかるだろう。

もう僕達と対等に戦えるのは同じ『神殺し』か『まつろわぬ神』だけだ。」

ぶれない彼の言葉に『確かにその通りだ』と内心納得する。

こんな出鱈目な体質の奴と戦える奴は人間じゃない。

彼の話は確かに納得できる……でも、決闘となると話は別だ。

「あ、あの……。」

「さつきはあんなに凄い威圧をしてくれたんだ……昴も僕と戦いたいんだらうっ……。」

「い、いえ、あ、あれは、その……そう言う訳では……。」
最初の態度もあってあまり強く出られない僕。

そんなはつきりしない僕に、先程の勇ましい姿は全く見られない。
頼りない僕の姿に違和感を持ったのか、彼は不思議そうに僕を見詰
めていた。

「た、確かに僕も武術家の端くれです。」

『剣の王』と呼ばれているサルバトーレ様と手合せしてみたい気持
ちはあります。」

「何だ、君も同じ考えだったんじゃないか。」

だったら話は早いよ、さっそく外に行って……。」

僕の言葉にサルバトーレ卿は僕の手を取る。

だけど僕はその手を振り払い、確固たる意志を込めて言い放った。

「で、ですが……僕達が戦えば2人共唯では済まない事もわかります。」

僕は貴方と命懸ける戦いをする事は出来ません。」

「……僕との決闘には命を掛ける価値は無いつて言ってるのかな。」

僕の言葉に彼の雰囲気はがらりと変わり、彼から凄まじい『氣』が
溢れ出す。

押し潰されそうな重圧に僕はすっかり体に力を入れ、彼から目を逸
らさない。

「僕も貴方とは武を競ってみたい。」

でも、僕には僕の生きる目的があります……こんな事に命を賭け
る事は出来ません。」

ここは僕も引く事は出来ない。

両者睨み合い再び訪れた張り詰めた一触即発の空気の中、言葉を発
したのはエリカさんだった。

「御2人共、落ち着いて下さい。」

「……エリカさん。」

彼女の声に戻ると、エリカさんは「任せて」という様に頷いた。

エリカさんは一歩前に出ると、未だ神殺しとしての力を見せるサル
バトーレ卿に進言した。

「サルバトーレ卿、私の方から提案が在ります。」

「・・・何かな。」

隠すつもりが無い苛立ちがエリカさんに向けられる。

思わず前に出ようとしたりした所を馨お姉ちゃんに止められた。

本当はエリカさんに任せるのが一番いいと、頭では分かっているのに体が反応してしまったのだ。

不安を押し殺す様に拳を握り締め、エリカさんを見守る。

「何も命懸けの戦いだけが決闘ではありません。

それに我が王もサルバトーレ卿との手合せを望んでいる事も事実です。

其処で・・・何かしらのルールを設けて決闘というのは如何でしょうか。」

「・・・ルール？」

「そうです。

例えば・・・どちらかが相手に決定打を与えた時点で決着・・・とというのは如何でしょう。

これならば多少の傷はあるでしょうが、死に至る程の怪我をする事は無いでしょう。

「此れならば我が王も決闘に応じる事を了承する筈です。」
そう言うのとエリカさんは僕に目を向けてくる。

僕は「やっぱりエリカさんは凄いな」と心で感心しながら、頷いた。
「そういう事でしたら、喜んで御相手致します。

僕もサルバトーレ様と戦ってみたい気持ちに嘘はありませんから。」

しかし当のサルバトーレ卿は彼女の提案に悩んでいるみたいだ。

其処にエリカさんが更に言葉を付け加える。

「・・・でしたらこう致しますよう。

負けた方が勝った方の言う事を一つ聞くと言うのは如何でしょうか。」

エリカさんの加えた最後の提案で彼の心は決まった。

悩んでいた様子から「かつ!!」と目を見開くと、何とも楽しそうな笑みを浮かべたのだ。

「よし、それで行こう。」

ルール有の決闘って言うのも面白そうだしね。

早速……って言いたい所だけど、今日はもう時間も遅いね。

それに折角なら万全の状態で戦いたいから……そうだね、2日後にしよう。

場所はそっちに任せてもいいかな。」

「御任せ下さい。」

「うん、宜しくね。」

決まったらアンドレアに連絡して……それじゃあ、2日後を楽しみにしてるから。」

そう言うのと今迄の空気は何のその、サルバトーレ卿は踵を返し、何食わぬ顔でこの場を後にした。

それを僕達は呆然と見送るしかなかった。

嵐の様に去って行ったサルバトーレ卿が作り出した何とも言えない空気の中、最初に動いたのは彼だった。

彼は真つ直ぐ僕に歩み寄って来ると、謝罪と共に頭を下げた。

「先程は知らなかったとはいえ、大変失礼致しました。」

私はサルバトーレ・ドニの騎士をしております『アンドレア・リベラ』と申します。

以後、お見知りおきを……。」

頭を下げてきたのはサルバトーレ卿の後ろに控えていたスーツ服の男性。

彼の完璧な所作に戸惑いながら、何とか言葉を返した。

「此方こそ宜しく願います。」

「うちのバ……我が王が申し訳ありません。」

今この人『馬鹿』って……。

彼等は案外心許せる関係なんだろうか？

「御気に為さらないで下さい。」

僕の方こそ神殺しとしての先輩であるサルバトーレ様に失礼な事をしてしまいました。」

そう言った僕をアンドレアさんは珍しい物を見る様に見詰めて来た。

「……貴方は不思議な御方だ。」

「えっ??」

「いえ、何でも御座いません。」

それでは2日後、神藤様のお力を拝見出来る事を楽しみにして居ります。」

そう言つてアンドレアさんもサルバトーレ卿の後を追つて、この場から去つて行つた。

彼等が去つた後、僕達はパオロさんの執務室に集まっていた。

この場に居るのは僕とエリカさんと馨お姉ちゃん、それとパオロさんとエリカさんのご両親。

そして『赤銅黒十字』の大騎士であるジェンナーロさんとクラレンスさんである。

「大変な事になってしまった。」

折角来てくれたのに本当に済まない。」

「僕の所為でもありませんから、あまり気にしないで下さい。」

それにいつかは逢わないといけない方でしたから。」

僕がそう言つてもパオロさんの顔は優れない。

というよりも、この場にいる全員の表情が何処か暗い。

まあ、サルバトーレ卿と決闘をしなくちゃいけなくなつたのだから、気分が沈むのも仕方がない。

そんな空気を払拭すべく、なるべく明るい声で口を開いた。

「でも命を懸けた戦いにならなくて良かったです。」

エリカさんのお蔭です……本当にありがとうございます。」

「そんなに褒められる事では無いわ。

本当なら戦闘を回避する事が一番だったのだけれど・・・私ではあれが限界だった。

「ごめんなさい、昂。」

落ち込むエリカさんだったが、僕は彼女を責める気なんて全くない。

逆に感謝している位なんだから。

この想いを伝えたいと思ったが、その前に真剣な顔付きでパオロさんが口を開いた。

「サルバトーレ卿がこの辺りに潜伏している事はアンドレア卿からの情報で事前に知っていたんだ。」

「だけど・・・結局昂君が到着するまでに見つける事が出来なかった。」

「僕達が到着した時に、皆さんが慌てていたのは・・・。」

「ええ、皆が総出でサルバトーレ卿を探していたの。」

サルバトーレ卿はアンドレア卿が別件で居ない事をいい事に昂君と接触する為に自由に動き回っていたのよ。」

今までの苦労を思い出したのか、パオロさん達は深く溜息をついた。

詳しく聞けば、この騒ぎは一週間ほど続いていたらしい。

・・・話に聞いていた通り傍迷惑な人だった。

「しかし、決闘ですか・・・昂様には勝算があるのですか？」

そう問い掛けて来たのはクラレンスさん。

彼はスキンヘッドの黒人で、以前はエリカさんを指導していた事もある優秀な騎士だ。

僕は彼の問い掛けに首を横に振った。

「・・・分かりません。」

ある程度はエリカさん達からサルバトーレ様の事は聞きましたが、神殺しの方と戦うのは初めてです。

負けるつもりはありませんが、絶対に勝てると言いきる事も出来ません。」

そう答えた僕にパオロさんの優しい声が掛かる。

「昴君、本来であれば戦闘経験や情報を持っていた方が有利ではある。でもね、神殺しの方々にそれは当て嵌まらない。」

「どういう事ですかい？」

聞き返したのはジェンナーロさん。

20代とは思えない程老けて見えるが、気さくでとてもいい人だ。

・・・エリカさんはあまり彼の事が好きではないみたい。

「簡単に言えば神殺しの方々はその程度の事で勝敗を左右されない。

考えても見ろ、彼等がその程度の不利で苦戦する事を想像出来るか？」

「確かに・・・護堂さんは彼との戦いに連勝中。

一度目は神殺しになったばかり、二度目は相手に手の内を知られている中での勝利。

言われて見れば、神殺しにとってその程度の事は些細な物なんですね。」

納得した様に発言したのは馨お姉ちゃん。

そう言えば草薙先輩は以前は普通の一般人だった。

そんな境遇で一年もの間、熾烈な戦いを勝ち残って来たんだ。

馨お姉ちゃんの言葉にパオロさんも頷いた。

「確かに今回の決闘は勝敗の予想が付かない。

でもそれはこれからの戦い全てに言える事だ。

だからこそ我々は出来る限りのサポートをと考えている・・・少しでも昴君の勝率が上がる様にね。」

「今回我々に出来る事といったら・・・精々サルバトーレ卿の情報を伝える事位ですね。」

「戦いも心配だけど、心配事はそれだけではないわ。」

いつものほんわかとした雰囲気は無く、真剣な面持ちで口を開いたのはサーシャさんだった。

それにわかっていると言う様にパオロさんが頷く。

「最後にエリカが提示した条件の事だろう。」

もしサルバトーレ卿が勝てば、間違いなく全力の一戦を要求してく

る筈だ。」

やっぱりそうですね・・・どう見ても好戦的な感じでしたし・・・。

「それに昴が勝った場合の事も考えて置かなくてはいけないわ。」

「考える事は山積みですね。」

その後皆さんは僕の為に多くの時間を割いてくれた。

今迄の資料やパオロさん達の話からサルバトーレ卿の戦い方を予

想し、対策を立てたり。

周囲に迷惑の掛からない決闘の場を考えたり。

僕が勝った時負けた時の事を考えたり。

そうして猶予だった2日間は、あつという間に過ぎて行ったのだつた。

第27話 VSサルバトーレ・ドニ

Side 昴

あれから2日が経ち、遂にサルバトーレ卿との決闘の日がやって来た。

今僕達が向かっている場所はミラノ郊外にある公園。

周囲に被害を掛けない様にパオロさん達が辺りを封鎖して、誰も近づけない様になっている。

今日は起きた時から緊張感と高揚感が混ざり合った様な精神状態だった。

戦う事への不安から来る緊張感。

剣術の頂点にいる人へ挑む高揚感。

しかも戦う事を意識しているからか、体の調子も万全だ。

そんな僕のいつもと違った様子に気付いたエリカさん達はあまり話し掛けて来なかった。

良い精神状態にいる僕の邪魔をしたくないと気を使ってくれたみたいだ。

僕達が待ち合わせ場所に到着した時には、既にサルバトーレ卿の姿があった。

彼は僕の姿を視界に捉えると、獰猛な笑みを浮かべて招き入れた。

「待っていたよ。」

早速、始めようじゃないか。」

彼を見た僕も同様に挑戦的な笑みを押しさえる事が出来なかった。

真っ直ぐ彼の前まで歩み寄る。

「今日は宜しくお願いします。」

「(ちん)そ……。」

この間とは違う僕の様子に彼も気付いたみたいだ。

軽薄そうな様子は鳴りを潜め、彼も瞬時に臨戦態勢に入った。

僕達の間にはピリピリとした空気が漂う中、エリカさんが口を開いた。

「本日の決闘の立会人はアンドレア・リベア、沙耶宮馨、そして私エリカ・ブランデツリが務めさせていただきます。」

「そう、よろしくね。」

サルバトール卿は興味無さそうに告げる。

既に僕達の視界には相對する者しか映っていない。

「ルールを確認して置きましょう。」

今回の決闘は先に決定打を与えた方が勝者とさせて頂き、その判定は私達が決めさせて頂きます。

宜しいですね。」

「わかりました。」

「・・・それで構わないよ。」

サルバトール卿は少々不服そうだが、一応頷いてくれた。

「それでは両者の準備が出来次第始めようと思います。」

「僕はいつでもいいよ、早く始めよう。」

「・・・少し時間を下さい。」

早く始めたくてうずうずしている彼に断りを入れ、昂り過ぎた心を落ち着かせる為エリカさん達の下へ向かう。

そんな僕を彼女達は優しい笑顔で迎えてくれた。

「昂に卿程とは言わないけど、戦闘狂の氣質があつたなんてね。」

僕の事を思つてか、軽い口調でそう言つて来るエリカさん。

それに馨お姉ちゃんも続く。

「それは違うよ、エリカさん。」

「あら、何か違つたかしら？」

「昂君は戦う事が好きなんじゃなくて、向上心が強いんだ。」

現状に満足せず、より自分を高めて行く。

神殺しになつた今だつて稽古を続けているだろう？」

「言われて見ればその通りね。」

神殺しの方が普段から自分を鍛えている何て聞いた事が無いわ。」

「とはいえ・・・昂君、少し気負い過ぎだよ。」

折角の機会なんだから、もっと柔軟性を持って臨まないと・・・色々勿体無いよ。」

この時初めて2人が僕の方を見た。

2人の瞳からは、僕に対する絶対的な信頼が見て取れる。

僕は2人のやり取りとその信頼の視線にすつと無駄に入っていた力が抜けた。

そしていつの間にか狭まっていた視界も広くなった。

・・・本当に彼女達には助けて貰ってばかりだ。

「ありがとうございます、エリカさん、馨お姉ちゃん。」

「もう大丈夫そうだね。」

「いつてらっしやい、昴。」

私達は貴方の勝利を信じているわ。」

僕は力強く頷くと、サルバトーレ卿と対峙する為歩き出す。

そんな僕を獰猛な笑みを浮かべたサルバトーレ卿が迎えた。

「お待ちせしました。」

「さあ、早く始めよう。」

睨み合う僕達の間>Eリカさんが立つ・・・そして高らかに宣言した。

「それでは・・・始め!!」

僕は開始の合図と共に、今出せる最高のスピードでサルバトーレ卿に突進する。

サルバトーレ卿はまだ一步も動いていない所か、剣すら抜いていない。

それでも僕は『氣』を駆使して、常人なら絶対に出せないスピードで突っ込む。

そして間もなく彼の懐に入ろうかと言う所で・・・僕はサルバトーレ卿と目が合った。

それに気付いた瞬間、僕は回避行動に入っていた。

前に進もうとしていた体を強引に急停止させるが、その時にはもう目の前に剣先が迫っていた。

「っ!!」

このまま回避に移っても間に合わないっ!!

瞬時に判断した僕はそのまま体の力を抜いた。
急停止によって後ろにあった重心により体は自然と後ろに倒れて行く。

その時の僕の目には徐々に迫り来る剣先が映っていた。
僕は剣先から目を離す事なく、体が後ろに倒れる感覚に身を委ねる。

彼の狙いは『目』。
寸分違わず突き出されている剣はギリギリの所で僕の眼前を通過した。

僕はそのままバク転の要領で地面に手を着き、足を彼の顎目掛けて振り上げた。

「おっと。」

サルバトーレ卿は難無く躲すが、彼との距離を取る事には成功した。

しかし僕の背中には冷や汗が伝っていた。

・・・一瞬でも反応が遅れていたらさっきの一撃でやられていた。
サルバトーレ卿が何時剣を抜いたのか、何時剣を振ったのか・・・
全く気付かなかった。

そして何より、僕の速さに完璧に対応した事が不思議でならなかった。

そんな考えが表情に出ていたのだろう、サルバトーレ卿は楽しそうに口を開いた。

「中々の速さだったけど・・・その程度じゃ、僕の中から逃れられる事は出来ないよ。」

それが権能の力なのか、彼の努力の結晶なのかは分からない。

でも完璧に僕の速さを見切っていた彼の言葉は事実だろう。

「でも驚いだよ、開始早々一直線に突っ込んで来るんだから。」

相手が僕じゃ無かったら決まっていたかもね。」

そう言う彼の表情は心底楽しそうだ。

何処にでもありそうな無骨な剣を肩に担ぎ、僕から目を離さない。

「うーん、無手だったから護堂みたいな戦い方なのかと思っていたけ

ど違ったね。

「どうも僕同様、武術を嗜む者みたいだ。」

彼はそう呟くと、だらんと両腕を下に下げた。

そしてその姿を見た瞬間、僕の本能が最大限の警戒を鳴らす。

ただ腕を下げているだけ・・・それなのに全く隙が見えない。

それ所か彼の間に合いに入れば一瞬の内に切り捨てられる・・・そんなイメージが頭を過る程だ。

「先手は取られてしまったからね・・・次は僕の番だ。

ここに誓おう。」

僕は、僕に切れぬ物の存在を許さない。」

その瞬間、彼から『氣』の奔流が溢れだし、彼の右腕が銀色に輝き出す。

これが『剣の王・サルバトール・ドニ』の全てを切り裂く魔剣の権能。

禍々しくも絶大なオーラを纏い『無骨な剣』を『魔剣』へと変化させたサルバトール卿は僕の方へ歩き始めた。

あの魔剣の力を持つてすれば、例え神殺しの体であろうと切り捨てられてしまおうだろう。

それにあの眼がある限り容易には彼に近付けない。

例え懐に入れたとしても、あの剣技を躲せる自信は今の僕には無い。

僕には一歩、また一歩と近づいて来る彼の姿が死神の様に見えていた。

・・・それでもやるしかない。

最初の攻撃が失敗してしまった以上、僕に残された道は真っ向勝負しかない。

・・・望むところだ。

そんな覚悟を決めた僕の頭を過ったのは、灰色の狼の姿だった。

「っ!!」

何かに目覚めた様な感覚。

僕の口からは自然と言葉が紡がれていた。

「我は戦場の先駆者である。

我は冥界への先導者である。

我は勝利への道を切り開く者である。」

これが『ウプウアウト』より篡奪した権能を掌握した瞬間だった。

S i d e 馨

決闘の開始と同時に目にも止まらぬ速さでサルバトーレ卿に突っ込んだ昴君。

しかしその行動から攻撃に移る事は出来なかった。

昴君の速さを見切ったサルバトーレ卿がカウンターで刺突を繰り出したからだ。

間一髪ので回避出来た昴君だったけど、先制攻撃に失敗した事で真っ向から戦わなくてはいけなくなつた。

でも少し驚いた。

さっきの先制の突貫は奇襲とも取れる攻撃だ。

サルバトーレ卿との手合せを楽しみにしていた昴君が意表を突く戦法を取るとは思わなかつた。

・・・後日話を聞いた所によると『折角の手合せ、自分の全てをぶつけたかつた』と言っていた。

一度距離を取り、仕切り直した両者。

先に動いたのはサルバトーレ卿だった。

卿は魔剣の権能を行使し、ゆっくりと昴君に歩み寄る。その重圧は対峙していない僕にも伝わっていた。

しかしその重圧を払拭する程の呪力の爆発が起こつた。視線の先には膨大な呪力を放つ昴君の姿があつた。

・・・今迄とは違った力を感じる。

そう思った瞬間、僕の思考を遮る様にとあるイメージが流れ込んできた。

・・・それは灰色の狼の姿。

「馨さん、どうかしたの?」

僕の様子がおかしい事に気付いたエリカさんが声を掛けてきた。

「いや、大丈夫だよ。」

ちよつと霊視が降りて来たみたいだ。」

「あら、馨さんにも霊視の素質があつたの?」

「言つて無かつたかな、祐理程では無いけど少しだけね。」

「それで何が見えたのかしら?」

「灰色の狼・・・間違いなくウプウアウトだと思うよ。」

僕の霊視はあまり成功率が良く無いけど、間近で昴君の権能掌握の瞬間を見たからだろうね。

かなり明確なイメージが見えたよ。」

そんな僕達にこの場にいる最後の1人・・・アンドレア卿が声を掛けて来た。

「ウプウアウトというと先日彼が倒した神でしたか。」

「アンドレア卿・・・ええ、間違いないと思います。」

ですが、现阶段ではどの様な権能か全く見当が付きません。」

「・・・ぶつつけ本番、という事ですか。」

僕達が言葉を交わしていると、昴君の呪力の高まりは落ち着きを見せ始めた。

その間、昴君に詰め寄っていたサルバトーレ卿は足を止めていた。

まるで更なる強敵を待ち望んでいる様に・・・。

一方の昴君の方だが、僕からは何の変化も見られない。

強いて挙げるとするならば、高い集中力を保っている様に見える位か。

そして遂に両者が動いた。

S i d e 昂

僕は掌握した権能に戸惑いを覚えていた。

戦闘中という事もあり顔には出さなかったが、この権能の能力がよく分からなかったのだ。

炎の権能の様に『体』や『氣』に変化がある訳では無い。

強いて挙げるとするならば、通常時より感覚が鋭くなっている事位か……。

混乱に見舞われていた僕は彼の声に現実に取り戻された。

「準備は出来たのかな？」

それじゃあ、そろそろ行くよ!!」

「っ!!」

そう宣言したサルバトーレ卿は先程とは違う素早い動きで僕に詰め寄ってきた。

一瞬で距離が無くなり、剣の間合いに入ってしまった僕は瞬く間に窮地に立たされる。

いつ振り上げられたのか分からない、上段から迫る刃。

咄嗟の反応で後ろに跳んだ事により間一髪、着ていた服を両断されただけで済む。

しかし彼の猛攻はそれだけに留まらない。

初動の見えない斬撃が僕を仕留める為に縦横から迫り来る。

それを回避だけに専念する事で何とか躲していく。

時には躲し切れず傷を負う事もあったが、致命傷という程でも無い。

これは権能行使時から感じていた鋭くなった感覚のお蔭だ。

未だにこの権能の能力は良く分かっていないけど、感覚が鋭くなると言うのは間違いなさそうだ。

問題はサルバトーレ卿の攻撃に隙が無い事だ。

今の僕でも回避に集中しなくては避ける事もままならない。動き出しが速過ぎてとてもじゃ無いけど攻撃に何て移れない。

気を抜けば一瞬で決着が付く、そんな濃密な時間が続く中・・・変化は徐々に始まっていた。

自分の変化に気付いたのはサルバトーレ卿の太刀筋が見え始めた時だった。

いや、見えていると言うよりも彼の動きが分かる様になった・・・と言うべきだろうか。

時間が経つにつれて・・・違う、彼から攻撃を食らう度に徐々に反応速度が上がっている。

避けきれず刻まれた傷の数々・・・これらを経験値として体が彼の動きを覚え始めていた。

自覚をして初めてこの権能の使い方がはつきりとわかった。

この権能は受けた傷の分だけ経験値として相手を知る事が出来る。体を張って勝つ為の情報を集める・・・これがこの権能の力だ。

実際回避する率は上がって来ているし、今の様に考え事をする少しばかりの余裕もある。

でも問題もある。

1つは攻撃に当たらなければ経験値が貰えない事。

一歩間違えれば致命傷を負う可能性もある為命懸けの行動だ。

2つ目は怪我を負い過ぎると幾ら反応速度が上がっても、体の動きが鈍くなる事。

現在も彼に傷付けられた切り傷からは絶え間なく血が流れ続けている。

このままこの状況が続けば、先に致命的な隙を作るのは僕の方だろう。

反撃に移りたいが、未だそこに至れる程の余裕はない。

しかしタイムリミットがある以上何か打開策を考えないと・・・。

頭と体をフル回転させている時、サルバトーレ卿から声が掛けられた。

「いや〜凄いな、どんどん反応速度が上がって来てる。

それが君の権能なのかな？」

「っ!! そ、そうみたいですっ!!」

この際攻撃の手は緩められていない。

僕は何とか躲しながら、言葉を返す。

この時、鋭い斬撃を繰り返しながら楽しそうに口を開く彼に僕は1つの悪寒を感じた。

そしてそれはすぐに現実の物となる。

「あまり時間は掛けるべきじゃないかな。」

「っ!!」

サルバトーレ卿から眩きが零れた直後、本能が最大限の警戒を発した。

彼の『氣』が今まで以上に高まった事に、僕は急ぎ距離を取る。

しかし一歩遅かった。

「っあああっ!!」

左腕から鮮血が舞い上がり、数瞬置いて激しい痛みが襲い掛かる。

目の前には剣を振り切っているサルバトーレ卿の姿。

痛みを堪えながら、僕はそのまま距離を取る。

追撃を警戒していたが、彼が追ってくる気配はなく未だその場に留まっている。

痛みと混乱が思考を鈍らせる中、権能による経験が入ってくる感覚があった。

そこから導き出された先程の一撃は・・・桁違いに速い斬撃。

恐らくやっていた事は何も変わらない・・・違うのはその速さのみ。

でも言葉で言う程簡単な事では無い。

速さを求め様とすればそれ以上の技術が必要になる。

技術が無ければ唯剣を振っているだけの、何の力も伝わっていない

物に成り下がってしまう。

しかし彼は違った。

権能により感覚が鋭くなっていた僕が気付かない程の速さの斬撃。それを今まで以上の鋭さと正確さを持って繰り出して来たのだ。

並大抵の技量では無い。

・・・これが『剣の王』の実力。

驚異的な実力に畏怖し、そしてこの程度の傷で済んだ事に安堵する。

彼は勝負を決めに来ていた。

狙いは左肩から右腹に走る斬撃。

それを反射に近い反応で無意識に体が回避していたのだ。

僕が反応出来たのは恐らく権能の力があつたから・・・。

権能の力に感謝しつつ、同時に心の中で自分を戒める。

権能によって齎された経験を過信しすぎていた。

幾ら相手の動きを蓄積出来ると言っても、その全てを得られる筈も無かつたのだ。

「結構本気で決めに言ったんだけどなあ。」

楽しそうな声色の中に少々の驚きが含まれた声上がる。

警戒を続けていた僕は大きな反応を示す事なく彼を見つめ続ける。

サルバトーレ卿はそんな僕を見て口角を上げたが、何か思ったのか突然審判役のエリカさん達に顔を向けた。

「ねえ、さっきので勝負が決まっちゃったりしたのかな？」

確かに今回の決闘のルールは先に一撃を入れた方の勝ちだった筈。

・・・もしかして僕負けっちゃったの!?

はっとして僕もエリカさん達に顔を向ける。

エリカさん達3人は顔を見合わせると、頷き合い代表してエリカさんが口を開いた。

「先程の攻撃で受けた傷は見た目に反してそれ程重症ではありませんん。

それに・・・まだ双方力を出し切ってはいない様に思います。

このまま決着にしては双方納得しないでしょう。」
「うん、それを聞いて安心したよ。」

折角楽しくなって来た所だったのに、こんな所で止められたら完璧に不完全燃焼だよな。

もしかしたらちよつと強引な手段を使つてでも彼と戦おうとしたかも……。」

最後に何やら不穏な事を言っていた様な気がする。

エリカさん達の判断に僕も安心したが、すぐに気を引き締める。

……これからどうするか。

先程の攻防でこの権能に付いて更にわかった事がある。

1つはこの権能の重要な欠点を見つけられた事。

それは先程も考えた様にこの権能の力では相手の全てを知る事は出来ない。

僕の間でだいたい6〜7割と言った所だろうか。

あの一撃から「これ以上は得られない」と感じている事から、得られる経験も限られているんだと思う。

どうしてそれが分かるかというと……『勘』としか言い様がない。

そしてもう1つ……これもさっきの一撃から感じている物。

今まで気付かなかったが経験と共にもう1つ……別の力を蓄えていたみたいだ。

勝負を決められる程強い力では無い。

でも勝つ為の『道を切り開く力』はある……僕はそう感じている。

その力に意識を向ければ、思い浮かぶのは『弓』とたった一本の『矢』。

現在の中断で多少休む事が出来たけど、どちらが優勢かは一目瞭然。

至る所から血を流す僕と、無傷のサルバトーレ卿。

流血は未だ止まる気配が無く、このまま行けば間違いなく僕が負ける。

……だったら、この力に賭けるしかない。

「さつきはうまく避けられたけど・・・次は決めさせて貰うよ。」

「そうは行きません・・・この勝負、勝つのは僕です。」

心に抱える不安は一切見せる事無く、僕は言い切る。

そんな僕にサルバトーレ卿の笑みは深まるばかりだ。

「そうでなくちゃ面白くない。」

さあ、第2ラウンドと行こうじゃないか!!」

彼の言葉が再開のゴングとなった。

踏み込もうとしていた彼よりも早く、内に溜められていた力を行使する。

「我は戦場に置いて勝利を欲する。」

勝利する為の道を切り開く力を我に示せ。」

溢れ出る『氣』と共に手の中に『弓』と『矢』が顕現する。

僕の行動に警戒からか一瞬踏込を躊躇したサルバトーレ卿。

その隙を逃さず弓を構え、力一杯矢を放った。

矢は凄まじい速度でサルバトーレ卿に迫る。

しかしその先に居る彼は万全の態勢で待ち構えていた。

「それも権能の力だね。」

途轍もない呪力が矢に籠められているのがわかるよ。

でもこの程度・・・僕に斬れない訳が無い!!」

そんな事は僕も分かっている。

この攻撃で勝てる何てこれっぽっちも考えてない。

でもあれは唯の矢じゃ無い。

僕自身どんな力があるかもわかっていない。

けどこの場を好転させるだけの力はある筈なんだ。

僕は何処から来るか分からない絶対の確信を持って、決着の準備を

進める。

その間にも矢はサルバトーレ卿に迫っていた。

迎え撃つ態勢に居るサルバトーレ卿には一縷の隙もない。

しかし矢は突然の変化を見せる。

サルバトーレ卿に矢が届こうとした瞬間、突然矢が淡く輝き出した

のだ。

その輝きは正に彼の持つ魔剣と同じ輝きだった。

それには流石のサルバトーレ卿も驚きを見せるが、次の瞬間には獯猛に口元を歪めていた。

「面白っ!!」

だけど・・・僕には届かない!!」

彼の叫びと共に振るわれた魔剣は寸分違わず矢と交わった。

数瞬の拮抗を見せるも矢は真つ二つに切り裂かれてしまい、そのまま消え去る。

だが・・・それだけの隙があれば十分だった。

僕は矢を放った瞬間、今まで鋭くなっていた感覚が戻って行くのを感じていた。

けど得られた経験は無くなっていない。

今が勝負の時!!

僕はすぐさま新たに権能を行使する。

でも前回の様に長時間準備する時間の余裕はない。

少しでいい・・・この勝負を決められるだけの『力』だけで十分なんだ。

僕の想いに答える様に体の内が熱くなってきた。

同時に聖句も無く権能を行使するのは無茶なようで、焼ける様な痛みが胸元を襲う。

けどそれも『氣』から『炎』へと変化が完了した事で徐々に収まっていく。

それと同時に矢がサルバトーレ卿に届いた。

それは嬉々として迎え撃った彼の意識が完全に矢だけに向いた瞬間だった。

未だ残る痛みを我慢して僕は炎を脚に灯し、全力で地面を蹴る。

その速度は最初の比では無い。

地面に炎の軌跡を残しながら、数瞬の間にサルバトーレ卿の懐に入

り込む。

目の前で矢が消え去るのが見えた。

そしてサルバトーレ卿が僕の姿を一瞬見失う。

次の瞬間には僕の接近に気付く所は流石としか言い様が無いが……もう遅い。

煌々と燃え盛る拳をサルバトーレ卿に叩き込んだ。

「危なかった……ほんとギリギリだったよ。」

其処には何食わぬ顔で正面から僕の炎の拳を受け止めているサルバトーレ卿の姿があった。

注視するのは僕の拳が当たっている所。

其処だけ服が焼けているが見えている肌は全くの無傷。

そして拳の当たった感触が在り得ない程硬く、まるで『鋼』を叩いた様だった。

「力の籠った一撃を囮とした良い攻撃だったけど……。」

そう言つて手に持つ魔剣を振り上げる。

この距離でこの体制では絶対に避けられないだろう。

……でも。

「この勝負、僕の……。」

「いいえ、僕の勝ちです。」

『神道流攻式壺ノ型・波・焰』。

「なっ!!」

サルバトーレ卿に残った炎を全て叩き込む。

事前にサルバトーレ卿の『鋼の加護』についてはエリカさん達から聞いていた。

勿論その効果と……弱点も。

元来『鋼』は『炎』に弱い。

『太陽』や『溶岩』といった超高温に晒されれば間違いなく熔ける。

聞いた話では他の神殺しの方には『鋼殺しの炎』を持っている方がいて、とても強力な権能らしい。

僕の『炎』には『太陽』程の力は無い。

『火神』から篡奪した権能・・・所詮は『火』でしかないのだ。それでも『鋼』に対して唯一の対抗手段。

だから最後の一撃は『炎の権能』を使うと決めていた。戦闘不能に出来なくてもいい。

少しでもダメージを与える事が出来れば・・・。

僕の考えは間違っただけじゃなかった。

サルバトーレ卿の体を炎が駆け巡った。

例え『氣』によるダメージは『鋼』で防げたとしても、『炎』による熱までは防げない。

恐らく全身を中から熱されている事だろう。

「・・・がはっ!!」

少量だが口から吐血したサルバトーレ卿。

それでも倒れる事無く剣を握り続け、未だ闘志が衰えないのは流石神殺しと言った所だ。

・・・でも。

「それまで!!」

この場にエリカさんの声が響き渡る。

対峙していた僕達は声の方に顔を向け、それを確認したエリカさんは宣言する。

「只今の一撃を持って・・・勝者『神藤 昂』とします。」

神殺し同士としては異例のルールに則った決闘に決着がついた瞬間だった。

第28話 決闘後とそれぞれの思惑

S i d e 昴

エリカさんの掛け声でサルバトーレ卿との決闘は終了した。

僕は『氣』を収めると途端に力が抜けそうになったが、何とか踏ん張って対峙していた相手に礼を取った。

「ありがとうございます。」

「いや／＼さっきの一撃は中々だったよ。」

以前護堂に外からこんがり焼かれた事はあったけど、今度は中から焼かれちゃうなんてね。」

そう言う割には全然何ともなさそうだ。

とてもいい笑顔で僕に話し掛けて来る。

「最初はルールで縛る決闘なんて・・・と思っていたけど案外楽しめたよ。」

でも・・・より強く君と本気で殺りあってみたくなったかな。」

と思っただけど最後の言葉・・・全然目が笑って無かった。

背筋を震わせているとエリカさん達がやって来た。

「御二方の決闘をこの目で拝見出来た事を光栄に思います。」

サルバトーレ卿・・・今回の勝者に贈られる報酬を覚えておられますか。」

「確か勝った方の言う事を一つ聞かなきゃいけないんだったよね。」

残念だなあ・・・僕が勝ったら今後は命懸けの真剣勝負をして貰うつもりだったのに。」

やっぱり・・・勝ってよかった。

安堵の息を吐いていると、今度は僕に話が振られた。

「今回の決闘の勝者は君だ。」

何か僕にして欲しい事はあるかい？

何でもいいよ・・・あ、再戦だったら僕も嬉しいな。」

それは貴方の希望です。

僕は貴方と命のやり取りをしたくはありません。

そんな事を心内で考えながらも一つ息を吐き、気持ちを落ち着けて

から口を開いた。

「報酬については既に決めています。」

「へえく……何かな？」

少し意外そうに……でも、何処か鋭い視線を僕に向けるサルバトール卿。

その視線に少し怯んでしまったが、それでもしつかり相手の目を見返す。

「僕が貴方に望む事、それは……僕からの依頼を受けて貰う事です。」

「……どういう事かな?！」

少々呆気に取りられている彼とその隣に立つアンドレア卿。

かなり予想外だった事はその表情から窺える。

「この先僕は神々との戦いに挑んでいく事になります。」

でも時には僕達だけでは手に負えない事柄もあると思うんです。」

「……つまり代わりに戦って欲しいって事かな?！」

この時サルバトール卿の目は心底面白い物を見る様に僕を見つめていた。

「簡単に言えばそう言う事です。」

勿論受けて頂いたら報酬はきちんと御支払致します……如何でしょうか。」

「はははっ敗者である僕に拒否権はないよ。」

それに僕にとっても悪い事所か、寧ろ好条件だ。

依頼内容によっては『まつろわぬ神』や『カンピオーネ』のとも戦える可能性があるって事だろうか?」

願ったり叶ったりだよ。」

今後の事を考えているのか、とても楽しそうに笑っているサルバトール卿。

そんな彼の様子を見てかエリカさんが口を開いた。

「それでは今後神藤 昴より依頼があった際にはその依頼を受けて頂くという事で宜しいですか?！」

「問題ないよ、いつでも連絡をして来てくれて構わないから。」

あつ、そうだ……僕の連絡先を教えずに置かなくちゃね。」

そう言つて自分のポケットを探し始めるサルバトーレ卿。
そこに「携帯電話なら此方に」とアンドレア卿が差し出した。

「ありがとね・・・はい、これが僕の連絡先。」

僕のアドレス帳に二人目の神殺しの名前が載った。

・・・二人には失礼だけど、ちよつと複雑な気分だ。

「中々いい体験が出来たよ。」

それじゃ、僕は帰らせて貰うね。

また会おう・・・昂。」

連絡先を交換し終わると、すぐにサルバトーレ卿は踵を返し歩き始めた。

その颯爽とした姿に戦闘の影響はないのだと、改めて彼の凄さを認識した。

そんな彼に僕も最後まで神殺しとしての姿を見せて居たかった。

「これから宜しくお願いします。」

最後にもう一度礼を取る。

サルバトーレ卿は笑顔で手を振りながら去って行った。

「それでは私も失礼させて頂きます。」

「あつ、アンドレアさんも今日はありがとうございました。」

アンドレア卿は多くは口にせず、僕達に頭を下げてサルバトーレ卿を追って去って行った。

去って行く二人の姿が完全に見えなくなると、最後に残っていた糸が解けその場に座り込んでしまった。

怪我と疲労から体に力が入らない。

そんな僕を柔らかな温もりが背中から包み込んだ。

「お疲れ様、昂。」

今回の決闘・・・私達が思い描いていた最高の形で乗り切る事が出来たわ。」

「最初はどのような事かと思いましたが・・・何とかなりました。」

僕を支える様な形で後ろから抱きしめてくれたのはエリカさんだった。

彼女の温もりに緊張から解かれた心と体が癒されていく。

「とても格好良かったよ、昴君。」

それに新たな権能の掌握おめでとう。」

「馨お姉ちゃん・・・ありがとう。」

「疲れただろう？ 今はゆっくり休むと良い。」

僕は移動の準備を整えて来るよ。」

そう言うのと馨お姉ちゃんが行ってしまった。

残された僕とエリカさんだったが、僕はちよつと限界みたい。

「すみません・・・エリカ・・・さん。」

「いいのよ、昴。」

馨さんの言った様に、今はゆっくり休みなさい。」

エリカさんは後ろから抱きついたまま僕の頬にキスを落とした。

その柔らかな感触を最後に僕は意識を手放した。

Side サルバトール

「それにしても意外だったな。」

「ん？ 何が？」

追い付いたアンドレアは唐突に僕に話を振る。

何の話かさっぱりだ。

「さっきの決闘の事だ。」

いつものお前なら難癖つけて、強引にでも続けようとするだろうが。」

「ええ〜流石の僕も決闘の場に置いてそんな事しないよ。」

・・・まあ、不完全燃焼である事は間違いないけど。」

不満が無いと言ったら嘘になる。

でもある程度楽しめたから『今回は』もういいかな。

「今日までアンドレアが忙しくて聞けなかったけどさ、君は彼の事はどう感じた？」

「誰のせいで忙しかったかと思っっているんだ。」

まあいい、神藤王の事だったな？

そうだな・・・噂とは全くと言っていい程違った御方だった。」

「ヴオバン侯爵の再来って奴？」

「どれ程横暴な男かと思っていたが・・・違った。」

初めて会った時には、普通の少年としか思えなかった。

次に会った時には王としての威厳を存分に見せつけられた。

だが・・・そんな彼の姿に畏怖する者は『赤銅黒十字』には見受けられなかった。」

「脅されているんだとしたら、あんなに心配そうな表情はしてなかっただろうしね。」

「それにあの覇気・・・彼が神殺しとなつてまだ4ヶ月。」

今後の事を考えると少し恐ろしくもあるな。」

「そうなんだよ!!」

やっぱりアンドレアもそこに気付いてくれた。

その事に僕のテンションは鰻登りだ。

「護堂とは全く違う生粋の武人。」

勿論僕や羅濠教主と比べたらまだまだだけど、年は護堂よりも下なんだよ？

あの若さであれだけの武術を身に付けて居る何て・・・本当にこれからが楽しみたよ。

それでいてあの呪力の使い方の上手さ・・・あれだけは誰にも真似出来ないだろうね。」

捲し立てる様に言葉を並べる僕にアンドレアは呆れた様に溜息を吐く。

「はあ・・・少しは落ち着け。」

だが言う程の物だったか？ 俺にはそうは見えなかったが・・・。」

「わかってないなあ、アンドレアは。赤銅黒十字で会った時も、さっきの決闘後も・・・全く呪力を感じられなかった。」

「っ!! 確かに戦闘後だけなら一時的な疲労で説明も付くが・・・。」

「神殺しの持つ呪力は底が無い。それを完璧に自身の内側へ押さえ込んでいるんだ・・・それも平常

時から。

僕が言うのも何だけど・・・ちよつと規格外だよね。

でも・・・。」

と続けようとした所で急に足から力が抜けた。

痩せ我慢で今まで持っていたけど・・・流石に限界だったみたいだ。体を内側から焼かれるのは予想外だった。

鋼に変えていた範囲も時間が無くてかなり少なかったし、ダメージ量が半端ない。

急に倒れた僕に切迫した様子のアンドレア。

「・・・いいいやあ・・・ちよつと限界みたい。

後は宜しくね、アンドレア。」

「お、おい!!」

最後に残った意識の中で思う。

昴もまた護堂同様発展途上だ。

権能の掌握もこれから進むだろうし、戦闘経験も積んでいく事だろう。

・・・やっぱりもつと成長した時に再戦した方が楽しそうだよね。

そして僕は完全に意識を手放した。

後日長時間の説教を喰らったのは言うまでもない。

S i d e 昴

意識を失った僕が次に目覚めたのは赤銅黒十字で使っている部屋だった。

体には包帯が巻いてあったりしたけど、殆ど痛みは無い。

状態がいい事もあって、丁度起き上がろうとした所にエリカさん達が入って来た。

「目が覚めたのね。

まだ起きたら駄目よ、安静にしてなさい。」

「エリカさん、馨お姉ちゃん、おはようございます。

もう殆ど痛みはありませんし大丈夫ですよ。」

制止を無視して体を起こす。

心配な表情を浮かべていた二人だったが、僕の何ともなさそうな様子にほっとしていた。

エリカさん達の話の話を聞けば、僕は丸1日眠っていたみたいだ。

傷自体は大した事なかったけど、出血量が多かったらしい。

その為1日も目が覚めなかったのだろうとエリカさん達は言っていた。

空腹を落ち着かせる為に朝食を取ったら、パオロさん達の下へ向かう。

パオロさんの執務室に入ると、中には幹部のメンバーが揃っていた。

「お疲れだったね、昴君。」

「確かに疲れましたが、とてもいい経験が出来ました。」

僕はパオロさんの正面に腰を下ろす。

するとミーシャさんがすつと紅茶を出してくれた。

「ありがとうございます、ミーシャさん。」

「いえいえ、昴君もお疲れ様。」

怪我也大した事なくてよかったわ。」

優しく微笑んでくれたミーシャさん。

彼女だけでなく、この場に居る全員が優しい笑みを浮かべていた。

その事に心が温かくなる。

照れ隠しに紅茶で一息付くと、改めて口を開いた。

「何とか勝てましたから、計画した通りに進める事が出来ました。」

「エリカから報告は受けているよ。」

イタリアに来て早々大変だったが、やっと落ち着けるね。」

パオロさんの言葉に苦笑いが浮かぶ。

僕達はサルバトーレ卿との決闘が決まった後、長い時間を掛けて話し合いを行った。

その主だった内容は、勝った時と負けた時の対応だ。

負けてしまった際の事はすぐに決まった。

満場一致で再戦を申し込まれるという予想だったので、僕が頑張つて戦う・・・それだけ。

問題だったのは勝った時だった。

この条件はサルバトーレ卿を納得させる為に付け加えた物。

別に僕は彼に望んでいる事があつた訳じゃない。

それはパオロさん達も同じだった。

話合ひの際、最初にサルバトーレ卿の事を詳しく教えて貰つた。

主に彼の性格、戦闘スタイル、そして権能。

その情報があつたからこそ今回の報酬を思いつく事が出来たんだと思う。

戦う事が好きであるサルバトーレ卿。

有事の際、僕の手が回らない事も多くある筈。

そんな時に代わりに戦つてくれる人がいると心強い。

勿論彼が僕達の思い通りになる様な人ではないと言うのは分かっている。

でも同じ神殺しである僕の・・・それも依頼という形なら無下には出来ないのではと考えた。

それに依頼内容も戦闘のみにするつもりだ。

此れならば依頼自体が彼にとってのご褒美になるのでは・・・と思つたのだ。

僕の提案に皆賛同してくれた。

この契約だけで彼の問題行動がなくなるとは誰も思っていない。

けど今後の事を考えると、出来る限り良い関係を築いていきたいと言うのが全員の総意だった。

だから僕が勝った時の報酬は『依頼の発注』に決まったのだ。

「これで少しはあの御方も落ち着いてくれると嬉しいんだがな。」

「それは無理だろう。」

あの方にとっては『戦える機会が増える』としか思っていないだろうからな。」

「それもそうか。」

結局今後もサルバトーレ卿の動向には気を付ける……という事で一致した。

「さて、これからの予定なんだけどね。」

その後も多くの話題で話が弾んでいたが、時計を見たパオロさんがそう切り出した。

主だった話題は僕の新しい権能に付いてだった。

全員が興味津々で、各自の見解で大いに盛り上がった。

しかし朝から始まったこの会議も、今は昼に差し掛かろうとしている。

パオロさん達には仕事もあるだろうし、この辺りが区切りと見たんだろう。

「本当はある人に会って貰う予定だったんだけど……あんな事になったから話が流れてしまっただけね。」

でも日を改めてと話は付いている。

詳しい日程が決まり次第連絡するよ。」

「わかりました……それまで僕は何をしていればいいですか？」

「そうだね……折角の夏休みだから、ミラノの街を楽しんできたらどうだい？」

パオロさんは優しい笑みを浮かべる。

彼の言葉は嬉しいけど、流石にそれは悪い。

「僕も何かお手伝い出来る事は……。」

しかしパオロさん達に笑って断られた。

「その気持ちだけ受け取っておくよ。」

昂君はまだ学生だ、今は子供らしく遊ぶ事を優先すると良い。」

「それに大きな戦闘の後だ。」

心身ともに休める事も必要だよ。」

「そうよ、仕事は私達に任せて夏休みを楽しんで。」

ブラウさん達からも言われてしまった。

確かに僕に出来る事は限られてくる。

それに夏休みを満喫したいという気持ちがあるのも確かだ。等と考えている時エリカさん達にも声が掛けられていた。

「エリカもこの夏は好きに過ごすと良い。」

「勿論馨ちゃんもね。」

「しかし・・・宜しいのですか?」

「今は忙しい時期でも無い。」

それにエリカも昴君とゆっくりしたいだろう?」

パオロさんの言葉にエリカさんは顔を綻ばせ、そして「ありがとうございます」と頭を下げた。

馨お姉ちゃんは僕と同じお客様という立場だ。

『赤銅黒十字』と『沙耶宮家』との親交を深めると言う役目はあるけど、そこまで深い意味合いは無い。

よって馨お姉ちゃんも同様に夏を満喫できるという訳だ。

僕がエリカさん達に視線を向けると、彼女達は笑顔で頷いてくれた。

「わかりました、ゆっくり休ませて頂く事にします。」

でも、何かあつたら教えて下さい。

僕に出来る事でしたら何でもしますから。」

僕の言葉にパオロさんはしつかり頷く。

・・・という事で僕達は連絡があるまでゆっくりする事になった。

第29話 デート

S i d e 昴

パオロさん達との話し合いの後は彼等の言葉に甘えてゆつくり休ませて貰った。

まだ疲れが抜けきっていなかったのか、朝までぐっすりだった。そして翌朝。

僕はエリカさん達と朝食を食べながら、これからどうするのかを話し合っていた。

「折角貰えた休暇・・・存分に楽しませて貰いましょう。」

「でも、どうするんですか？」

僕の言葉にエリカさんは少し考えてから口を開いた。

「そうね・・・二人は初日にミラノの主要観光地を見て回ったのよね。」

「途中でハプニングはあったけど、殆ど見て回れたんじゃないかな。」

「だったら今日は私の買い物に付き合ってくれないかしら？」

「僕はそれでもいいですよ。」

言葉に困る事は無いですし、普通に街を歩くのも楽しそうです。

「シヨップピングか・・・僕も色々見てみたいと思っていたんだ。」

「なら決まりね、朝食を食べ終わったら早速出掛けましょう。」

朝食の間エリカさん達は何処に向かうか話していて、とても楽しそうだった。

そんな二人以上に、僕自身も心が躍っていた。

朝食を食べ終わった僕達は早速街へと繰り出した。

「まずは何処に行きましょうか？」

「そうだな・・・僕は少し服を見たいかな。」

「いいわね、最近忙しくてファッションの気を配る余裕がなかったから。」

という事で、エリカさんお勧めの服屋に行く事になった。

そしてついに行った事に後悔する事になる。

服屋に入ったのはいいけど、この店には女性物の服しか扱っておらず、僕には用の無い店だった。

そして当たり前だけど女性の姿しかない。

1人になるのは得策ではないと判断した僕は黙ってエリカさん達の後ろをついて歩いていった。

そんな僕の思いを知ってか知らずか、2人は楽しそうに服を物色している。

「いい店だね・・・うん、凄く良い。」

「気に入ってくれたのなら私も嬉しいわ。」

馨さんはこういうのも似合うんじゃないかしら。」

「うくん・・・僕はあまりスカート穿いた事が無いからなあ。」

「だからいいんじゃない。」

偶には女性らしい格好もしなくちゃ。

・・・それに昴も喜ぶと思うわよ。」

急に馨お姉ちゃんが僕の顔を見詰めて来た。

僕は話を聞いていなかったから突然見詰められて反応に困ってしまふ。

そんな僕を余所に馨お姉ちゃんは頷くとエリカさんから服を受け取った。

「そうだね・・・ちよつと試着してきてもいいかな?」

「ええ、構わないわ・・・ちよつとそのあなた。」

馨お姉ちゃんはエリカさんの呼んだ店員に連れられて離れていった。

「エリカさん、馨お姉ちゃんは?」

「少し試着してくるそうよ、昴も後で感想を言ってあげなさい。」

「え〜つと・・・わかりました。」

頷いた僕に満足気のエリカさんは不意に僕の手を取った。

「私も少し見ておきたい物があるの。」

昴の意見も参考にしたいから、一緒に来て貰ってもいいかしら。」

そうして連れられて来た所は・・・下着売り場だった。

「エ、エ、エ、エリカさん、こ、ここって・・・。」

「ほら昂、これなんてどうかしら?」

エリカさんは顔を真っ赤にしている僕なんて気にせず、意見を聞いて来ている。

僕は女性の下着を直視出来ず、下を向いて顔をあげる事が出来ない。

「やっぱり着けてみないとわからないわね。

私も少し試着してくるからそこで待っていて頂戴。」

「えっ、あの、エ、エリカさん。」

慌てて声を掛けるもエリカさんは何着かの下着を持って試着室に行ってしまった。

そして女性下着売り場に1人取り残された僕。

周りからの視線が辛い。

エリカさん・・・お願いだから早く出てきて下さい。

少し前まで早く出て来てと願っていた僕はどうかしていた。

だって試着室から出て来るエリカさんの姿は容易に想像できたのだから・・・。

「昂、これなんてどうかしら?」

ホントはすぐに目を背けなくちやいけない筈なのに、視線を外す事が出来ない。

透き通るような白い肌。

豊満な胸に、くびれた腰からお尻に向けたライン。

女の人でも見惚れる様なプロポーションを前に一瞬で顔が赤くなる。

「昂、見惚れるのは嬉しいけれど、そんなに見詰められたら流石に恥ずかしいわ。」

視線を外せずにいたら、エリカさんは身を振りながら少し恥ずかしそうに体を隠そうとする。

そんな仕草も男心を攪る要因にしかならない。

本能が暴走しそうになるのを何とか抑え付け視線を外す。

「い、いめんなやつ。」

「いいわよ、それよりこの下着どうかしら？」

「いや・・・あの・・・」

視線を向ける訳にも行かず、何と答えたらいいのか分からず、あたふたしていた所に後ろから声が掛かった。

「とても楽しそうな事をしているね、2人共。」

少し声に怒気が含まれていた様な気がするけど、この際気にしない。

助けが来たと思つて振り向いたらそこには・・・。

「・・・馨・・・お姉ちゃん？」

「そうだよ・・・どうかな、昴君？ その・・・似合っているかな？」

もし良かったら君の意見を聞きたいんだけど・・・。」

そこに立っていたのは何処のお嬢様かと見間違える程の女性だった。

勿論馨お姉ちゃんなのはわかっている。

でも再開してから来ていた服はいつも男物だったので思わず確認してしまった。

白色の丈の長いワンピースの上から水色のカーディガンを羽織っている。

頭には白いつばの広い帽子を被っていて、馨お姉ちゃんの綺麗な顔を際立たせている。

今までとの印象ががらりと変わって、とても女性らしくなっている。

「す、すごく綺麗だよ、思わず見とれちゃった。」

「そ、そうかい？ そう言ってくれたのなら試着してみた甲斐があったかな。」

僕は見惚れて、馨お姉ちゃんは恥ずかしそうに、2人で顔を赤くしているといったの間にか着替えていたエリカさんが試着室から出て来ていた。

「馨さん、とてもよく似合っているわ。」

それに、昴も喜んでくれたでしょ？」

「こんな恰好をしたのは子供の時以来でね・・・流石の僕もちよつと恥

ずかしいんだ。」

「恥ずかしいがる事ないわ、昴だつてそう思うでしょ？」

「は、はい、とても似合ってます。」

いつもの服装は格好良いけど、今は凄く綺麗です。」

僕がそう言うのと馨お姉ちゃんは更に顔を赤くしてしまった。

そんな馨お姉ちゃんを見て、エリカさんは呆れた様に言う。

「今日はそのままの格好でいたらどう？」

「い、いや、流石にそれは……。」

「そうだよ、馨お姉ちゃん。」

似合ってるんだから、今日はそのままでいた方がいいよ。」

「決まりね……彼女の服、そのまま買い取らせて貰うからお願い出来るかしら。」

エリカさんが店員さんにそう告げてしまい、馨お姉ちゃんは戸惑いながらも嬉しそうにしていた。

僕達は服屋を後にし、色々な所を見て回った。

日本では見た事の無い変わった物が置いてある雑貨屋さんだったり……。

お昼には日本の大衆食堂の様な所で、地元の人に囲まれながら食事をしたり……。

そして今僕達は三日前にも来たドウオモ大聖堂のある広場まで来ていた。

この前も思ってたけど、凄く存在感がある建築物だなあ。

「もう日も暮れる時間ね、そろそろ結社に向かいますよるか。」

「その前に話があるんだけどいいかな？」

「……どうしたの？」

訝し気に馨お姉ちゃんを見るエリカさん。

それを無視する形で馨お姉ちゃんは僕を真っ直ぐに見詰めてくる。

「昴君……以前僕の気持ち伝えた事を覚えているかな？」

「う、うん。」

「そうか……でも、もう一度ちゃんと伝えて置きたいんだ。」

「・・・馨お姉ちゃん。」

真剣な表情の馨お姉ちゃん。

そんな彼女の表情に心臓が高鳴る。

「僕は君の事を子供の頃は弟の様に思っていた。

でも武術であつという間に追い抜かれ、すぐに差をつけられて・・・

少し寂しい気持ちや悔しい気持ちもあつたけど、それ以上に強くなつていく君がとても格好良かったんだ。」

馨お姉ちゃんは話し続ける。

初めて聞くあの時以上の馨お姉ちゃんの僕への想い。

「道場を辞めなくちゃいけないと知らされた時、始めて僕は君に対する気持ちに気付いた。

僕は昂君の事が大好きだ。

勿論エリカさんが居る事もわかつてるし、例えばどんな返事でも君に協力する事は変わらない。

昂君・・・君の正直な気持ちを教えてくれないかな。」

僕の正直な気持ち。

僕は・・・。

「僕にとって馨お姉ちゃんは憧れの存在だった。

いつも僕を気遣つてくれて、優しくて・・・一緒にいて安心できる、家族以外でそう思える唯一の人だった。

再会した時はとっても綺麗になつてドキドキした。

婚約者だつて知つた時、驚いたけど凄く嬉しかった。

約束通り、ずっと傍にいて馨お姉ちゃんを守るつて・・・でも。」

言わなくちゃいけない。

例え傷つける事になつたとしても。

僕が口を開こうとした時、今まで口を閉ざして見守っていたエリカさんが声を上げた。

「昂！」

「っ！」

驚いてエリカさんの方を振り向くとそこには優しく微笑んでいる

エリカさんが居た。

「昴、私の事を気にしなくてもいいのよ。

自分の気持ちを正直に言いなさい。」

「えっ!!」

エリカさんはそう言うのと黙って頷いてくれた。

自分の気持ちに正直に……。

そう思うとずっと抱えていた想いが言葉になって溢れだした。

「馨お姉ちゃん……ううん、馨さん。

僕は神殺しだ。

これから先、普通の生活なんて出来ないと思うし、沢山危険な目に合わせる事になるかもしれない。

それに……既にエリカさんを愛し、護り抜くと心に誓っています。

……それでも……それでも僕は……。」

「……昴君。」

「……それでも僕は、馨さんとずっと一緒にいたい。

貴女を護るのは他の誰でもない僕の役目だ、それは誰にも譲りたくない。

世界を敵に回したとしても貴方の事は必ず護ります。

だから……僕とこれからの未来ずっと一緒にいてくれませんか?」

僕は彼女に右手を差し出す。

彼女の目には次第に涙が溜まってくる。

そして彼女は僕の手を取るのではなく、僕に飛び込む様に抱き着い

てきた。

「ありがとう、昴君……大好きだよ。」

「はい、僕も大好きです。」

瞳を潤ませながら僕を見つめて来る馨さん。

そんな彼女に吸い込まれる様に顔を寄せ……僕から始めて彼女にキスをした。

彼女の頬に涙の雫が伝っていくのが分かり、彼女を抱き締める腕に力が籠る。

この人も絶対に僕が護るんだ。

僕の中に何者にも譲る事の出来ない想いがまた一つ心に灯った。

暫く抱きしめあっていたら「ん、うん」とエリカさんの咳払いが聞こえ事に慌てて体を離れた。

「どつてもいい所邪魔して悪いけど、もういいかしら？」

「す、すみません、エリカさん。」

「ああ、悪かったね。」

少し機嫌が悪そうだし、呆れている様にも見える。

・・・そりやそうだよね。

恥ずかしさと申し訳無さが心を占める。

「エ、エリカさん、あ、あの・・・。」

「いいの、前々から分かっていた事よ。」

最初から神殺しである貴方の寵愛を私一人が独占出来る何て思っていないかったわ。

それに・・・。」

そう言つてエリカさんは馨さんに視線を移す。

「彼女とならいい関係で居られそうだしね。」

「僕もそう思うよ。」

エリカさんこれからも宜しく頼むね。」

「こちらこそ。」

二人は固く握手をする。

元々友好的な雰囲気だった2人だけど、こうして改めて握手する姿は何処か嬉しかった。

「じゃあ、そろそろ帰りましょうか。」

もう叔父様達も戻っているでしょうし。」

そう言つて僕に腕を絡めて来るエリカさん。

同時に柔らかな胸の感触も伝わって来る。

「エ、エリカさん？」

「あら、いいじゃない・・・散々私の前で見せつけてくれたんだから、これ位。」

顔を赤くする僕に悪戯めいた笑みを向かるエリカさん。

そしてそれに対抗する様に馨さんも反対の腕に抱き付いて来た。

「2人で狡いじゃないか、僕も混ぜて欲しいな。」

「あら、今位譲ってくれてもいいんじゃない？」

「それを言うなら、エリカさんこそ空気を読んで欲しいな。」

「あ、あのく2人共・・・？」

さっきまでもいい雰囲気は何処へ行つたのか。

急に僕を挿んで火花を散らし始めた2人。

しかしそれも束の間・・・次は同時に笑みを浮かべあう。

「やっぱり私達は・・・仲間であり、友であり・・・。」

「同じ人を愛した者同士であり・・・。」

最後は2人の声が重なり合う。

「そして・・・ライバル!!」

視線をぶつけ合う2人だったけど、その口元は楽しそうに笑っていた。

そんな2人の様子に心配していた自分が馬鹿らしくなった。

彼女達となら何処へだって進んで行ける。

そんな事を頭の隅で考えながら、2人の手を引いて歩き出す。

その時の僕の顔にも間違いない笑みが浮かんでいたと思う。

第30話 会談に向けて

Side 昴

馨お姉ちゃん・・・いや、馨さんと心を通じ合わせてから数日が過ぎ、イタリアに来て1週間以上が経った。

パオロさんの言っていた会う予定だった方も忙しいらしく中々予定が合わない。

パオロさんは「神殺しとして命令すれば」と言ってくれたが、迷惑は掛けたく無いので断り、気長に待っている。

僕達は待っている間観光ばかりしているのも飽きて来るので、結社の修練場を借りて稽古をしていた。

今はその真つ最中だ。

「皆さんいい調子ですよ。」

そのままの状態をキープして下さい。」

僕は先日から此処の見習い騎士の子達に頼まれて氣の稽古をつけてあげている。

そして現在目の前には20人程の結社の人達が座り意識を集中させている。

初めてこの修練場に来た時は僕に気付いて出て行く人や、隅の方に下がってしまう人ばかりだった。

その事に申し訳なく思いながらも「仕方ない」と割り切つて稽古をさせて貰っていた。

けど、何日か経つて僕より少し年下位の男女が5人程来て、

「お、御初に御目に、か、掛かります。

わ、私達は、しゃ、赤道黒十字の、み、見習い騎士です。

し、神藤昴様、わ、私達に稽古をつけて、い、頂けないでしょうか。」ひと息に噛みながらも捲し立てる様に先頭の少女が話す全員が同時に頭を下げた。

周りからは息を呑む声が聞こえる。

神殺しは魔術師にとって畏怖される存在。

もし機嫌を損ねる事があれば、何をされても文句は言えない。

それに世間では僕は「魔王」でもあるのだから・・・彼等の反応も仕方がない。

まあ、僕はそんな事しないけどね。

よく見ると全員震えている事がわかる。

何故恐怖を感じながらも僕に声を掛けて来たのか不思議だったが、彼女達をこのままにしておく訳にはいかない。

僕は彼等に歩み寄り先頭の子の肩に優しく手を置く。

その子は手を置いた瞬間びくつとし、恐々とした様子で顔をあげた。

真つ青な顔色の彼女に僕は優しく微笑みながら「いいですよ、一緒にやりましょう」と言つてあげた。

僕の言葉に残り全員も顔をあげる。

声を掛けられた彼女は目に涙を溜めながらも「宜しくお願ひします」と勢い良く頭を下げ、つられる様に全員がもう一度頭を下げた。

そんな事があつて彼女達に稽古を付けて上げた。

流石歴史ある結社なだけはある。

見習い騎士と言つていたが結構レベルが高く、覚えもいなので教え方がいがある。

最初は恐々していた彼女達だったが、優しく接していたら最後の方は笑顔が垣間見れる様になっていた。

そして次の日には少し人数が増えていた。

昨日の様子を見ていた人達が「自分達も」と頭を下げて来たのだ。そんなこんなで日に日に人が増え、今では20人以上に稽古を付ける事になっていた。

全然後悔なんてしてないけどね。

彼女達が声を掛けて来た理由について・・・ミーシャさんが自分の指導している子に声を掛けたらしい。

僕に声を掛けてきた子がその子だ。

何でも僕が結社の人達と仲良くなる切っ掛けになれば・・・と思つたらしい。

その御蔭で僕が居る事により蔓延していた何処かぎこちなかった
雰囲気は無くなった。

・・・ミーシャさんに感謝。

「つと、そろそろ時間ですね。」

今日はここまでにしましょう。」

僕がそう言うのと全員が目を開け、深く息を吐いた。

座ってやる稽古だと言うのに全員がびっしり汗を掻いていた。

そして立ち上がった彼等は僕の前に整列する。

「お疲れ様でした。」

皆さんここ数日で凄く上達しています。」

僕が労いの言葉を掛けていると、修練場にエリカさんとパオロさん
が揃って入ってきた。

今日は打ち合わせがあると言ってエリカさんは稽古を欠席してい
たのだ。

馨さんは僕の隣にいて、指導を手伝ってくれていた。

急ぎの用じやないのか、エリカさん達は僕の話が終わるのを待つて
いる様で此方に向かつてはこない。

それでも待たせては悪いと僕は早々に話を切り上げる事にした。

「それでは皆さん、今日もありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

僕の言葉に彼等は解散し、早々に修練場を後にしていく。

恐らくパオロさん達に気付いて、邪魔をしない様に配慮したのだら
う。

僕と馨さんはエリカさん達に近づいて行く。

「お待たせしました。」

「構わないよ、私の方こそお礼を言わなくてはいけない。」

結社の騎士達を指導してくれてありがとう。」

「僕も刺激になりますから気にしないで下さい。」

それよりもどうかされましたか？」

僕の問い掛けに表情を真剣な物に変えるパオロさん。

「漸く日程が纏まったよ。」

「急で悪いが明日こちらに見えるそうだ。」

「わかりました、それじゃあ明日の稽古は中止ですね。」

「そちらについても私の方から連絡しておこう。」

「ありがとうございます。明日はどうすればいいですか？」

「午前中には見えられないという事だ。」

慌しくなるが朝の内から準備をしておいてくれ。

それと・・・明日、私も同席するがくれぐれも気を付けてくれ。

言葉は悪いが、腹黒い方だ・・・何を考えているのか古くからの仲間だが私も想像できない。」

「ご挨拶するだけですから大丈夫ですよ。」

それに何かあったとしても、僕にはパオロさんやエリカさん・馨さんが居ますから。」

そう言っただけ彼女達にも笑顔を向けると、二人も笑い返してくれた。

そんな僕達を見てパオロさんにも自然と笑みが零れる。

「はははっ、昴君の信頼を裏切らない様にしないとな。」

「私も全力で補佐させて頂きます。」

「自分も同じく。」

力強い返事をした2人にパオロさんも満足そうにしていた。

「それでは続きは食事の後にしようか。」

「そろそろ食事の用意も出来ている筈よ。」

「でしたら僕達は先に汗を流してきますね。」

「じゃあ、食堂で待っているわ。」

話を終えた僕達は揃って修練場を後にした。

次の日の朝。

今日は稽古を休み、朝食を食べ終えたら準備の為エリカさんの部屋に集合していた。

「今日お会いするのは昨日も話した様にとても高貴な方よ。」

そして神殺しである貴方に屈する様な方でもないわ。」

「昂君の前評判があるから警戒して来るだろうけど、一応王としての威厳を示して置かないね。」

うん・・・よく似合っているよ。」

僕はエリカさんと馨さんに見繕って貰ったスーツに身を包んでいく。

人生初のスーツ・・・着慣れてないからちよつと恥ずかしい。

これに決まるまでに何回も着替えさせられた。

まだ会談の前なのに少し疲れてしまった。

「とても格好いいわ。」

それじゃあ、私達も着替えましょうか。」

エリカさんがそう言うと、2人はまだ僕が室内にいるのに服を着替え始めてしまった。

「ぼ、僕は外で待ってますから。」

僕は慌てて扉に向かおうとしたが、それを遮る様に後ろから抱き付かれてしまった。

背中に柔らかい感触が感じられ、更にいい香りが鼻腔を擦る。

「私がお意している服、1人じゃ着られないの・・・だから手伝ってくれないかしら？」

抱きついてきたのはエリカさん。

絶対に理性が削られる事間違いない状況に何とか逃げ出そうとしたけど・・・。

「か、馨さんに手伝って貰えば・・・。」

「ごめんね昂君、僕も手伝って欲しいんだ。」

それに急いで着替えないと、あの方もいらっしやるかもしれないし。」

・・・無理だった。

僕は逃げる事を諦めるしか無かった。

「・・・わ、わかりました、だから離れて下さい。」

「ありがと、何だったらこっち向いて着替える所を見てもいいのよ?」
「け、結構です、て、手伝う事があつたら声を掛けてください。」

エリカさんの冗談だと分かる言葉にも思わず反応してしまい僕は

更に顔を赤く染める。

そして僕は外に出る事も出来ず、そのまま扉を向いて待っている事となった。

服の擦れる音が気になって仕方がない。

「昴君、ここちに来てくれないかな？」

早く解放されたいと思っていると、ついにお呼びが掛かった。

馨さんの方に声を頼りに顔を下げたまま向う。

「・・・昴君、ちゃんとここちを見てくれなきゃ。」

下を向いている僕の顔は強引に上げさせられた。

そこで目にしたのは、着物の帯を締めず前を肌蹴させた状態の馨さんの姿だった。

顔が熱くなっていくのがわかる。

目を背けたいけど、顔を固定されているから何処に目をやっても馨さんの肌が目に入ってしまう。

「着物の裾を抑えていてくれないかな？」

久方振りに女物の着物に袖を通したから上手くいかなくてね。」

「わ、わかりました・・・こ、これでいいですか？」

馨さんの正面に立ち、なるべく見ない様に視線を外しながら手を貸す。

「OKだよ・・・そのまま抑えていてね。」

僕が抑えている間に馨さんは器用に帯を巻いていく。

その間は気が気では無かった。

間近に馨さんの際どい姿があり、距離が近いから彼女の体温が僕の所まで感じられる。

「もう大丈夫だよ・・・ありがとう、助かったよ。」

その言葉と共にすぐさま離れ、ひと息つく事が出来た。

そしてこの時にやっと馨さんにちゃんと目を向けた。

馨さんは白を基調とした着物で、花の種類はわからないけど、青い花がきれいに着物を彩っている。

馨さんの中性的で綺麗な顔つきによく映えている。

「どうかな？」

「は、はい、よ、よくお似合いです。」

「そう言ってくれて僕も嬉しいよ。」

馨さんのどんな男でも見惚れてしまう様な笑顔に、赤くなっていた顔がもつと赤くなる。

そんな僕に馨さんが近付いて来て、止めを刺すかの様に耳元で囁いた。

「僕って着物を着るとき、下着は着けない主義なんだ。」

「ふえ!!」

「上を着けて無いのは気付いたと思うけど・・・下も確かめてみる?」

馨さんは素っ頓狂な声を上げる僕の手を取って自分の大事な所にかけて行こうとする。

突然の告白に動けなかった僕だったけど、救いの声が掛けられた。

「昴、こつちに来てくれないかしら?」

「は、はい! 今行きます。」

「残念・・・確認するのはまたの機会だね。」

とつてもいい笑顔で言われた言葉を背にしてエリカさんの所へ向かった。

エリカさんは胸元を抑えながら、僕を待っていた。

「遅いわよ・・・何やらお楽しみだったみたいだし。」

「そ、そんな事ありませんよ。」

少し怒った表情でこつちを睨んでくる・・・けど本気で怒っている訳では無いのだろう。

どちらかといえは拗ねている様な感じに見える。

「まあいいわ・・・それよりも背中中のチャックをあげてくれないかしら?」

そう言つて後ろを向き、髪を退かすエリカさん。

そこに現れたのは、傷一つない綺麗な白い肌だった。

腰から背中、肩にかけて大理石にも引けを取らない白く透明な肌。

しかもまだちゃんと締まっていけないのか、一歩間違えればお尻の方も見えてしまいそうだ。

「じっくり見たいのなら2人きりの時に幾らでも見せてあげるわ。」

だから今は早くしてくれないかしら？」

はっと我に返り、エリカさんの方に手を伸ばす。

「す、すいません、今あげますね。」

肌を噛まない様に注意しながらゆっくりと上げていく。

その間も綺麗な肌が目の前にあるから、ドキドキが治まらなかった。

「ありがとう昴、後は腰にある紐を縛って……。」

チャックを上げてからは、エリカさんが自分で衣装を整えて行く。

そして全てを終えたエリカさんが僕の方に振り返った。

エリカさんは赤を基調としたドレスだ。

赤は赤銅黒十字の色でもあるから、こうした大切な時には赤色のドレスを選ぶそうだ。

肩は剥き出し、胸元も強調されていて、スタイルの良いエリカさんによく似合っている。

目のやり場には困るけど……。

「どうかしら？」

「……はっ、す、すみません。」

と、とても御似合いです、エリカさん。」

見惚れていて、少しぼーっとしてしまった。

エリカさんは全てを見透かしている様に微笑みを浮かべている。

「ありがとう、昴……貴方にそう言っただけで貰える事が何よりも嬉しいわ。」

そう言ったエリカさんの笑顔はとても綺麗だった。

そんな彼女に再び見惚れている間に馨さんが僕の隣に立っていた。

「そろそろ時間じゃないかな？」

「それもそうね……行きましようか。」

2人に促される形で部屋を出ると、部屋の前でパオロさんが待つて居た。

「すみません、お待たせしました。」

「いや、気にする事は無い。」

……女性の着替えというのは時間の掛かる物だからね。」

何かを達観する様に僕だけに聞こえる様に話すパオロさん。

・・・僕よりも沢山経験してきているんだろうな。

「それよりも、そろそろ到着すると連絡が来た。」

「私は出迎えに行くが昴君はどうする？」

「勿論僕も行きます。」

「はははっ、昴君ならそう言うと思っていたよ。」

笑い出すパオロさんを横目にエリカさん達が話し掛けて来る。

「本当なら昴は魔王らしく部屋で踏ん反り返っているのが正しいのよ。」

「確かに自分から出迎える神殺し何てあまり居ないよね。」

「でもそこが昴君らしいじゃないか。」

等と言われながら僕達はエレベーターに乗り込み、エントランスを目指す。

その道中昨日の確認をしようと口を開いた。

「今日御会いする方は対魔王組織の偉い方でしたよね。」

「グリニツジ賢人議会の元議長様・・・今でも議会に強い発言力も持っている方よ。」

エリカさんの答えに昨日の話を思い出す。

グリニツジ賢人議会。

確か神殺しの暴挙に対抗する為に立ち上げられた組織だった筈。

賢人議会は神と神殺しの情報を集め、有事の際には率先して対応する事が主な活動だ。

そして集めた情報も希望者には提供している。

以前見せて貰ったサルバトーレ卿の資料もその情報を元に製作したらしい。

「昨日も話したが、彼女とは少し縁があったね。」

その縁があつて今回の会談が実現したんだ。」

「今回の会談は本来なら実現不可能な物・・・叔父様の力があつての物なのよ。」

確かに対魔王組織の人が「魔王の再来」と呼ばれている僕と会談何て在り得ない事だ。

その組織の偉い方とこれから会うんだ……少しドキドキしてきた。体が弱い方だと言う話ですけど……その辺りはどうなんですか？」とある事件が切っ掛けで体調を崩してしまわれてね。

今はあまり外に出られないと聞いているよ。」

「そんな方が態々会ってくれるなんて……。」

「彼女自身何か考えがあつての事かもしれない。」

何も起きないと思うが、一応慎重に行動してくれ。」

パオロさんの言葉に全員がしっかりと頷く。

そして丁度いいタイミングでエレベーターが到着し、僕達はエントランスに入る。

通常は多くの人で溢れ返っている時間なのだが、今日は誰もいない。

今日の為に人払いをしたとパオロさんが言っていた。

暫く待っていると、結社の前に車が止まったのが見えた。

車から降りてきたのはプラチナブロンドの髪が眩しい美しい女性。

その女性はこちらに目をやると一瞬表情を固めたが、すぐに微笑みを浮かべこちらへ向かって来る。

彼女の後ろには2人の男性が付いて、僕の事を警戒する様に睨んでいる。

少し気が滅入るけど「気にしてもしょうがない」と割り切り、僕達の正面で立ち止まった彼女へと頭を下げた。

「本日は態々御越し頂きありがとうございます。」

初めまして……この度新しく神殺しとなりました『神藤 昂』と申します。」

昨日練習した通りの挨拶……ちゃんと出来た。

頭を上げると男性2人の訝しげな視線に気付く。

プラチナブロンドの女性も驚いていたが、すぐに先程の微笑みに戻り優雅に頭を下げた。

「此方こそ王自ら出迎え恐悦至極に御座います。」

申し遅れました、私グリニツジ賢人議会特別顧問のアリス・ルイズ・オブ・ナヴァールと申します。」

・・・以後お見知りおきを。」
これがプリンセス・アリスとの出会いだった。

第31話 プリンセス・アリス

S i d e アリス

私の名前はアリス、周りからは『プリンセス・アリス』と呼ばれています。

グリニツジ賢人議会の元議長・現特別顧問で自分でも世界有数の魔術師だと自負しております。

アレクサンドルの追い続けていた『最後の王』との戦いも一先ず落ち着きを見せた3月。

少しはゆっくり出来ると思っていた所にある報告が上がってきました。

イタリアに顕現したまつろわぬ神。

赤銅黒十字が対処していたのですが、何やら不穏な動きがあるという物でした。

神を封じたという些か信じ難い発表を確認する為、議会の者達が現地調査に行きましたが、その場に神が封じられている気配は無いとの事でした。

私達はすぐに赤銅黒十字に説明を求めましたが「調査中」の一点張り。

私個人で昔から縁のあったパオロ様と連絡を付けてみても教えては下さらなかつた。

得られた情報は唯「近い内にわかる」その一言だけでした。

その後パオロの姪であるエリカ・ブランデッリが日本に留学したという報告も上がってきました。

日本には草薙護堂様が居られます。

何か関係があるかと探らせましたが、何でも婚約者のお世話に行つたとの事。

その婚約者について調べさせていた時、事件は起こりました。

日本に現れたまつろわぬ神と戦っていた草薙様。

そこに突如戦いに割つて入った者が現れたそうです。

その御方の名は『神藤 昴』・・・新たに生まれた神殺し。

報告には草薙様の獲物を横取りした・・・とありました。

その後王同士の会談を持って和解したとの事でしたが、多くの者が近い将来2人の王が激突すると考えています。

何故なら神藤様はあの「ヴオバン侯爵の再来」と呼ばれているのですから・・・。

王の命令に逆らえない事を良い事に赤銅黒十字を自らの手中に入れた。

そしてそれだけに飽き足らずパオロの姪エリカを自身の女として囲っている。

同じく日本でもとある家系を傘下に入れ其処の娘も1人、人質として傍に侍らせていると言う。

・・・もし噂通りの人物だとしたらヴオバン侯爵以上の魔王振りです。

イタリア中の魔術師達が新たな王に警戒を強める中、赤銅黒十字から1つの打診がありました。

それは「我等が王『神藤 昂』様が賢人議会の方との会談を望んでいる」という物でした。

議会の方達は大いに慌て、多くの王と面識があり懇意にもしている事から私に協力を要請してきました。

本来結社の方針としては断固として断るべきなのですが・・・被害を最小限にする為受けるという事でした。

実際はこれより先にパオロ様から『我が王と会ってくれないか』という話が来ていました。

・・・その時は言葉を濁したのですが、結局は私が行く事になりました。

しかし会談の数日前、突然中止になってしまいました。

その理由はサルバトーレ卿と神藤様の決闘。

神藤様が来日したその日にサルバトーレ卿が決闘を申し込み、神藤様もそれを了承したとの事でした。

この事からも随分と交戦的な御方だという事が想像できます。

その決闘の様子は赤銅黒十字の撮影した映像で確認させて頂きました。

資料作成の参考に・・・とパオ口様から内密に送られてきた物です。
・・・随分と危険な橋をお渡りになられる。

結社が危機的な状況とはいえ、エリカが心配では無いのでしょうか。

等と考えながらも拝見した映像では神藤様が勝利していました。

事前情報通り炎に関する権能をお持ちのよう・・・。

しかしあの矢を放った権能は流石にどういった権能なのか分かりませんでした。

恐らく日本にて草薙様から横取りした神の権能である事は間違いない筈。

映像越しでは無く、直接見る事が出来れば何かしらの啓示を得る事が出来るでしょうが・・・致し方ありません。

結局映像からわかった事は神藤様の神殺しとしての実力の一端だけ。

いえ、それが分かっただけでも僥倖でしょう。

後は直接会ってみない事には対策も立てようがありませんから・・・。

日程を調整し今日神藤様と会談をする事になりました。

護衛は2人・・・議会の中でも屈指の使い手です。

神殺しに対しては石ころ同然でしょうが、一応連れて行く事になりました。

私はアストラル体でいくので危険なのは護衛の人達だけの様な気もしますけど・・・。

赤銅黒十字の本社に近付くにつれて、護衛の二人の緊張感が高まって行くのを感じます。

声を掛けた事によって幾分か落ち着いて下さいましたが、それでも体に力が入っています。

・・・そう言う私も心なしに緊張していますから、彼等の事を強く

言えません。

赤銅黒十字で止まった車から降り、視線を巡らせるとガラス扉越しに幾人かの人影が見えました。

いいえ、この時間にこれだけの人数しかいないのはあり得ません。恐らく今日の為に人払いをしておいたのでしょう。

しかしそこに居た人物が予想外でした。

迎えがいる事は予想していましたがけれど、パオロ様が一人で来られると考えていました。

まさか「ヴオバン侯爵の再来」と噂の神藤様が態々出迎えに来られるとは思っても居ませんでした。

エントランスで待っていたのは、パオロ様とエリカと情報にもあった日本の呪術師・沙耶宮 馨。

そして神藤 昴様。

護衛の2人の動きが一瞬でしたが硬直し、警戒心が跳ね上がるのを感じます。

そんな私達を余所に真つ先に言葉を発したのは神藤様でした。

「態々御越し頂きありがとうございます。」

初めまして、この度新しく神殺しとなりました神藤 昴と申します。」

歩み寄った私達に対してとても丁寧に挨拶を下さいました。

・・・もしかすると私達は大きな勘違いをしていたのかもしれないのですね。

そんな事を思いながら今日はとても有意義な時間になるのではと心が躍り出しました。

Side 昴

僕達は挨拶を済ませるとすぐにアリスさんを応接室に案内した。

そして今僕達は相対してソファに座っている。

パオロさんは僕の隣に座り、後ろにはエリカさんと馨さんが立って居る。

アリスさんの後ろにも多分護衛である人達が控えている。

「改めまして神藤昴です。」

「アリス・ルイズ・オブ・ナヴァールです……気楽にアリスと御呼び下さい、神藤様。」

「それなら僕も昴と呼んで下さいませんか？」

様付されるのはまだ慣れなくて……ちよつとむず痒いです。」

「申し訳ありませんがそれは出来かねます。」

神藤様は神殺しの王で在らせられるのですから……御容赦下さいませ。」

はつきりとした拒絶。

何となくわかっていたけどやっぱり慣れないな、こういうの……。「今日は此方に足を運んで下さりありがとうございますとございました。」

本当でしたら此方が何うべきなのに……。」

「王自ら御足労頂く等……そんな恐れ多い事をさせる訳にはいきませんわ。」

恐々としてそう訴えてくるアリスさん。

だけどその瞳にはこの状況を楽しんでいる様な感じがする……僕の気の所為かな？

「……厄災の魔王を我等が守護する地に入れる訳が無いだろうが。」
小さな呟きだったけど狭い室内だ……僕の耳にも届いてしまった。
声の方に視線を向けるとアリスさんの後ろに控えていた1人が僕を睨み付けていた。

……多分聞こえる様に言ったのかな？

僕も世間で流れている噂の事は知っているからある程度は思っているけど……ここまで睨み付けられるのは初めてだった。

流星は対魔王組織の一員……恐怖を押し殺して対抗の意思を見せて居る。

心内で感心しているとアリスさんがすぐさま頭を下げて来た。

「ステイル!!」

申し訳御座いません、後でしっかり注意して置きます……何卒命だけは。」

鬼気迫った雰囲気を出しているけど……さっきの瞳の輝き記憶にある僕は演技に見えて仕方なかった。

まあ、気にしている訳でも無いからいいんだけど。

「いえ、別に気にしていませんから。」

「ありがとうございます……それで今回はどういった御用件でしょうか。」

パオロ様からは『話がある』と伺っておりますが。」

アリスさんの視線がパオロさんに向いたので僕も彼を見る。

そのパオロさんが少々呆れた様子で口を開いた。

「プリンセス……貴方はもう気付いておられるのでしょうか？」

「あら、何の事でしょうか？」

その笑みを見て僕も確信した……あの瞳の輝きは気の所為では無かったと。

「でもパオロ様も人が悪いですわ。」

それならそうと先に仰って下さっても良かったのではないですか？」

「私の言葉等よりも直接昴君に会って貰った方が确实ですからね。」

パオロさんの言葉に2人の視線が僕に集まる。

そしてアリスさんがとても楽しそうに話し出した。

「赤銅黒十字を脅して自らの傘下に、草薙様の獲物を横取り、更にサルバトーレ卿との決闘。」

これらの情報から多くの人からヴォオバン侯爵の再来だと噂されていました。

……ですが、それは間違いだった様です。

噂とは異なる優しき気性に、私達への配慮。

そして何より……パオロ様達の神藤様に対する信頼と心配が感じ取れます。

もし噂通りなのだとしたら、こんな穏やかな空気ではいられないでしょう。」

流石由緒ある貴族様……この短い間に真実に辿り着いた。

この場で話について行けていないのは、アリスさんの護衛の2人だ

け。

その2人を蚊帳の外にしたままアリスさんは言葉を続ける。

「いったい何人の方が神藤様の真実を知らず恐怖している事か。」

「僕はそんなに怖がられていますか。」

「神藤様が来日されてからというものの、イタリア中の魔術師達は体を震え上がらせております。」

ですがその心配は杞憂だったと知る事が出来ました・・・これが私をこの会談に招いた目的ですか。」

最後の問い掛けはパオロさんに向けられていた。

その言葉に頷くパオロさん。

「彼の好意に甘えこの状況を創り出してしまったが、我々はなるべく早い内にその誤解を解きたいのです。」

そして誤解を解くには、直接会って貰うのが一番確実だった。」

「それに私ならば各地にあらゆる伝手があります。」

真っ先に誤解を解いておけば、色々と便宜を図って貰えると・・・
そう言う事ですか?」

アリスさんの言葉にこの場に緊張感が生まれた。

パオロさんも真剣な面持ちで相對する。

「やはりそこまで御見通しですか。」

「少し考えればわかる事です。」

・・・神藤様、幾つかお聞きしても宜しいでしょうか。」

「僕で御答え出来る事でしたら構いませんよ。」

僕の何かを見極める様な彼女の真剣な眼差しに自然と背筋が伸びる。

「ではまず・・・例の噂の発端であった『赤銅黒十字に対しての命令』は彼等を守る為ですか?」

「長い間僕の事を守って貰いましたから・・・僕も同じ事を行っただけです。」

「草薙様の獲物を横取りしたと言うのは?」

「形だけを見ればそう取られても仕方がないのかもしれないかもしれませんが。」

ですが僕は先輩の事を心の底から慕っています。」

「・・・神藤様はその御力で何をなさるおつもりですか？」

その瞬間のアリスさんの雰囲気は凄まじい物だった。

それだけこの問い掛けが重要だと分かる。

答えを間違えればこの会談が台無しになってしまう事も十分に考えられる。

でも・・・僕の考えはこの力を持った時から変わらない。

彼女の覇気に気圧されそうになったが、視線を逸らさず真っ直ぐに見詰め返す。

「僕はこの力を誰かの為に使いたい・・・誰かを守る為に使いたい。勿論この力の強大さは十分に理解しているつもりです。」

だからこそ皆さんの御力が必要不可欠だと・・・僕は思っています。」
僕達の交わり合う視線。

先に表情を崩したのはアリスさんだった。

「ふふっ、神藤様は本当に御優しい方なのですね。」

とても嬉しいそうに・・・そして満足そうに笑っている。

僕の答えに満足して貰えたみたいだ・・・安心した。

「では最後に・・・後ろの二人についてはどう思っていますか？」

安心した僕を狙ったかのようなその問いに、僕は自然と後ろを振り返っていた。

僕を見つめる2人の瞳には優しさと共に何処か期待している様にも見える。

僕自身恥ずかしかったけど、気持ちを偽る事は出来ず、この場で嘘を吐く事も出来ず、正直に口を開いた。

「あの、えっと・・・大切な人達で、その、あ、あ、愛・・・しています。」

今の僕の顔は真っ赤な事だろう。

恥ずかし過ぎて最後は尻すぼみになってしまった。

そして正面に座るアリスさんはとても満足に微笑んでいた。

「あらあら・・・後ろの御二人は如何なのでしょう？」

「私の心と体は、もう既に彼に捧げております。」

「僕の全てを賭けて彼を支えて行く所存です。」

彼女達の言葉に更に顔が赤くなる。

そんな僕をアリスさんとパオロさんは微笑ましそうに見詰めていた。

「とても可愛らしい方ですわね。」

「しかし思慮に長け、とても頼もしい王の姿を見せてくれます。」

「それは先に拝見させて頂きました・・・とてもこれからが楽しみである御方です。」

そんな2人の会話が耳に入らない位恥ずかしかった僕だった。

「では昴様が今お持ちの権能は2つだけで間違いないでしょうか？」

「はい、権能の力もさつき話した通りです。」

僕が落ち着きを取り戻した後も会話は続いている。

先程まで僕が神殺しになった経緯や、権能の能力等をアリスさんに説明していた。

何故ならアリスさんの協力を得るにあたって、それらを話す事が彼女の提示した条件だったからだ。

僕達がこの会談で求めているのは誤解を解く事と彼女の協力を得る事。

誤解を解く事は結構簡単に解決したけど、問題はその後だった。

アリスさん自身は協力する事に積極的だった・・・と言うより既に協力するつもりでいた。

でもそこで問題になったのはアリスさんの立場だ。

対魔王組織の重鎮であるアリスさんが神殺しの1人である僕に協力というのが問題だったのだ。

そこでアリスさんがある提案をして来た。

それが僕の此れまでの経緯と権能について詳しく伝える事だった。想像以上に悪い噂が流れている僕が協力を得る為には多少のリスクを負う必要がある。

彼女の提案を聞いた時、僕は自然と納得してしまった。

経緯については調べれば簡単になると言う事で大した問題では

無かったけど、権能に付いては違う。

神殺しにとって自身の権能は戦いの生命線。

勿論それだけで勝敗が決まる訳では無いけれど、勝敗の鍵である事は確か。

本来ならば教える訳にはいかない情報だけど・・・僕はそれを話す事にした。

普通ならば躊躇する所だと思うし、実際エリカさん達は躊躇した。でもそれを僕が大丈夫だと言い切ったのだ。

言い切れた理由は2つ。

1つは議会の資料には権能のデメリットが記載されていないかった事。

先のサルバトール卿との決闘の際、ついでに護堂先輩の資料も見せて貰ったけど、そこには馨さんから聞いていた護堂先輩の権能の使用条件が殆ど載っていないかった。

理由を聞けばデメリットを掲載すれば、勝てると考えて神殺しに勝負を挑む輩が出てきかねない。

そう言う無駄な犠牲者を減らす為に態と記載していないという事だった。

そしてもう1つは・・・僕は権能の力を戦闘手段の1つとしか思っていない事だ。

権能には確かに強大な力がある。

でもそれだけで神々との戦いに勝てる程簡単な話では無い。

そして僕は『武術家』だ。

例え神殺しになってもそれは変わらないし、変えてはいけない物だと思う。

何故そう思うかは何となくとしか言い様が無いが、この気持ちは間違っていないと確信している。

今迄も武術を基本とし、権能でその威力を上げ戦ってきた。

そして例え権能が使えなくなったとしても僕は拳を握ると思う・・・1人の武術家として。

まあ、武術の通用しない相手にはその限りではないと思うけど。

だから権能について全てを話した所で大して問題は無い・・・とエリカさん達に話したのだ。

僕の話聞いてエリカさん達は納得した様に頷いてくれた。

「昴君は護堂さんと違って、権能の力だけが昴君の強さじゃ無かったね。」

「それに例え権能が使えなくても唯人に昴が負ける姿が想像できないわ。」

「あら、エリカ・・・神殺しとは元来そういう物ですよ。」

「恐らくあの草薙王も自身の危機となれば例えどんな手段を用いたとしても勝利を手にするだろうな。」

等という言葉と共に了承を得た僕は、これまでの経緯と今持つ権能に付いてを話したのだった。

全てを話し終えた後、同じ内容の資料をアリスさんに渡した。

僕の資料作成に・・・と用意していた物だ。

それを受け取ったアリスさんは、今までの穏やかな空気を真剣な物へと変えた。

「先のお話に加えこの資料・・・昴様の信頼と思い、丁重に管理させて頂きます。」

「いえいえ、先程も言いましたが隠す様な事ではありませんから・・・皆さんで有効活用して下さい。」

「・・・ありがとうございます。」

深々と頭を下げるアリスさん。

これが元来あるべき神殺しと魔術師の関係性何だろうな・・・そんな事を考えながらアリスさんを見詰める。

そして頭を上げたアリスさんは再び口を開いた。

「今日の所は一先ずこの辺りで御暇させて頂くこうと思います。」

彼女の言葉に僕は部屋に備え付けてある時計に目をやる。

話合いが始まって早数時間・・・もう既にお昼の時間を過ぎていく。

「そうですね・・・今日は本当にありがとうございます。」

「私も大変貴重な時間を過ごす事が出来ました。」

彼女の言葉に僕も頷き返す。

当初の目的通り、僕の誤解も解け協力関係を結ぶ事が出来た。

この会談はとても実りある物になったと言っていいだろう。

「最後に、これからの事なのですが・・・まずは議会の方々の説得をしなくてははいけません。」

どれ程時間が掛かるかは分かりませんが、頂いた資料もありますので説得は難しくないかと思えます。

本当ならば昴様に直接一声掛けて頂けたらと思うのですが・・・。「確かにそうすれば間違いなく頷かせる事は出来るでしょう。」

誤解を解く事も出来るかもしれないが、それ以上に周囲に与える影響が計り知れない。」

僕もパオロさんの言っている意味が分かった。

もしかしたら直接会う事で議会の方々と親交を深める事が出来たら、それはそれでいい事なのかもしれない。

しかしそれを赤銅黒十字同様「脅し」と取られる可能性が高いのだ。そうなれば幾ら弁明した所で、僕の「魔王」という肩書きはこの先

ずっとならば回る事になる。

これからの事を考えれば、それだけは避けなくてはならない。

「時期が早いという事は分かっております。」

・・・ですがいざそれは私共と昴様の正式な協力関係を築ければと考えてなりません。」

「まだ将来の事は分かりませんが・・・そうなれば僕としてもとても嬉しいです。」

そうして僕達の会談は終わった。

アリスさんは軽快な足取りで結社を後にし、護衛の人達も最初程警戒は見られなかった。

彼女達を見送った後、今までの緊張がどっと疲れとして出た。

「はあ〜上手く行って良かったです。」

「お疲れ様、昴。」

最高の結果になったのは昴の頑張りの成果よ。」

「そんな事ありません。

エリカさん達が支えてくれたからです・・・今日は本当にありがとうございました。」

そう言つてパオロさんとエリカさん・馨さんに頭を下げる。

彼等はそんな僕を笑顔で見つめていた。

「昴君を支える事が私達の仕事だからね。

それにここまでスムーズに事が運んだのはプリンセス・アリスの御蔭でもある。」

「あの御方が高位の魔女であつたからこそ、昴君の本質を見抜いて、最初から協力的だつたんじやないかな。」

「・・・そうだつたんですか。」

確かに全てを見透かされる様な感覚があつたのを覚えている。

緊張であまり意識していなかつたけど・・・。

「とはいえ今日は本当に御疲れだつたね、ゆっくり休むと良い。」

「はい、そうさせて貰います。」

そうして僕達は各々の部屋へと歩き出した。

この時の僕は疲労感とは別の、ある種の達成感を感じていた。

初対面の方との初めての会談。

最初はどうなる事かと思つたけど、相手の人にも恵まれた事もあつて、ちゃんと熟す事が出来た。

・・・此れからこういう事が増えて行くんだろうな。

そう考えると少し気が滅入るけど、僕の望む未来の為に・・・そして支えてくれる皆の為に一層頑張ろうと思つた。

後日エリカさんと馨さんに「愛の言葉」をもう一度・・・とせがまれた時はとても大変だつた。

第32話 ブラック・プリンス

S i d e 昴

アリスさんとの会談から3日。

現在結社の応接室にてテレビ電話を利用してアリスさんの報告を聞いている。

その報告というのが……3日という短い間にグリニッジ賢人議会の方達の説得に成功したという内容だった。

説得する際、幾つか条件が付いたと言っていたけど問題は無いと彼女が言っていた。

『折角ですので、何方か御会いになりたい方はいらつしやいますか?』
唐突にそう問い掛けて来るアリスさん。

本当に唐突だった。

説得に成功したと話した直後に何の脈絡も無く聞いて来たのだ。

『折角私達の協力関係が成立しましたので、早速私に力になれる事が無いかと思いましたが!』

「あの…えっと……。」

『うくん、誰がいいかしら?』

あつ『ラファエロ様』はどうでしょうか。

いいえ、パオロ様にも手伝って貰って、イタリア中の結社を集めて大々的に挨拶するのもいいかもしれません。』

アリスさんのテンションが高すぎて、僕が口を挿む余裕が無い。

それに色々つぶつ飛んだ考えが次から次に口から漏れていて、危険な感じがする。

如何した物かと悩んでいたら、パオロさんが動いてくれた。

『プリンセス・アリス……少し落ち着いて下さい。』

『あらっ……私ったら、つい。』

パオロさんの声に漸く落ち着きを取り戻してくれたアリスさん。

随分とご機嫌だけど何かいい事でもあったのだろうか?

落ち着いても未だ楽しそうな笑みを絶やさないうアリスさんを見て思う。

『申し訳ありませんでした、昴様。』

それで……何方か御会いになりたい方がおられますか?』

今度は多少なりとも落ち着いた様子で僕を画面越しに見詰めるアリスさん。

そんな彼女にパオロさん達にかなり無理を言っつて決めたある人物の名前を口にした。

その名前にアリスさんは固まってしまった。

『……それは、本気で御座いますか?』

「はい……どうしても直接お話ししたい事があるんです。」

真剣に頼む僕に本気だと伝わったのか、アリスさんは少し悩んでから頷いた。

『分かりました、交渉してみましよう。』

ですが、あの御方はかなり気難しい方です……少々時間が掛かるかもしれません。』

「無理を承知で頼んでいる事は分かっていますから。」

『では早速動こうと思えますので、今日はこの辺りで。』

「今日は態々ありがとうございます。」

そしてこの会話から更に3日後……僕はイギリスの地を踏んでいた。

アリスさんから承諾を得たと聞き、イギリス・ロンドンにやって来た僕達。

空港に到着するとアリスさんが待つて居た。

そして挨拶もそこそこに車に乗り込み、移動を開始したのだった。

「今日は無理を言っつて申し訳ありませんでした……そしてありがとうございます。」

「礼には及びませんわ、昴様。」

事情は後日教えて頂きましたもの……私で御力に慣れて大変嬉しく思っております。」

僕達は今ロンドンに程近いコーンウォールへ向かっている。

理由はコーンウォールに拠点を持つ神殺し『アレクサンドル・ガス

コイン』その人に会う為だ。

コーンウォールには彼が立ち上げた『結社・王立工廠』がある。

結社内には多くの神に纏わる品々が保管されていて、その多くは『拝借書』を用いて勝手に持ち出した物らしい。

道中にアリスさんが楽しそうに話してくれた。

「でも大丈夫でしょうか？」

急な話でしたし、ご迷惑になるんじや……。」

「心配しなくても大丈夫ですわ、昂様。

最初は拒絶されましたが、私の作った資料と共に直接説得したら一応ですが領いて下さいましたから。

勿論警戒はしているでしょうし、それなりの準備もしている筈です。」

「緊張するのは分かるけど、自分で言い出した事ですよ。」

「昂君にはアレクサンドル様に御会いしたい理由があるんだ……だってたら覚悟を決めて行かないとね。」

エリカさん達に励まされても、この緊張感を拭う事が出来ない内に遂に到着した。

『王立工廠』……見た目は立派な美術館だ。

だが……周辺に全く人がいない事かなりの違和感がある。

その事を不思議に思っていると笑顔でアリスさんが教えてくれた。

「これも準備の1つです。」

部下を巻き込まない為に昨日の内に全員避難させたのでしよう。」

「……僕と戦う可能性があると考えているって事でしょうか？」

「諦めなさい、昂。

貴方は今噂の『魔王様』なんですから、これ位の警戒はされて当然だと思わなくちゃ。」

……そうでした、今の僕は悪逆非道の魔王でした。

そんな僕に会ってくれると言うんだから、アレクサンドル様も心が広い。

いや、アリスさん交渉術が凄いのかな？

そんな事を考えていると、既に皆は結社の中に入ろうとしていた。

「何をしているの昴、貴方も早く来なさい。」

「あつ、待ってください。」

急いで追い掛け一緒に中に入ると、そこは荘厳な雰囲気のある空間だった。

幾つものショーケースが置かれ、多くの展示物が並べられている。

そしてその殆どの物が神にまつわる物だと直感でわかった。

集中して感じてみれば、実際に神気を微量ながら発している物もあつた。

それ等が珍しくきよろきよろと周囲を見回していると、不機嫌そうな声が響いた。

「態々貴様の話に乗ってやったんだ、とつとと要件を済ませて帰れ。」

「あらあら、そんな事だから女心がわかっていないと言われるんのですのよ。」

客人を持って成す位やったら如何なのですか？」

「ふんつ、俺はお前達を招待した覚えはない。」

お前が強引に決めたんだろうが。」

現れたのは黒髪黒目、黒のジャケットを着こなしている白皙の美男子だった。

眉間に皺が寄って機嫌が悪い事を隠そうともししていない。

そして流石は歴戦の神殺し、今の会話の間も僕への警戒を一度も解いていない。

「……それで例の新たな神殺しが俺に何の用だ。」

今までアリスさんに向いていた鋭い視線が僕に向けられる。

今にも襲い掛かって来るのではないかと錯覚する程の殺気と共に……。

驚きはしたけど、事前の話からこうなると予想していたから、それに怯む事無く真つ直ぐに見返せた。

そんな僕を感心した様に見詰めると、彼は口を開いた。

「若いとはいえ流石は神殺しだな、この程度の殺気では大した牽制にはならんか。」

そう言つて僕の後ろに立つエリカさん達を確認すると殺気を収め

た。

彼の視線に気付いてエリカさん達を見ると、その顔には冷汗を浮かべていた。

……アリスさんは平然としていたけど。

「……それで、貴様がいったい何の用だ。」

彼から発せられる覇気に怯みそうになるも自身に喝を入れ、再び問われた事に今度はちゃんと答える。

「御初に御目に掛かります。」

この度新たに神殺しとなりました、神藤 昂と申します。

先達に当たるアレクサンドル様にご挨拶に伺いました。」

「挨拶だと!？」

ふんつ、俺にも勝負を挑みに来たという訳か……だが生憎俺は忙しい、他を当たれ。」

一方的に話は終わりだと言わんばかりに切り捨て、奥に引き帰そうとするアレクサンドル様。

そんな彼を慌てて引き止める。

「えっ、い、いや、ちよつと、ま、待ってください、僕は別に戦いに来た訳じゃないです!」

「ヴォバンの再来と言われている貴様が何を言っている。」

僕の言葉を全く聞いてくれる様子が無い。

何とかしなくては、と次の言葉を発する前にアリスさんが助け舟を出してくれた。

「だから少し待ちなさい、アレクサンドル。」

先日資料をお渡しした際、自身の目で噂の真意を確かめて欲しいと言った筈です。

貴方ともあろう御方がたかが噂話を真に受けて、その真実から目を背けるのですか?」

彼女の言葉に去ろうとしていた足を止めたアレクサンドル様。

そんな彼を楽しそうに見詰めているアリスさんと、その彼女を睨み付けているアレクサンドル様。

「……いいだろう、お前の言う真実とやらを見極めてやろうじゃない

か。

神藤 昴、唯挨拶に来たという訳じゃあるまい、早く本題に入れ。」
流石は古くから付き合いのあるアリスさん。

更に不機嫌さは増した様に感じるけど、話を聞く気にはなつてくれ
たみたいだ。

2人のやり取りに呆気にとられていた僕は、慌てて姿勢を正し口を
開いた。

「は、はい……アレクサンドル様は十年前に倒した『まつろわぬ神』に
ついて覚えておられますか。」

「いったい何の話だ……まあ、いいだろう。」

十年前だったな……ああ、イタリアの連中から頼まれた奴か、それ
がどうした。」

「その時その場にいた二人の日本人は覚えておられますか。」

「ああ、俺が着くまで戦っていたあの二人か……それがお前に何の関
係がある。」

突然の話題に訝しげなアレクサンドル様だったけど、雛定めするよ
うな視線と共に答えてくれる。

そんな彼の瞳を真っ直ぐに見つめて、僕も答えた。

「……私の両親です。」

僕の言葉に彼の眉間の皺が更に深くなった……でも、その表情に先
程までの不機嫌さはない。

「この度はアレクサンドル様にお礼を言いに来ました。」

「……礼だと?」

「はい……両親の遺体を保護してくださったのはアレクサンドル様だ
とお聞きしました。」

本当にありがとうございます。」

「そんな事を言う為に俺に会いに来たのか、お前は。」

「お時間を取らせて申し訳ありませんでした。」

伝えたい事は言えた。

僕は両親のお礼を言う為に彼に会いたかったのだ。

当時の事は殆ど覚えていない僕だけど、これだけはちゃんと聞いた

かった。

でも以上は迷惑になる。

それでなくとも話を聞く限り僕達が強引に押し掛けたのだ。

紹介してくれたアリスさんには申し訳ないが、用件が済んだのだから早い内に御暇した方がいいだろう。

下げていた頭を上げて後ろへ振り返る。

そこには優しい笑みを浮かべたエリカさんと馨さんの姿があった。

……そして今でも楽しそうな笑顔のアリスさんも。

「もういいの？」

「はい……これ以上ここに居ても迷惑でしょうから。」

「わかったわ。」

僕の言葉にエリカさん達も歩き出そうとした所に声が掛かった。

「……待て。」

その声を聞いた瞬間、アリスさんの笑みが深くなった様な気がした。

……何か面白いネタを手に入れたかの様に。

それは置いておいて僕達は声の方へと振り返る。

「……そろそろ昼だな。」

突然どうしたんだろう？

ぽつりと小さな声がアレクサンドル様から零れたが、こちらに背を向けていてその表情はわからない。

そこに楽しさを隠そうともしないアリスさんが声を掛けた。

「どうかされましたか、アレクサンドル。」

私達は邪魔にならない様に帰ろうとしていたのですが。」

それを聞いた瞬間、彼から不機嫌オーラが溢れ出た。

多分からかわれているのが分かったんだろうな……僕にもわかった。

今のアリスさんはいつも僕をからかって来るエリカさん達と同じ顔をしている。

「ちっ!!……この辺りはお前達が来るからと、全員避難させた。

勿論この結社内にも誰もいない。

しかし俺は腹が減ったからな……自分で作る。」

「はあ……。」

いったい何が言いたいんだろう。

確かにもうお昼の時間だし、僕もお腹が減っている。

この街に誰もいない事は分かっているから、どうしようかとエリカさん達に相談しようと思っていた所だ。

どう反応していいのか悩んでいると、またしてもアリスさんが楽しそうに話す。

「あらあら、もしかしてアレクサンドルが私達の食事でも用意してくれるのですか。」

「えっ!!」

「……ちっ!!」

そう言われた瞬間アレクサンドル様は部屋の奥へと去って行った。見送るしかできなかった僕達にアリスさんが促す。

「さあ、行きましょう。」

アレクサンドルが食事に招待してくれるそうですよ。」

「えっ……い、いや……けど……。」

「彼は色々と捻くれていますから、あんな言い方でも私達を誘ってくれていたのですよ。」

そう言つて自ら先頭に立ち進んでいく。

アリスさんを残して帰る訳にもいかず、僕達も後を付いて行く。

彼女は迷う事無く進んで行くから、恐らく何度も訪れた事があるのだろう。

すると次第にいい香りが漂い出した。

彼女はノックもせず堂々と香りのする部屋に入る。

その中には1人黙々と食事をしているアレクサンドル様の姿があった。

そしてそのテーブルにはあと4人分の食事が用意されていた。

「恐らく私達が来る前から用意してあったのだと思います……言ったでしょう、捻くれ者だと。」

アリスさんはそう言うのと、とっとと席についてしまった。

置いて行かれた僕達だったけど、ため息をつきながらもエリカさんが前に進み出た。

「私達も頂きましょう。」

折角用意して下さった物を、食べない方が失礼よ。」

「それもそうだね、頂こうか。」

「わ、わかりました。」

そうして僕達も席に着いた。

テーブルに並べられていた料理は和食。

白いご飯に味噌汁・魚の干物に豆腐・漬物まである、完全に日本の朝食だ。

そしてそれが堪らなく嬉しかった。

イタリアに来てから、今まで此処までちゃんとした和食とは縁が無かったから。

「頂きます。」

「ふんっ!!」

手を合わせて挨拶をすると、アレクサンドル様が不機嫌そうに鼻を鳴らした。

でもその様子が僕達を気にしている様に見えて、何処か可愛く思ってしまった。

そして改めて食事に手を付ける。

まずはご飯から。

炊き立ての香りが食欲を刺激する。

噛めば噛む程甘味の増すのがたまらない。

次に魚。

いい焼き加減で、ふつくらとしている。

身をほぐすと中から湯気が立ち上り中までちゃんと火が通っているのがわかる。

味も絶品だ。

豆腐は自家製だろうか。

少々不恰好だがまたそれがいい味を出している。

味も文句の付け所がない。

漬物も塩梅が完璧でとてもおいしい。

最後に味噌汁をすする。

心に沁み渡る様な優しい味だ。

両親やおじいちゃんのことを思い出した。

とても堪能した。

あつという間に食べ終えてしまった。

おかわりが欲しい位だ……そんな事言わないけど。

そしてふと顔を上げると全員が僕を見ていた。

エリカさん達は微笑ましそうに。

アリスさんは楽しそうに。

アレクサンドル様は少し驚き交じりに……すぐに不機嫌そうな顔に戻ったけど。

見られていたのが恥ずかしくて顔を俯かせたのは仕方ないと思う。

先に食べ始めていたアレクサンドル様とあつという間に食べ終えた僕。

他の皆さんは未だ食事中。

普段なら会話の弾む食事中だけど今日ばかりはエリカさん達も黙って食べている。

……アレクサンドル様の前だから仕方がない。

アリスさんは意図的だ……多分この状況を楽しんでいる。

アレクサンドル様は指を叩きながらイライラしているご様子。

重苦しい雰囲気の中、居た堪れなくなつた僕は必死に捻り出した案を口にした。

「あ、あの、ここに展示してある物を拝見してもいいですか？」

「……貴重な物が多い、触れるなよ。」

いや、壊されたら堪つたものじゃないからな、俺も行こう。」

完全に思い付きだったけど、如何にか上手くいったみたいだ。

これで少しはこの雰囲気をよくする事が出来た筈。

眉間に皺を寄せながらも、立ち上がり歩き出すアレクサンドル様。

「私達も食べ終わったら、すぐに行くわ。」

エリカさんの声を背に僕はアレクサンドル様の後を追う。

「どうせお前も神話について学んでいないのだろう、ならここで十分だ。」

彼はそう言っただけで設置してある椅子に座り、腕と足を組んで黙り込んでしまった。

でもここなら広いし、そこまで重い空気になる事はない……と思いたい。

アリスさんの話だと『王立工廠』内の展示物は一般公開がされているらしい。

連れられて来たのは恐らくその一般公開されている所。

アレクサンドル様には言われてしまったが、僕も神殺しになってから少しは神話の勉強をしている。

……始めたばかりでまだエリカさん達には敵わないけどね。

それでもここにあるのは一般公開されているだけあって、誰でも知っている様なビツクネームの物ばかり。

その為ここにある物の殆どを理解する事が出来た。

ギリシア神話に北欧神話とヨーロッパの物が多い。

それにこれら全てが本物だと直感的にわかる。

美術品や骨董品に詳しい訳では無いけれど、少なからず神の力を感ぜられるからだ。

……だからこそ、こうして収集して管理しているんだろうな。

1つ1つ見ている時に気になる物を発見した。

それは他の展示物と違い、はつきりとした神力を放っている。

題名を確認したら、北欧神話に出てくる毒蛇『ヨルムンガンド』について記された石版だった。

気になってじつと見ていたら突然後ろから声を掛けられた。

「……………それがどうかしたか。」

「うわっ!!」

「……………。」

集中して見ていたから全然気が付かなかった。

その所為で驚いて変な声を上げたら冷めた目で睨まれてしまった。

「す、すみません。」

「………それで。」

「あ、は、はい、この石版なんですけど……。」

先程の石板を指さす。

訝しげにそれを見つめるアレクサンドル様。

しかし、一向に何の反応を示さない……もしかして気付いていないのかな？

「………これがどうしたと言うのだ。」

「い、いや、これだけ他の物と違って神の力が強かったと感じたので。」

「何だと!!」

気付いた事を伝えると僕を押しつけて石板に齧り付く。

じっと石板を観察しながら、彼の集中力が急激に高まって行くのを感じ取れた。

「………確かに力を感じる。」

いや、今まさに強くなっているな。」

小さな呟きが聞こえてくる。

彼は突然振り向いて僕の肩を掴み、睨みつけて来た。

「何故気づいた。」

「えっ?」

「どうしてこれに気付いたのかと聞いている。」

「は、はい……えっ?」

あの、どうしてと言われましても……偶然としか。」

僕の言葉が信用できなかったのか、それでも僕を正面から睨むアレクサンドル様。

だけど暫くすると、何かに閃いた様にぶつぶつと考え始めた。

「個人の力量にもよるが、神殺しの殆どが神と相対した時のみその力を発揮する。」

だがこの場には少なからず神力を宿している物が多くあった。微量だが石板からは確かに他と比べると強い力を放っていた。

いや、そうだとしても……まさか此奴の感覚は俺よりも鋭いと言うのか。」

暫く目の前で考え込むアレクサンドル様に気不味かった僕。ただ何かを決めたのか急に顔付きが変わった。

そして懐から鍵を取り出すとシヨーカーを開けて、石板を取り出した。

「……行くぞ。」

「へっ?」

彼は僕の襟首を掴み、そのまま引き摺る様に歩き出した。

「い、いや、ちょっと、待って下さい、行くっていったい何処へ。」

「着いたらわかる。」

今は話している時間が惜しい。」

問答無用みたいだ……強引過ぎてとてもじゃ無いけど逆らえる空気がない。

知的な人だと思っていたけど、違ったみたいだ。

「せ、せめてエリカさん達に……。」

「ダメだ。」

そして僕は引き摺られながら、何処かわからない所へ連れて行かれるのだった。

Side エリカ

昴がアレクサンドル様に連れられて行った事で、この場の緊張感は緩和された。

……あの子の事だから、この空気を何とかしようと思ったのね。

御蔭で残された私達は比較的ゆっくり食事を取る事が出来た。

そして久し振りの和食を堪能した後、昴の所に向かったのだが……。

「何処に行ったのかしら?」

「こつちにもいなかったよ。」

昴とアレクサンドル様の二人の姿が何処にも見当たらない。

あの短い間に何処に行ったというのだろうか。

「2人共、こっちに來て。」

馨さんと悩んでいると、アリス様から声が掛かった。

声のした方へ行くとアリス様が開きっぱなしのショーケースを見つめていた。

「アリス様、どうかされましたか？」

「いえね……ここだけショーケースが開いていて、しかも少しだけど神気を感じるの。」

真剣な表情で何かがあつた場所を見ているアリス様。

ショーケースの表示には『ヨルムンガンドの石板』と書かれていた。

「……もしかして!」

「何かわかりましたか？」

「恐らくなのだけど、此処に展示してあつた物に気になる事が出來た。

そしてアレクサンドルはそれを調べに言ったのではないかしら？」

「昴君が居ないのは、その緯線に気付いたのが昴君だったから？」

「……あり得るわね。」

「異変に気付いた昴様は、何かに役立つかと思われてアレクサンドルに連れて行かれた……という事ですか？」

アリス様の見解に私達は思わずため息をついてしまった。

まさかこんな事になるとは……。

「私の考えがあつているとは限りませんが、神殺しが二人で行動しているのです。」

「……必ず何かが起こるでしょう。」

「ですが追いつけるにしても、何か手掛かりが無いと……。」

「ここにはヨルムンガンドの石板と書かれているわね。」

「確かこれはスウェーデンの結社が保管していた物をくすねて來た物だったと思います。」

「それじゃあ追いかけてみましょうか。」

私は叔父様に連絡を入れ、昴の行方を追うべく一路スウェーデンへ向かう事にしたのだった。

第33話 胸騒ぎ

S i d e 昴

あの後僕は引き摺られながら目的地も教えて貰えず、飛行機に乗せられた。

後で聞いた話だと、アレクサンドル様……アレクさんの自家用ジェットだったらしい。

重苦しい空気を何とか和らげ様と頻りに話し掛けてみたけど、全て空振り。

唯一の進展と言えば、今までアレクサンドル様と呼んでいたのを、長いからアレクと呼べと言われた事位。

僕は目的地すら知らされず、ヒシヒシと感じられるアレクさんからのプレッシャーに耐える事しか出来なかった。

飛行機を降りたら車に乗せられ現在とある海辺に1人立っている。アレクさんに待っているとわれ、その本人は何処かに行ってしまったからだ。

それにしても此処は何処だろうか？

あの石版が関係している所なのは間違いないから、北欧の何処かだと思っただけ……。

それにここに来てからというものの胸騒ぎが収まらない。暫く1人で待っていたら、漸くアレクさんが戻って来た。

何処に行っていたかは分からないけど、機嫌が悪くなっている様に見える。

……何かあったんだろうか？

「……行くぞ。」

ただ一言そう言うと、僕を待たずに歩き出してしまおうアレクさん。そんな彼に急いで追い付いたけど、眉間に皺を寄せている彼に言葉を掛けられない。

でもそんな事を言っている場合でも無いのも確かで……意を決して声を掛けた。

「アレクさん、ここ何処なんでしょうか？」

「……………ここはこの石版が見つかった場所だ。

この近くの海岸に打ち上げられていた所をこの辺りを拠点として
いる魔術結社が回収した。」

それはある程度予想していた答えだった。

……僕は具体的な場所を知りたいんです。

けれど、漸く得られた情報ではあった。

しかしその後は会話が続き、黙々とアレクさんに付いて歩くしか
なかった。

暫くして到着したのは綺麗な海岸。

そしてここに来て漸くアレクさんが僕に視線を向けた。

「此処が石板を発見した海岸だ。

さつき石板を見つけた結社に聞いて来たから間違いない。

……それにお前も気が付いているだろう、辺りに漂う呪力に。」

「はい。」

ここに来る前から感じていた胸騒ぎの正体も、この辺りから感じる
『氣』である事は歩いている途中で気付いた。

この近くに何かあるのは間違いないだろう。

「お前はこの呪力の発信源が分かるか？」

「……力の強い方角は何となくですが分かります。」

意識を集中させる事で、より強く『氣』を感じ取れた。

そんな僕をアレクさんは意味深に頷きながら、指示を出す。

「やはりそうだったか……そこまで案内しろ。」

「は、はい、わかりました。」

早く行け、と言わんばかりに僕に視線を向けて来るのできびきびと
した動きで歩き出す。

後ろからのプレッシャーをひしひしと感じながら海岸を歩く事数
分、等々海岸地帯が終わってしまった。

僕は再び周囲に意識を張り巡らせる……そして漸く見つけた。

其処に視線を向けると、一ヶ所だけぎりぎり一人通れる位の穴が
開いている所があった。

其処から肌を刺す様な濃密な『氣』が漏れ出ていた。

僕の視線に気が付いたのか、アレクさんもその穴を鋭い視線で凝視する。

「……確かに、あの穴が発信源で間違い無さそうだな。」

そう呟いたアレクさんの表情は笑っていた。

そして僕を追い抜いて穴に向かって歩いて行く。

「よくやった、此処まででいい……後は好きにしろ。」

アレクさんはそう告げると『氣』を発し、その瞬間光と共に消え去った。

「えっ、ち、ちよつと！」

声を掛ける暇も無くその場から居なくなったアレクさん。

何かしらの権能を発動させた移動に全く反応も出来ず、僕は一人取り残された。

これからどうしよう。

恐らく今までの感じから彼の中には僕の事は頭の隅にも残っていないと思う。

エリカさん達と連絡取りたいけど携帯の充電は切れている。

アレクさんの言っていた結社に助けを求めるのも手だけど場所も名前もわからない。

それ以前にここが何処かもわかっていない。

もう日も暮れ始めていて、海外は日本と違って夜遅くまでやっている店も少ない。

周囲を見渡す限り何も無い場所では人を見つける事も難しいだろう。

本当にどうしよう。

よし！何時までも此処に居ても仕方がないから移動しよう。

取り敢えず言葉の心配はないから、近くに誰かいないか探そう。

そこで電話を借りればいいし、もしかしたら泊めてくれるかもしれない。

機動的観測は多分に含まれているけど、今は他に何も思いつかない。

僕は辺りに何かないか取り敢えず歩き始めた。

S i d e アレクサンドル

今までずっと探し続けていた最後の王の謎も解き明かした。

俺だけの力じゃないのが心残りだが……。

一番興味は失ってしまったが、世界には未だ俺の興味を引く物は多く存在する。

次の調査に向かおうとしている時、ある報告が入った。

何でも新たな神殺しが誕生したらしい。

場所は日本……よりもよっていけ好かない奴のいる土地だ。

当時は俺には関係のないと気に留めていなかったが、次々に入ってくる情報に無視出来なくなっていた。

魔王デヤンスタール・ヴォバンの再来。

パオロ率いる赤銅黒十字に対して無茶な命令。

日本の神殺し草薙 護堂の獲物の横取り。

数日前に行われたサルバトーレ・ドニとの決闘。

まだ誕生して数ヶ月という短い期間にこれだけの事を仕出かした。

あの戦いで死んだヴォバンの再来というのも頷ける。

そして昨日……あの女から厄介な、そして一方的な電話が掛かって来た。

その内容は今でも聞かなかった事にした。

『明日かの噂の王を連れて行きます。』

楽しみに待っていてくださいね。』

たったそれだけの馬鹿げた内容。

無視しようかと思っただが、噂通りの男ならば無視してこの辺りに被害を出す訳にはいかない。

俺は幹部連中に住民を含めて全員避難させた。

そして今日……俺の目の前にいるのは、噂とは懸け離れた見た目の優男。

この容姿で魔王の再来かと思ったものだ。

しかし見た目で判断できないと、実体験で知っている俺は警戒を怠

らない。

「御初に御目に掛かります。

この度新たに神殺しとなりました、神藤 昂と申します。先達に当たるアレクサンドル様にご挨拶に伺いました。」

予想外にも丁寧な挨拶をしてきた。

神殺しという者は決まって何処か可笑しいものだ。

容姿は良く見えても、あの中華女のように振る舞いが自分勝手等よくある話である。

「挨拶だど？」

俺にも勝負を挑みに来たという訳か……生憎俺は忙しい、他を当たれ。」

大方の内容を予想した俺は即座に突き放し、無駄な時間を終わらせようとした。

それで奴が牙を剥くなら仕方がない、少々面倒だが受けてたとう。

そこの待ったをかけたのは……今回の首謀者の女だった。

「だから少し待ちなさい、アレクサンドル。」

先日資料をお渡しした際、自身の目で噂の真意を確かめて欲しいと言った筈です。

貴方ともあろう御方がたかが噂話を真に受けて、その真実から目を背けるのですか？」

普段なら聞き流す程度の挑発だった。

確かに電話の直後に送られてきた資料には目を通したが、全く信憑性の無い内容。

だが何故か今回は心の何処かで見極めなくては、という気持ちが湧き上がっていた。

あの女に言われたという所が気に食わなかったが……仕方がない。

俺は噂話に踊らされていた事に気付かされた。

奴を……神藤 昂を見誤った。

恐らく噂の殆どが出鱈目……奴から受け取った資料が真実なのだろう。

そう判断できるだけの意思がこの少年には感じられた。
真つ直ぐな視線。

目上に対する気配り。

少年らしからぬ対応。

まあ、偶に少年らしい所も見受けられたが……。

今までに会った事の無い神殺しだ。

興味を引かれた……だから俺らしからぬ事をしてしまったのだらう。

もう少し話してみたくなり昼食に誘ってしまった。

あの女の顔にイラついてしまい話す事は無かったが……。

そして今の俺の状況を決める出来事が起こった。

食事を終わらせた神藤 昂が、我が結社の収集品を見たいと言いだしたのだ。

ここにあるのは俺の集めた物ばかりで、そして此奴に見せている物は一般公開している物だけだ。

俺は離れて観察していたが、その時の様子は何処から見ても年相応の少年にしか見えない。

しかし突然立ち止まると、此処に来てから見た事の無い鋭い視線である展示物を睨んでいた。

俺にもあの感覚がわかる。

恐らく神殺しとして何か感じ取ったのだろう。

気になって近付くと、そこに展示してあったのは北歐神話の毒蛇ヨルムンガンドが書かれた石版だった。

……確か放置されていたスウェーデンの結社から拝借した物だったか。

興味を引かれ、後ろから声を掛けると驚かれたがすぐに気付いた事を話してくれた。

この石版が力を放っている……という事だった。

その指摘に俺もすぐさま確認する。

……確かに他の物より微弱だが力が強く感じる。

いや、今現在にも徐々にその力が強くなっている様に感じ取れた。

一流と呼ばれる魔術師連中でも気付くかどうかの本当に微少な変化を感じ取ったこの男に興味が湧いた。

大した話は聞く事が出来なかったが、神殺しに理論的に話せと言うのも無理な話か。

だが大まかな推論は立てた。

「個人の力量にもよるが、神殺しの殆どが神と相対した時のみその力を発揮する。

だがこの場には少なからず神力を宿している物が多くあった。

微量だが石板からは確かに他と比べると強い力を放っていた。

いや、そうだとしても……まさか此奴の感覚は俺よりも鋭いと言うのか。」

此奴の事も気になるが、今はこの石版の方が先か。

推論を証明し様が無い事は後にして、現在進行形で強くなりつつある石板に目を落とす。

石板から力の反応が出始めたという事は、現地でも何かしらの変化が起こっている可能性がある。

しばし考えを纏めた後、隣で俺を見る男に視線を向ける。

いつもなら一人で行く所だが、此奴の鋭い感覚が役に立つかもしれない。

俺の立てた推論を検証する事も出来る。

それに此奴なら俺の邪魔をする事は無いだろう。

そう判断して此奴を連れて俺はスウエーデンに飛んだ。

石板の発見場所……スウエーデンのとある海辺。

予想通りかなりの力が感じ取れる。

俺でも此処まで感じているのだ……此奴ならもっと強く感じている事だろう。

そして漸く見つけた。

海岸の終わり、岩場の見え辛い所に人一人通れる程の穴を。

肌を刺す濃密な呪力がその穴から溢れ出ていた。

俺一人でも見つける事は出来ただろうが、此処まで早く探し当てる

事は不可能だった。

そう思い俺の前で洞穴を睨む少年に視線を向ける。

此奴の感覚は神殺しの中で間違いなくトップだ。

この周囲に漂う呪力の中で迷わずその源を探し当てたのだから。

……推論は正しかったという事か。

此奴がどうしてこれほどの感覚を持っているかは分からないが、それはまた後でもいい。

俺は再び呪力湧き出す洞穴へ視線を戻し、歩き出す。

此処まで連れて来てくれた事には感謝するが、これ以上は調査の邪魔だと判断した。

権能を使い一瞬で奴を置き去りにして穴に飛び込む。

穴の中は思った以上に暗く深い。

しかも下に向けて穴は進んでいる為、海水が浸水して来ている。

この状況で長時間の調査は厳しいと判断した俺は早速調査を開始する。

この洞穴は真つ直ぐに続く一本道。

石板が出て来ていた事から遺跡かと予想していたがどうやら違った様だ。

遺跡であるならばもつと道が複雑なはずである。

壁も何かが彫られている訳ではない。

だがこの洞窟全体に魔術が掛けられている……恐らくこの呪力が外に漏れ出ない様にする為の術が。

その魔術が緩んだ所為で石板も呼応する様に力を発し、この辺りも呪力が充満する事になったのだろう。

少し違和感を覚えながら更に先を進む。

この先から神に準ずる力が感じられる為、間違っている訳ではないだろう。

洞窟が深くなるにつれて通路の幅は広くなる。

そして道は一本道だが、この洞窟は起伏がとても激しい。

初めは下に向かっていて、全身が海水に浸かってしまった箇所もあったほどだ。

そして今は急な上り坂。

御蔭で冷たい海水とはおさらば出来たが、代わりに呪力の正体がすぐ近くで感じられる。

少しして漸く最奥部らしき場所に辿り着いた。

そこはちよつとした広間になっていてかなり広い。

注目すべきはその中央。

不自然に大きな石が置かれ、その石がこの力の発信源となっていた。

周囲に視線を走らせたが他には何も見当たらない。

呪力石を前にして暫し考えを纏める。

この規模の魔術を唯人が行ったとは考え辛い……ならばいったい誰が、何の為に。

いくつか考えはあるが、どれも決定性に欠ける。

手っ取り早いのはこの石を破壊してこの力の正体を拝んでみる事だが、神獣は一部を除いて言葉を発さない。

神であれば何かしらの情報を手に入れる事は出来るのだが……。

それに此処に居るのが本当にヨルムンガンドであれば相手は毒蛇の化物だ。

この状況を考えたら此処での戦闘は避けたい。

そう判断して今回はここまでにして外に出る事にした。

その時だった。

しつかりと持っていた筈の石板が俺の手から離れ地面に落下したのだ。

まるで何かに吸い寄せられるかの様に……。

地面に落ちた石板はあっけなく割れ、その瞬間嫌な予感が全身を駆け巡った。

そしてすぐさま視線を石に向ける。

するとどうした事だろう……石に大きく罅が入っていた。

この石板が石を壊す条件だったのか、石板によって封印されていたのかはわからない。

だがまずい、どうしてこうなった。

次の瞬間石は砕け散り、広間に凄まじい力の奔流が流れ込んできた。
俺はすぐさま意識を切り替え、最善を尽くす為次の行動に移るのだった。

Side 昴

海辺を後にした僕は、人または家を探して道に出ていた。
だがしかし……この辺りは街灯も疎らにしか無く、周囲には何も見当たらない。

こんな所では人に会う事なんて出来るのだろうか。
途方に暮れていた時、道の向こうに一筋の光が見えた。
それはだんだん近づいてくる。

……車だ!!

今日は色んな事（災難）があっただけど、天はまだ僕を見捨てていなかった。

こんな所を車が通る何て……僕はついているかもしれない。
僕は急いで道に出て、相手が気付く様に大きく手を振った。

近づいて来る車はそれに気付いたのか、僕の手前2m程で止まってくれた。

乗っていたのは4人。

まずは厳つい顔付きの40代位のおじさん。

2人の背の高いイケメン。

最後に僕と年の同じ位の藍色に輝く綺麗な髪をした女の子。

「あ、あの……えっ?」

一番に降りて来たのは女の子。

勢い良く僕に向かって来たかと思うと、何処からともなく剣を取り出し僕の喉元に突き付けて来た。

そして無意識に体が反応してしまった。

喉元目掛けて放たれた突き。

それが届く前に足を振り上げ、真ん中辺りから圧し折る。

そしてその光景に呆然としている彼女の腕を掴み地面に組み伏せる。

此処までの動きを完全に無意識の内に一瞬で行なっていた。

はっと我に返って自分の下で呻いている彼女を認識し、更に剣を構え今にも襲い掛かって来そうな彼等に気付く。

「貴様何者だ!!」

「今すぐジークルーネを離せ!!」

激しい怒声が浴びせられ、すぐに彼女を解放し彼等からも距離を取った。

ジークルーネと呼ばれた彼女も僕が離れたらすぐさま起き上がり、折れた剣を手に仲間の下へ駆け戻る。

振り返った彼女の瞳は激しい怒りで満ちていた。

其処に最後に車を降りた目付きの鋭いおじさんが彼等を宥めながら前に出た。

表情には出していないが、僕を警戒している事は感じ取れる。

「全員落ち着きなさい。」

君もいきなり済まなかったね。」

彼の言葉に今にも襲い掛かって来そうな感じはなくなったけど、全員が全員僕を睨んでいる状況は変わらない。

その視線は僕が不審な動きを見せればすぐにでも襲い掛かると言っている様に見えた。

彼等が下がった事を確認した男性は警戒しながらも、少しばかり表情を和らげて話し掛けてきた。

「君は誰だい? どうして此処に居るのかな?」

その問い掛けに僕はどう返すか迷った。

本当の事を言っているのか。

少し様子を見た方がいいのか。

彼等がどういった人物なのか。

返事に困っていると、彼が更に言葉を続ける。

「この辺りはある御方の指示で我々が封鎖しているんだ。

それにこの辺りには誰も住んでいない。」

ああ、そう言う事か。

彼の言葉に彼等の正体が何となくわかった。

恐らく彼等はあの石版を発見した結社の人達だと思う。

さつき話を聞きに行つたつて言っていたし、多分指示した人はアレクさんだ。

少々過激だったけどカンピオーネの指示だし、そりや必死にもなるか。

彼等を魔術師だと判断して僕は名前を名乗る事にした。

「……僕は『神藤 昴』といます。」

これだけ言えばわかるだろう……今の僕は色んな意味で有名だし。

若い彼等は気付いていない様子だったが彼は気付いたみたいだ。

そんな彼は恐る恐るといった感じに聞いてきた。

「も、もしかして……あなた様は……。」

「ええ、あなたの想像している通りの人間だと思えます。

僕はあなた達に指示した人に連れられて此処に来ました。

ああ、そのまま構いませんからね。」

話の途中で跪こうとしたから慌てて付け加える。

今までの雰囲気は何処へ行ったのか、彼からは恐怖しか感じない。

……ここでも僕は魔王の再来と思われるのか。

少し落ち込んだが気を取り直して話を続ける。

「僕のやる事はもう済んだみたいなので、もう勝手にしてくれと言われました。」

「だけど、周りに人の姿が無くて困っていたんです。」

「貴様はいったい何を言っている!!」

等々彼女が吠えた。

名前だけ言つて話を続ける僕は確かに不信だろうしね。

……でも、自分から神殺しだつて名乗るのは少しね。

その彼女だが僕を警戒する事だけに気を向けていたからか、彼の様子に気付いていない。

彼は彼女が声を上げた瞬間その顔が真っ青になったのだ。

「も、申し訳ありません、どうかこの者の命だけは!」

「大丈夫ですよ、別に気にする様な事ではありませんから。」
すぐさま謝って来る彼にそう諭すと、驚いた表情をした。

そしてすぐに感激に表情を染めて膝を付き、深く頭を下げた。
そんな彼の姿に後ろに控えていた人達は困惑する。

「ヨ、ヨルダン様、どうしてこの様な何所の馬の骨とも知れない輩に頭を上げるのですか!!」

「馬鹿者!!この御方は新たに誕生されたカンピオーネ・神藤 昂様だぞ。」

流石の彼女も僕が誰だか漸くわかったみたいだ。
その表情を一気に青くした。

「こ、この方が、カ、カ、カ、カンピオーネ。」

残った二人もその表情を恐怖に染めた。

うん、シヨックだ。

彼女達は止める間もなく僕の前に揃って膝をつく。

「し、し、知らなかったとはいえ、も、申し訳ありませんでした。」

「えっと・・・ジークルーネさんでしたっけ?」

「は、はい。」

ああ・・・とても怯えさせてしまった。

「別に気にしていませんから。」

皆さんもそんな所に膝を付いたら服が汚れますよ。

そんな畏まらなくてもいいですから、立ってください。」

しかし誰も動いてくれない。

どうしようかと悩んでいた時ふとヨルダンさんと目が合った。

僕は期待を込めて頷いてみると、彼も何とか頷き返してくれた。

「皆立つんだ、神藤様が言う事を聞かない訳にはいくまい。」

そう促し、自分から率先して立つ。

ありがたい・・・あの状態じゃあやり辛くつてしょうがないから。

残った人達も恐る恐る立ってくれた・・・その表情は恐怖に染まっただけだ。

「先程は申し訳ありませんでした、神藤様。」

「も、申し訳ありませんでした。」

再び謝って来るヨルダンさんとジークルーネさん。
残りの二人も一緒に頭を下げる。

「さつきも言いましたが、別に気にしていませんよ。
それよりも皆さんはどうしてここに？」

このままじゃ、話が前に進まないと思ひ話題を変える。

「我々は数時間前に突然いらつしやつたアレクサンドル様の指示でこの辺りの封鎖の為に動いております。」

私達は最終点検の為に車で見回っていたのです。」

うん、予想通りだ。

「その時アレクさんが持ち出した石板の事も聞かれましたよね？」

「はい、その通りです。」

突如として数時間前から発し始めたこの呪力にどうした物かと思案しております。

其処にアレクサンドル様のお話を聞く事で私達は原因が分かったのです。

ですが、どう考えても私達には手に余る事案。

だからアレクサンドル様が来て下さって本当に渡りに船でした。」

彼らにとつてはそうだろう。

エリカさん達に聞いたけど、普通神獣と戦うのだって一般的な魔術師にとつたら命懸け。

それが神をも殺した逸話がある奴だったら尚更だ。

「神藤様はどうして此処へ？」

「さつきも言った様に僕は今回の調査にアレクさんに連れてこられたんですよ。」

詳しい理由は教えてくれなかったから僕も分かりませんけれど……。」

そう言つて僕は苦笑いを浮かべ、彼等も同様に困った様な表情をしていた。

ある程度両者の事情が分かった所で僕は頼みを聞いて貰おうとした時だった。

突如地面が揺れたと思つたら、海とは反対側に聳え立つ山の中腹か

ら巨大な『氣』が吹き出した。

僕はその山を注視しながら倒れない様に踏ん張る。

暫く経つても揺れは治まらず、それ所か徐々に揺れが酷くなってくる。

この揺れの正体はいったい何なのか。

原因を考えるならば、アレクさんだけど……彼が調査に向かったのは海岸にあった洞窟の筈だ。

それがどうして反対側の山が異変を起こしているのか。

しかし感じられる『氣』は間違いなくあの洞窟から感じ取れた物で間違いはない。

……幾ら考えてもわからない。

揺れが大きくなる中、不安が心を支配していく。

しかし不意に揺れが止まった。

それと同時に崖から放たれていた『氣』以上のアレクさんの『氣』が此処まで感じられた。

これは……アレクさんが権能を使った？

何の権能かはわからないが、アレクさんは無事みたいだ。

当たり前か……神殺しになった人がそう簡単に死ぬ訳ないな。

揺れも収まった事だし、改めて状況を確認する。

ここにいる人達は全員無事だが、その表情は優れない。

突然の地震に山中からの巨大な『氣』。

魔術に関わる人なら何が起きたか分かっただろう。

恐らくこの地に眠っていた神話に纏わる何かが目覚めたのだ。

僕も何かあった時の為に準備をしておいた方がいいのかもしれない。

そう判断して、未だ放心状態の彼等に声を掛ける。

「すみません、頼みたい事があるんですけど……。」

「は、はい、何でしょうか。」

「赤銅黒十字と連絡を取りたいのですが、電話を貸していただけませんか？」

「それでしたら……。」

それに反応してくれたのはヨルダンさん。

自分の携帯電話を取り出し僕に渡そうとした、その時……。

ピシヤヤヤアアアン!!・・・ドゴオオーン!!

今まで経験した事の無い規模の落雷が落ちた。

それと共に先程の比ではない『氣』が辺り一帯を包み込んだ。

第34話 開戦

Side 昴

「皆さんしっかりして下さい!!」

神の神気の当てられて呆然としている彼等に声を掛ける。

彼等の様子から見てこの様な出来事に巻き込まれるのは初めてだろう。

ヨルダンさんですら僕が声を掛けるまで心ここに在らずの状態だった。

「ヨルダンさん、電話を貸して下さい。」

「は、はい。」

先程渡しかけていた電話を受け取り、急いで操作して電話を掛ける。

しかし繋がらない。

電話が繋がらず困惑していると、僕の様子を見て彼等も自分の電話を確認してくれた。

だが誰一人として繋がる事は無かった。

「確かこの辺りに電話の通信所があった筈です。」

もしかすると先程の落雷で止まってしまったのかもしれない。

この状況を判断したヨルダンさんの言葉。

確かに先程程ではないが今も断続的に雷が鳴っている。

可能性としてはあり得る話だ。

でも、それならどうする。

まだ確認はしていないが、この心身の高まりから『まつろわぬ神』が出現したのは間違いないと思う。

今も神の神気がこの辺り一帯に撒き散らされている。

そして海岸の方からは雷とは別に大きな音も聞こえている。

この雷と石板に記されたヨルムンガンド…顕現した神はもしかしたら……。

この近辺で神に対抗できるのは僕とアレクさんだけ。

でもアレクさんは今間違いない戦闘中だろう。

連絡がつかない以上、エリカさん達の助けは望めない。

今日会ったばかりの彼等をいきなり神との戦いに巻き込む訳には
いかない。

……腹を括ろう。

「ヨルダンさん、この辺りの封鎖は完了していますよね？」

「は、はい、我々以外は全員避難させました。」

「……でしたら貴方達も早く避難して下さい。」

「し、神藤様は……。」

「僕は現れたまつろわぬ神の所に向かいます。」

そう言つてさつきまで居た海の方へ足を向ける。

「それでしたら我々も一緒に……。」

「ご心配なく、こう見えても僕も神殺しの一人です……大丈夫ですよ。」

彼の提案は断つた。

彼を含め全員の震えが止まっておらず、顔色も悪い。

提案自体は有り難いが正直この様子では何もできない、足手纏い
だ。

「ここから避難したら如何にかしてこの事を赤銅黒十字に伝えて下さ
い。」

僕の電話を預けておきます。

ここに赤銅黒十字の総帥の直通番号が入っていますから。」

電話をヨルダンさんに預け僕は走り出す……まだ見ぬ神の下へ。

海辺に辿り着くとそこには燃える様な目と赤髪と赤髭を持つ大男
の姿があった。

荘厳さと力強さ、そして圧倒的存在感。

その全てが今まで見た生物を凌駕している。

大男は悠然とした足取りで歩き続ける。

向かっている先は例の『氣』が発せられた山……恐らくその『氣』の
正体の下へ行く気だろう。

だが未だアレク様の『氣』も感じ取れる事から、まだ戦闘は続いて

いる筈。

だったら僕のやる事はただ1つ。

僕は神に向かって全力で走る。

彼を見た瞬間から全身に力が漲っている。

彼が僕に気付いた様子はなく、恐らく唯の人間だと思われるのだろう。

今もただ真っ直ぐに山を目指して歩いている。

だから僕は普段抑えている『氣』を解放した。

その『氣』に気付いたのか、彼は足を止めて僕を始めて視界に捉えた。

「貴様……神殺しだな。」

「その通りです、私は今代の神殺しの1人『神藤 昴』と申します。

もし宜しければ貴方の名前を教えてください。」

僕の問い掛けに彼は手に持つ巨大な槌を掲げ高らかに答えた。

「問われれば答えねばなるまい!!」

我が名はアース神族の一員にして最強の戦神トールである!!」

雄叫びと共に槌を振り上げると彼……戦神トールに稲妻が迸る。

それは唯の稲妻ではない。

凄まじい神力を宿し、普通の稲妻の数倍の威力はあった。

それを自らに落としたトールだが特にどうといった様子はない。

雷の神にして北欧神話最強の戦神。

僕はその事を意識しながらもトールに問い掛ける。

「貴方はいったい何を望んでいるんですか。」

「わかりきった事を、私はこの先に居る蛇に用があるのだ。

神殺し……確か神藤 昴といったな、邪魔立てするな。」

くそっ!! やはりそうか。

豪胆あるいは乱暴な性格といわれるトール。

ここで簡単に引き下がってはくれないだろう。

「悪いですが、それは出来ません。」

「ふん、やはりな。」

全身に闘気を漲らせながら僕を睨み付けるトール。

神と神殺しが出会ったのだ、彼も何事も無く先に進めるとは考えていないのだろう。

「だが二度は言わぬぞ、邪魔をするなっ!!」

怒声と共にトールは手に持つ槌を振り下ろす。

そして激しい光と轟音と共に稲妻が僕の目の前に落ちる。

爆音と共に凄まじい爆風に曝されるが全身に力を入れて何とか踏ん張りトールを睨み返す。

「此処を通す訳にはいきませんっ!」

「邪魔をするなど言った筈だ、私はあの蛇を殺しに行く!」

「だったら仕方ない、僕は全力で貴方を止めさせて貰います!」

今にも襲い掛かって来そうなトールの様子に全身の『氣』を高め、臨戦態勢に入る。

そんな僕にトールも神力を高めながら、寧猛に言い放った。

「ふんっ、分かり易くて結構だ……叩き潰してくれっ!!」

僕は拳を構え、トールは手に持つ槌『ミヨルニル』を振り被る。

ここに北欧神話最強の神との激闘が始まった。

S i d e パオロ

昴君がイギリスに出発して早数時間。

私はいつもの様に職務を熟していた。

少し休憩しようとして部屋を出て歩いていると、ふと思った。

今日はいつもより結社の騎士達の士気が低く見えると。

まあ、彼等の気持ちも分からないでは無い。

昴君が来てからという物、始めは恐怖と緊張から結社内は常に空気が重たかった。

だが彼が指導をし、騎士達と交流する様になってからは変わった。彼と触れ合った事で知った優しさからか、騎士達のやる気は日に日に上がって行ったのだから。

いつも以上にやる気に溢れていた事から思えば、そう見えても仕方がないのかもしれない。

我々の中でも最近まで昂君の事を『ヴオバン侯爵の再来』という噂を信じ恐れていた者は多い。

それもミーシャと勇氣ある若い騎士見習い達の御蔭で払拭された。

まあ、彼の雰囲気は普段から噂とは全くの正反対。

声を掛けるにしても勇氣入るだろうが、一度触れ合えば彼の優しさに誰もが気付くだろう。

昂君が指導してくれた数週間の間、結社全体の力は間違いなく底上げされた。

これはカンピオーネとしての力ではない。

彼自身が幼い事より培って来た物だ。

前神道流当主にして昂君の祖父『神藤 統一郎』。

統一郎殿は優れた指導者だったと聞く。

そんな彼の指導を1番身近で感じ、教えを受けて来た昂君だからこそ彼から受け取った物はとても多いのだろう。

その優れた指導力はここでも如何無く発揮された。

日本でも知る人ぞ知る『神道流』だが、多くの魔術師・騎士にとって大切な事を学べる流派だ。

魔力の使い方、体の動かし方、剣の振り方……数え挙げたら切がない。

各いう私も彼の両親からその基本を教えて貰った。

今の私があるのは彼等の御蔭といってもいい。

昂君の指導を受けていた中の1人に、見習い騎士から正式な騎士に昇格させてもいい実力の者も出ている。

後は現地にて実践経験を積み、すぐに昇格するだろう。

その様な事を考えながら休憩から戻り仕事を進めていると電話が鳴り響いた。

電話に表示されているのはエリカの名前。

「もしもし、私だ。」

『エリカです、叔父様。』

少々緊急の連絡があり電話致しました。』

エリカからの電話だが、その声から少し疲れが見える。

緊急の用件ともいうし、間違いなく何かあったのだろう。

「何かあったのか？」

『昴がアレクサンドル様と共に失踪しました……こちらから連絡がつきません。』

エリカの言葉に思わず動きを止めてしまった。

どうしてそんな事になったのだ。

『恐らくアレクサンドル様が昴を強引に連れだしたものと思われま
す。』

「この際理由は気にしない。

それに昴君の事だ、多少の事なら大丈夫だろう……行先に心当たり
は？」

『プリンセス・アリスがスウェーデンに行っただろうと。』

「スウェーデン？……少し待て。」

そう言つて一旦電話を離す。

確か先程確認していた書類に……あつた。

「エリカ、行先はスウェーデン北東だ。」

『北東ですか？』

「詳しくは分からないが、先程スウェーデンに派遣している騎士から
緊急の連絡が入ったのだ。

急に強い呪力を感じた地があると報告が上がって来ている。」

『叔父様、私達はこれからスウェーデンに向かおうとを思います。』

「カンピオーネが二人も揃っている。

恐らく何らかの騒動が起こるのは確かだ、準備を怠るなよ。」

『わかっていますわ、叔父様。』

それではこれで失礼いたします。』

エリカとの電話はそれを最後に切れた。

確実に起こるであろう騒動を思い私は深く息を吐いた。

エリカの電話から数時間後、再び電話がかかって来た。

登録者の名前は神藤 昴。

急いで電話に出る。

「もしもし、昴君かい？」

しかし電話から聞こえたのは聞いた事の無い男の声だった。

『そちらは結社赤銅黒十字の総帥パオロ・ブランデツリ様で宜しいでしょうか。』

「誰だっ!!」

『申し遅れました。』

私スウェーデンで小さな魔術結社のリーダーを務めております、ヨルダンと申します。

この度神藤様の指示の下、緊急の連絡の為神藤様の電話を御借り致しました。』

「彼はどうしている!!」

『い、今報告いたします。』

ヨルダンと名乗った彼は声を震わせながら今の状況を報告してくれた。

「よく分かった……報告ありがとう。」

それで、昴様は今まつろわぬ神と戦っているかと？」

『はい、私達が避難している間にも凄まじい爆音が鳴り響いておりますので間違いないかと。』

今も途切れる事無く、激しい音がここまで届いております。』

「……そうか。」

報告された内容は大方予想通りの事だった。

やはり2人もカンピオーネが揃えば、こんな事になるか。

「既に我々の結社の者がそちらに向かっている。」

君達の結社に向かわせるから彼女達の指示を受けなさい。」

『……わかりました。』

普通なら他の結社に指示を出す様な事はしないのだが、今は緊急事態だ。

彼の声は震えていたから、初めてまつろわぬ神を間近に感じたのだろう。

神に対する恐怖が抜けきっていない事が分かった。

それに我々はカンピオーネの庇護下に入っている結社だ……彼もそれを十分に理解しているからの判断だろう。

全てのやり取りを終えて、彼との電話を切ると共に深いため息が零れる。

ここに来てまつろわぬ神との遭遇……彼も大変な星の下に生まれた事だ。

……神殺しを成し得た時点で何を言っても遅いだろうが。

私は気を取り直して今の事をエリカに伝えるべく再び電話を取る。

今まさに激戦を繰り広げているであろう昴君の無事を祈りながら

……。

第35話 激戦

S i d e 昴

「我が『ミヨルニル』の力味わうと良い。」

戦闘開始直後そう言うのと大きくて見持つ槌を振り上げ、それを僕目掛けて投げつけて来た。

凄まじい速さと、風切音と共に迫ってくる槌。

その迫力に思わず全力で回避する事を選択した。

すぐさま横に飛び込めば、直後に今まで僕が居た所を槌が通過する。

トール自身が大男である事もあり、彼の持つミヨルニルも人一人よりも普通に大きい。

……あんなの喰らったら一溜まりもない。

開始早々冷や汗を流しながら、ブーメランの如くトールの手に戻って行くミヨルニルを見詰める。

トールの持つ『ミヨルニル』はとても有名な物で、僕も少しだけ知識がある。

壊れる事の無い強度を持ち、自在に大きさを変える事が出来る。

そして一度投げても、今の様に再びその手に舞い戻る力を持っている。

真つ赤に熱を発している『ミヨルニル』に思わず舌を打つ。

北欧神話最強の戦神はだてでは無く、手に持つ武器も反則級の神具。

戦神である事から近接戦闘も楽々やってのけるだろう。

更に雷の神でもある。

それに最初に落としたあの雷……あれの対処法が全く思いつかない。

思考を巡らせながら再び構えを取る。

恐らく今回はウプウアウトから篡奪した権能は使えない。

傷を負う事で相手を知り経験を得て行くあの能力では、トールに対して相性が悪すぎる。

トールの一撃は全て、受ければ小さくないダメージを負う威力を持っている。

そんな物を一々受けていたら体が幾つあっても持たない。

それにあの権能で得られる経験だけでは間違いなく雷は避けられないだろう。

ならば今の僕が使える権能は唯一つ。

1番厄介である雷を使われる前に最大火力で決着を着ける。

幸いにして余裕を見せている今なら付け入る隙は確実にある筈だ。

方針を決めた僕は早速権能行使の準備に入る。

『炎の権能』は最初の『氣』の量で使える炎の量が決まる。

だから聖句を唱えた後からトールに接近するギリギリ限界まで『氣』を溜め続ける必要がある。

それもトールに気付かれない様に……。

今の僕にそれが出来るのか分からないが、それが出来る事がこの方針の最低条件である。

気付かれれば警戒され、間違いなく雷を使って来るだろう。

失敗は許されない、と覚悟を決めて小さく聖句を唱える。

「天上にあつては太陽、中空にあつては稲妻、地にあつては祭火。

世界に遍在する火、惑わしの罪を取り除き、善き路によって富を導く者為り。」

聖句を唱えると共に体内を流れる『氣』が炎へ変わる準備を始めた。

それと同時に溢れ出ようとする『氣』を内に留める。

戦闘中という事もあり尋常でない量だが、表情を変える事無く抑え込む。

……これで後は気付かれずにトールに近付くだけだ。

最速で決着を付けるプランを練り終えた所にトールの第2投が襲い掛かる。

思考中の隙を付いた攻撃に反応が遅れた。

だが高い集中力を発揮していた事が功を奏し、間一髪の所で回避に

成功する。

熱風を振り撒きながら横を通過したミヨルニルに改めて気を引き締める。

「隙を付いたと思ったが、やはり神殺しだな。」

舞い戻るミヨルニルを手に収め、好戦的に笑うトール。

僕は体を起こし、その立居姿だけで覇気を纏わせる彼を真つ直ぐ睨み返す。

「流石は北欧神話最強の戦神……一瞬も気を抜けない。」

「ほう、我を相手にその様な気概で勝てると思っていたのか。」

その程度で我を止められると思うなよ。」

そして再び振り被られるミヨルニルに内心笑みを浮かべ、気合を入れる。

慣れない挑発に……挑発になつていたか微妙な所だけど上手く行つて良かった。

僕の言葉に反射的に反応してしまうあたり、トールは伝承通り単純で激しやすいみたいだ。

そんなトールの性格を思い出しての咄嗟の思い付き。

雷を使われる可能性もあったけど、今回は運が味方した。

三度放たれた『ミヨルニル』は猛烈な勢いで僕目掛けて一直線に向かつて来る。

予想通りの攻撃方に気合を入れて僕も駆け出した。

狙うのはミヨルニルと地面に開いている僅かな隙間。

タイミングを見てその隙間の下をスライディングの要領で滑り込んだ。

頭上ギリギリをミヨルニルが通過していくのを感じるが僕はもうトールだけを見据えていた。

ミヨルニルによって視界から消えていた僕が突然近くに現れた事でトールは多少なりとも驚いている筈。

……ここしかない。

僕はすぐさま起き上がると溜め続けていた『氣』を解放した。

全身から放たれた『炎』はすぐさま集束して僕の背に日輪を作る。

そして勢いそのままに僕は両足に『氣』を込めて地面を蹴る。

『神道流移動術・瞬』

炎の軌跡を残しながら一瞬の間にトールの懐へ飛び込んだ。

「何っ!!」

移動術の速さに驚きを隠せないトールの声が漏れる。

僕も間近に感じられる強大な神力と完璧な肉体に圧倒された。

でも臆する事無くここで勝負を決めるつもりで拳を握り締めた。

『神道流攻式壱ノ型・針・焰』

燃え上がらせた拳をトールへと叩き付ける。

「ぐおおお。」

分厚い筋肉の壁を火神の炎で焼き焦がす。

『針』を使った事で目に見えない体内にも炎が突き抜ける感触があった。

僕はこの機を逃さず連撃に繋げ様とした時だった。

「ぐうう……嘗めるなあ!!」

怒号と共にトールは拳を振り上げ、それと同時に神殺しの本能が警笛を鳴らす。

僕はそれに従いとつさに腕をクロスさせ頭を護り、同時に『氣』を頭上に集中させた。

権能の力によつて『氣』は『炎』へと変換され、頭上には『炎壁』が出来上がる。

その直後閃光と爆音と共に凄まじい衝撃が襲い掛かった。

恐らくトールによる雷の攻撃。

その一撃は『炎壁』を突き抜ける事は無かったが、衝撃で僕は動く事すらままならない。

そしてその硬直が致命的な隙となった。

先程投擲したミヨルニルがトールの手に戻っていたのだ。

もう既にトールは怒りに表情を染めながらミヨルニルを振り被っている。

僕は凄まじい一撃に思考すらも硬直していて反応が遅れていた。

それでも神殺しの神がかった反射の御蔭で瞬時に前方にも『炎壁』

を展開する。

「そんな物で防げると思うなあ!!」

「つぐうう!!」

ミヨルニルによる衝撃は雷の比では無かった。

瞬く間に『炎壁』を突き破ってくるその威力……尋常じゃない。

そして一瞬にして『炎壁』は破られる。

全身が粉々になるんじゃないかとすら思う衝撃に僕は為す術も無く吹き飛ばされた。

飛びそうになる意識を必死に繋ぎ止め、砂浜の上を転がりながら耐える。

漸く止まった時には30mもの距離を吹き飛ばされていた。

そして全身に襲い来る痛み……特に両腕には激痛が走っていた。

何とか体を起こすも、体を動かす度に全身を痛みが駆け巡り、両腕に至っては真っ赤に腫れ上がっている。

でもまだ体は動く。

トラツクに惹かれた程度の全身の打ち身と間違いなく粉々に折れているだろう両腕。

あの一撃を受けてこの程度で済んだのは『炎壁』と咄嗟に後ろに跳べた御蔭だ。

反応は遅れたが、それでも体はしつかり回避の為に動いていた……流石は神殺しと言った所だろう。

だが両腕が使えなくなったのは厳しい。

僕的にはあそこで勝負を決めるつもりだったし、そうでなくとも一発で終わる予定じゃなかった。

予想外だったのは、思った以上に頑丈だった肉体と彼の精神力。

『針』を使ったから間違いなくダメージは受けた筈だ。

それでもたった一発で反撃を喰らってしまったのだから、戦神である彼を甘く見ていたという事だろう。

「ふんっ、痛み分けと言った所か。」

その言葉に距離の離れたツールに視線をやると、彼は不満そうに表情を歪めながら口元の血を拭っていた。

そして視線を下にやると、僕の一撃が入った箇所には真っ赤に焼けた跡が残っていた。

トールの仕草と言葉からすると、少なくともダメージが入っているという事。

「確かにそうみたいですな。」

全力で動けるとは言い難い僕の方が不利だとは思ったけど、痩せ我慢で笑みを浮かべる。

そして再び構えを取るが、それだけで腕に痛みが走る。

けど、これが僕の基本形……どんな状態であろうとこれだけは譲れない。

……でもこれ以上拳を握る事は不可能か。

自分の体を客観的に分析して心の中で零す。

拳を握る事すらままならないこの状況で武術を元に戦闘をする事はもう出来ない。

幸いにも『氣』はまだ十分に残っているし、『炎』の使える量も余裕がある。

……この状況で勝つ方法を考えないと。

現状使えるのは背中中で燃え続けている『炎』だけ。

決定力に掛けるこの状況でどうやって勝利を挽ぎ取るのか。

激しくなるだろう第2ラウンドに一層気を引き締めた。

S i d e トール

蛇に誘われる形で訪れた現世。

蛇との決着をつけようと奴の気配のする方角へ向かおうとした所、進行方向に我が仇敵が姿を現した。

……神殺しだ。

真っ先に蛇との決着を付けたかったが、邪魔立てするのなら無視は出来まい。

戦神らしく顕現して早々『神藤 昂』と名乗った神殺しと戦う事になった。

ハハハつ、やはり戦いという物は血が滾る。

手始めに我が神器『ミヨルニル』を使い攻撃する。

だが流石は神殺し……この程度では簡単に避けられてしまう。

一瞬の隙を見て再度投擲したが反応良く避けられた。

その後だ……奴の零した言葉に我は反射的に体が動いていた。

このトール相手に気を抜く余裕があると思ったか!!

そう思えば既に再度ミヨルニルを振り上げていた。

だが今思えばそれが奴の策だったのかもしれない。

我が槌の攻撃を正面から躲し、あろう事か我の動揺を付いて一瞬の内に懐まで潜り込んできた。

直後に来た火神から篡奪したであろう『炎の拳』による一撃。

喰らった腹部から一直線に体内を焼かれた程の貫通力を持った威力に思わず苦悶の声が漏れた。

しかし「やられたままではいられまい」と我が雷神としての力を解き放った。

上空より雷を招来し奴の頭上に落とす。

受け止められはしたが、その隙に舞い戻ったミヨルニルを叩き込んでやった。

吹き飛ぶ奴の姿を見詰めながら、上手く衝撃を逃がされた事に訝しむ。

あの状況でミヨルニルの一撃に対して炎で壁を作り、自分とはつきに後ろへ飛んでいた。

その反応の良さは些か厄介だと思わざるを得ない。

口元を伝う血を拭い、絶えず鋭い視線を向けて来る神殺しに我も睨み返す。

この攻防は痛み分けと言った所か。

双方万全とは言えなくなつた体……だが我は勿論、奴にもそんな事は関係ないだろう。

我はこの戦いに勝ち、蛇との決着を果たすのだ。

湧き上がる隠しきれない高揚感に口角を上げ、再び神力を滾らせミヨルニルを握り締めるのだった。

S i d e アレクサンドル

封印の要だった石が壊れたのを確認した俺はすぐさま迷宮を作り出す権能『大迷宮』を行使した。

ここに封印されているのは間違いなく『毒蛇・ヨルムンガンド』。こんな閉鎖的な場所で毒蛇を相手にする訳には行かない。

実際石が壊れた直後からそこから神気と共に毒霧らしき物も出て来ている。

『迷宮』を作り出した俺は一先ずヨルムンガンドの居る場所から離れた所へ移動した。

速攻で倒してしまう事は簡単だが、『大迷宮』を解いてしまえばこの洞窟が崩れてしまうのは必至。

その前に調べられる事は調べておこう。

ヨルムンガンドはまだ今の場所から動く気配はない。

権能を行使したおかげで気付いたが、あの封印があつた場所には壁画があつたみたいだ。

俺とした事が封印石から発せられていた神気に気を取られて全く気付けなかった。

だが幸運な事に迷宮の中であればその全てを把握する事はできる。

俺は自分自身に苛立ちながらも洞窟内を把握する為に意識を集中させるのだった。

調べてわかつた事はあの壁画は全て唯の落書きだという事だ。

ヨルムンガンドに関する事は一切なく、学術的価値も何も無い。

いったい誰が何の為にこんなくだらない事をしたのか……苛立ちが更に募る。

……どうするか。

一旦感情を押さえて、これからの事を考える。

幸いにしてあれだけの毒霧を出していたにも拘らずヨルムンガンドは未だその場から動いていない。

奴をこのまま放って置いても良いだろうが……俺が目覚めさせた手前このままというのも外間が悪い。

相手はヨルムンガンドとは言え、たかが神獣。

神が相手ならいざ知れず、神獣程度ならどうにでもなるだろう。

それに直接壁面を調査出来たら、何か違う発見があるかもしれない。

そんな淡い期待を持ってヨルムンガンドの所へ移動する事に決めた。

そして……。

「くっ!!」

襲い掛かる巨大な蛇の尻尾。

それを俺の持つ権能の1つ『電光石火』を使い、神速で見切り避ける。

結局ヨルムンガンドのいる場所に入った途端、奴は突如として周囲に毒を振り撒きながら襲い掛かって来た。

俺の持つ呪力に反応したのだろう……神獣の癖に鋭敏な奴だ。

毒の方は魔術的意味合いが強いらしく、呪力を高め続けていれば大した影響はない。

問題はその強靱な鱗だ……隙を付いて電撃を食らわしてみたが焦げ跡一つ付かない。

何て強靱な体だ!!

たかが神獣だと甘く見ていた。

電撃が効かないと言うのはかなり厄介だ。

今はとりあえず避け続けているが問題がある……この部屋にある壁面だ。

確かに価値の無い物だと分かっていたが、それでも直接調べてみたいと思っていた。

しかし奴が暴れまわる度に壁に体をぶつけ、貴重な資料が破壊されていく。

何とか防ぎたいがどうする事も出来ない。

「シヤヤヤーローー!!」

大声を上げながら再び襲い掛かって来るヨルムンガンド。

今度は正面から牙を剥き出し噛み付くつもりの様だ……更に毒の特殊効果付き。

……もうここまで来たら諦めるしかないのか。

この状況ではもう調査など出来る筈もない。

遺憾だが……かなり遺憾だが、諦めるしかないか。

そしてある権能を行使する事を決めた。

こうなったら完膚なきまで叩き潰してやる。

正面から迫る蛇を神速で躲しそのスピードのまま蛇の胴体まで移動する。

そこで準備していた権能を行使する。

すると俺の目の前に暗黒の球体が現れた。

暗黒の球体が現れた瞬間この部屋……いやこの迷宮全体が悲鳴を上げた。

行使したのは『さまよう貪欲』と呼ばれている権能。

出現した球体はブラックホールの様に全てを飲み込む吸引と重圧を兼ね備えた物。

『さまよう貪欲』は凄まじい勢いで周囲にある物を吸い込んでいく。

そして吸い込まれた物はその重圧によって跡形もなく押し潰される。

そしてそれはヨルムンガンドも例外ではない。

「キシヤヤアアアアアアローローー。」

悲鳴とも聞こえる叫び声を上げながら体の中心から『さまよう貪欲』に飲み込まれていくヨルムンガンド。

その勢いは次第に強まっていき迷宮をも飲み込んでいく。

いやもう既に『大迷宮』の権能は使っていない、使う必要が無くなった為行使を止めたのだ。

『さまよう貪欲』はこの辺り一帯を吸い込むまで止まる事は無いだろう。

予想の付いていた俺は出口目掛けて神速で移動する。

自分の権能に巻き込まれるのはごめんだ。

ヨルムンガンドの悲鳴は聞こえなくなった……もう既にその命を落としたのだろう。

出口を目指す目的はもう1つある。

迷宮の権能を解除した時から感じているこの気配。

これ事実であるなら外は厄介な事になっている筈だ。

嫌な予感に突き動かされながら急ぐ。

外に近付くにつれて感じ取れる気配が確かな物になってくる。

出口が見えたが俺は神速を弱める事なく外に飛び出し、そのまま海の上から周囲を見渡す。

そしてそこからの景色に驚愕した。

洞穴のある海岸では火傷の様な痕を負いながら手に持つ槌を振り回す大男の姿。

そしてその背に日輪を背負い、全身に怪我を負いながらも、襲い掛かる雷に炎で対抗する少年。

……先程別れた筈の『神殺し・神藤 昴』が戦っていたのだから。

第36話 決着

S i d e 昴

再開したトールとの戦い。

その戦いは最初と違い遠距離からの打ち合いになっていた。

「はあああああああ!!」

「おおおおおおお!!」

僕は幾つもの『炎玉』をトールに向けて打ち出す。

そしてトールは上空に広がる雷雲から雷を落とす。

僕は避ける事の難しい雷に『炎壁』で対抗する。

トールがミョルニルを振るう事で雷を落としている事に気付いて本当に良かった。

それまではいつ落ちて来るか分からない雷に常時『炎壁』を展開するしかなかったからだ。

でも今はそのタイミングに合わせて『炎壁』を展開する事で『炎』と『氣』の消費を押しさえられた。

だから万全とは言えない状況だけど戦って来られた。

逆にトールは僕の攻撃を真正面からミョルニルで撃ち落とす。

その動きにはかなりの余裕があり、幾つか撃ち漏らす事はあったが全く答えている様子は無い。

今はまだ戦況は拮抗している。

どちらも攻めきれないこの状況に時間と労力だけが流れていた。

その中で僕は焦燥に駆られていた。

トールの雷は当たれば間違いなく決着の付く一撃だ。

それに比べ僕の『炎玉』には決定的に威力が足りないのだ。

『炎』や『氣』の量を増やすが全く効果が見られない。

今でこそ『炎』と『氣』に余裕があるが、このまま何もしなければ間違いなく僕が先に隙を見せてしまう。

くそっ!!このままじゃだめだ!!

長期戦になれば早々に僕の敗北は必至。

それにトールは明らかに調子を上げて来ていて、徐々にだが間違い

なく体の動きが鋭くなってきた。

「如何した!! 貴様の力はこんなものか!!」

トールは大声を張り上げ、僕を煽りながら更なる雷撃を放つ。

振り下ろされたミョルニルに合わせ、雷光と轟音が頭上から落ちてくる。

それに『炎壁』を張って防ぐが、その圧力が増していた。

「ぐっ!!」

ギリギリの所で破られる事は無かったが、その威力は今迄で最大だった。

防げた事に安堵しつつも、全身に冷汗が伝う。

やり返す様に『炎玉』を飛ばすも、容易く防ぐトールの様子に歯噛みする。

このままじゃ本当に不味い!! 早くこの状況を打破しなくちゃ!!

そう思った僕は前々から考えていた事を実行する事にした。

今迄一度に10程しか放っていなかった『炎玉』を倍以上の30以上を一斉にトールに向かって放った。

ダメージを与えられるとは思わないけど、少し位の時間稼ぎは出来る筈。

僕はその間に意識を集中させた。

『火神アグニ』は世界に存在する様々な『火』を司った神だ。

天上では『太陽』、中空では『稻妻』、地では『祭火』。

自然は勿論、怒り等の感情の『火』も『アグニ』の力とされている。以前エリカさん達に聞いた事がある。

「炎の権能の可能性についてか。」

「確かに『アグニ』は様々な面を持っている神ね。」

「僕も簡単にですが調べました。」

唯の『火』だけでなく、それこそ『太陽』や『稻妻』まで沢山の『火』を司っていたみたいです。」

僕の言葉にエリカさん達も頷く。

「けどその全部を使えるとは考え難いな。」

「それは私も賛成ね。」

「どうしてですか？」

「簡単な事よ、昴。」

例え神々に対抗しうる肉体を得たとしても、その全てをその身に宿す事は不可能。」

「だから神殺しの権能には色々と制約が付いたり、限定的な力だったりする事が多いんだ。」

「じゃあ、僕が『太陽』とかの力を使う事は無理なんでしょうか。」

ちよつと期待していた僕は少し落ち込んでしまいが、エリカさんは首を横に振った。

「いいえ、希望を捨てるのは早いと思うわ。」

「そうだね、昴君はまだ神殺しになったばかり。」

これからもつと神殺しとして成長していく。」

「その段階でまた新たな力を身に着けて行く筈よ。」

だから今みたいに自分の殺めた神の事を調べるのは絶対に無駄にはならないわ。」

「僕達も教えられる事は教えるから、もしわからない事があつたら聞いてね。」

「はい、ありがとうございます。」

その後も自分なりに調べ続けた。

けど試す機会が無かつたから、今の僕にそんな力があるのか分からない。

だけど……今はそんな事を言っている場合じゃない!!

僕は高めた集中力で体内の『炎』に意識を向け、強く『太陽』を思い浮かべる。

すると僕の意識は徐々に自身の炎に飲み込まれていく。

燃え盛る炎の中……そこで僕はついに見つけた。

炎の遥か上空で存在感を示す2つの力を……。

黒雲の中で時折轟音と共に光を走らせる『稲妻』。
そしてその更に上空。

黒雲に遮られ直接見る事は出来ないが、より強い力が確かにそこにはあった。

『太陽』

今僕が求めている力が間違いなくそこにある。

一身に手を伸ばすと真っ直ぐに上へと向かって行く。

ピシャ!!

立ちはだかったのは『稲妻』。

光の柱が拒む様に次々と襲い掛かり僕の進行の邪魔をする。

僕にはまだ早いと言われているかの様……だけどそんな事は関係ない。

邪魔するなあ!!

僕の想いに呼応する様に地上で燃え盛る『炎』から火柱が立ち上り強引に黒雲を退ける。

そしてその切れ間から僅かに覗く『太陽』目掛けて一気に通り抜ける。

だが更なる壁が僕の行く手を塞ぐ。

真っ直ぐ天へと昇っていたが『太陽』に近づくにつれて全身が焼かれる様な痛みに苛まれ始めたのだ。

そのプレッシャーは『稲妻』の時の比じゃない。

だけど『稲妻』の時とは違い拒まれている訳じゃ無い。

『太陽』の圧倒的な力の前に僕の体がついて行けていないのだ。

地上の『炎』も此処まで届かない。

身を護る術も無く、遂には『太陽』の高熱で体の至る所が発火し始めた。

全身が悲鳴を上げている……それでも僕は一身に手を伸ばす。
此れしかないんだ!!

この力が今必要なんだ!!

神殺しとしての直感が何としても『太陽』を掴めと訴えて来る。

そして武術家として、男としての意地がある。

こんな所で……負けて堪るかあ!!

灼熱の業火に身を焼かれながらも……遂にその手が『太陽』に届いた。

『太陽』に手が触れた瞬間、意識は現実へ引き戻され、それと同時に口から言霊が零れていた。

「大地に豊穡を与え、地上に光を示す。

天上より与えられし神の力、此処に開放する。」

唱えた言霊によつて背負っていた炎が白く輝き出す。

そしてその輝きは留まる事を知らず、雷雲立ち込め暗闇に包まれていた周囲を真昼の様に明るく照らし出した。

それは正に『太陽』の如く。

光量は先程に比べたら落ち着いたが、それでも周囲は僕を中心に日中の様な明るさを取り戻した。

そして僕自身の姿だが、凄まじい熱量を周囲に放ち、神々しく輝く『真の日輪』を背負い立っていた。

しかし今はそんな事に意識を裂いている余裕が僕には無かった。

何故なら現在進行形で体を中から焼かれている様な痛みに苛まれ続けているからだ。

それは意識の中で感じて痛みと同等……いや、それ以上。

あの時と違い現実で起きているこの痛みは意識時以上の苦痛だ。

苦悶の表情を浮かべながら、それでも正面のツールから視線をきらなかつたのは神殺しとしての本能。

そのツールはというと僕が変化を始めた辺りに、放っていた『炎玉』を潰し終えていた。

そして彼はこの力の正体に気付いた様で、危機感を持ったのかミヨルニルを振り被っていた。

しかしその動きは止まり、ツールの意識は僕から外れた。

彼の視線の先は彼の目指していた場所……そして僕が行かせまいとしていた場所。

僕の背後の山中が突如崩落したのだ。

原因は間違いなくアレクさん。

彼の大きな『氣』と共に対峙していたであろう者の『氣』が消滅した。

トールが戦闘前に言っていた『蛇』が倒された事に思う所があったから意識が逸れたんだと思う。

まあその御蔭で僕はこうして戦える体制を作る事が出来たんだからアレクさんに感謝しなくちゃ。

凄まじい速さで海岸に飛び出して来たアレクさんはじつと僕達を見ている事に気付いたけど、今は気にしない。

目の前の彼との決着を付ける事が先決だ。

「ふんっ、あの蛇は他の者に倒されてしまったか……まあいい。」

そう言つて再び僕に鋭い視線を向ける。

その瞳には苛立ちと怒りが見て取れた。

「お主を倒し、次は其奴を倒せばいいだけの事だからなあ!!」

トールは更に闘志を漲らせミヨルニルを構えたが、同時に僕を観察していた。

「それにしても……『太陽』か。

確かに強大な力を感じるが……その使う本人がその状態ではな。」

思ったよりも冷静な事に舌打ちしつつトールに指摘された事を考える。

言われなくても分かつてる。

多少駆けの部分があったけどデメリットよりもメリットの方が多いと踏んだのだから仕方ない。

誤算は今も続くこの痛み……流石にこれに長時間耐えられる自信は無い。

やるなら短期決戦……それしかない。

僕は激しい痛みに苛まれながらも、それでも関係あるかと不敵な笑みを作る。

それと同時に『炎玉』と同じ様に『太陽玉』を作成する。

「っ!!……確かに、厳しい状況ですが貴方を倒す力は手に入れました。」

ここから一気に決めさせて貰いますっ!!」

作った『太陽玉』は3つ。

白く輝くその一つ一つが小さな太陽であり『炎玉』の比じゃない威力がある。

本当はもつと作って勝負を決めに行きたかったがそういう訳には行かなかった。

何故なら少し『太陽』の力を使っただけで今以上の痛みに襲われたからだ。

全身が沸騰する様な痛みに一瞬体が硬直してしまった程。

『太陽』の力がこんなに負担が大きいなってっ!!」

分かっていた事だけと思わず心内で愚痴ってしまう。

でもそんな事を言っている余裕が無いのも事実。

僕は作った『太陽玉』をツール目掛けて放った。

速度は『炎玉』と変わらない……でもその圧力は比べ物にならない。

凄まじい熱量を周囲に放ちながら一直線にツールに向かって行く。

「太陽なんて私の敵では無いわ!!」

そう言うツールはミョルニルを振り下ろし、同時に『太陽玉』に極大の雷が襲い掛かる。

激しい爆発が起こったが、その中で1つだけ消される事無く、灼熱の光球が存在感を示していた。

『太陽玉』は健在。

自然と口角が上がる。

そして驚愕したのはツールだった。

「何っ!! ぐあああっ!!」

全て消したつもりでいたツールは反応する事が出来ず『太陽玉』の直撃を喰らう。

腹に直撃した『太陽玉』は激しい爆発と爆風を撒き散らし、周囲は

爆煙に包まれる。

流星にあの攻撃だけで倒せたと思っていなから、警戒を弱める事無く煙の先を注視する。

けど煙が晴れるよりも先に、その中から不穏な気配を感じて咄嗟に『氣』を練り上げた。

僕を中心に太陽の炎が球状に広がり全身を包む。

その直後……凄まじい轟雷が降り注いできた。

「ぐうぐう!!」

途轍もない衝撃と『太陽』を使う代償に苦悶の聲が零れる。

体感的に途轍もなく長く感じた衝撃が漸く収まると、その疲労から思わず片膝を付いてしまった。

「はあはあはあ……」

周囲には黒焦げのクレーターが至る所に出来ていて、まるで爆撃でもあった様な有様。

僕の周りだけが綺麗に残っている……そんな状況だ。

「あの雷を耐え切ったか……」

声の先に視線を向ければ僕を見据えるツールと視線がぶつかった。

不遜な表情を浮かべているツールだったが、その腹には大きく焼け焦げた跡が見えた。

太陽による攻撃は間違いなく効いている!!

膝を付いている場合ではないと、震える足に力を入れ何とか立ち上がる。

これで漸くツールを倒す算段が立てられる。

でも状況が悪いのは間違いなく僕の方。

収まる気配の無い痛みに耐えながらも再び『太陽玉』を作り放つ。するとツールがここに来て変化を見せた。

「些か厄介なその太陽……これ以上喰らわぬわ!!」

そう言い放つとミヨルニルを空へ掲げ自身に雷を落としたのだ。

雷はツールへと帯電し、彼の『氣』と合わさり凄まじい力となって、彼から発せられるプレッシャーが高まった。

そして先程よりも多く放った5つの『太陽玉』全てを容易く打ち

払ったのだ。

「なっ!!」

簡単に対応された事にも驚いたが、それ以上に驚いたのはミヨルニルだけでなく帯電している左腕も使った事だ。

能力が向上している事は予想していたけど……これは相当やばい。

折角の太陽の力が効かなくなるなんて……予想外もいい所だ。まだまだ余裕がありそうだし、これ以上の手札が無いとも限らない。

……早く決着を付けなくちゃ駄目だ。

改めてそう確信した僕は覚悟を決めた。

さっきの攻撃と防御で『太陽』の残りも少なく、氣・体力共に限界が近い。

それにこれ以上先の事を気にしていても勝機は無い。

トールの勝ち誇った笑みを睨み返すと同時に三度『太陽玉』を作る。

「芸の無い男だ……その攻撃はもう効かぬわあ!!」

そう言うのと今度はミヨルニルを振り上げ、雷による攻撃を再開させるつもりみたいだった。

でもそれよりも早く僕は駆け出した。

僕の行動は予想外だったのか数瞬後に後ろに雷が落ちる。

結局僕にはこれしかないんだ。

腕がもう使えない？

いや、まだこの腕は動く。

『太陽』の代償がきつい？

そんなの我慢すればいいだけの話だ。

僕は誰だ？

僕は……僕は神殺しだ!!

僕は拳を握り締め、それだけで激痛が走るけどもう止まらない。

太陽の炎を拳に宿し、全力でトールに肉迫する。

トールは接近する僕に対してミヨルニルを構え迎え撃つ態勢に入った。

進攻を止めて来るかと思っただけ、彼も分かり易い戦いを望んでいたみたいだ。

嬉々とした顔で僕を待つて居る。

そんな彼に僕は先程作った『太陽玉』を放つ。

後数歩でトールの間合いに入ろうかというタイミングで放たれた『太陽玉』にトールの意識が僕から逸れる。

目の前で放たれた筈なのに凄まじい反応を見せるトール。

そんな彼の懐に飛び込んだ僕は『太陽』を宿した拳を叩き込もうとしていた。

しかしそれはトールの左腕に防がれる。

そして次の瞬間には僕を叩き潰そうとミヨルニルが迫っていた。

この時幾つかの選択肢があった。

防ぐか、避けるか、迎撃するか……。

僕が選択したのは……真つ向から受け止める事。

全身に力を入れ、その凄まじいであろう衝撃に備える。

手と足には太陽の炎が灯っているが、吹き飛ばされた時以上の威力のある攻撃に耐えられるか分からない。

それでも……勝つためには耐えるしかないんだ!!

次の瞬間襲い掛かる凄まじい衝撃。

意識が飛びそうになるし、衝撃の瞬間から腕の感覚が無い。

それでも吹き飛ばされまいと全ての力を振り絞り耐える。

ミヨルニルから伝わる雷の力に体の内外全てが焼き切られ、凄まじい痛みにも声すらも上げられない。

それでも……僕の全力を賭けた行動はトールの攻撃を押し留める事に成功した。

受け止められた事に流石のトールも驚いたのか称賛の声が漏れていた。

「我の一撃に耐えるとは流石だ……だが、これで終わりだっ!!」

「終わるのは……貴方だあ!!」

もうこの場を一步も動けない。

次の瞬間には倒れてしまいそうな程だ。

でも……この瞬間を待っていた。

この絶対にツールが避ける事が出来ない、ミヨルニルを使って防ぐ事が出来ない……この瞬間を。

僕は感覚の無い両腕でミヨルニルを抱え込む様に全身で掴む。

雷からの攻撃はさつき以上に来たが、まだ耐えられる。

そして僕は……残った全ての『太陽』の力を解放した。

太陽は僕を中心にその膨大な熱を放出し、僕とツールを飲み込む。

雷で強化されたツールには、この程度じゃ全然効いて無いと思う。

でもこれでいい……彼への雷の供給は遮断した。

此処からは時間と体力勝負。

そしてツールに反撃する暇を与えない。

「この程度の事で我を倒せると……なっ!!」

僕の体から全て離れた『太陽』の力だけど、制御は出来る。

意識的に動かす度に今度は体じゃ無く頭の中が焼ける痛みに苛まれるけど関係ない。

僕達を包む『太陽』を操り、今度は球体では無く棒状に変化させる。

それは言うならば『槍』の様に……。

それを作る事5本。

それ等の内4本をツールの地面に縫い合わせる様に打ち込んだ。

『太陽槍』は『太陽玉』と違いその体に弾かれる事無くツールの体を貫通する。

「ぐああああ!! つ嘗めるなあ!!」

「くはっ!!」

ミヨルニルを持つ手の『太陽槍』を強引に破ったツールはその勢いのまま僕を吹き飛ばす。

もう力の残っていないかった僕は簡単に吹き飛ばされる。

でも……それでいい。

僕は消し飛びそうな意識の中、憤怒の表情で僕を睨み付けるトールに視線を向ける。

そして最後に無意識に口角を上げ言った。

「……………これで本当に最後です。」

最後に残った『太陽槍』……………それに残った全ての太陽の力を注ぎ込んだ。

それは全長2mにもなる『太陽長槍』……………正真正銘これが全て。それに螺旋回転を加えトール目掛けて撃ち放った。

トールはミヨルニルを使い迎え撃つも『太陽長槍』はそれすらも打ち破り……………遂に届いた。

「ぐうおおおおお……………ぐうああああああああああ!!」

鼻に肉の焼焦げた匂い、耳にはトールの叫び声が届く。

それを最後に僕の意識は落ちていった。

第37話 夏休みの終わり

S i d e エリカ

スウェーデンに到着後、道中で叔父様から連絡を受け現場へ急行していた。

現に天候は悪く、辺りには神の神気を感じる事が出来る。

「……………やっぱりこうなったわね。」

「連れていかれた時点で何か起こるとは思っていたけど……………」

「仕方ありませんわ……………それが神殺しという物です。」

途中直前まで昴と一緒に居たと言う現地の結社へと向かう。

そこには大きな疲労感を顔に浮かべた現地の結社メンバー達が私達を待っていた。

「……………お待ちしておりました。」

「挨拶はいいわ、それよりも……………」

「わかっております。」

此処のリーダーだと言う男に今の状況を掻い摘んで教えてもらう。

その大方は私達が予想していた通りの物だった。

状況を確認し終えたので、彼らに指示を出す……………これも大手

結社の役目だ。

「私達はこのまま王の下へ向かいます。」

あなた達は引き続き辺り一帯の立ち入り禁止を行って下さい。」

「……………畏まりました。」

私達が早速移動しようとした時……………

「私は先に現地に向かいます。」

アリス様は一言そう告げると音も無く消えた。

今まで一緒に居たのはアリス様の幽体。

私達に付き合い一緒に行動して下さったけど、もう必要はないと判断したのか先に向かったみたいだ。

私達もアリス様に追い、昴と合流する為移動を開始した。

彼の戦っている場所はここから程近くの海辺だという。

私達は魔術で強化した体を最大限に使って駆けていた。

戦場に近付くにつれて、戦闘音と共に感じ取れる神気と昴の呪力が高まっていく。

最愛の人が戦っていると思うと居ても立っても居られない。

それは隣で並走している馨さんも同じだろう。

急に気温が高くなり、肌が汗ばんできたが今は気にしている暇はない。

現場が近くなり走るスピードが上がる。

そして遂に昴の戦っている海辺に到着した。

到着して最初に目に入ったのはアリス様とその隣に立つスーツの男。

少々草臥れたスーツになってしまっているが彼は間違いなくアレクサンドル様だろう。

状況が分からなかったが今は昴が最優先だ。

私達は足を止める事無くアリス様の隣に辿り着いた。

そしてその先で見た物に私は一瞬動きを止めてしまった。

「.....」

「追い付きましたか.....エリカ、馨。」

私達を一瞥してすぐに視線を前に戻したアレクサンドル様。

そしてアリス様が声を掛けて来た。

だけどその声に私達は反応を返すよりも先に体が動いていた。

何故なら今まさに神の一撃を受け、吹き飛ぶ昴の姿があったからだ。

だが私達が動くよりも先に神の苦悶の声上がる。

昴が吹き飛ばされた直後に巨大な炎の槍が神を貫いたからだ。

その炎の槍は直後に膨張を始め、凄まじいエネルギーと共に視界を真っ白に染め上げた。

危機を察知した私達は自らの身を守るべく、最大力を持って防衛魔術を使用する。

直後に迫り来る凄まじい衝撃に思わず吹き飛ばされそうになる。それ程の衝撃に耐えきり、視界も色を取り戻した先に見た物は……。

腹の真ん中に大穴を開けながらも立つ大男……神の姿と。その少し離れた場所で倒れ伏す昴の姿だった。

間違いなくどちらも重傷。

その中で先に動いたのは神の方だった。

ピクリと体が動いたかと思うと、ゆっくりと一步前に踏み出した。昴の方へ動き出した神に私達は同時に飛び出していた。

……がその一步に踏み留まる事が出来ずそのまま崩れ落ちた。地を揺らしながら倒れる神の姿に驚きながらも、私達はそのまま昴の下へ駆け寄る。

体中には大小様々な火傷の痕。

そして何より彼の両腕は真っ赤に腫れ上がり、右腕は肘から先が変な方向に折れ曲がってしまっている。

とても痛々しい姿だ……。だが、それでも息をして心臓が動いている事にほっと息を吐く。

「ハハハっ……ガハッ……ふん、どうやら私の負けの様だ。」彼の笑い声にすぐさま臨戦態勢に入るが、その後の言葉にその必要はないと悟った。

振り返れば既に崩れ始めている神の姿があった。

「聞こえておるかは分からぬが、良き死合であった……。だが、次は負けん。」

その言葉を最後に神の姿は消えた。

静まり返った場に波の音だけが響く。

その中で最初に音を出したのはアレクサンドル様だった。

いつの間にか消えていた彼は、突然に昴の隣に見下ろす形で現れると視線だけ私達に向けて口を開いた。

「俺の見ていた範囲で、この場で起こった事を資料に纏めて送って置く。」

そう言うのと私達に背を向け、次の瞬間には権能を行使しこの場から去ってしまった。

一瞬の出来事に啞然としてしまうも、またも突然現れたアリス様に現実に引き戻される。

「昴様も御無事のようですよ、私も御暇させて頂こうと思います。

昴様に宜しく御伝えておいて下さい。」

そう言うのと私達の返事も待たずにアリス様もこの場から姿を消した。

再び訪れる静寂に私達は自然と昴に目が行く。

痛々しい姿は変わりないが、それとは裏腹な穏やかな寝顔に思わず笑みが零れる。

「…………人をごだけ心配させたか分かっているのかしら。」

「ホントにね…………でも無事で良かった。」

戦闘後とは思えない可愛らしい寝顔に思わず手が伸びてしまう。

汚れが目立つその顔を優しく撫でも、身動き一つしないほど深く眠っている。

「良く眠ってるね。」

「それ程の激闘だったんでしょ。」

彼の顔を見ていると愛おしさが抑えきれなくなってきた。

それは彼の頭を撫でている馨さんも同じ様だ。

そんな彼を見て私達は顔を見合わせると、静かに笑い合う。

私達を心配させた罰と、神を討伐したご褒美の為に行動を開始するのだった。

Side 昴

目を覚ますとそこは病院のベッドの上だった。

僕は自分の状況を確認する為に体を起こし、その時に体中に包帯が巻いてある事に気付く。

少し動き辛くはあるが特に痛みは感じない。

でも一番目に付くギプスの填められた右腕は動かすと少しだけ痛みが走った。

でもそれも軽微な物だったので大丈夫だろうと少し安心した。

ガラツ!!

体の調子を確認していると病室の扉が開きエリカさんと馨さんが入って来た。

2人は僕を見ると表情を綻ばせ近寄って来る。

「やつと起きたのね、昴。」

「おはようございます、エリカさん、馨さん。」

「その様子から見るともう大丈夫そうだね。」

「ええ、ご心配おかけしました。」

右腕は少し痛みますが、それ以外は大丈夫そうです。」

「その様子を見ると、本当に大丈夫そうですね。」

「でも激しい戦闘だったみたいだからね、もう少し休んでいると良いよ。」

そう言っ僕を再び横にする馨さん。

万全の状態で無い事は僕が一番わかっているので大人しく従った。横になった後、僕達は少し話をした。

僕がアレクさんに連れ出されてからの事や雷神ツールとの戦いの事を……。

その話をエリカさん達は真剣な顔付きで聞いていた。

「……………やっぱりあれは『雷神ツール』だったのね。」

「アレクサンドル様の推測は正しかったという事か……………」

「どういう事ですか?」

どうやら僕の眠っている間にアレクさんが僕の戦闘の詳細をまとめて送ってくれたらしい。

ただ僕が眠っていたのはあの戦いから1日ほど……………アレクさん、資料作成は早過ぎではないでしょうか。

ともあれ、その資料と僕の話の大まかな内容は殆ど一緒だったみたいだ。

少し無駄になったかなと思っていたら、当事者の話も大事な情報だと言ってくれた。

「この戦いで得られたものは大きいね。」

「1つは雷神トールから篡奪したであろう権能ね。」

新しい権能……言われて意識してみれば、確かに僕の中に新しい力を感じる……様な気がする。

「確かに新しい力を感じる気がします。」

それにトールから篡奪したから『雷』関係の権能ですよね。」

「多分そうだと思うよ。」

「何か心当たりでもあるの?」

エリカさんの問いにさつきは端折って話さなかった『太陽』の力を手に入れる時の意識下の事を話した。

其処で激しく轟いていた『稲妻』の話を……。

「そう……炎の権能には『稲妻』の力もあつたのね。」

「でも確か『稲妻』は『雷光』の事だった筈。」

もしかすると同一の力として統合される可能性があるね。」

「神話的観点からすれば違いはあるけど……馨さんの言う通りかもしれないわね。」

まあ、結局は権能を掌握してみないと分からないわ。」

「そうだね、機会を待ちながらこうして色々と考察を続けて行けばいいや。」

「はい、そうですね。」

話をしている最中に馨さんが入れてくれた水を口に入れひと息つく。

「それでもう1つは新しい炎の力……『太陽』の力に目覚めた事ね。」

「でもあの力を使い熟すには、まだまだ時間が掛かりそうです。」

「使うのに随分負担が大きかったみたいだね。」

「最後の最後は幾分かましになった気がしますけど、『炎』と同じ様に使えるかと思ったら……。」

僕の言葉に神妙に頷く2人。

「昴君の話だと、まだその段階に行くのは早かった……って事なんだろうね。」

「神殺しとしての成長が不可欠になって来るわね。」

「……これからもいっぱい経験を積んで貰わなくちゃ。」
「え？」

エリカさんの不穏な言葉に思わず聞き返してしまう。

しかし2人はそんな事お構いなしに話を続ける。

「去年同様今年も騒動が多くなりそうだし。」

「暫くは休む暇も無い位忙しくなるんじゃないかしら。」

「僕達も昴君の為に頑張らないとね。」

「ええ、私達の働きが昴の成長に繋がるんですもの……気合を入れて頑張りますよ。」

「い、いや、ちよつと待つて下さい。」

僕の言葉は全く届かない。

2人はとても楽しそうな笑顔を浮かべてこれからの事を相談し始めるのだった。

……彼女達の話が現実になったら、僕は生きて居るのだろうか。

僕が諦めて外を眺めていた頃、病院の先生が入って来た。

でもその表情はとても強張っていたので、魔術関係者何だと察しがついた。

ビクビクしている彼を刺激しない様に気を使い、さっきの事も相まって少し疲れてしまった。

そんな僕に気付いた2人は、また僕をベッドに横たわらせた。

「今日はもう休みなさい。」

「病み上がりなのに、沢山話させてごめんね。」

「いえ、僕の方こそすみません。」

そう言うと2人は優しい笑みを返してくれた。

「じゃあ、お休みなさい。」

「お休み。」

両頬に2人の口付けが降ってくる。

されるがままで少し恥ずかしく、少し顔を赤くしながら『おやすみなさい』と返し、僕はまた眼を閉じた。

次の日、無理言つて退院させて貰った僕は一路イタリアに戻ってきた。

右腕は吊っているから不便ではあるけど、夏休みも残り少ないので戻る事にしたのだ。

「アレクさんとアリスさんから？」

「ああ、御2方から昴君に伝言を預かっている。」

赤銅黒十字に漸く辿り着き、パオロさんに挨拶に来た時、そこで彼から切り出された。

そしてパオロさんは一枚のメモを取り出すと、僕に差し出してきた。

それを受け取ると、乱暴に『一度だけお前に力を貸してやる』と書かれていた。

「それはアレクサンドル様からだ。」

先日送られてきた資料と一緒に入っていた、恐らく昴君宛てで間違いないと思う。」

「でも、心当たりが無いんですが……。」

「彼は捻くれ者であり、全て自分でやろうとする所がある。」

だから今回昴君を巻き込み、まつろわぬ神と戦わせてしまった事を『貸しを作った』と考えたんじゃないかな。」

「貸し……ですか？」

「まあ、彼の考えは理解できない所が多い……あまり深く考えず、心の片隅に留めて置く程度でいいと思う。」

若干彼に対する言葉に毒を含んだパオロさんらしからぬ物言いに少し驚いてしまった。

後でブラウさん達に聞いた所、昔アレクさんの起こした騒動に巻き

込まれ死ぬ様な思いをしたのだとか。

パオロさん含め命を助けて貰った事があるから普段は王として崇めていたみたいだけど、ふとした時に当時の記憶が蘇って口が滑ってしまうらしい。

……パオロさんも大変なんだなあ。

大人で落ち着きのある人だと思っていたけど、人間らしい所もあるんだと思つてちよつと親近感が湧いた。

そしてパオロさんの武勇伝を聞いてみたいとも思つた。

「次はアリス様からだ。」

そう言つて僕の方にパソコンの画面を向けて来る。

画面の中にはアリスさんの姿があつた。

『昂様の雄姿……しかと拝見させて頂きました。』

そしてこの様な形でしか姿を御見せ出来ず申し訳ありません。』

アリスさんは画面の中から喋り出した……ビデオレターみたい。い。

何でも力を使い過ぎてこういう形でないと顔を出せなかつたみたいだ。

『あの神々しくて凄まじい『太陽』の力……思わず体が震えておりました。』

途中から恍惚とした表情で僕の戦いをべた褒めし始めるアリスさん。

如何も『太陽』を掌握した頃からアレクさんと一緒に見ていたらしい。

『何か力になれる事がありましたら何でも仰つて下さい。』

また御逢い出来る事を心から願つております。』

最後にそう締めくくると映像は終わった。

アリスさんからの映像を見た感想は……。

……は、恥ずかしかったあ。

無我夢中にやっていた事を事細かに称賛される事がこんなに恥ずかしかったなんて……。

途中から始まった称賛に僕は顔を真っ赤にしていた。

エリカさん達は興味津々に話を聞いているし、恥ずかし過ぎる時間だった。

「……え、えつと、アリスさんにはこれから沢山お世話になりそうですね。」

何とか落ち着きを取り戻した僕は何とかそう切り出した。

「だがその分あちらの要望を聞く事になるだろう。」

「ですがアリス様も昴……神殺しに対してそこまで強くは出ないのでは？」

「いや、神殺しの力を知っているからこそ必要な時は必ず昴君を頼って来るだろう。」

「神話関連の場合……ですか？」

「来るとしたら間違いないくそうなる筈だ。」

という事はヨーロッパで何か起きたら連絡が来る可能性があるのか。

等と考えているとパオロさんから否定の言葉が出た。

「とはいえ、ヨーロッパには3人の神殺しが居られる。」

昴君まで話が行く事はまず無いだろうね……何か大きな出来事が起こらない限りはだが。」

「そうですね。」

パオロさんの最後の一言が妙に引つかかった僕だった。

それからは休みを取り戻す様にゆっくり過ごし、夏休みも残り3日……遂に日本へ帰る。

結社を出る際は皆さん惜しむ様に送ってくれたのが嬉しかった。

今年の夏休みは激動の日々を過ごしたなあ……かなり大変だったけど。

アリスさんという協力者も得て、サルバトーレ卿とアレクサン……2人との接点を持つ事も出来た。

でもちよつと疲れたなあ、暫くはゆつくりしたい……。

帰りの飛行機の中でそんな事を思いながら両隣に座るエリカさん達との会話に花を咲かせるのだった。

余談

イタリアに戻って来た夜の事。

今迄電源の落ちていた携帯に漸く充電する事が出来た時の話。

何か連絡が入っているかもしれないと電源を入れ、表示された画面を見て思わず大声を上げてしまった。

それに反応したのはエリカさんと馨さん。

「いったいどうしたの、昂。」

「エ、エ、エリカさん……これはいったい、どういう事ですか!?!」
責める様にエリカさん達に携帯を突出すが、しれっとしたままの2人。

僕の方は映っている画像のせいで顔が真っ赤になっていた。

其処に映っていたのは画面を2分割して、それぞれ2人とキスしている画像。

「やっと思い出したの?」

「こんなの何時撮ったんですか!?!」

「勿論昂君が眠っている時に、だよ。」

聞けばツールとの戦闘の後2人してこの画像を撮り合ったらしい。
何故と問い詰めると……。

「何でって……ねえ?」

「昂君一人で頑張ったから、ご褒美だよ。」

「恥ずかし過ぎで、ご褒美どころじゃないですよ!!」

「当たり前よ、ご褒美だけじゃないんだから。」

僕が反論すると、エリカさんはさも当然の様に言った。

その言葉に「へ?」と間拔けな声を上げてしまう。

「貴方が神殺しであり、とても強い事は分かっているわ。

でも、それでも私達は貴方の事が心配なのよ。」

「……そ、それは。」

「だからそれは僕達を心配させた罰ってわけ……でも昴君も嬉しかったりするんですよ。」

後ろから凭れ掛かる様に抱き締めてきた馨さんの声が耳を撥る。

その甘い声と香りに更に顔が熱くなる。

けどそれも次の言葉で一気に冷え切ってしまった。

「後、それにはロックが掛けてあるから。」

「へ?。」

「当たり前でしょ、簡単に変えられたら罰にならないじゃない。」

そう言つてエリカさんは僕に顔を近づけ、そして妖艶な手付きで僕の唇をなぞる。

「そうね、貴方から私達に熱い口付けをしてくれたら解除してあげてもいいわ。」

「んなっ!。」

艶のある彼女の笑みと衝撃的な言葉に開いた口が塞がらなくなる。

エリカさんは満足した様に小悪魔チックな笑みを浮かべて離れ、それと同時に背中の温もりも無くなった。

彼女達は並んで僕の前に立つと、とてもいい笑顔で……。

「楽しんでしている(ね)(わね)。」

そう言つて2人はさっきまでの行っていた作業に戻って行った。残された僕は呆然とするしかなかった。

第38話 予感

S i d e アリス

エリカ達と別れた後、私は体調は優れなかったが別の場所に轉移した。

其処はあの海岸から少し離れた場所。

其処に佇む1人男の姿を見つけて隣に立つ。

「随分と昂様の事を気にしているようですね。」

「……………貴様か、何の様だ。」

突然現れた私に驚く事も無く一瞥するとアレクサンドルは再び前を向く。

その表情から何を考えているのか読み取る事は出来ない。

そして私の言葉は無視された……………がいつもの事なので気にせず続ける。

「少し伺いたい事が……………あの山で一体何があったのですか？」

「……………何の事は無い、少し神獣と戯れていただけだ。」

「神獣……………トールの話から推測すれば、ヨルムンガンドですか。」

「結社に保管してあった石版……………あれが鍵だった。」

何故今になって力を持ち始めたかは分からんが……………。」

「それに気付かれたのが昂様……………ですね。」

私の言葉に少し表情が険しくなる。

少し思う所があったのででしょうか？

彼らしくないと思いつつも事はやめて置く。

「あれの感覚は他の神殺しとは一線を画している……………俺も言われるまで気付かなかったからな。」

それこそお前並みの魔女でも気付くか分からんレベルだった。」

「……………それ程ですか。」

私達から離れた場所でエリカ達に介抱されている昂様に視線を向ける。

今迄であったどの神殺しとも違う御方。

普段の雰囲気は優しさあふれる少年……………だがその戦っている

姿は全くの別物。

戦況を見極め、勝負所を見落とさない勝負強さ。

真剣に相手に向き合う中に、ほんの少しの隠しきれない楽しそうな表情。

そんな彼の姿を目の前で見る事が出来たのは収穫だった。

「それにしてもあれ程の大物との戦いにも拘らず、大した被害が出ていないとは……。」

昂様の権能はかなり使い勝手が良い物なのですね。」

ふと思つた事が口から零れた。

実際戦場跡を見渡しても幾らか焦げ付き、大小様々なクレーターは出来ているが目立った被害はその程度。

此処が街中であればまた違つただろうが、今回は大した被害では無い。

日本での戦闘の際もこのこと同じ……いや、もっと被害は小さかったと聞いている。

そう思つて口にした言葉だったのだが、彼は違つたみたいだ。

「……お前は気が付かなかったのか。」

「何の事です?」

訳が解らず聞き返せば呆れた様に溜息を吐かれた。

その事にイラツとしつつも、いつもの事だと気持ちを静め、彼の言葉の続きを待つ。

「彼奴の戦闘における一番の強みは何だと思う。」

「強みですか?」

突然の問い掛けだったが、反論しても時間の無駄なので黙つて思考を巡らす。

昂様は武術家……それも彼の年齢では考えられない程の使い手だ。

それに神殺し特有の勝負強さだろうか。

先の戦いでの手札の斬り方は流石と言えた。

といろいろ考えている所にアレクサンドルが口を開いた。

「武術か?」

いいや、それならサルバトーレや羅濠の方が勝っている。
今後はどうなるか分からないが、今の時点では間違いない。
なら勝負強さや戦術眼か？

「それも草薙護堂……いや、経験から見て俺よりも下だろう。」
「でしたら、先程も言っていた鋭敏な感覚ですか？」

「半分正解だ。」

勝ち誇ったような顔つきで私を見る彼には本当にムカつきました。

口が開きそうになるのを如何にか堪えている内に、したり顔で彼は再び口を開いた。

「彼奴の戦闘での強みは呪力のコントロールだ。」

「呪力のコントロール……ですか？」

「俺達の出鱈目な呪力量は知っているだろうが、彼奴はそれを完璧に操っている。」

その上でのあの力の使い方だ。

自身の内に力を溜め込んだ上で戦うのが彼奴のスタイルだろう。」

「……貴方は彼が力を内側に溜めこんでいるからここまで被害が出なかったと言いたいのですか。」

「漸く気が付いたか、その通りだ。」

資料を見て知ってはいたが、改めて考えると在り得ない事だと気付く。

神殺しの膨大な呪力を完璧に操る事は、実際在り得ない事ではあるが……まあ不可能では無い。

だが権能という神をも殺し得る力を体内に留め、溜め込みながら戦う。

幾ら頑丈に出来ていても体が持つ訳が無い。

其処に気が付きアレクサンドルの方を見るが、その彼は事も無げにいつもと変わらない表情。

「勿論自身に合った形で権能が昇華したんだろうがな。」

それでも化け物じみている事に変わりはない。

もし俺達と同じ威力の権能を持っていたとしたらこの辺り一帯は焼け野原になっていただろう。

もう1つ言えば彼奴の鋭い感覚は呪力に敏感だからだ。

自身の呪力をあれ程まで操れるのなら、その過程で周りの呪力にも過敏になっても可笑しくない。」

「……それが昂様の強み。」

「まあ、俺は彼奴の事をそこまで知っている訳では無いから唯の推測に過ぎんがな。」

そう言うとアレクサンドルはもうここには用は無いと言う様に彼等から背を向け歩き出す。

私も彼の言葉に少し考え込んでいた為反応が遅れてしまい、気が付いた時にはもうこの場から去った後だった。

「まだ聞きたい事があったと言うのに……。」

と文句を言いながらも、思わず笑みが零れる。

普段はあまり人に興味を持たない彼が……。

「随分と昂様の事を気に掛けるのですね。」

彼らしからぬ事に、少しばかり可笑しくなってしまった。

何か思う事があったのか、それとも何かの気まぐれか……。

そればかりは彼しかわからない事だが、これからも楽しい事が沢山ありそうだ。

「それに……。」

終始彼は何かを考え込んでいる顔をしていた。

3月に退けた『最後の王』の一件から見なかつた表情だ。

「彼の興味を引く事が起こったという事でしようか。」

珍しく饒舌だった事もそれで説明が付く。

「近い将来、何か起こる可能性がありますね。」

そしてその中心にいるのは、恐らく……。」

遂に移動を始めた昂様達に再び視線を向ける。

エリカ達に運ばれている姿は唯の少年の様にしか見えない神殺しの1人。

他の方々とは違う『善王』としての素質を持つ彼の将来を予測し……。

「彼と協力関係を持つ事が出来た事がこの夏の一番の収穫ですね。」

そう思わず口から零れた。
そして私も休みを取る為に術を解き、柔らかいベッドの上へ帰るの
だった。

S i d e アレクサンドル

アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァールの前を去り、1人になって考
えを纏めていた。

少し口に出した事で考えはある程度纏まった……その点だけ
はあの女に感謝しないでもない。

案件は幾つかあるが今大事なのはあの遺跡での出来事。

俺の手から滑り落ちた石板……あれは間違いなく何らかの意
志の力があつた。

でなければ俺があんなミスをする筈がない。

神殺しである俺に対して向けられた作為……恐らく神がそれ
に類する存在が動いているとみていいだろう。

……まあ、どれもまだ証拠も何もない唯の推論だが。

だが調べてみる価値はある。

そう考えを纏めた俺は自身の破壊した遺跡の後に降りたつた。

山が丸々総崩れを起こしていて最早見る影もない。

何か無いか見渡してみても辺りは剥き出しの土と木々の残骸ばかり。
り。

「やはり遺跡は俺の権能に飲み込まれたか。」

あの時の呪力が一切感じられない事に思わず舌打ちしてしまう。

緊急事態だったとはいえ『さまよう貪欲』を使った事が悔やまれる。

暫く見回ってみたが結局痕跡1つ見つけられなかった為一先ず諦
める事にした。

作為が動いていた事は間違いないのだから、その内またアクション
があるだろう。

用は無くなった……そう思いこの場を去ろうとした時ふと海

が視界に入った。

此処から見える海は綺麗な物だ……あの戦闘跡が酷い海岸を除けばだが。

そして頭に過るは『神藤 昂』……あの男の事。

確かに今までに会った事が無い神殺しとしての気質を持っていた。

あの男と違い自分な立場を理解している。

あの男と違い此方の考えを汲んで行動していた。

そして他の神殺しに無い物……人間らしさが多く見られる男だ。

「権能の汎用性と威力はあの力量にあった物という事……」

人としては真っ直ぐな男ではあったが、その力は桁違いに強い。

元々の力量に起因しているであろう権能の威力と汎用性は、はっきり言えば信じられなかった。

しかしやはり神殺し……化物の類である事に変わりはないと切り替える事にした。

更に言えば……あの『太陽』の力。

恐らく身に合わない力だった事は間違いない……あの隠し切れない苦痛の表情がその証拠だ。

「外に放てば良かったもつと楽に使えただろうに……」
それが出来なかったのか、やらなかったのか、それとも考えつか
なかったのか……。

「何れにしろ、俺には関係の無い話か……」

そうして俺もこの場から帰る事にした。

結社に帰ってからも休む事なく働き続ける。

やる事が多く、今回の件の整理に資料作成もしなくてはならない。そして神藤昂の資料を作っている時にふと考えてしまった。

今回の件、間違いなく俺が彼奴を巻き込み、挙句神との戦いも強い結果となってしまった。

「いや、強いてはいないか。」

あのまま無視する事も出来たのに戦うと選択したのは彼奴自身だ。最初はそう思ったが、暫く一緒に居た事で少しばかり見えた彼奴の気質を思い出し、思わず顔を顰めた。

一般人に近い気質に、あの神殺しらしからぬ優しき。

「……全く面倒な事になった。」

どちらにせよ、事の発端を作ったのは俺だ。

そう至ってしまった自身の思考に舌打つ。

そして出来上がった資料に殴り書いたメモを挿み、送還の術で赤銅黒十字まで飛ばした。

漸くひと段落した俺は広を脱ぎ捨て、自室のソファに沈み込んだ。

一息つくと用意していたグラスを傾け、最後の……最重要案件に思考を傾けた。

あの時は自分の権能に巻き込まれない様にする為、そこまで考えが及ばなかった。

だがあの感覚は間違いない……権能を手に入れた時に感じる、自分の中に何かが入って来た感覚。

この体になって何度か受けたあの感覚が……間違いなく『ヨルムンガンド』を倒した後に感じた。

本来ならあり得ない事だ。

神獣から権能を得られたという話は聞いた事が無い。

もしそうだとすればこの世は権能を持つ者だらけという事になってしまう。

「確かに神格化されている、人の形を持たない神も多く居るが……。」
ヨルムンガンドにそれ程の力は感じる事が無かった。

少し手ごたえがあるな……その程度の感覚だった。
なのに得られた新たな権能。

「俺に干渉してきた相手の仕業と考えるのが無難か……。」
グラスをテーブルに置き、立ち上がると再び動き始めるのだった。
また何かが起こりそうな……いや、もう既に起こっている。
そんな確信が俺の中に残ったのだった。

後日、この事はあの女を通して全世界に流して貰った。

勿論権能を得られるという物では無く、神獣の強さが跳ね上がっているという物をだ。

神獣は一般的な魔術師が単独で倒せるものではない。

だが指折りの手練れの中には神獣程度なら倒してしまう物もいる。

その連中がもし神獣を討伐してしまったら……。

それをあの女も理解した様だ。

この話をした時「なぜもつと早く」と怒っていたが、教えてやっただけ有り難く思えないのだろうか。

緊急の用件だから教えてやっただけであって、本来なら教える義理は無い。

等と心内で罵倒しながら、今日も作業の手を止める事ないのだった。

都の守護者

第39話 修学旅行

S i d e 昴

長かった夏も終わり、僕達は学生らしい日常に戻っていた。とは言え、日本に戻ってから忙しかった。

まずは沙耶宮屋の家に言ってイタリアであった事を報告。サルバトーレ卿との決闘や、雷神ツールを打ち取った事。

そして……馨さんと正式に婚約者として向き合うと決めた事。全て馨さんが逐一報告していたみたいだったけど……。

だけど最後のはちやんと僕の口から伝えたかった……いや、伝えなくちゃいけない事だと思った。

源蔵お爺ちゃんはとても嬉しそうに祝福してくれた。

千尋さんには真剣な顔付きで「宜しく御願致します」と頭を下げられた。

その時の千尋さんの表情と雰囲気はブラウさんの時と同じだった。大事な一人娘……嬉しくもあるけど、それ以上に神殺しの傍

にいると思うと心配なんだ。

後にブラウさん、千尋さんの両人から伝えられた思いだ。

この時はその思い全てに気付く事は出来なかった。

けど、千尋さんの真剣な表情にそれ相応の覚悟を込めて返事をした。

……その返事に千尋さんの表情が少しだけ穏やかになった様に見えた。

それから長らく休んでいた道場の再開。

無事に戻った事を伝えたら皆さん揃って道場に顔を見せてくれて、そのまま道場を開く事になった。

その時に聞いた話だけど、何でもこの道場に通いたいと言う人が増えていくらしい。

前々から『氣』のコントロールに定評があつた僕の家。

お爺ちゃんを始めとする御先祖の方々は知る人ぞ知る感じで開いていた道場だった。

それが僕が神殺しになつた事で一気に……それこそ日本全国に名前が広がつたらしい。

僕としては来て貰えるなら拒むつもりは無いけど、それに待つたを掛けたのはエリカさん達だった。

彼女達の話では僕と仲良くなつて、その権威を得ようとしたりとか。

神殺しという存在が気に入らず、懐に入つて無謀にも危害を加えようと考えている輩も居たりするらしい。

こういった事を考える人は、ひと昔前のヨーロッパでは少なくなつたみたいだ。

これは今迄日本に神殺しという存在が居なかつた事が原因みたい。それは道場に通う年長者の方々も同じ考えだった。

だから道場に通つている人達に声を掛け、無闇に此処につれて来ないと言つて回つてくれたらしい。

エリカさん達はその方々に感謝を言いに行つた……勿論僕も一緒に。

そしてその先で言われたのは……。「此処には私共をここまで成長させてくれた恩がある。

それこそ昂君のお爺さん……総一郎や先代……昂君の曾御爺さんには若い頃から世話になつて来た。

それに昂君の事も小さい頃からずつと見て来たし、接してきた。だから例え昂君が神殺しという偉大な存在になつたとしても、私達

にとつては孫も当然なんだ。
昂君に危害を加えようとする輩を私達は許すつもりは無いよ。」

という、とても嬉しい言葉だった。
更に『今後僕に何かあれば全力で力を貸す』……という言葉も

添えられて。

詳しく聞けば沙耶宮家が主導になり夏の間話し合いの場を持つ

たらしい。

各年代いずれも『神道流道場』で腕を磨いていた人達の集まり。何1つ揉める事無く、全員一致で僕の下に付くと決まったらしい。此れには馨さんも聞いていなかっただけで驚いていた。そんな彼女を見た1人が「僕達を驚かせたかった」と笑って言った。そして……この場に居た全員が膝を付き頭を垂れる。神殺しになってからという物、少なくとも回数見た光景。僕力強く「ありがとうございます」と言葉を返すのだった。

落ち着きを取り戻した後。

聞けば道場に通いたいと言う人を沙耶宮家が主導になって精査しているらしい。

最終判断は勿論僕に委ねてくれるみたいだけど、あからさまな人を先に斬って置いてくれているみたい。

この方法なら、後々文句を言われる事も少なくなると思つての事。僕達もその意見に賛成して、皆さんには悪いけど任せる事にした。実際には、人が多すぎて少し時間が掛かるみたい。

僕の出番はまだまだ先だと言われてしまった……ちよつと気合が入っていただけに少し残念。

そうしてあつという間に残った夏休みも終わり、既に学校が始まつて1週間。

未だ夏の強い日差しが降り注いでいる。

そんな中、今日もいつもの様に学校に通い、今は昼休み。

先輩達と一緒に屋上で昼食を食べています。

「9月になつたつて言つてもまだまだ暑いな。」

「本当ですね、もう少し何とかならないんですかね。」

「2人共、時期に日差しが和らいできますから……もう少しの辛抱ですよ。」

「冬の時期はお昼如何していたんですか？」

「寒くなったら流石に教室で食べてたよな。」

「周囲の視線がとても多かつた事を覚えています。」

万里谷先輩の言葉に、その状況が容易に想像ついた。

クラニチャール先輩と万里谷先輩・・・2人と一緒に食べていれば、間違いなく注目を集めるだろう。

特に男子からの恨みが籠った視線は僕も覚えがある。

それを思い浮かべただけで、背筋に悪寒が奔った。

先輩も同じなのか、少し憂鬱な表情を浮かべている。

でもすぐに首を横に振り、僕に顔を向けた。

「俺達は教室で食べるけど・・・神藤やひかり、静花はどうするんだ？」

「私は皆さんとお昼を一緒にできないのは残念ですが、教室で食べようと思います。」

「私もそうするよ、お兄ちゃんの教室で食べる訳に行かないし。」

「僕は・・・。」

「ねえ昂、私達は学食と一緒に食事をしない？」

此処よりは周囲は騒がしいでしょうけど、お昼位は一緒に居たいわ。」

ひかりちゃんと静花ちゃんが断り、僕も続けて口を開こうとしたらエリカさんに遮られた。

甘える様に僕に寄り掛かると、そこから上目使いで訴えて来る。

その仕草と表情と目の前にいる大好きな彼女に一気に体温が上がリ、顔が真っ赤になったのが分かった。

ドキドキしすぎて返答出来ずにいると、エリカさんを咎める声があった。

「エリカさん、公衆の面前で何をやっているんですか。」

その様なふしだらな事をしてはいけないといつも言っているではありませんか。」

「あら、これ位イタリアでは当たり前なのよ・・・ねえ、リリイ？」話を振られたクラニチャール先輩。

今迄我関せずと、甲斐甲斐しく先輩の世話を焼いていた彼女だった

憂さ晴らし?・・・とは少し違うけど、少しクラニチャール先輩に思う所があるんだと思う。

・・・・・・僕に力になれる事があればいいのに。

「そういえば修学旅行、楽しみだよな。」

話題が変わり、話は2年生が行く修学旅行の話。

この間エリカさんが話していたっけ・・・・・・日程は10月に入つてすぐだった筈だ。

「10月に入つてすぐでしたよね。」

もう何処に行くのか発表はあつたんですか?」

うちの学校は毎年修学旅行の行き先が変わるのだ・・・・・・この辺りは流石私立と言つた所。

そして行先の発表は当日の1ヶ月前という良く分からない決まりがある。

年によつて当たりはずれがあるので、2年生の間に緊張感が漂つていた。

「ああ、ちょうど今日発表があつたんだ。」

「何処だつたんですか?」

「京都だったよ。」

「京都ですかあ、良いですね。」

「本当に普通の観光地でほつとしてるよ。」

安堵の息を吐く先輩に思わず苦笑する。

気持ちも分からないでもない。

いい年だとヨーロッパやアメリカといった海外・・・・・・例年でも沖縄や北海道といった有名観光地だったりする。

けど運が悪ければ富士山に登山だったり、近場で済まされたり・・・・・・。

噂で聞いた話だと都内でキャンプというのもあつたらしい。

確かに楽しそうではあるけれど・・・・・・修学旅行でそれは嫌だと思つたなあ。

「神藤は京都行つた事があるのか?」

「一度祖父母に連れて行ってもらいました。」

けど小さい頃だったのではほとんど覚えていなくて……。」

「俺は行った事ないから、楽しみなんだよなあ。」

万里谷は行った事あるんだっけ？」

「私も一度だけですが行った事があります。」

けど姫巫女の修行の一環でしたので、観光は殆どできませんでした。

だから私も楽しみです。」

「私も京都にはとても興味があります。」

歴史ある建造物に趣のある街並み……そして多くの神々を祀る仏閣。

忙しくて行く機会は暫く先かと思っていたのですが幸運でした。」

昼食も食べ終えてきぱきと片付けに勤しんでいたクラニチャール先輩も会話に入ってきた。

その言葉通り顔に笑みが浮かんでいて、楽しみにしている事が十分に伝わって来る。

だったのだが、その表情が真剣な物に変わる。

「……ですが心配事もあります。」

「もしかして……また魔術絡みか？」

察した先輩の言葉にクラニチャール先輩が頷く。

けどクラニチャール先輩が再び口を開く前に先輩が首を横に振った。

「今そんな事を心配しても仕方ないさ。」

折角の修学旅行なんだからさ、リリアナも純粹に旅行を楽しもうぜ。」

そう言う先輩の視線が一瞬ひかりちゃんと話している静花ちゃんに向けられた。

それに気付いたクラニチャール先輩も何か言いたげだったけど口を噤んだ。

何とも言えない空気が漂う中、それを吹き飛ばしたのはエリカさん

だった。

「私も京都に行くのは楽しみなんだけどね。

ただ……昂と離れ離れになるのはとても寂しいわ。」

「エ、エリカさん!？」

再び僕に寄り掛かって来る彼女に上目使いで見上げられると、あつという間に顔が熱くなる。

「エリカさん、また貴女はー!」

僕に凭れ掛かっているエリカさんを再び万里谷先輩が叱る。

その行動にあの空気は一瞬にして霧散し、いつもの感じが戻って来る。

それは良かったんだけど……。

僕はエリカさんが凭れている為動く事が出来ず、一緒に万里谷先輩に叱られる羽目になった。

叱られている間もエリカさんはより体を押し付けて来るし、それに万里谷先輩も反応して叱る勢いが強くなるし。

結局休み時間が終わるまで、飴と鞭を同時に味わうと言う状況に耐えるしかなかった。

あの空気を変えてくれたのは嬉しいけど……もつとやり方は無かったんですか!？」

僕の心の声はそう叫んでいたのだった。

第40話 京都事情

S i d e 昴

長く感じた昼休みも終わり、あつという間に放課後。

学校から帰ると道場を開き、夕方は学生達、夜は魔術関係の大人達を相手に指導を行った。

それも終わり今日はエリカさん達も夜の稽古に参加していた為、3人で遅めの食事を取っていた。

その時話題は自然とエリカさんが行く修学旅行の話になっていた。

「へえ、エリカさん達は京都に行く事になったんだね。」

「そうなの、今から楽しみだわ……馨さんは行った事あるのかしら?。」

「勿論、京都には何度も言った事があるよ。」

「それは姫巫女の修行の為?。」

エリカさんの問いに馨さんは首を横に振る。

「確かにそれもあるけど、それだけじゃないよ。」

沙耶宮家も由緒ある家柄だからね、京都に所縁がある。」

「それは初耳ね。」

「と言つてもかなり昔の事だよ。」

確か江戸時代にこっちに本拠を移したって書いてあったかな。

これ以上詳しい事は資料が無くて調べ様が無いけどね。」

そう言つて笑う馨さん。

聞いてたけど……とても凄い事じゃなかった?

エリカさんのブランドゥリ家も由緒ある家だつて言つてたけど、沙

耶宮家も負けず劣らず。

僕の大切な人達の家は思っていた以上に大きかった。

思わぬ話に啞然としている僕を尻目に話は続いて行く。

「だから京都には別荘も持つてるし、家同士の繋がりを持っている家もある。」

その縁もあつて京都には長い期間修行に行つてた。

勿論、長期休暇の時に遊びに行つたりもしたから、結構詳しいよ。」

「……今日のお昼リイが思案していたのだけど、京都の魔術師事情はこの辺りとはまた違うのかしら？」

少し悩んだ末、馨さんに問い掛けたエリカさん。

それに何て事は無く馨さんは答えて行く。

「エリカさんの考えている通りだよ。」

一般的に日本の中心は東京だけど、魔術の中心は京都なんだ。」

「どういう事かしら？」

「京都は歴史の深い土地、江戸時代前は京都がこの国の中心だったからね。」

「昔は京都が都だった事ですよね、それが何か関係があるんですか？」意味の呑み込めていない僕に馨さんがさらに詳しく話してくれた。

「昂君、歴史が深いという事はその分魔術がより発達した地域という事になるんだ。」

特に京都は日本の中心……日本の地脈点でもある。」

「……っ、地脈点でもあるのね。」

「地脈点？」

聞いた事の無い単語が多くなってきた。

「地脈点って言うのは、簡単に言えば大地に流れる力の集まりだよ。」私達にも魔力がある様に大地にも同じ様に魔力が流れているのよ。」

それこそ、人間なんかじゃ比べ物にならない様な量……莫大な量が。」

「その魔力は地上にも影響を与える。」

大地に栄養を与えるし、その土地に居る生物にも影響を与える。」

勿論大地が動く様に、地脈点も移動する。」

現在わかっているのは、アメリカ・中国・ヨーロッパの一部都市だったかな。」

「地脈点の辺りは繁栄している事が多いのよ。」

でも、今まで日本にも地脈点があるなんて知らなかったわ。」

「それは仕方ない事だよ。」

昔も昔、平安時代に京都の地脈点は封印されたんだから。」

それにエリカさんは大きく驚いた。

「まさかつ、在り得ないわ。」

大地に流れる力だけでも強大な力なのに、地脈点はそれと比べ物にならない程に大きな力なのよ!?

そんな事が出来る人間が居る筈ないわ!?

「そう思うのも無理ないけど、歴史上それが可能の人物が一人だけいたんだよ。」

昴君も知っているとと思うよ、結構有名な方だから。」

僕も知っている有名な人……?」

さつき平安時代って言ってたから……?」

「あつ、もしかして『安倍晴明』ですか?」

「正解だよ、昴君。」

「……確か平安時代に活躍した『陰陽師』だったかしら?」

「当時の京都は地脈点の影響で様々な災厄が蔓延していて、それを『安倍晴明』が地脈点を封印する事で抑えたと文献が残っているんだ。」

「……それ、本当なのかしら?」

あまりにも在り得なさ過ぎて、信じられないんだけど……。」

「気持ちは分からないでもないよ。」

実際僕も封印の地を確認した事は無いし、文献の方も目にしたんじゃないくて又聞きだからね。」

でも、この事は京都支部・上層部の最重要機密だって話だ。」

「……何でその最重要機密を馨さんが知っているんですか?」

「ああ、修行に行った時お世話になった人が教えてくれたんだ。」

教えてくれた人はかなりノリの軽い人だったから……あまり信用は出来ないけどね。」

……随分口の軽い人が居るもんだなあ。」

大丈夫なんだろうか、京都の人達は……。」

「とつ、話が少しずれてしまったね……確か京都の魔術師事情だったね。」

「そう言えばそうだったわね。」

興味深い話だったから、つい聞き入ってしまったわ。」

2人して苦笑いを浮かべている。

僕も言われるまで気が付かなかった。

「京都も一応正史編纂委員会の支部の1つという形を取っている。

けど、その体系は他の支部とは全く違う……その原因を作っているのが『陰陽師』だ。」

「その『陰陽師』は『魔術師』と何か違うの?」

「そこまで大きく変わらないね。」

違う所があるとするとするなら『陰陽師』は地脈の力を利用する事で術を発動するって所かな。」

「……それはヨーロッパでは珍しい技術ね。」

「見た事の無い技術では無いけれど『陰陽師』はそれが主流なんだ。」

彼等はそれを『陰陽術』と呼んでいる……でもこの技術自体が問題な訳じゃ無い。」

此処で馨さんは深く溜息を吐いた。

「彼等が『陰陽術』に高いプライドを持っている事が問題なんだ。」

「自分達の持つ物にプライドを持つ事が問題とは思いませんけど?」

「確かにそうだよ……でも彼等のそれは少し違う。」

「要するに、魔術師より自分達の方が上だと……そう思い込んでいるって事かしら?」

呆れた様に言い放ったエリカさんに馨さんが苦笑いを浮かべる。

「簡単に言えばね……勿論全員が全員そう思っている訳じゃ無い。」

でもその思想が根深い事は間違いない。

長い歴史の中で京の都をずっと守護してきた自信とプライドが在るんだ……仕方のない事かもね。

でも、それが原因で日本と海外の関係以上に魔術に関して鎖国が激しいんだ。

……同じ日本国内なのに、本当に馬鹿みたいだよな。」

同様に呆れた様に溜息を吐く馨さん。

その姿にやけに実感が帯びている様に思う。

「もしかして馨さん……修行中に何かあったの?」

「本当に大変だったんだよ。」

僕を招いてくれた沙耶宮と関係の深い人達はとても良くしてくれただけど……。

その人達に連れられて行った合同練習会は酷かったよ。

……今でもあまり思い出したくはないね。」

馨さんの本当に嫌そうな表情に余程の事だったんだと悟った。

でもすぐに何時もの笑顔に戻ると明るく言った。

「でも今はそこまでじゃない筈だ。」

当時僕が修行に行く前に京都支部の上層部の総入れ替えがあつたね。

そんな彼等の新しい指針の下、外との交流にもっと積極的になるべきだつて言う事で、僕が実験的に京都に修行に行つたんだ。

僕が最初だったから酷かっただけで、その後と言つた祐理達は普通に過ごしていた筈だ。」

「つまり、特に心配する事じゃないって事でいいかしら？」

「話は長くなっちゃったけど、そう言う事だね。」

基本彼等は有事の際以外は不干涉だから……変な事をしなければあつちから干渉して来る事は無い筈だよ。」

それならばと、僕は少し安心した。

行つた先でエリカさんに何かあつたら気が気じゃ無かつたら……。

「一人問題になりそうな人が居るけれど……今それを心配しても仕方ないわね。」

……それなら何処かお勧めの観光スポットは無いかしら？」
「そうだね、それなら……。」

一瞬不安そうに何か呟いたエリカさんだったが、すぐに楽しそうな笑みを浮かべて馨さんと話しだした。

それからアンナさんも交えて、珍しく全員で夜遅くまで話が盛り上がるのだった。

第41話 京都に行こう

Side 昴

2週間後。

エリカさん達2年生のテンションが徐々に上がって行く中、僕は変わらない日々を送っていた。

その日もいつも通りに過ごし、道場終わりのお風呂で汗を綺麗に流してきた後の事だった。

お風呂から上がると、リビングにエリカさん・馨さん・アンナさん以外にもう1人いた。

「千尋さん？」

「お邪魔しているよ、昴君。」

そこに居たのは沙耶宮家現当主・沙耶宮千尋さんだった。

颯爽と和服を着こなしている千尋さんはいつ見てもカッコいい。

千尋さんは僕に味方してくれると言った時から、頻繁に連絡をくれていた。

そして公に僕と接する事が出来る様になってからは、時間を見つけては道場にも顔を出してくれていた。

最初は馨さんが心配なのかと思っていたけど、心配されていたのは僕達全員だった。

神殺しとは言え僕はまだ高校生になったばかり。

それにこの家で暮しているのは高校生2人に大学生とメイドがそれぞれ1人ずつ。

……確かに心配にもなる。

という訳で千尋さんが此処に居る事は別段不思議な事では無い。

ただここに来る時はいつも道場にも顔を出していた筈……。

でも今日は来てなかったし……何か別の用件があつて来たのかな？

「こんな時間に珍しいですね、どうかしたんですか？」

「申し訳ないんだが、今日は仕事の話で来たんだ。」

少し時間をいただけませんか、昴様。」

「っ!!」

僕は普段から畏まられても窮屈なので、いつもは普通に接して貰っている。

その千尋さんの口調が神殺しとしての僕の対応になっている……何かあった時の証拠だ。

僕はすぐに気持ちを入れ替え席に着く。

僕が座った事を確認した千尋さんは真剣な表情で口を開いた。

「少し急を要する案件が起こった為、夜分に申し訳ありませんが窺わせて頂きました。」

「気にしないで下さい……それで、何かあったんですか?」

「話すと長くなるのですが、簡単に言うと……。」

少し罰の悪そうにそう切り出すと、予想の斜め上に行く事を頼まれた。

「……京都に行つて頂けませんか?」

「……はい?」

「困惑するのも無理はありません、これから経緯を説明させて頂きます。」

そう言うのと千尋さんは真剣な様子で改めて口を開いた。

「本日、京都分室より正式に昴様を招待したいと一報が入りました。」

そう言うて懐から一枚の手紙を取り出した千尋さん。

受け取って中を確認して、一通り目を通すと手紙を机に置く。

「京都に行く事自体は別に構わないんですけど、この指定された日程……僕学校なんです。」

「私共も昴様が学業を優先したいと言う御心を汲み、長期休暇以外で話は断っていたのですが……。」

「……手紙には書いていない、何か緊急の用件があるって事ですか?」

察した僕の言葉に千尋さんは頷いた。

手紙で指定されていたのは一週間後……エリカさんの修学旅行の日付と同じ。

つまり護堂先輩も京都に滞在しているという事。

手紙には「是非会つてご挨拶を」って書いてあったけど、流石に何かあるのではと勘ぐってしまう。

「草薙様宛に此方同様に手紙が届いていないか調べましたが、私共の方では確認できませんでした。」

「僕達の方でそれとなく確認しておきます。」

「でも護堂さんが京都に行く事を知らなかった……とは考えにくいね。」

「偶然にしては出来過ぎているわ。」

相手側に何か意図があるとみて間違いないわね。」

2人の言葉に千尋さんも首肯し、懐から別の紙を取り出した。

「私共も同じ様に考え思案していた所に、もう一通手紙が届きました。」

これは沙耶宮家が京都に古くから繋がりを持つ家『土御門家』からの手紙です。」

手渡された手紙の内容に思わず目を見張る。

この手紙の内容にはエリカさん達も顔を顰めていた。

「これが本当ならば京都のみならず、日本そのものが大変な事態に見舞われます。」

昂様……行って戴けないでしょうか。」

千尋さんの嘆願、答えは考えるまでも無い……僕は力強く頷いた。

「……京都に行きます。」

本当かどうか確かめる為にも、そしてもし本当だったら絶対に阻止する為に……。」

「……ありがとうございます。」

こうして僕の京都市行きが決定した。

あれから数日が経ち、僕は今、馨さんと共に車に揺られていた。

向かっている先は勿論京都、運転しているのは甘粕さん。

出発したのは指定された日……エリカさん達の修学旅行の前日、学校から戻ってすぐに出発した形だ。

京都に行く事を決めた後、その旨を相手側に伝えた所エリカさん達と同じ新幹線の切符が送られてきた。

何か起こるか決まった訳では無いけど、先輩達と一緒に行動するのは些か不安がある。

それに僕達には情報が少ない。

それを少しでも補完する為、送られてきた切符を使わず、早めに出発する事となったのだ。

「……エリカさん、ちゃんと起きられるでしょうか。」

「アンナさんが居るんだ、心配いらないよ。」

そして何より彼女がこういったイベント事で寝坊するとは考えられない。」

「……確かに。」

此処に居ないエリカさんは修学旅行の日程通りに行動する事になってる。

本人は一緒に来たがついていたけど、先輩の方でも何か起きる可能性がある為別行動という事になった。

今回の事に付いては、先輩にも話している。

契約を交わしてから日本で起こる最初の案件になるのだ……最初から契約を違える訳には行かない。

それに旅行先で急に事件に巻き込まれるのはとても不憫だと思う。

折角の修学旅行に水を差す事になってしまったが先輩も心構えが出来る分、気が楽になったと言ってくれた。

その時クラニチャール先輩が「私達が解決しよう」と言い始めた時、エリカさんと口論になった。

けれど先輩の「そういう約束だろ」の一言で口を噤んでしまった。

でも何か力になれる事があれば協力するとも言ってくれた。

その事があつたからか、エリカさん達の雰囲気が悪くなっていたのが少し心配だ。

……ここで僕が心配しても仕方ないかな、エリカさんを信じよう。

「それにしてもどうして態々車で行くんです？」

「それは勿論……車の方が昴君との距離が近いからさ。」

暫く走っていると甘粕さんが話題を振って来た。

そしてそれに答えた馨さんは僕の腕に抱き付いて来た。

「ふえ!？」

大きめの車で広々としているのに随分距離が近いなあとは思っていたけど、まさかのそんな理由!?

すぐに離れてしまったが、その一瞬の女性特有の柔らかさに心地い香りが鼻腔を擦る。

本人はエリカさんと自分を比べて幾分か悲観しているけど、僕からしたらどちらでもドキドキしてしまう。

「あまり人前だとイチャイチャしたくないし、それにあまり公共機関は使わない方がいい。」

「私もいるのですが……それで、やはり監視されていると？」

甘粕さんの言葉に一気に僕の思考が切り替わる。

もしそうだとしたら、この道中も何かあるかもしれない。

そう思い周囲を警戒する様に意識を集中させるが、馨さんは否定した。

「いや可能性としては否定できないけど、それは限りなく低いと思う。」

「どうしてですか？」

「まず第1に京都で大掛かりな準備をしているのに、今仕掛けるのは意味が無いから。」

第2に監視しているのだとしたら魔術なら昴君が、尾行なら甘粕さんが気付く筈だから。

実際の所は如何かな？」

話を振られた僕は閉じていた眼を開けて、首を横に振った。

「いえ、そんな『氣』の気配はありませんでした。」

「……確かに、今の所は。」

今高速道路を走っていて、結構沢山の車がいるのに……甘粕さんってやっぱりすごい人だなあ。

馨さんの言葉に気の抜けた僕は何と無しにそんな事を思ってしまった。

「だろう？ まあ、他にも理由はあるけど大体はこんな所かな。」

「ではどうして新幹線ではいけなかったのですか？ ……今回は真面目に答えて下さい。」

「簡単だよ、二つの爆弾を一緒にしておくと危険だと思わなかい？」

「そういう事ですか。」

「それに大規模な事を計画しているみたいだしね、恐らく護堂さんの手も借りる事になる筈だ。」

そうなった時、広い京都市内で固まって行動していてもあまり意味は無い。

情報も仕入れなくちゃいけないし、一緒に行動する意味が無かったって所かな。」

……酷い言われ様だったけど、自覚している為何も言い返せなかった。

その後少しばかり気落ちしてしまっただけど、馨さん達と話している内にそんな気分も忘れてしまった。

それに道中はとても楽しかった。

度々やるサービスエリアで甘粕さんお勧めのご当地グルメに心を躍らせ、ちよつとした旅行気分。

とても物知りな甘粕さんに心から尊敬してしまった程だ。

そして夜の間も車は走り続け、その間僕は休ませて貰った。

運転している甘粕さんに悪いから起きていようと思っていたけど、睡魔には勝てなかったのだ。

睡魔と闘っている時に馨さんに膝枕をされ、抵抗むなくそのまま落ちてしまった。

そして気付けばすでに京都市内。

目を開けて最初に見たのは馨さんの優しい笑顔。

気恥ずかしさとともに迎えた今日……激動の1日が始まった瞬間だった。

Side 馨

僕の膝の上で可愛い寝顔を見せる昴君。

さつきまでは頑張って起きていたけど、今はいつもなら寝ている時間。

横になるように促すとそのまま眠ってしまった。

僕はそんな彼の髪を梳きながら、飽きる事無くその寝顔を見つめ続ける。

暫くそんな心地いい時間が流れていたが、運転席からの声到我に返る。

「我等の王も、こうしていると普通の少年にしか見えませんね。」

「急にどうしたんだい？」

「いえ、ただふと思っただけですよ。」

「この姿も私の使える王の姿の1つだと……。」

「……そうだね。」

こんな可愛い寝顔を見せる子が神殺し何て誰も思わないよね。

普段は中性的な容姿も相まって、少し頼りなく見える昴君。

それでも一度スイッチが入ればそこには見紛う事無き王の姿が見える。

まだ神殺しに至って数ヶ月とは思えないその姿に、多くの人々が今後の彼に畏敬の念を抱いている。

……本人は無意識なんだけどね。

だからこそ本当に今後が楽しみなんだ。

でも、今くらいはゆっくり休んで欲しい。

今日は間違いなく大変な1日になると思うから……。

「それで、到着はいつくらいになりそう？」

「この調子でいけば、日の出位には京都市内に入るかと。」

「まずは『土御門家』に向かってくれ、その後は……。」

「わかっています、私は情報収集に入ります。」

「よろしく頼むよ、甘粕さん。」

「お任せください。」

「それじゃあ、僕も少し休むよ……後は宜しく。」
「分かりました。」

はあ、結局最後まで自分が運転するんですね、分かってましたけど……。」

そうして僕も膝の上の温もりを感じながら目を閉じたのだった。

「それにしても馨さん……別に早く行くなら車じゃなくてもよかったですのでは?」

なんて言葉僕には聞こえなかった。